

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第140集

寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡・片地家館跡発掘調査報告書

国道343号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第140集
寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡・片地家館跡発掘調査報告書 正誤表

P	L	誤	正
1	19	昭和62年10月 日	昭和62年10月30日
22	11	見られるる。	見られる。
31	22	(41,41,43)	(41,42,43)
69	35	128	129
75	31	挟入が	挟入が
92	26	200g以上	2000g以上
93	7	詳細な不明	詳細は不明
163	9	822	832
169	23	するAブロック	する。Aブロック
189	21	想定されるのが想像の	想定されるが想像の
262	4	p. 271	p. 273
262	8	p. 271	p. 273
262	10	11171	1171
262	11	p. 271	p. 273
263	1	p. 271	p. 273
263	5	p. 271	p. 273
263	23	p. 271	p. 273
264	3	p. 271	p. 273
264	5	p. 271～272	p. 273～274
277	1	重機によって重き、	重機によって動き、

寺前 I・II遺跡・片地家館跡発掘調査報告書

国道343号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,300箇所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う交通網の整備も重要な一施策であります。特にも幹線道路網の整備事業は高速交通時代に対応した産業経済開発の大動脈として、多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

県単高速関連整備事業である一般国道343号の改良工事に関連する陸前高田市所在の遺跡は、昭和62年以降6遺跡の発掘調査を終了し、3遺跡の発掘調査報告書を刊行しております。本報告の寺前Ⅰ遺跡、寺前Ⅱ遺跡、片地家館跡の3遺跡は矢作川左岸の丘陵地に立地し、昭和63年度の発掘調査によって縄文時代の遺構と遺物、中近世の探掘跡等の貴重な資料が発見されました。

本報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御援助を賜りました大船渡土木事務所、陸前高田市教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成元年7月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県陸前高田市矢作町に所在する寺前Ⅰ遺跡、寺前Ⅱ遺跡、片地家館跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、国道343号神明前地区道路改良工事に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と岩手県土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 遺跡台帳番号、調査期間、発掘調査面積、調査担当者は各遺跡の中扉に記したとおりである。
4. 発掘調査に際しては、陸前高田市教育委員会の御協力をいただいた。
5. 石質の鑑定は佐藤二郎氏に依頼した。
6. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

I 調査に至る経過	昆野 靖
II 遺跡の位置と環境	玉川 英喜、中川 重紀
III 調査と室内整理の方法	中川 重紀
IV 寺前Ⅰ遺跡	平井 進
V 寺前Ⅱ遺跡	平井 進
VI 片地家館跡	中川 重紀
7. 現地調査においては今野昶助氏をはじめとする地元陸前高田市の方々に、室内整理では整理作業員の協力を得た。
8. 調査の諸記録と遺物は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序
例言

本 文

I 調査に至る経過	1
II 立地と環境	2
1 遺跡の位置	2
2 地形概観	2
3 基本層序	5
4 周辺の遺跡	7
III 調査と室内整理の方法	13
1 野外調査	13
2 室内整理と報告書の作成	14
IV 寺前 I 遺跡	17
1 縄文時代	21
〔1〕遺構	21
(1) 土坑	21
(2) 柱穴状土坑群	25
(3) 焼土遺構	26
〔2〕遺物	29
(1) 土器・土製品	30

(2) 石器・石製品	75
(3) 出土状況について	168
〔3〕まとめ	188
2 古代以降	191
引用・参考文献	195
V 寺前 II 遺跡	245
1 遺跡の概要	249
2 縄文時代	249
(1) 土器・土製品	249
(2) 石器・石製品	262
(3) まとめ	275
3 近世以降	276
VI 片地家館跡	291
1 検出された遺構と遺物	292
(1) 遺構	292
(2) 遺物	299
2 まとめ	310

図 版

岩手県全体図	
第1図 道路改良路線と遺跡位置図	1
第2図 寺前 I・II 遺跡、 片地家館跡位置図	3
第3図 地形分類図	4
第4図 寺前 I 遺跡基本土層	5
第5図 片地家館跡基本土層	6

第6図 周辺遺跡位置図	9
寺前 I 遺跡	
第1図 寺前 I 遺跡遺構配置図	19
第2図 5E-1 土坑	21
第3図 7F-1・2 土坑	23
第4図 8H-1 土坑	24

第5図	9E-1土坑	24	第36図	第VII群土製品	66
第6図	8D-1土坑	25	第37図	石皿第I群1類	94
第7図	8D-2土坑	25	第38図	石皿第I群1~2類	95
第8図	4C-1焼土遺構	26	第39図	石皿第I群2類	96
第9図	5C-1焼土遺構	26	第40図	石皿第I群3類、第II群1類	97
第10図	柱穴状土坑群遺構配置図	27	第41図	石皿第II群1類	98
第11図	第I群・第II群1類土器	41	第42図	石皿第II群1~2類	99
第12図	第II群1類土器	42	第43図	石皿第II群2類	100
第13図	第II群1類土器	43	第44図	石皿第II群2類、尖頭器第I群	101
第14図	第II群1~3類土器	44	第45図	尖頭器第II群1類	102
第15図	第II群3~4類、 第III群1~2類土器	45	第46図	尖頭器第II群1~2類	103
第16図	第IV群1~2類土器	46	第47図	尖頭器第II群2類	104
第17図	第IV群2類土器	47	第48図	石匙第I群、第IV群	105
第18図	第IV群2類土器	48	第49図	石匙第II~III群	106
第19図	第IV群3類土器	49	第50図	石匙第I群1類	107
第20図	第IV群3類土器	50	第51図	石匙第I群2類	108
第21図	第IV群3類土器	51	第52図	石匙第I群2類	109
第22図	第IV群3~4類土器	52	第53図	石匙第I群2類、第III群	110
第23図	第V群1類土器	53	第54図	石匙第II群1~3類	111
第24図	第V群1類土器	54	第55図	石匙第II群3類	112
第25図	第V群1類土器	55	第56図	寛状石器、ビーエス・エスキュー	113
第26図	第V群1類土器	56	第57図	不定形石器第I~II群、 第III群1類	114
第27図	第V群1類土器	57	第58図	不定形石器第III群1類	115
第28図	第V群2類土器	58	第59図	不定形石器第III群2類	116
第29図	第V群2類土器	59	第60図	不定形石器第III群2類	117
第30図	第V群2類土器	60	第61図	不定形石器第III群2類	118
第31図	第V群2~3類土器	61	第62図	不定形石器第III群2類	119
第32図	第V群4類土器	62	第63図	不定形石器第III群2類	120
第33図	第V群4類土器	63	第64図	不定形石器第III群2類	121
第34図	第V群4類土器	64	第65図	不定形石器第III群2類 第IV群1類	122
第35図	第V群4類土器、第VII群土製品	65			

第66図	不定形石器第IV群1～4類	123
第67図	不定形石器第V群、第VI群1類	124
第68図	不定形石器第VI群1類	125
第69図	不定形石器第VI群2類	126
第70図	不定形石器第VI群3類	127
第71図	不定形石器第VI群4類	128
第72図	石鏃、石斧第1群1類	129
第73図	石斧第1群1類	130
第74図	石斧第1群2類	131
第75図	石斧第II群1類	132
第76図	石斧第II群1類、 磨石類第1群1類	133
第77図	磨石類第1群2～3類、 第II群1～3類	134
第78図	磨石類第II群3類	135
第79図	磨石類第III群1類	136
第80図	磨石類第III群2類	137
第81図	磨石類第III群2類、第VI群1類 第V群1類	138
第82図	磨石類第V群1～2類	139
第83図	磨石類第V群2類	140
第84図	磨石類第VI～VII群1類	141
第85図	磨石類第VII群2類、石皿、 砥石第1群	142
第86図	砥石第1～II群	143
第87図	砥石第III群、円盤状打製石器	144
第88図	石剣類第I～IV群	145
第89図	石製品第1群1～2類	146
第90図	石製品第1群2類～第V群	147
第91図	石製品第VI～VIII群	148
第92図	石製品第VIII群	149
第93図	石製品第VIII群	150

第94図	石製品第IX～X群	151
第95図	その他の礫石器	152
第96図	A・Bブロック位置図	172
第97図	古代以降の遺物	192
第98図	採掘跡遺構配置図	193
寺前II遺跡		
第1図	寺前II遺跡遺構配置図	247
第2図	第I～II群土器	254
第3図	第III～V群土器	255
第4図	第V群土器	256
第5図	第V群土器	257
第6図	第V群土器	258
第7図	第VI～VII群土器	259
第8図	石鏃、石鏃、不定形石器	265
第9図	石斧第1群	266
第10図	磨石類第I～IV群	267
第11図	磨石類第IV～VI群	268
第12図	砥石第1～II群、石剣類第II群	269
第13図	石製品第VI群	270
第14図	石製品第VI群	271
第15図	石製品第VI群、 その他の礫石器	272
第16図	井戸跡と近世の遺物	277
第17図	近世の民家跡	278
片地家館跡		
第1図	グリット・遺構配置図	293
第2図	1、2号採掘跡土層断面図	295
第3図	3、4号採掘跡土層断面図	296
第4図	B、C区土層断面図	297
第5図	神社跡	298

第6図 土器	301
第7図 石器1	303
第8図 石器2	304
第9図 石器3	305

第10図 石器4	306
第11図 石器5	307
第12図 石器6	308
第13図 古銭	312

表・グラフ

周辺の遺跡一覧表	11
寺前I遺跡	
第1表 土器・土製品観察表	67
第2表 石器・石製品計測表	153
第3表 ブロック別の占有率	172
図表1 土器・土製品の総量	173
図表2 前期の土器の分布状況	174
図表3 後期の土器の分布状況	175
図表4 晩期の土器の分布状況	176
図表5 石甌(全体)の分布状況	177
図表6 石甌(I群)の分布状況	178
図表7 石楯(II群)の分布状況	179
図表8 尖頭器の分布状況	180
図表9 石鏃の分布状況	181

図表10 石匙(全体)の分布状況	182
図表11 石匙(I群)の分布状況	183
図表12 石匙(II群)の分布状況	184
図表13 不定形石器(III群)の分布状況	185
図表14 不定形石器(IV群)の分布状況	186
図表15 磨・凹・タタキ石類の分布状況	187

寺前II遺跡

第1表 土器・土製品観察表	260
第2表 石器・石製品計測表	273

片地家館跡

石器一覧表	309
古銭一覧表	311

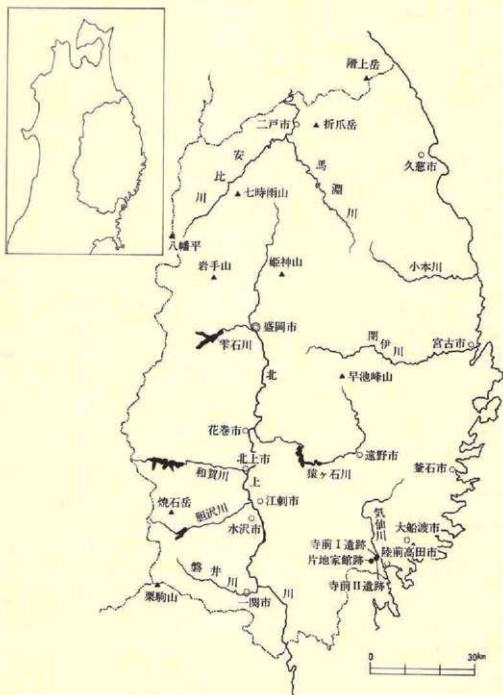
写真図版

寺前I遺跡	
写真図版1 遺跡の遠景等	199
写真図版2 土坑	200
写真図版3 土坑	201
写真図版4 採坑道入口跡等	202
写真図版5 第I～II群土器	203
写真図版6 第II群土器	204
写真図版7 第II群土器	205
写真図版8 第II～IV群土器	206
写真図版9 第IV群土器	207

写真図版10 第IV群土器	208
写真図版11 第IV群土器	209
写真図版12 第IV群土器	210
写真図版13 第IV～V群土器	211
写真図版14 第V群土器	212
写真図版15 第V群土器	213
写真図版16 第V群土器	214
写真図版17 第V群土器	215
写真図版18 第V群土器	216
写真図版19 第V群土器	217

写真図版20	第V、VII群土器	218
写真図版21	石皿	219
写真図版22	石皿	220
写真図版23	石皿	221
写真図版24	石皿、尖頭器	222
写真図版25	尖頭器、石錘	223
写真図版26	石錘、石匙	224
写真図版27	石匙	225
写真図版28	石匙	226
写真図版29	石匙、寛伏石器、 不定形石器	227
写真図版30	不定形石器	228
写真図版31	不定形石器	229
写真図版32	不定形石器	230
写真図版33	不定形石器	231
写真図版34	不定形石器	232
写真図版35	石錘、石斧	233
写真図版36	石斧、 磨石・凹石・タタキ石	234
写真図版37	磨石・凹石・タタキ石	235
写真図版38	磨石・凹石・タタキ石	236
写真図版39	磨石・凹石・タタキ石	237
写真図版40	磨石・凹石・タタキ石、 石皿	238
写真図版41	砥石、円盤状打製石器	239
写真図版42	石剣・石刃・石棒類	240
写真図版43	石製品	241
写真図版44	石製品	242

写真図版45	石製品	243
写真図版46	その他の礫石器、 須恵器、古銭	244
寺前II遺跡		
写真図版1	第I～IV群土器	281
写真図版2	第IV～V群土器	282
写真図版3	第V群土器	283
写真図版4	第V～VII群土器	284
写真図版5	石皿、石錘 不定形石器、石斧 磨石・凹石・タタキ石	285
写真図版6	磨石・凹石・タタキ石、 砥石・石剣・石刃・ 石棒類	286
写真図版7	石製品	287
写真図版8	石製品、その他の礫石器	288
写真図版9	民家跡、井戸跡	289
片地家館跡		
写真図版1	遠景、現況、土層、採掘跡	315
写真図版2	採掘跡、土坑	316
写真図版3	土器	317
写真図版4	石器1	318
写真図版5	石器2	319
写真図版6	石器3	320
写真図版7	古銭	321



岩手県全体図

I 調査に至る経過

一般国道343号神明前地区道路改良工事は、陸前高田市矢作町字越戸内から同市矢作町字湯濱畑まで総延長2,340mであり、県単高速交通関連道路整備事業として昭和59年に着手され、平成2年に完了の予定である。

この間に所在する埋蔵文化財包蔵地は、打越遺跡、東角地遺跡、古館跡、片地家館跡、寺前II遺跡、寺前I遺跡の6遺跡があり、この取り扱いについては岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で現地確認を含む事前協議が行われた。経過の概略は、以下のとおりである。

- 昭和61年5月14日付け 大土第296号 大船渡土木事務所長から岩手県教育長あて
分布調査の依頼
- 昭和61年5月17日付け 陸高教社第122号 陸前高田市教育長から岩手県教育長あて
分布調査の依頼違達
- 昭和61年5月22日付け 教文第153号 岩手県教育長から大船渡土木事務所長あて
分布調査の依頼に対する回答
- 昭和61年11月7～8日 岩手県教育委員会による現地確認
- 昭和62年8月24日付け 教文第289号 岩手県教育長から岩手県道路建設課長あて
昭和63年度における埋蔵文化財関連土木工事等の照会
- 昭和62年9月24日付け 道建号外 岩手県道路建設課長から岩手県教育長あて 同回答
- 昭和62年10月 日 岩手県教育委員会による現地確認
- 昭和62年11月2日付け 教文第419号 岩手県教育長から大船渡土木事務所長あて
遺跡の調査対象範囲について通知

これにより岩手県教育委員会は、打越遺跡、東角地遺跡、古館跡の3遺跡について岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの昭和62年度発掘調査事業として調整し、昭和62年6月1日付け契約により当埋蔵文化財センターが調査に着手し、10月31日に完了した。東側に位置する寺前I遺跡、寺前II遺跡、片地家館跡の3遺跡については、同様に当埋蔵文化財センターの昭和63年度発掘調査事業とし、昭和63年4月8日付け契約により調査することとなった。



II 立地と環境

1 遺跡の位置

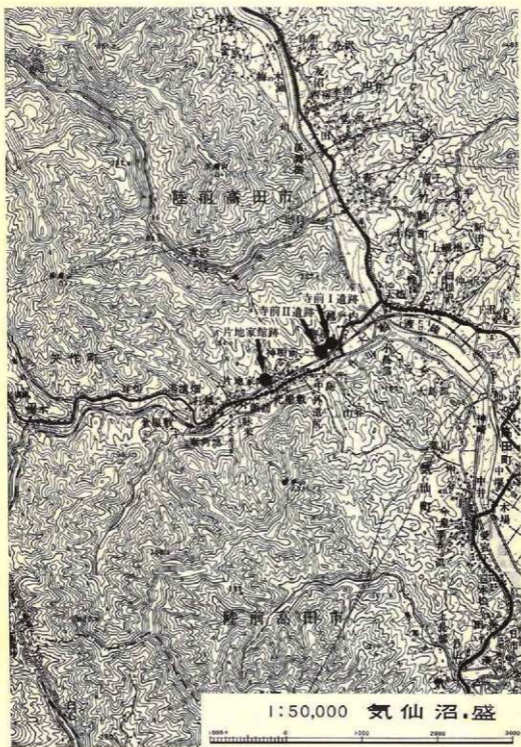
寺前Ⅰ遺跡・寺前Ⅱ遺跡・片地家館跡はいずれも陸前高田市矢作町にあり、それぞれの所在地は前者から字越戸内2ほか・字寺前40-2ほか・字諏訪48ほかである。陸前高田市は岩手県の南東端に位置し、東側に太平洋を望み、北側は大船渡市・住田町、西側は大東町・室根村、南側は宮城県に隣接する。矢作地区は陸前高田市の西部にあり、東流する矢作川沿いに集落が点在する。これら3遺跡は矢作川左岸の寺前・諏訪の集落の北側にあり、東西1kmの間に分布する。3遺跡のうち、寺前Ⅰ遺跡は北東端にあり、東日本旅客鉄道大船渡線陸前矢作駅の北東約1.7kmに、寺前Ⅱ遺跡は陸前矢作駅の北東約1.5kmに、片地家館跡は3遺跡中の南西端にあって、陸前矢作駅の北東約700mに位置する。3遺跡は北緯39度1分23秒～44秒、東経141度35分19秒～36分57秒の間にある。

2 地形概観

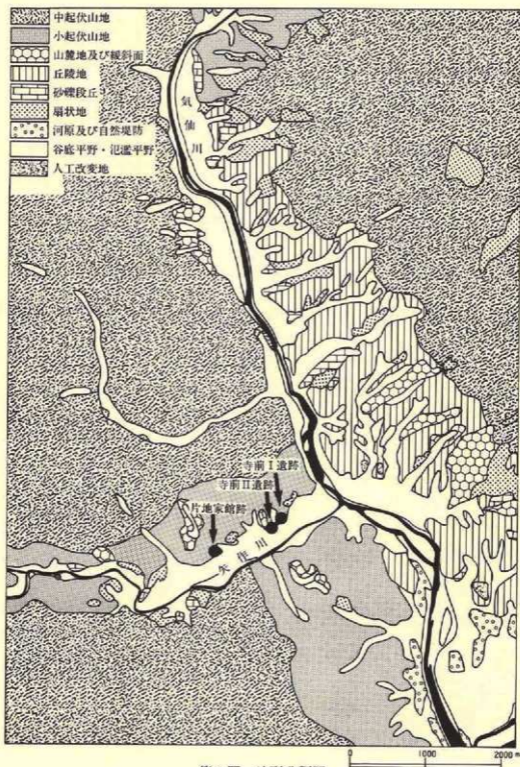
陸前高田市は北上山地の南東部縁辺に位置する。山地が多く、南流する気仙川を挟んで主線線路は南に延びる。東側は氷上山(標高874.7m)を最高峰に、500～800mの山々が、西側は叶倉山(728.9m)や陣ヶ森(583.6m)など600m前後の山々が連なる。山地は気仙川やそれに注ぐ小河川によって開析される。気仙川は遠野市と住田町境にある高清水山(1013.9m)に端を発し、途中住田町川口で大股川と合流、世田米付近では大きく蛇行した後流路を変えて南流を続け、広田湾に注ぐ。また、遺跡付近を流れる矢作川は、南流してきた生出川と東流してきた中平川が矢作町二又で合流した後東流を続け、竹駒町大畑付近で気仙川と合流する。合流点は気仙川の河口から僅か4.5km程の所である。交通路はこれらの河川に沿って開かれている。

太平洋を望む海岸線は日本でも有数のリアス海岸で、山地の後縁部が海に向かって延びた半島と半島の間に湾が入り組んでいる。南三陸リアス海岸は単純な沈降によるものではなく、離水と沈水の両方の地形を残している。

第3図の地形分類図は土地分類基本調査「盛」(1973年岩手県)を基にしている。図幅の多くを占める山地は起伏量200～400mの中起伏山地とその縁辺に連なる起伏量200m未満の小起伏山地である。比較的定高性がよく、準平原化の名残りと思われる山頂緩斜面も氷上山山頂付近など一部に見られる。丘陵地は氷上山山地と気仙川の間南北に帯状に分布する。陸前高田市の市街地の背後には開析の進んだ海岸段丘の残丘が存在する。本来は段丘面に分類される地形であるが、浸食が進み平坦面が少ないため丘陵地に分類した部分が多い。この段丘も沈水と離



第2図 寺前I・II遺跡・片地家館跡位置図



第3図 地形分類図

水の跡を残す地形であり、数回の上昇と下降をくり返している。縄文海進期における旧汀線は矢作川下流域にまで及んでいたと思われる。段丘面には海岸段丘起源の他に河岸段丘がある。河岸段丘は気仙川沿いの左岸とそれに注ぐ小沢との合流点付近、および矢作川沿いに部分的に発達する。低地は河川に沿った谷底平野が多く、気仙川や矢作川沿いには幅数百mの平野が広がる。気仙川河口の広田湾口に広がる平野は幅4～5km程であるが、三陸リアス海岸の中では最大級の沖積平野である。

遺跡は気仙川や矢作川沿いの段丘面や丘陵地・山麓緩斜面上に載るものが多い。今回調査が行われた3遺跡の内、寺前I遺跡、片地家館跡は小起伏山地の縁辺にあたり、寺前II遺跡は谷底平野の北端部にあり、埋没谷の部分にある。寺前I遺跡、片地家館跡は松倉山から南東に延びる尾根状の山地縁辺の緩斜面上に、寺前II遺跡は尾根筋から矢作川に注ぎ込む沢の低地に立地する。各遺跡の標高は、寺前I遺跡が31～32m、寺前II遺跡が11m前後、片地家館跡は48～50mである。遺跡の現状は寺前I遺跡が主に山林で、一部畑地、墓地で、片地家館跡が山林、寺前II遺跡が水田、畑地で、かつては宅地として利用されていたことがある。

3 基本層序

寺前I遺跡と片地家館跡の基本層序は基本的には共通するが、寺前II遺跡では丘陵地から運ばれた土砂が堆積したものである。以下に各遺跡毎に各層序の概要を述べる。層序名は各遺跡毎に命名している。

寺前I遺跡（第4図）

土層柱状図は4Dグリッド付近で作成したものである。

- I_a層 暗褐色土(10YR4/4～3/4) 耕作地造成に伴って盛土された土のうち、耕作されていた層である。小さな礫、スレートを多く含み、粘性の強い土質である。層厚20～30cm
- I_b層 黒褐色土(10YR3/3～2/3) 土質等はI_a層に同じである。硬く締まっている。層厚40cm
- I_c層 褐色の混土 基本的にはa～b層と同じ盛土であるが、褐色の粘土質シルトがブロック状となってより多く混入している。層厚20cm
この3層(a～c)には遺物はほとんど含まれない。谷側ほど層が厚く最大では2m以上。
- II層 黒褐色土(10YR2/2～2/3) 旧表土であり、遺物包含層である。シルトで粘性がある。小礫を若干含む。層厚20～30cm。



第4図 寺前I遺跡
基本土層

III_a層 褐色土 (10Y R4/4~4/6) 基盤層であるIII_a層が風化した層であり、III_b層より若干よ
 げているが、下部は漸移しており不明瞭である。礫まじりのさらさらしたシルトである。
 若干の遺物が混入している。層厚は概ね20cm程である。作図した4 D付近は風倒木痕によ
 る擾乱が見られたため柱状図では厚くなっている。

III_b層 褐色土(10Y R4/4~4/6) 粘土質シルトの基盤層である。層厚は概ね1~3mである。
 下部は岩盤にのる。

調査区の大部分は採掘によって岩盤まで擾乱され、東側の一部のみが上記のような土層の堆
 積となっている。また、東端の一部には岩盤が露出している所もある。

寺前II遺跡

本遺跡は松倉山の尾根筋から矢作川に流れ込む沢の一つに立地したものであり、その層序は
 上方の丘陵地から運ばれた土石が堆積し埋没谷を構成しているため、多量の小石を含む層と礫
 層の互層となって何層か積み重なったものである。したがって、調査区では現地地表下50cmで多
 量の伏流水が溢れ出し、作図することは不可能であった。本遺跡から出土した縄文土器及び石
 器の大部分は現表土下0.8~2.3mの礫層の中から出土したものである。

片地家館跡 (第5図)

調査区は大半が採掘によって擾乱されていたが、辛うじてB区の調
 査区に自然堆積層と思われる部分があり、模式図はその地点で作成し
 たものである。

I層 明褐色土、赤褐色土、黒褐色土の混合土に粘板岩のスレートや
 礫が混じるもので採掘の際の土砂で、この上に腐植土が載る。層
 厚10~60cm。

II層 黒褐色土 (7.5Y R3/1) 旧表土で、若干の遺物を含む。腐植
 土に粘板岩の小礫を含む。層厚10~20cm。

III層 褐色土 (7.5Y R4/3~4/4) 黒褐色土や小礫が僅かに入る粒子
 の細かいシルト質土である。層厚20cm。

IV層 褐色土 (7.5Y R4/6) 粘土質シルトで粘板岩の小礫が多く入
 る。V層と入り組んでいる。層厚20cm。

V層 明褐色土 (7.5Y R5/6) ~明赤褐色土 (5Y R5/8) 粘土質シル
 トの基盤層。層厚20cm以上。

VI層 粘板岩の岩盤で石英礫が節理面に入っている。節理面に石英脈が発達している。



第5図 片地家館跡
基本土層

4 周辺の遺跡

気仙地方には古くから注目されてきた貝塚が多くあることで知られている。陸前高田市の広田湾や隣の大船渡湾の湾岸沿いにも全国的に名の知れた貝塚として、国指定史跡の中沢浜貝塚・下船渡貝塚・蛸の浦貝塚があり、また、縄文土器編年の標式遺跡となっている門前貝塚（後期初頭）や大洞貝塚（晩期）がある。他にも大船渡湾の細浦上の山貝塚や広田湾の瀬沢貝塚が大正年間に長谷部言人や松本彦七郎等によって人類学雑誌等に度々紹介されている。これらの貝塚はその後も現在に至るまで度々調査が行われ、岩手県における貝塚研究の主要な舞台となってきた。

また、気仙地方は洞穴遺跡の多いことでも知られている。大正14年8月、大山柏や八幡一郎等によって踏査された女神洞穴、蝠蝠洞穴、関屋洞穴などが同年10月の人類学雑誌で紹介されている。住田町には縄文時代早期の土器編年の標式遺跡として著名な蛇王洞洞穴がある。このように当地域は先人達に数多くの格好のフィールド・ワークの場を提供してきた。

現在、遺跡台帳には陸前高田市で228ヵ所、大船渡市では74ヵ所が登録され、岩手県中世城館跡分布報告書には陸前高田市55ヵ所、大船渡市11ヵ所の城館跡が登録されている。そのうち第5図の周辺の遺跡位置図には今回調査が行われた3遺跡を中心とする陸前高田市西部の気仙川・矢作川流域の100ヵ所の縄文時代・古代等の遺跡と33ヵ所の中世城館跡を図示した。以下に図示した遺跡の概要を若干述べることとする。

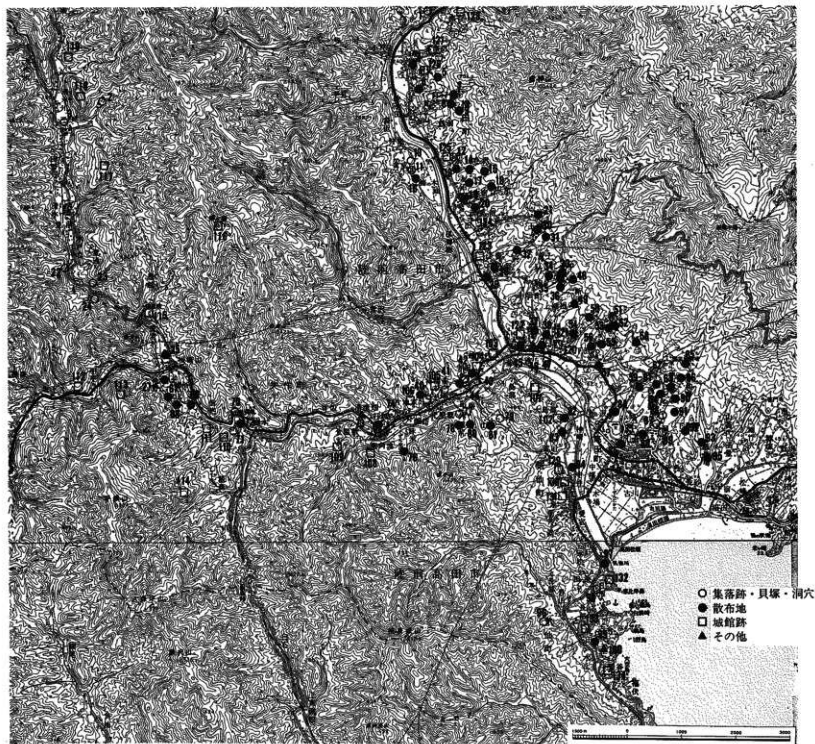
縄文時代の遺跡は66ヵ所で、種類別の内訳は集落跡9、散布地49、貝塚3、洞穴5である。弥生時代の遺跡は散布地のみ2ヵ所、古代の遺跡は集落跡6、散布地14ヵ所である。時代不明の集落は4ヵ所、散布地が21ヵ所である。他に塚・窯跡・祭祀跡が各1ヵ所である。なお、複合遺跡はそれぞれ1ヵ所に数えているので、合計数は図示した遺跡数をうまわる。気仙川流域の遺跡は左岸の水上山山地西麓に続く緩斜面上や丘陵・段丘上に立地するものが多い。矢作川流域のものは開折の進んだ板橋山付近や湯濱畑以東に比較的多い。時代別の立地にはそれ程顕著な差は見られない。図示した遺跡で最近調査が行われた例としては、横田町の釘の子遺跡や矢作町の山崎遺跡、それに高田町の貝畑貝塚がある。釘の子遺跡や山崎遺跡では縄文土器の他に弥生土器が比較的まとまって出土している。貝畑貝塚では複式炉を持つ縄文時代中期の竪穴住居跡等が検出されている。

中世の城館跡は旧気仙郡内に75遺跡が知られており、そのうち陸前高田市内には55遺跡が確認されている。その大部分は気仙川と支流の矢作川に沿った丘陵上に偏在している。矢作川沿いにおいては、今泉街道筋にあたる東角地付近までの右岸と越戸内付近までの左岸に20遺跡が立地している。

「矢作村郷土年表」による城館の初見は、正和4年(1315年)の千葉廣胤による鶴館城、外館2城の構築であり、葛西氏の姻戚である千葉氏の繁行が知られる。具体的な城館名が記されるのは、宝徳3年(1451年)の竹駒壺館城、「古城書上」には横田の本宿館、三日市館等があるが、永享8年(1436年)の千葉氏一族の争乱、永正元年(1504年)の大原館城主大原信明と米ヶ崎城主浜田基綱の合戦、天正16年(1588年)には米ヶ崎城主浜田安房守の謀反に矢作鶴館城主千葉大湯守が出陣するなど同族間の争乱があり、東磐井郡境の矢作はその前線の要衝にあたるのみならず、金採掘の利権に伴う城館の興亡が推測される分布である。

<引用・参考文献>

- 岩手県企画開発室 1973年 『土地分類基本調査』盛
 岩手県教育委員会 1986年 『岩手県中世城館跡分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第82集
 及川 洵 1968年 『岩手県湯沢遺跡古墳址略報』考古学ジャーナル第25号 ニュー・サイエンス社
 大山 柏・八幡一郎 1925年 『岩手県南部石器時代遺跡調査旅行』『人類学雑誌』第40巻第10号
 大山 柏・八幡一郎・小金井良精・長谷部晋人 1925年 『岩手県における石器時代の遺跡—講演要旨』『人類学雑誌』第40巻第11号
 貝塚真平他 1985年 『日本の平野と海岸』岩波書店
 国生 尚・石川長喜 1984年 『川内遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第82集
 佐藤正彦・蒲生琢磨 1987年 『中沢沢貝塚発掘調査概報III』陸前高田市文化財報告書第11集
 佐藤正彦 1984年 『山崎遺跡発掘調査報告書』
 佐藤正彦 1985年 『貝塚貝塚発掘調査概報』陸前高田市文化財報告書第8集
 鳥羽渾藏 1897年 『陸前国気仙郡の石器時代遺跡』『東京人類学会雑誌』第129号
 1919年 『陸前国細浦上の山貝塚の環状列石』『人類学雑誌』第34巻第5号
 長谷部晋人 1919年 『陸前国細浦上の山貝塚の環状列石』『人類学雑誌』第34巻第5号
 1925年 『陸前大洞貝塚(発掘)調査所見』『人類学雑誌』第40巻第10号
 吉川虎雄他 1973年 新編『日本地形論』東大出版会



第6図 周辺遺跡位置図

周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	類別	遺構・遺物	所在地	備考
1	穴沢	集落跡	縄文(晩期)土器	横田町字舞沢	
2	三の戸沢	集落跡(?)	石器、石斧、石剣、刀跡	矢作町字三の戸沢	
3	角地	集落跡(?)	石剣	矢作町字三の戸沢	
4	志田実	散布地	縄文土器	横田町字志田実	
5	八戸沢	散布地	土師器	横田町字志田実	
6	根原	散布地	縄文(晩期)土器、原石、割片	横田町字志田実	
7	釘の子I	散布地	土器、絞縄文、須恵器、土師器、原石	横田町字釘の子	
8	釘の子II	散布地	縄文土器	横田町字釘の子	
9	釘の子III	散布地	縄文土器	横田町字釘の子	
10	袋沢I	集落跡	縄文土器、フレーク、土師器、石剣、石器	横田町字袋沢	
11	袋沢II	散布地	惣六住居	横田町字袋沢	
12	釘の子	集落跡	縄文(中期)土器、土師器、須恵器	横田町字釘の子	57調査
13	袋沢III	散布地	縄文土器、土師器	横田町字袋沢	
14	友沼I	散布地	縄文	横田町字友沼	
15	友沼II	散布地	縄文	横田町字友沼	
16	金成	散布地	縄文、打製石斧	横田町字金成	
17	友沼III	散布地	縄文	横田町字友沼	
18	山田	散布地	縄文(晩期)土器	横田町字西宿	
19	西宿	散布地	縄文(中・後期)土師器	横田町字西宿	
20	水宿	散布地	縄文(晩期)	横田町字水宿	
21	堂の沢	散布地	縄文	横田町字堂の沢	
22	木戸口編組跡六	洞 穴	縄文(後期)土器、土師器	矢作町字木戸口	
23	赤魚穴	洞 穴	土器	矢作町字木戸口	
24	虫頭穴	洞 穴	土器	矢作町字木戸口	
25	愛宕下	散布地	縄文土器、土師器、石剣	矢作町字愛宕下	
26	板橋山	散布地		矢作町字板橋山	
27	柳野	散布地	縄文土器	矢作町字柳野	
28	壺	散布地	縄文(晩期)土器	竹駒町字上壺	
29	下壺I	散布地	縄文、フレーク	竹駒町字下壺	
30	上壺I	散布地	縄文、土師器	竹駒町字上壺	
31	下壺II	散布地	縄文	竹駒町字下壺	
32	下壺I	散布地	縄文	竹駒町字下壺	
33	北平I	散布地	縄文	竹駒町字北平	
34	新田	散布地	石剣	竹駒町字新田	
35	北平II	散布地	縄文	竹駒町字北平	
36	北平III	散布地	壺、土器、石剣	竹駒町字北平	
37	畑	散布地	壺、土器、いりり跡	竹駒町字畑	
38	和野	散布地	縄文(中期)土器、土偶、石棒、石楯	竹駒町字和野	
39	観音寺	散布地	土器、石器	矢作町字神明前	
40	神明前I	集落跡	縄文土器	矢作町字神明前	
41	神明前II	集落跡	土器、大甕(?)	矢作町字神明前	破壊
42	寺前I	集落跡	縄文(晩期?)、土師器、石棒、石剣 etc	矢作町字寺前	
43	寺前II	散布地	縄文土器	矢作町字寺前	
44	寺前III	散布地	縄文土器	矢作町字寺前	
45	東見田	散布地	土器、土師器、青銅鏡	竹駒町字宮	
46	細池沢石塚	塚	積石塚一基	竹駒町字細池沢	
47	細池沢	散布地	縄文、土師器、須恵器、フレーク	竹駒町字細池沢	
48	北平IV	散布地	縄文	竹駒町字北平	
49	新田	散布地	縄文、弥生	竹駒町字新田	
50	仲の沢II	散布地	縄文	竹駒町字仲の沢	
51	坊寺	集落跡	土師器	竹駒町字坊寺	
52	滝里I	散布地	弥生、土師器	竹駒町字滝の里	
53	滝里II	散布地	縄文、土師器	竹駒町字滝の里	
54	仲の沢I	散布地	縄文	竹駒町字仲の沢	
55	下沢I	散布地	縄文	竹駒町字下沢	
56	下沢II	散布地	縄文	竹駒町字下沢	
57	相川I	散布地	縄文、須恵器、石器	竹駒町字相川	
58	相川II	散布地	縄文	竹駒町字相川	
59	大瀬I	散布地	縄文、石器	高田町字大瀬	
60	大瀬II	散布地	縄文	高田町字大瀬	
61	硝石	散布地	縄文	高田町字硝石	
62	西和野I	散布地	土器	高田町字西和野	
63	西和野II	散布地(总倉地)	縄文、土師器	高田町字西和野	
64	小森原	散布地		高田町字西和野	
65	広畑	散布地	縄文	高田町字西和野	
66	西和野III	散布地	土師器	高田町字西和野	
67	山崎田	散布地	縄文土器	矢作町字山崎	

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地	備考
68	山崎Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字山崎	
69	山崎Ⅰ	散布地	縄文(晩期)土器、土師器、鉄滓	矢作町字山崎	
70	仙後姫若跡	洞穴		矢作町字仙内	
71	水神沢穴	洞穴	土器、貝塚、木炭	矢作町字仙内	
72	雫の水	散布地	縄文土器	矢作町字雫の水	
73	湯原沼	遺跡跡	土器、焼成台、須恵系赤地陶器、灰果、スリノコ	矢作町字湯原沼	
74	東角地	集落跡	カブト、人骨、縄文土器、土師器	矢作町字東角地	
75	打越	散布地	土器、石器	矢作町字打越	
76		散布地		矢作町字片地家	
77	外道尻Ⅱ	集落跡	土器、磨製石器、石埴	矢作町字外道尻	
78	外道尻Ⅰ	散布地	土器、石器	矢作町字外道尻	
79	山谷Ⅰ	集落跡	土器、石斧、磨石、石鏡	矢作町字山谷	
80	外道尻Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字外道尻	
81	山谷Ⅱ	散布地	縄文土器	矢作町字山谷	
82	陣ヶ森	散布地		矢作町字陣ヶ森	
83	神崎	散布地	縄文土器	矢作町字神崎	
84	柳ヶ沢	散布地		高田町字柳ヶ沢	
85	西郷	散布地	土器	高田町字西郷	
86	貝塚	貝塚	縄文、土師器、須恵器	高田町字野字下和野	
87	西和野	集落跡	縄文土器、土師器、須恵器	高田町字西和野	
88	洞の沢	散布地	土器、石器、貝塚	高田町字洞の沢	
89	中和野Ⅰ	散布地		高田町字中和野	
90	中和野Ⅱ	散布地	縄文	高田町字中和野	
91	中和野Ⅲ	散布地	縄文	高田町字中和野	
92	下和野	散布地		高田町字下和野	
93	飯森場	散布地		高田町字飯森場	
94	中井	散布地	合矢製品	高田町字中井	
95	山角代	散布地		高田町字山角代	
96	牧田貝塚	貝塚・船跡	土器、アサリ、ハマグリ、イボニシ、レイシ	高田町字牧田	
97	川口	散布地	土器	高田町字川口	
98	二日市貝塚	貝塚	土器、カキ、ハマグリ、イシダタミ、イボニシ	高田町字二日市	
99	双六	散布地	土器、石鏡	高田町字双六	
100	双六窟	塚礎跡		高田町字双六	

墳
塚
墳
塚

No.	名称	別称	所在地	形式	現状	主等(文献)
101	内館	臨時館・鶴館	矢作町下矢作字大島辺	山城	山林、畑	千葉広風
102	陣ヶ森		大島辺		山林	菅原新左エ門奉行
103	總船		越戸内			
104	古館	倉主館				大善院藏書
105	外館		神祀前			
106	古館	片地家館・高屋歌館	片地家			
107	東角地館		東角地			
108	小山館		味太			
109	八幡館		金屋敷			
110	番敷	番立	梅木			
111	フン館	古館	山崎			
112	日向館		中平			
113	大立		坂下			
114	船櫓		坂下			
115	番ヶ沢館		二又			
116	陣ヶ森		馬越			
117	日貫館		二和野			
118	三ノ戸館		三ノ戸			
119	釣場館		釣場			
120	滝ノ里館	花輪館	竹駒町滝ノ里		山林、畑、宅地	佐々木与八郎重調
121	金山館		細根沢		畑、宅地	
122	古館	舟本館・安館	塚		山林、畑	
123	壹館	坪越・坪川屋・竹駒屋	下壱		山林	佐々木安宗、瀧人、助次郎(古録書上)
124	本宿館	横田城・菅宿城	横田町字本宿		山林、畑	日(説)野右馬之光(古録書上)
125	三日市館	外館	字三日市		山林	日野遠江守、大学(古録書上)
126	あかまい館		字久田実			
127	開田館		字久遠坪			
128	南行館	笠原館	字南行			細野利幹
129	遠館		気仙町中が谷			
130	東館		町裏			
131	籠橋館	籠ヶ橋館	内野		山林、畑	
132	二日市館	籠橋館・八幡館	二日市		山林、畑、宅地	金為近
133	上長瀬館		牧田		山林、畑	千葉慶宗
134	栗谷館		栗谷		畑	
135	八幡館	東館・高田城	本丸	丘陵	公園、宅地	千葉安房守次調

III 調査と室内整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区割の設定

寺前Ⅰ遺跡と寺前Ⅱ遺跡は両遺跡を覆うように任意の3点を設け、グリッドを設定した。片地家館跡は任意の2点を設定した。3遺跡とも2～3の基準点を通る直線を軸線としてグリッドを設定した。

寺前Ⅰ・Ⅱ遺跡

寺前Ⅰ・寺前Ⅱの両遺跡の調査区は西南西から北北東へ、幅15～20mで帯状に広がっている。両遺跡の調査を統一的に把握するため、両遺跡が単一のグリッドにのるように設定することにした。

寺前Ⅰ遺跡内に任意の1点をとり基点1とした。基点1から西南西方向へ30m離れたところに1点をとり基点2とした。基点1と基点2を結ぶ方向を軸線とし、基点1から縦横に3m間隔の方眼を設定した。得られた方眼のうち、基点1より東北東方向に30m、北北西方向に15mの地点を原点とした。原点より西南西方向のグリッドには0, 1, 2, ……70、南南東方向のグリッドにはA, B, C, ……Qと命名した。グリッド名は両者を合わせて0A, 1B, 3Cのように呼称した。

軸線A-G方向は磁北に対し約21度東偏するが、調査に当たってはこの軸線方向を南北方向、0-70の軸線方向を東西方向と呼ぶ遺跡の方位を採用した。ただし、本報告書に掲載した図版はすべて磁北を採用している。

なお、基点1、基点2および55Pグリッド(基点3)の公共座標は、次のとおりである。

第 X 系 標 高

基点1 $X = -107747.829\text{m}$, $Y = +66266.360\text{m}$, $H = 31.911\text{m}$

基点2 $X = -107764.056\text{m}$, $Y = +66241.133\text{m}$, $H = 31.374\text{m}$

基点3 $X = -107843.568\text{m}$, $Y = +66167.431\text{m}$, $H = 11.501\text{m}$

片地家館跡

調査区は道路建設予定地に沿った幅7～13m、長さ130mの東西に細長い区域である。地形的な制約から基準点は任意の2点(基点1、基点2)を設定した。2点間の距離は41.631mである。基準点の平面直角座標第X系による成果、及び杭高(L)は以下のとおりである。

基点1 $X = -108,172.716\text{m}$ $Y = +65,414.972\text{m}$ $L = 49.969\text{m}$

基点2 $X = -108,148.684\text{m}$ $Y = +65,448.966\text{m}$ $L = 49.392\text{m}$

グリッドは基点1を原点に東西、南北とも10m毎に区切り、調査範囲をカバーするように調査区の西端から東に向かってA～M、北から南にI～IVとし、グリッド名はIA区・IIB区等と呼称した。

(2) 粗掘り・精査

寺前I遺跡は3mのグリッドを基本として、人力による表土の除去を行い遺構、遺物の把握に努めた。寺前II遺跡はほぼ全面の表土除去を重機によって行った。片地家館跡では地表面に凹凸があり、しかも立木の伐採、運搬の際に重機が入って攪乱されていることから、手掘りによる調査は困難であったため表土除去は重機で行った。

検出した遺構の呼称は、寺前I・II遺跡ではIII A-1土坑等のように呼称し、片地家館跡では、遺構が少ないこともあり、1号探掘跡、神社跡等とした。

遺構の精査は土坑が主なこともあり2分法によった。遺物は層位を確認して各区画単位の中で、必要に応じて記録をとった後、取り上げた。

(3) 実測・写真撮影

平面実測は簡易遣り方測量を原則とし、探掘跡や一部の遺構については平板を用いた。簡易遣り方測量は設定したグリッド毎に同一の座標系を用いた。すなわち、寺前I遺跡は基点1を、寺前II遺跡は基点3を、片地家館跡は基点1をそれぞれ原点とする座標系を用いた。実際の測定にあたっては平面図は1mメッシュを基本として行い、断面図は任意の高さで作成している。縮尺率は1/20を原則とし、場合によっては任意の縮尺とした。写真による記録は6×7版のモノクロ1台、35mm版のモノクロ、カラースライド各1台をセットで使用し、遺構の全景、埋土の断面、遺物の出土状況等を撮影した。

2 室内整理と報告書の作成

(1) 作業手順

遺構については現地で作成した実測図の点検・合成、第2原因図の作成を行い、トレース、図版作成の順に進めた。

遺物については、水洗と注記の一部を残して発掘現場で行い、残りは室内整理の最初の段階で行った。その後、接合・復元、仕分け・登録の順に進めた。さらに、報告書掲載遺物の実測や拓本、写真撮影、計画、トレース、図版作成を行った。これらの作業の一部は併行または順不同で行った。

(2) 遺構関係の報告

スクリーントーンの使用については各図版に明示した。

図版の縮尺は、以下のとおりである。

寺前 I・II 遺跡 概ね 1/40

片地家館跡 1/60 ないし 不定縮尺

写真図版の縮尺は不定

(3) 遺物関係の報告

図版の縮尺は以下のとおりである。

寺前 I・II 遺跡 概ね土器は 1/3 石器は 1/2～1/3

片地家館跡 土器は 1/2 石器は 2/3・1/2・1/3 古銭は 2/3

写真図版の縮尺はおおよそ以下のとおりである。

寺前 I・II 遺跡 概ね土器は 1/3 石器は 1/2～1/3

片地家館跡 土器は 1/2 石器は 2/3・1/2・1/3 古銭は原寸

遺物は各遺跡毎に図版・写真図版を同一番号で統一した。

土器は、次のように分類した。なお、細分は遺跡別によった。

I 群 縄文時代早期の土器

II 群 縄文時代前期の土器

III 群 縄文時代中期の土器

IV 群 縄文時代後期の土器

V 群 縄文時代晩期の土器

VI 群 弥生時代の土器

VII 群 古代の土器

IV 寺 前 I 遺 跡

所 在 地 陸前高田市矢作町字越戸^{ノコ}内2ほか
委 託 者 岩手県土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 昭和63年6月23日～9月22日
整 理 期 間 昭和63年10月5日～平成元年3月31日
調査対象面積 1,965㎡
発掘調査面積 1,965㎡
遺跡番号・略号 NF56-2271・TMI-88
調査担当者 平井 進・中村良一
協 力 機 関 陸前高田市教育委員会



-  探掘跡入口及び落ち込み
-  墓 墳
-  土坑
-  土坑

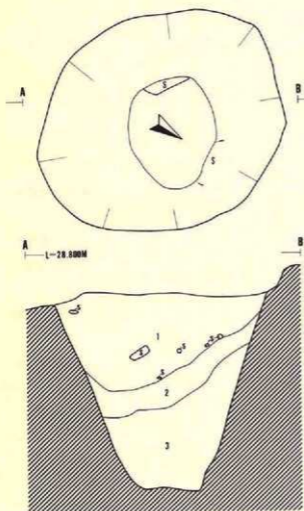
第1図 寺前I遺跡遺構配置図

1 縄文時代

縄文時代に属する遺構は土坑7基、柱穴状土坑18基、焼土遺構2基が検出された。遺物は早期から晩期に至るまでの各期の土器が出土した。しかし、主体となるのは後～晩期のもので前期がそれに続く。早期、中期は非常に少ない。石器はいろいろな種類が出土したが、量的には剥片石器が非常に多い。

〔1〕遺構

(1) 土坑



第2図 5E-1土坑

S = 北

5E-1土坑(第2図、写真図版2)

〔位置〕 検出された土坑の中では最東端に位置し、南～東へ急に落ち込む傾斜変換点に位置している。

〔形状〕 平面形は円形、断面形は開口部に向かって開く朝顔状である。

〔埋土〕 基本的に上位に黒褐色土、下位に暗褐色土が堆積し、その間に漸移層が存在する。

〔規模〕 開口部径2.8m×2.3m、底部径1.16m×0.9m、深さ2.06m。

〔壁〕 底部から直線状に外傾し、崩壊等は見られない。

〔底部〕 平坦で、小穴等は見られない。

〔その他〕 底部の一角に巨礫がある。大きさ等は不明である。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文土器(121)、石鐮(407、504)、石錐(901)、不定形石器(817)、円盤状石製品(1040)等と國化は省略したが、地文のみの縄文土器片、フレイク・チップ類が若干出土した。

- | | |
|----------------|---------|
| 1. 10YR5/6 | 黒褐色土 |
| 2. 10YR5/5 | 黒褐色土 |
| 3. 10YR5/3-5/4 | 暗褐色～褐色土 |

7F-1土坑（第3図、写真図版2）

〔位置〕 5E-1土坑の南西約7mに位置する。開口部の標高は約27mで、東側に急激に落ち込む斜面の傾斜変換点に位置する。

〔重複〕 7F-2土坑を切っている。

〔形状〕 開口部はやや歪むが円形状を呈する。底部は長円形である。断面形は一部重複があるため不詳な点もあるが、基本的には底部より開口部に向かって朝顔状に開く。

〔埋土〕 上位から暗褐色土、黒褐色土、褐色土の3層に大別される。U字状の自然堆積である。

〔規模〕 開口部径3.0m×2.5m、底部径1.1m×0.8m、深さ約2m。

〔壁〕 底部から開口部に向かって直線状に外傾する。崩壊等は見られない。

〔底部〕 やや鍋底状となるが、全体に平坦である。坑跡等は見られない。

〔その他〕 底部の周囲に若干の角礫が見られる。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文土器（93）、石鏃（385）、尖頭器（528）、石匙（616）等が出土した。また、図化は省略したが地文のみの縄文土器片とフレイク・チップ類が若干出土している。

7F-2土坑（第3図、写真図版2）

〔位置〕 7F-1土坑の若干斜面下位に位置する。

〔重複〕 7F-1によって切られる。

〔形状〕 開口部が斜面下位に向かってやや開くが、円形を基調としていたと思われる。底部は隅丸形状を呈する。

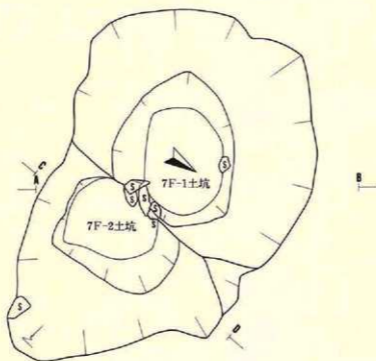
〔埋土〕 7F-1土坑を精査中に本遺構を検出したため、上位の埋土は不詳であるが、褐色土が多く混入するシルトである。下部に亜角礫を含む。ラミナが発達しており、自然堆積である。

〔規模〕 開口部径（2.4m以上）×2.1m、底部径0.95m×0.7m、深さ1.4m。

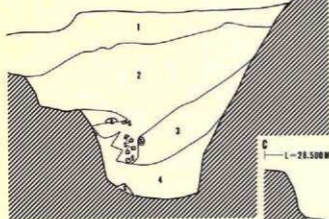
〔壁〕 斜面上位側の壁は直線的に大きく外傾するが、斜面下位側は垂直に近い立ち上がりとなる。残存していた壁には崩壊等の痕跡はない。

〔底部〕 壁の最下端は丸味を帯びて立ち上がるため、底面全体はやや鍋底状のような概観を呈する。水平かつ平坦である。

〔出土遺物〕 埋土中から縄文土器（102、133）、石鏃（359、480、484）、石錐（570）、石匙（668）、筒状石器（682）、不定形石器（751、815、891）、凹石（959）等が出土した。また、地文のみの縄文土器片およびフレイク・チップ類も若干出土している。



A — L-28.050M



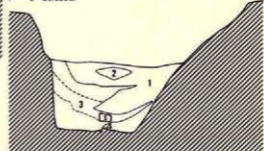
7F-1土坑

1. 10YR $\frac{5}{6}$ 暗褐色土
2. 10YR $\frac{5}{6}$ 暗褐色土
3. 10YR $\frac{5}{6}$ - $\frac{7.5}{6}$ 深褐色-暗褐色土、灰少量含む。
4. 10YR $\frac{5}{6}$ 褐色土

7F-2土坑

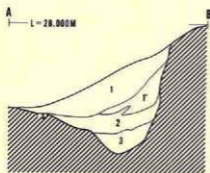
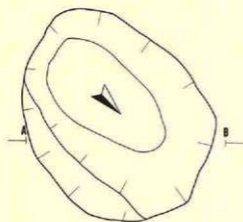
1. 10YR $\frac{5}{6}$ 深褐色土
2. 10YR $\frac{5}{6}$ 褐色土
3. 10YR $\frac{5}{6}$ - $\frac{7.5}{6}$ 褐色土の混土

C — L-28.500M



第3図 7F-1・2土坑

S = $\frac{1}{4}$



1. 10YR% 黒褐色土
 1'. 10YR% 黒褐色土、灰混入
 2. 10YR% 暗褐色土
 3. 10YR% 黒褐色土

第4図 8H-1土坑 S=3/6



1. 10YR% 黒褐色土
 2. 10YR% 暗褐色土、灰若干含む。

第5図 9E-1土坑 S=3/6

8H-1土坑 (第4図、写真図版3)

【位置】東側の急斜面で、斜面の斜面変換点から若干下がった所に位置する。7F-1土坑の南3m付近である。

【形状】斜面に対して直角方向に長軸をもつ長円形である。

【埋土】上位の大部分は後世の道路建設に伴い消失しているが、残存する埋土は黒褐色土と暗褐色土の互層となっている。上位の埋土には粉炭が認められる。自然堆積である。

【規模】開口部径2.2m×1.8m、底部径1.5m×0.75m、深さ1.1m。

【壁】やや袋状に内湾ぎみに立ち上がる。

【底部】北側にやや斜行し、大小の角礫・亜角礫がみられる。

【出土遺物】埋土中から後期(205)と晩期(223、265)の縄文土器と石錐(580)やブレイク等が出土した。

9E-1土坑 (第5図、写真図版3)

【位置】尾根上のやや平坦な所で、7F-1土坑の北西約3mに位置する。

【形状】平面形は長方形で、掘り込みが一方に片寄ったため断面形は三角形となる。

【埋土】黒褐色土と暗褐色土からなる。V字状堆積でもなければラミナも見られず、またブロック状の混土もなく、自然堆積かどうかは不明である。

【規模】開口部径1.3m×1.0m、底部0.45m×0.3m、深さ0.45m。

【壁】三方の壁はほぼ垂直に立ち上がる。

【底部】鍋底である。

〔出土遺物〕 晩期に属する縄文土器（273、275、280）と石匙（621）、石製品（1023）等が出土している。



8D-1土坑（第6図、写真図版4）

〔位置〕 9E-1土坑の北東約2mに位置する。

〔形状〕 隅丸長方形である。

〔埋土〕 暗褐色の単層である。埋土下に垂角礫と縄文土器が含まれる。

〔規模〕 開口部径1.75m×0.45m、底部径0.3m×0.2m、深さ0.3m。

〔壁〕 ほぼ垂直に立ち上がる。

〔底部〕 掘り込みがやや片寄り、段差が生じている。

〔その他〕 用途は不明であるが、柱穴状土坑の可能性もある。

〔出土遺物〕 縄文土器片が1点出土した。地文のみであり作図は省略する。



第6図 8D-1土坑

S=1/6



8D-2土坑（第7図、写真図版3）

〔位置〕 8D-1土坑の北約0.5mに位置する。

〔形状〕 円筒形である。

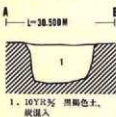
〔埋土〕 黒褐色の単層である。粉炭を少量含む。

〔規模〕 開口部径0.8m×0.75m、底部径0.55m、深さ0.4m。

〔壁〕 ほぼ垂直に立ち上がる。

〔底部〕 水平かつ平坦である。

〔その他〕 用途・時期とも不明である。



第7図 8D-2土坑

〔出土遺物〕 なし。

S=1/6

(2) 柱穴状土坑群（第10図）

柱穴状土坑は合計18基検出された。これらの土坑は3Cグリッドから9Eグリッドまで、標高30～31mの等高線に沿って連続して構築されている。各土坑の規模は多少の差はあるものの開口部径が30cm～15cmの範囲内に納まり、20cm弱のものがほとんどである。深さは最も深いP₆土坑で48cmとなるが、概ね15cm～25cmの間のものである。掘り方を有する土坑はP₁、P₂、P₃、P₄、P₅、P₇、P₁₂、P₁₄、P₁₆、P₁₈の計10基である。先端部が尖っているものはない。埋土は黒褐色土と暗褐色土で構成される。埋土中に少量ながらも焼土粒や粉炭を含むものはP₇、P₁₀、P₁₁、P₁₃、P₁₆、P₁₈の6基である。遺物を出土したのはP₁₈で、やや扁平な球状をした石器（1057）が底部から出土した。根固め石として転用された可能性も否定はできない。

検出された18基の柱穴状土坑は検出面と埋土の観察から判断すると、縄文時代の遺構であることはほぼ間違いないものと思われる。しかし、これらはすべて同時存在であったかどうかは不明であり、その性格も不明である。ただ、斜面が急勾配となる傾斜変換点に沿って連続すること、重複するものがなくある程度の間隔を有していること等から何らかの施設を構築した跡と考えられる。

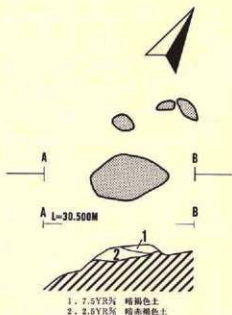
(3) 焼土遺構

4C-1 焼土遺構 (第8図、写真図版4)

〔位置〕本調査区内においては最も高い地点に位置し、北西から続く南東斜面の中腹に位置する。

〔状態〕淡く、もろい焼土である。断ち割りをした焼土以外にも、もっと淡い焼土が比較的広い範囲に分布する。いずれも現地性焼土である。厚さは最も厚い部分でも6~7cmであり、大部分は1cm以下である。

〔その他〕本遺構のまわりからフレーク・チップ類、縄文土器片等が出土したが、いずれも共伴するとはいいがたい。



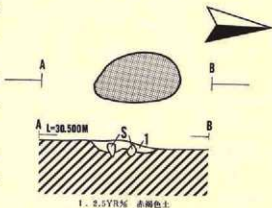
第8図 4C-1焼土遺構 S=⅔

5C-1 焼土 (第9図、写真図版4)

〔位置〕4C-1焼土の南西側1m付近に位置するため、基本的な周囲の状況は4C-1焼土と同じである。

〔状態〕4C-1焼土より一層淡い焼土である。焼土が形成された所は若干の隙が攪乱しているが、人為的なものではない。

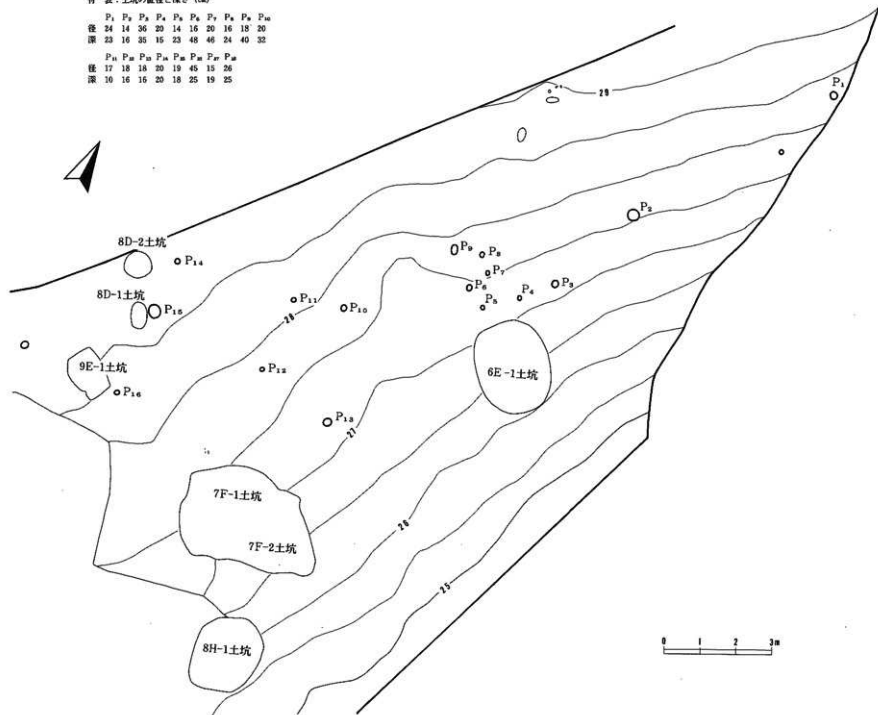
〔その他〕周囲から出土した遺物は量的にも器種的にも他から出土するものと同じであり、本遺構に伴うと思われる遺物ではない。



第9図 5C-1焼土遺構 S=⅔

付表：土坑の深さと径さ (cm)

	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径	24	14	26	29	14	16	20	16	18	20
深	23	16	15	23	48	46	24	49	32	
	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀
径	17	18	18	20	19	45	15	26		
深	10	16	16	20	18	25	19	25		



第10図 柱穴状土坑群連構配置図

〔2〕遺物

縄文時代に属する遺物は、土器、土製品、石器、石製品が出土した。調査区東端の遺物包含層から出土したものが大部分で、総量は遺物収納用コンテナで約50箱である。遺物包含層は斜面に廃棄されたと思われるものもあるが、土器、土製品のほとんどが砕けて小碎片となって折り重なった状態で出土し、かつ晩期の土器の上に後期の土器が乗るなど層位的に区分できる状態ではなかった。すなわち斜面上方から流れ込んで堆積した包含層である。

以上の出土状況から、遺構内出土の遺物もそのほとんどが包含層の形成と同様斜面上方から流れ込んだものと思われることや、数量的にも少ないことから、すべての遺物を一括して述べることにする。また、土器型式の細分と編年をめぐって必ずしも定説をみないものについて層位的に明らかにすることができないため、大まかな時期区分を採用した。

特記事項のない個々の遺物の説明は実測図・拓影図と写真および土器観察表・石器計測表のみとした。また、使用した主な用語・部位の名称等は挿図1・2および下記のとおりである。

口縁部……口端から頸部まで。頸部がなく、口辺に体部と区画されるような文様帯がある場合は文様帯の部分まで。頸部も文様帯もない場合は概ね口辺付近を示す。

口唇部……上部から見た口端部を示す。

頸部……口端から続くくびれた部分。壺は体部と口縁部にはさまれた直立する部分も示す。

体部……頸部から高台または接地面までを示す。

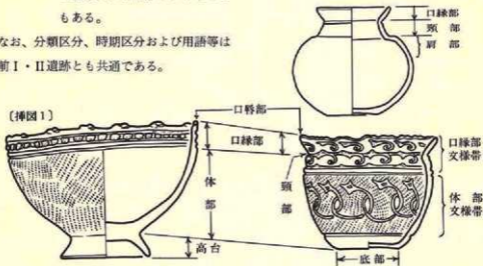
底部……接地面を示す。

高台……底部に付けられた円形の脚部を示す。

口縁部（体部）文様帯……口縁部（体部）を中心に割り付けられた文様帯を示す。したがって部分的には体部にかかること

もある。

なお、分類区分、時期区分および用語等は
寺前I・II遺跡とも共通である。



(1) 土器・土製品

本遺跡から出土した全ての土器・土製品を一括し、群に分けて述べることにする。群別に付いては前述したとおりである(P15参照)。出土状況に付いては後に詳しく述べるが、層的に分類できない状況であった。したがって、早期と中期を除き、各群を前・中・後の3区分に分類したのみである。しかし、各群を構成する各々の遺物は編年を意識して配列をした結果、同一の類の中で同一の用語を用いられているにもかかわらず、図版の中では離れて掲載されるものもできた。したがって、各群の中で取り上げた遺物の編年上の大まかな位置付を提示する必要が生じることとなった。

また、寺前Ⅰ遺跡と寺前Ⅱ遺跡は時期的にもまた立地上からも本来は同一なものとして統一的理解すべきものと思われることから、その分類項目の設定に当たっては同一のものを採用した。そのため細別したある項目は寺前Ⅰ遺跡からは出土せず寺前Ⅱ遺跡からのみ出土していたり、逆に寺前Ⅰ遺跡からのみ出土したものもあるなど、当該遺物がないにもかかわらず分類項目だけが設定されるものも生じた。しかし、統一的理解をするため本項では当該遺物が出土していないものに付いても項目をあげておくことにする。

なお、図化は出土したものの中から必要のあるものを選択したものであり、破損の著しいものや原則として同一個体の土器片および同様の文様体を持つものなどは努めて省略した。また、部位等の用語は挿図1に例示したとおりである。

第Ⅰ群土器……早期に属する土器を一括する。(第11図、第1表P. 67、写真図版5)

本群に属する土器は非常に少なく、図示した5点の他には、2と同様の土器が2点出土したのみである。すべて早期後葉に属すると思われる。

- a 摺糸文の原体を回転させずに引きずり、沈線状の文様を施文したもの。

(1)

- b 摺糸文が施文されるもの。(2, 3)

- c 表裏に縄文が施文されるもの。(4, 5)

- d 原体は不明であるが、胎土や焼成からみて早期と考えられるもの。

(寺前Ⅱ遺跡から出土)

1は右下がりに引いた後、左下がりに引いたものである。焼成は良好で硬い。2は施文の押圧が強い。4は口縁部上端に浅い刻みが付けられ、5は内外とも沈線が1本まわる。2～5の焼成は軟らかい。

第II群土器……前期に属する土器を一括する。

本群に属する土器は晩期、後期について多い。ただし、完形品は1点もなく、ある程度復元できる状態で出土したものは10の1点のみである。

1類……前期初頭から前葉に属する土器を一括する。(第11図～第14図、第1表P. 67～68、写真図版5～7)

《花積下層式から大木1式直前に併行するもの》

- a 縄文原体側面圧痕と沈線文の併用によって文様を構成するもの。
(6, 7, 8)
- b 燃糸文が施文されるもの。
(9)
- c 器形は小波状口縁をなす深鉢形土器で、節の粗い縄文を施文するもの。
(10)

《大木1式ないしそれと併行するもの》

- d 所謂ループ文が施文されるもの。
(11, 12)
- e 結び目を持たない羽状縄文が施文されるもの。(13, 14, 15, 16)
- f 0段の条の組紐が施文されるもの。(17, 18)
- g 口縁部に綾結文が施文されるもの。(19)
- h 底部に燃糸文が施文されたり、原体の側面圧痕がみられるもの。
(20, 21, 22, 23, 24, 25, 26)

《大木2 a式ないしそれと併行するもの》

- i 燃糸文が施文されるもの。(27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40)
- j 羽状縄文が施文されるもの。(41, 41, 43)
- k 沈線文を有するもの。(44, 45, 46, 47)
- l 複々節斜縄文が施文されるもの。(48)
- m 直前段多条が施文されるもの。(49, 50)

《大木2 b式ないし大木1～2式に併行するもの》

- n 綾格文が施文されるもの。(51, 52, 53, 54, 55, 56, 57, 58, 59, 60, 61,)
- o 多軸絡糸体回転圧痕文が施文されるもの。(62)

ループ文には11, 12のように連続するループを構成するものと、27～30に見られるように1つのループが間隔を持って施文されるものとがみられる。17と18は異個体であるが、頸部が軽くくびれる深鉢形の器形をし同様の原体を有するものである。ただし、前者は2まわり以上も

小さい。19は口縁部に4条の綾絡文がまわるが、器壁がぼろぼろに剝落し、不明瞭である。典型的な大木1式の小型深鉢形土器である。20～24は底部に燃糸文が施文されているのに対して、25、26は原体（紐）がたぐめられて敷かれてできた原体側面痕である。27～30は同一個体である。大波状口縁をなし、かなり大型の深鉢形土器と思われるが、出土した点数は図示した4点のみである。胎土・焼成とも良好である。32、33は燃糸文と単節斜縄文が施文されているが小片のため細部は不詳である。35は山形口縁をなし、口縁部上端は棒状工具による沈線で縁どられている。41は3本の紐の束を使用した木目状燃糸文と綾絡文が見られる。42と43は羽状縄文であるが、後者のように結束しない方が多い。また、結束の羽状縄文はすべて原体の末端が開いているが、無結束の羽状縄文には閉端のものも多くみられる。45と46は同一個体である。半截竹管を使用した波状の沈線文を有する。55～58は同一個体かどうかは不明であるが、胎土・焼成・色調等からみてその可能性が高い。もし同一個体であるならば57の胎土で確認された植物性繊維は、全体としては非常に少ないことになる。

2類……前期中葉に属する土器を一括する。(第14図、第1表P. 68、写真図版7)

《大木3式ないしそれと併行するもの》

- a 竹管文が施文されるもの。 (63)
- b 刻み目を有するもの。 (64)

64は胎土に植物性繊維を含んでおり、植物性繊維が見られるのが大木2式^(文5)までとするなら1類に編年されることになる。しかし、口縁部に連続する刻みが見られるのは大木3式とされていることからすれば2類とするのが妥当であり、一応そのように分類しておくが、本類に属する土器がきわめて少ないことから、これらは1類の最終末に属するとするのが妥当かもしれない。

3類……前期後葉に属する土器を一括する。(第14図～第15図、第1表P. 68、写真図版7)

《大木5式ないしそれと併行するもの》

- a 山形沈線文が施文されるもの。 (65, 66, 67, 68, 69)

《大木6式ないしそれと併行するもの》

- b 沈線文が施文されるもの。 (70, 71, 72, 73, 74, 75,)

74は沈線文が口縁部から体部に大きく展開したもので、沈線が交差する部分に大きいボタン状の瘤が貼付される。

4類……前期には属するが、細分できない土器を一括する。(第15図、第1表P. 68、

写真図版8)

- a 網目状燃糸文が施文されるもの。(76)
- b 単節斜縄文が施文されるもの。(寺前II遺跡から出土)
- c 縦位に粗い羽状縄文が施文されるもの。(寺前II遺跡から出土)

第II群に属する土器の中では本類に属するものが圧倒的に多い。本遺跡から出土した地文のみの土器片で最も多いのは単節斜縄文のみのもの、次は燃糸文のみのものである。文様体が不明で、地文のみの小片すべてを明瞭に時期区分することはできない。しかし、胎土・縄文原体等から時期区分が可能なものもある。それらの土器としてここではa～cの3グループをあげておくことにする。bの単節斜縄文の土器片はもとより本遺跡からも出土しているが、適当なものが見あたらなかったため図化を省略した。しかし、cの粗い羽状縄文が施文されるものは寺前II遺跡から出土のものが1点あるのみで、本遺跡からは出土していない。

第III群……中期に属する土器を一括する。

本群に属する土器はきわめて少ない。図示したものの他にも地文のみのものが若干出土しているが、いずれも小片である。

1類……中期前葉に属する土器を一括する。(第15図、第1表P. 68、写真図版8)

《大木7a式ないしそれと併行するもの》

- a 縦位に木目状燃糸文が施文され、燃糸文の両端に綾絡文が施文される。
(寺前II遺跡から出土)
- b 押し引きの沈線文が施文されるもの。(77, 78, 79)
- c 粘土紐を貼付するもの。(80, 81, 82, 83)

77～78は同一個体である。器形は山形状の口縁部で上端から4cm程下がったところで内側にくびれている。文様は沈線文のみで、地文は施文されていない。上端からくびれまでの間に見られる沈線は押し引きし、くびれより下の沈線は単に引いたものである。施文具には半截竹管を使用している。79は壺形土器の肩部で、押し引きの平行沈線が施文されているが、半截竹管を使用しているかどうかは不詳である。80は貼付した粘土紐にかかるように縄文が施文されたものである。また、81と83も粘土紐を貼付しているが、前者は斜めに、後者は縦に刻みが付けられている。なお、後者は細い沈線が施文された後に粘土紐が貼付されているが、どのような沈線文かは不詳である。82は所謂粘土紐を貼付したものではないが、口縁部上端に粘土帯を貼

付したとも、あるいは折り返し口縁とも言えるものである。口唇部にはやや細い刻みが付けられている。

2類……中期後葉に属する土器を一括する。(第15図、第1表P. 68、写真図版8)

〈大木9式〉

- a 縦に長い楕円文を磨消縄文によって描くもの。(84)

〈大木10式ないしそれと併行するもの〉

- b 大きな磨消縄文が横位に展開するもの。(寺前II遺跡から出土)
c 地文の上に浅い沈線で文様が描かれるもの。(85 1点)

85は次にくる第IV群1類aとは沈線の描きかたや、胎土等において大きく異なっている。沈線は浅く、単に地文の上に沈線を引いただけで区画文様とはならないため磨消しの手法も見られない。

第IV群……後期に属する土器を一括する。

本群に属する土器は晩期について多い。しかも、1類から3類まで量的にも形式的にもほぼ偏りなく出土している。しかし、所謂門前式土器は1点も出土していない。

1類……後期前葉に属する土器を一括する。(第16図、第1表P. 68、写真図版8)

〈宮戸1b式ないしそれと併行するもの〉

- a 磨消縄文が展開するもの。(86, 87, 88, 89, 90, 91, 92, 93, 94)
b 燃糸文が施文されるもの。(95)

86~94は磨消縄文が口縁部から体部にかけて大きく展開するものであるが、すべて破片であり全体の器形や文様等は不明な点が多い。したがって、これらの中には第III群2類に属するものも含まれている可能性がある。

2類……後期中葉に属する土器を一括する。(第16図~第18図、第1表P. 68~69、写真図版8~10)

〈宮戸2a式ないしそれと併行するもの〉

- a 刻み目帯を有するもの。(96, 97, 98, 99, 100, 101, 102, 103, 104, 105, 106, 107, 108, 109, 110)
b 磨消縄文によって文様体が構成されるもの。(111, 112, 113, 114)

〈宮戸2 b式ないしそれと併行するもの〉

- c 突起を有するもの。体部に羽状縄文を施文するものが多い。
(115, 116, 117, 118, 119)
- d 口縁部には二つ山突起が付き、体部には磨消縄文が施文される。
(120)
- e 縦位の羽状縄文が施文されるもの。
(121)
- f 力強い磨消縄文が描かれるもの。
(122, 123, 124, 125, 126, 127, 128, 129,
130, 131, 132, 133, 134, 135, 136, 137)

刻み目帯を有するものには磨消縄文が施文されているのが多く、縄文は結束しない羽状縄文がほとんどである。施文する方向は縦位、横位とも見られる。第II群のそれと比し、原体の幅は狭く、節も細かい。胎土は砂が多くざらざらしてはいるが、粗砂は見られず均一で良好である。磨きも丁寧で、光沢を帯びるものも見られる。黒色処理をしているものも見られる。111～114、122～137の磨消縄文は文様の構成と胎土等から分けたもので、前者はaと同様または近似するもの、後者は刻み目帯は見られず、口縁部文様帯と体部文様帯が区画されずに大きく施文されるものである。

3類……後期後葉に属する土器を一括する。(第19図～第22図、第1表P. 69～70、
写真図版10～12)

〈宮戸3 a式ないしそれと併行するもの〉

- a 小さな瘤が貼付されるもの。
(138, 139, 140, 141, 142, 143, 144, 145,
146, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153,
154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161,
162, 163, 164, 165)
- b 口唇部に頂部が二つに割れる特徴のある突起を有するもの。
(166, 167, 168, 169, 170)
- c 磨消縄文が木葉状入り組みと文となるもの。(171, 172)
- d 沈線によって文様体が描かれるもの。(173)

〈宮戸3 b式ないしそれと併行するもの〉

- e 口縁部にはB型突起を有し、体部は磨消縄文となるもの。
(174, 175)
- f 口縁部には大小の突起を有し、文様体の中には縄文の代わりに篋状工具による刻みを

充填するもの。

(176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183,
184, 185, 186, 187, 188, 189, 190)

g 磨消縄文に三叉文のはしりが見られるもの。(191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198,
199)

本類は所謂瘤付き土器から三叉文が出現する直前までの土器群である。138～140、162は瘤付き土器の突起である。中でも140は有孔の突起である。瘤は3種類に分けられる。一つは直径が5mm程の小さなもの(138～155等)、次は1cm以上の大きいもの(156～159、161等)、それに縦長で中央がくぼむもの(159、163～165)である。161は注口土器かまたは壺であるが、口縁部から頸部までは無文でただ一つ瘤が貼付されている。173は細く浅い沈線で斜格子状に施文されている。177～187に見られる刻み目は2類aのそれと大きく異なっている。2類aは半肉彫り状に作り出しているのに対し、ここの刻み目は非常に薄い篋状工具で連続刺突したものである。193～199の土器群は後期の最終末とみるか、晩期初頭とみるかは論の別れるところであろう。^[大4, 25, 30等]ここでは一応明瞭な三叉文の成立をもって晩期とした。

4類……後期には属するが、時期を細分できないものを一括する。

(第22図、第1表P. 70～71、写真図版12～13)

- | | | |
|---|----------------------|-------------------------------------|
| a | 羽状縄文が施文されるもの。 | (200, 201, 202, 203, 204, 205, 206) |
| b | 体部に刷毛目による文様が施文されるもの。 | (207, 208, 209) |
| c | 所謂ミニチュア土器である。 | (210, 211, 212) |
| d | 釣り手 | (213) |
| e | 沈線を有する高台。 | (寺前II遺跡から出土) |
| f | 突起 | (菊花状 214)
(人面付き 215) |

aに分類したものは胎土、焼成、原体等から本類に属するとしたものであるが、晩期に属するものも含まれている可能性がある。215は鉢形土器の突起であるが、人面を作りだしている。かなり摩耗しており細部は不詳なところもあるが、内面向きに作られている。

第V群……晩期に属する土器を一括する。

本群に属する土器は量的に最大であり、器種も豊富である。形式的には末葉のものが少なくなる傾向はあるものの、ほぼ偏りなく出土している。しかも时期的に明瞭に出土地点が異なるという特徴ある分布を示している。したがって、本群の分類・記述は、器種毎の編年を考慮す

ると、特に2～3類は従来の型式名をあげると煩雑となるためその方法はとらなかった。しかしながら2類は大洞C1～C2に、3類は大洞A～A'に比定されることには違いない。

1類……晩期前葉に属する土器を一括する。(第25図～第27図、第1表P. 71～72、

写真図版13～16)

〈大洞B式ないしそれと併行するもの〉

a 三叉文が口縁部に主文様として施文されるもの。

(216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223,
224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231)

b 巴状、半円、X字状等の入り組み文が施文されるもの。

(232, 233, 234, 235, 236, 237, 238)

c 一部に三叉文が残り、巴状、半円、X字状等の入り組み文と併用されたり、半歯状文のはしりが見えるもの。

(239, 240, 241, 242, 243)

〈大洞BC式ないしそれと併行するもの〉

d 半歯状文を有するもの。

(244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251,
252, 253)

e 歯列状文を有するもの。

(254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261,
262, 263, 264)

f 体部に磨消縄文が雲形状に広く施文され、変形菱形文が見られるもの。

(265, 266, 267, 268, 269, 270)

216～218は大型の深鉢形土器であり、219～228は小型の鉢形土器である。229は228と同様な鉢形土器の突起である。230、231は注口土器の注口部である。224の体部には綾絡文が見られるが、このような例は少ない。また、三叉文の発生から退化まで一連の変遷を辿ることはできるが、図化しなかった資料も含めても所謂典型的な玉抱き三叉文は見られない。

238～240は変形菱形文を有するものとしてfの項に入れるものかも知れない。三叉文から半歯文が発生し(248→245→244→246)、次第に平行化し(249→251)、ついには平行沈線間に刻みや歯列、点列を充填していく過程(252→257)を辿ることができる。

2類……晩期中葉に属する土器を一括する。(第28図～第31図、第1表P. 72～73、

写真図版16～18)

a 口縁部はB型突起が連続し、体部には磨消縄文による入り組み文が展開する。

(271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278)

- b 口縁端部には幅の狭い刻み目帯が1～2条めぐる。鉢形土器の文様体は体部上半に施文される。(279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286)
- c 口縁部に突起を有するもの。頸部に刻み目帯1条が回るものが多い。(287)
- d 口縁部は短く、無文帯となり、小さな波状口縁となるもの。(寺前II遺跡から出土)
- e 文様帯は口縁部に凝縮され、極めて幅の狭い平行沈線文帯を作るもの。口唇部や沈線の間に刻み目が付けられる。(288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297)
- f 隆起帯に縦位の連続する瘤が貼付されるもの。(298, 299)
- g 片口土器で注口部が無文となるもの。(300)
- h 頸部は無文で口唇部に棒状丘痕や口縁端部に縄文が施文されるもの。(301)

本類は1類に後続するもので、体部に広く展開されていた文様帯が口縁部に凝縮され平行沈線となって行くものである。体部は単節斜縄文となるものが多いが、287、297のように地文を持たないものでもてくる。298、299は壺の頸部である。後者のものと同様のものでも完形品が平船山遺跡^(21, 20, 21)等から出土している。

3類……晩期後葉に属する土器を一括する。(第31図、第1表P. 73、写真図版18)

- a 工字文を有するもの。(寺前II遺跡から出土)
- b 工字文が圧縮して重なり、平行沈線の集集体状となる。刺突帯が加わるものもある。(302)
- c 楕円文を有するもの。(寺前II遺跡から出土)
- d 平行沈線文を有するもの。(寺前II遺跡から出土)
- e 隆起線文を有するもの。(寺前II遺跡から出土)
- f 矢羽状沈線文を有するもの。(寺前II遺跡から出土)
- g 壺形土器を一括する。(303, 304, 305, 306)
- h 変形工字文を有するもの。(寺前II遺跡から出土)
- i 沈線文に2個1対の粘土粒が貼付されるもの。(寺前II遺跡から出土)
- j 無文の注口土器。(307)

本類に属するもののほとんどが寺前II遺跡から出土しており、本遺跡から出土したものはきわめて少ない。本遺跡からのものは壺形土器が多く、それらには縄文は施文されていない。307の注口土器は注口部分が細く長くなっている。

- 4類……晩期には属するが、細分ができないもの。(第32図～第35図、第1表P. 73、写真図版18～20)
- a 体部下端に一本の沈線が回るもの。(308, 309, 310, 311, 312, 313)
 - b 無文のもの。(314, 315, 316, 317)
 - c 地文のみのもの。(318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329)
 - d 頸部が無文となるもの。(330, 331)
 - e 工字文または楕円文をえがき中に刺突を充填するもの。
(寺前II遺跡から出土)

320、325、327、329は一部または全体に羽状縄文が施文されるが、前期に見られるような全面に正々の羽状縄文が施文されるものは殆ど見られない。325はその稀な例である。地文のみの深鉢形土器は比較的大型のものが多い。ほぼ完形に近い形まで復元できたものの中では326が最大であるが、他のものも器高が概ね30cm以上になると思われる。

第VI群……弥生時代に属する土器群を一括する。

- 1類……変形工字文状の沈線文を有し、文様体の一部に渦巻文や平行沈線が傾斜するなどの変化がみられる。
(寺前II遺跡から出土)

厳密に言えば縄文時代を扱う本稿で取り上げるのはおかしいが、出土点数が少ないことや縄文晩期に後続するものであることから、便宜上本稿の最後で取り扱うこととした。ただし、出土したのはすべて寺前II遺跡のものであることから、これらの説明は寺前II遺跡で行うことにする。

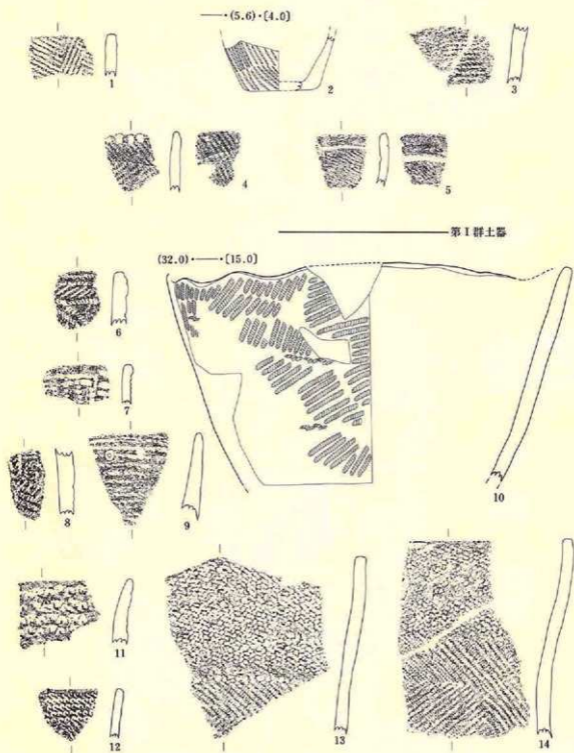
第VII群……土製品を一括する。(第35図～第36図、第1表P. 73、写真図版20)

- 1類……土偶
- a 中空土偶 (332)
 - b 中空とはなっていないもの。(333, 334, 335)

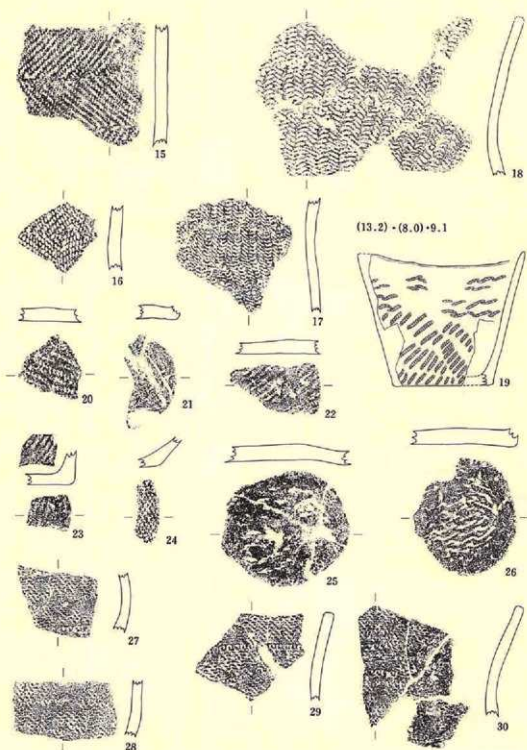
- | | |
|---------------|--|
| c 板状となっているもの。 | (336, 337) |
| 2類……耳飾り | (338) |
| 3類……円盤状土製品 | (339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346) |

332は唯一の中空土偶であるが、手足がなく、頭部が欠損しているため人間を模したものかどうかは不明である。裏面中央に尾のようなものが見られることからすれば何等かの動物を模したものかもしれない。338は表面の一部が剝落している。中央に針一本が通るほどの細い孔が穿たれている。円盤状土製品は合計8点が出土しているが、有孔のものは1点のみである。

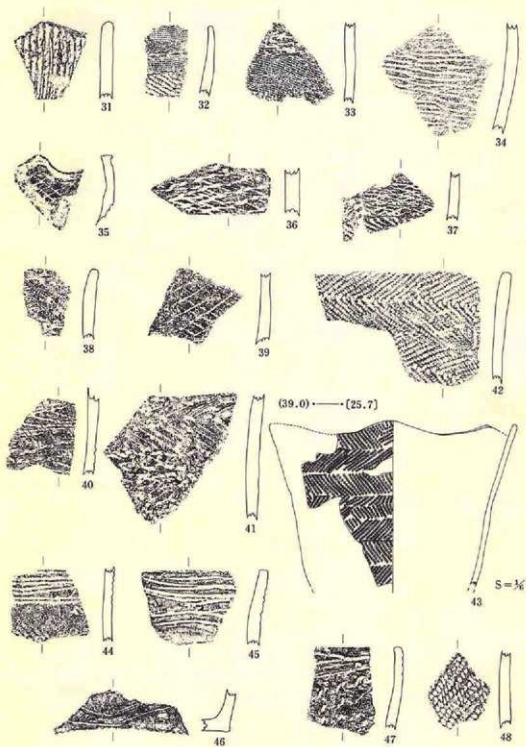
時期は不詳のものが多いが、332は晩期、333、338は後期から晩期にかけてのものと思われる。



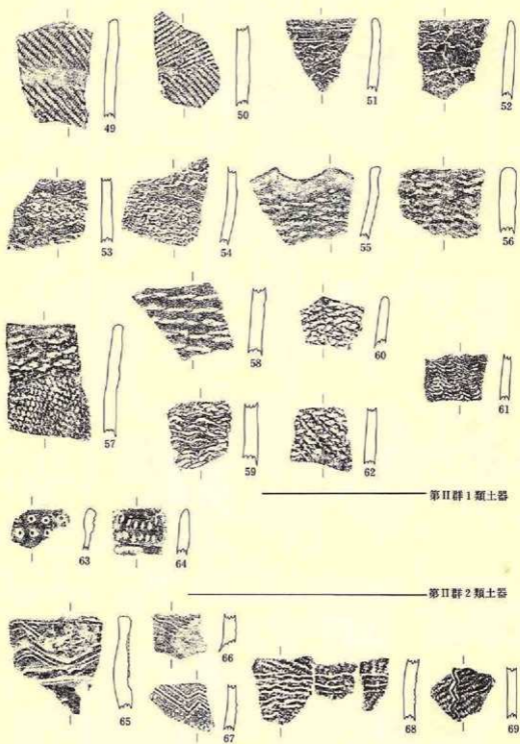
第11图 第I群·第II群I類土器



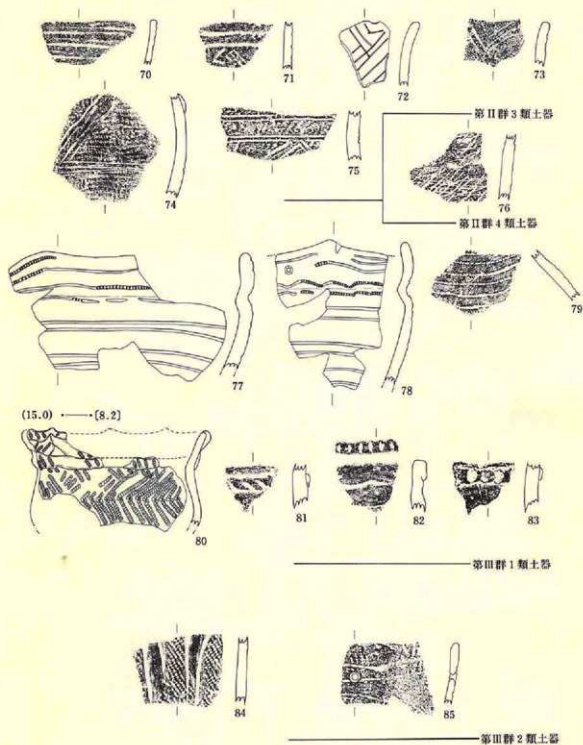
第12图 第II群1類土器



第13圖 第Ⅱ群1類土器

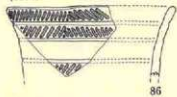


第14圖 第II群1~3類土器



第15圖 第II群3~4類・第III群1~2類土器

(13.4) ← (5.7)



86



87



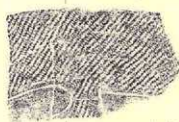
88



89



90



91



92



93

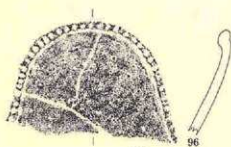


94



95

第IV群1類土器



96



97



98



99

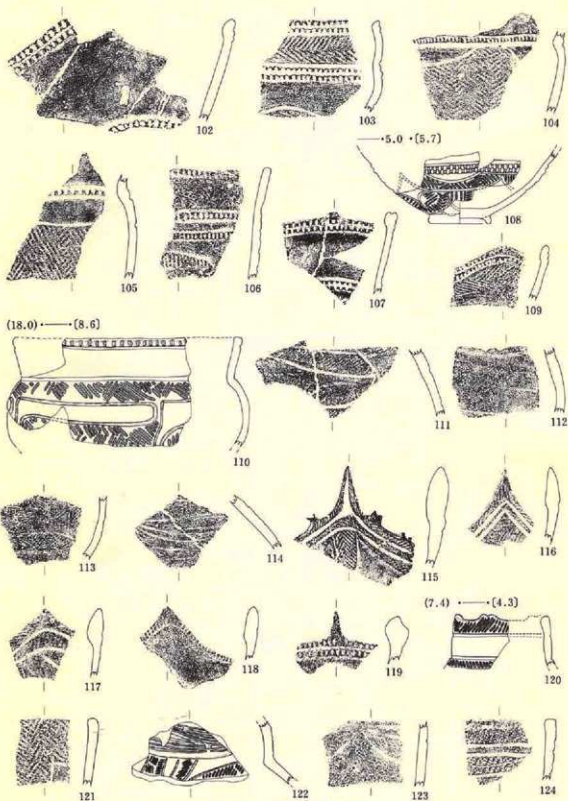


100

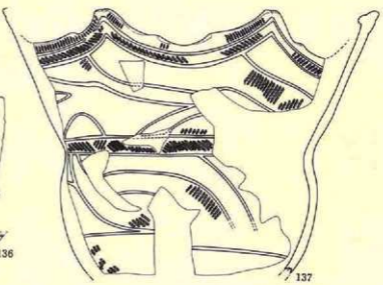
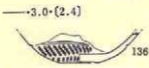
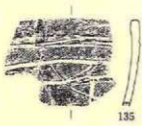
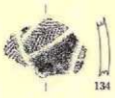
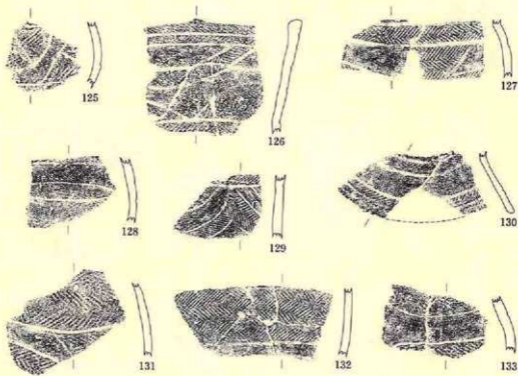


101

第16図 第IV群1～2類土器

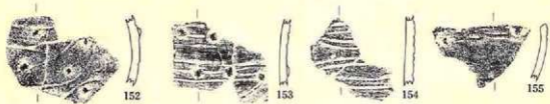
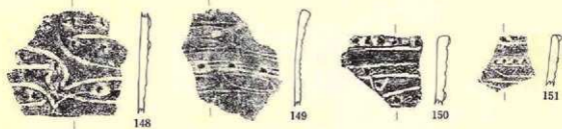
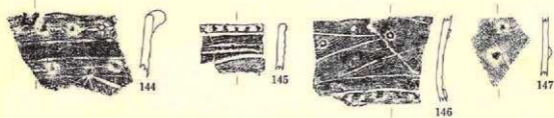
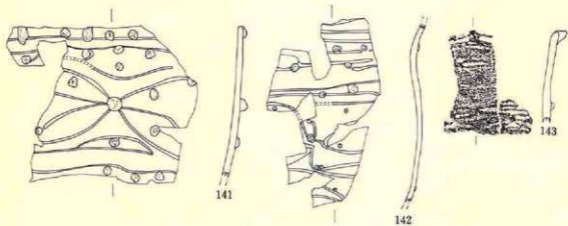
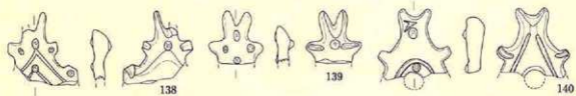


第17圖 第IV群2類土器

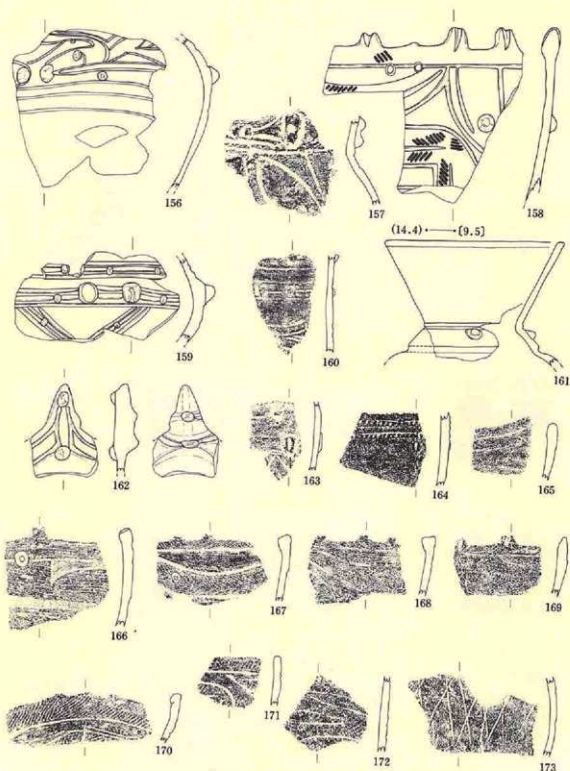


第IV群2類土器

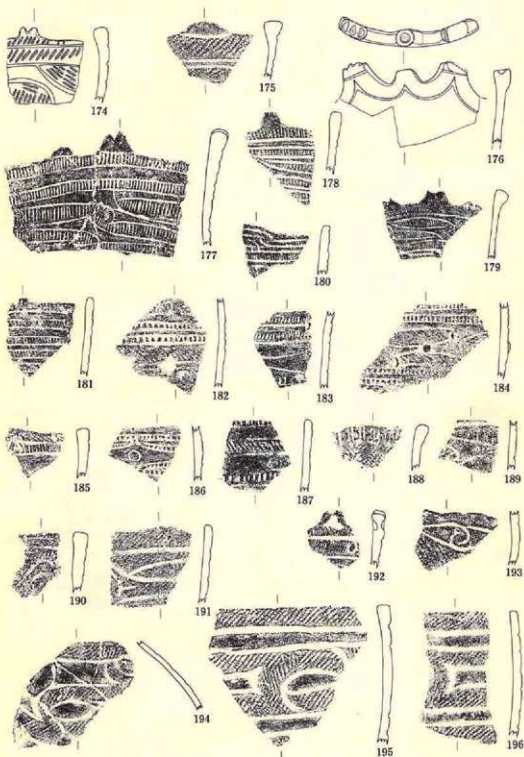
第18圖 第IV群2類土器



第19图 第IV群3類土器



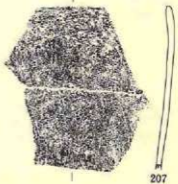
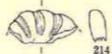
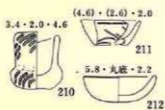
第20图 第IV群3類土器



第21圖 第IV群3類土器

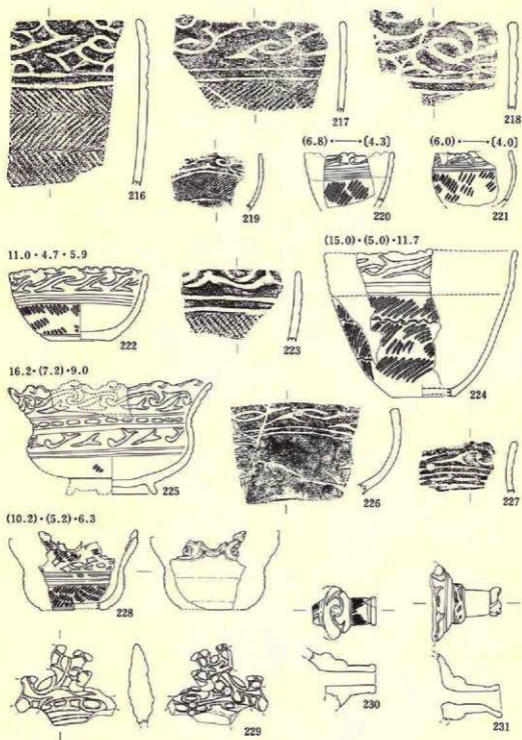


第IV群3類土器



第IV群4類土器

第22図 第IV群3～4類土器

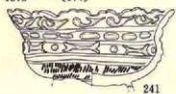


第23圖 第V群1類土器



第24図 第V群1類土器

13.3 → [6.4]

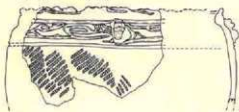


241

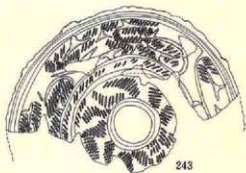
(19.4) · (8.5) · 3.6



(6.0) → [7.9]

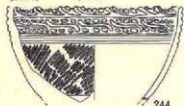


242



243

(14.0) → [7.5]



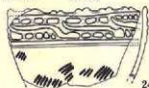
244

(20.6) · (6.6) · 7.6



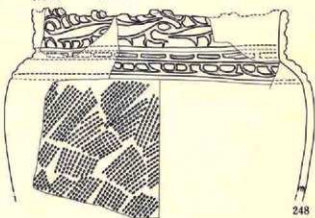
245

(11.0) → [5.7]



246

(20.4) → [16.5]

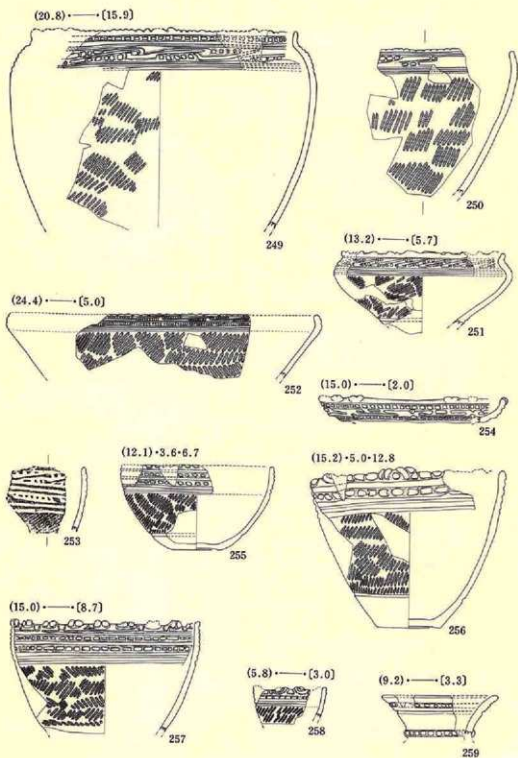


248

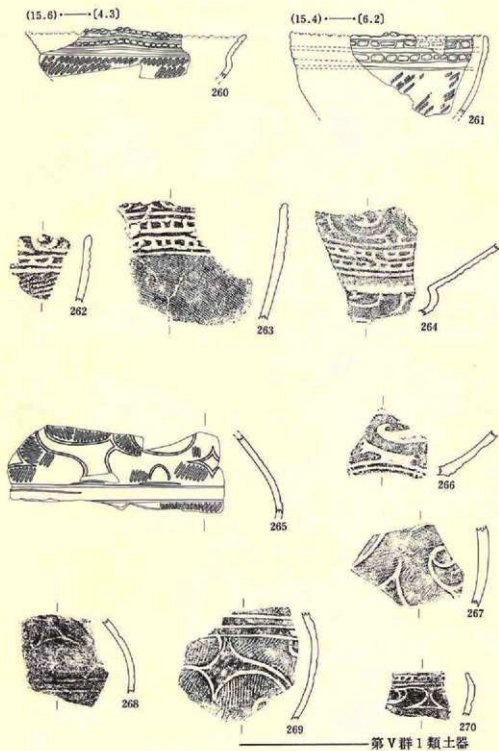


247

第25图 第V群1類土器



第26图 第V群I類土器



第27图 第V群1類土器

— (16.4) · (1.4)



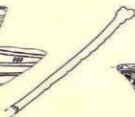
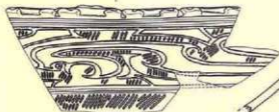
271

(40.6) · (22.6) · 6.6

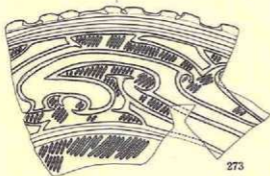


S = 1/2

272



274

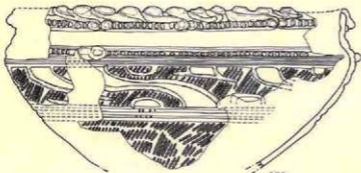


273



275

(26.0) · (12.8)



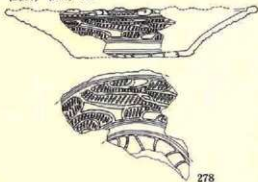
276



277

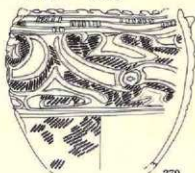
第28图 第V群2類土器

(20.0) • (9.6) • 3.9



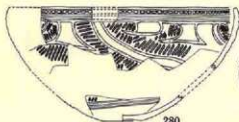
278

(12.8) • [12.8]



279

(18.2) • (3.0) • (9.0)

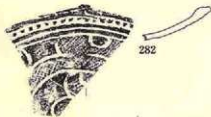


280

(24.2) • [16.7]



281



282



283



284



285

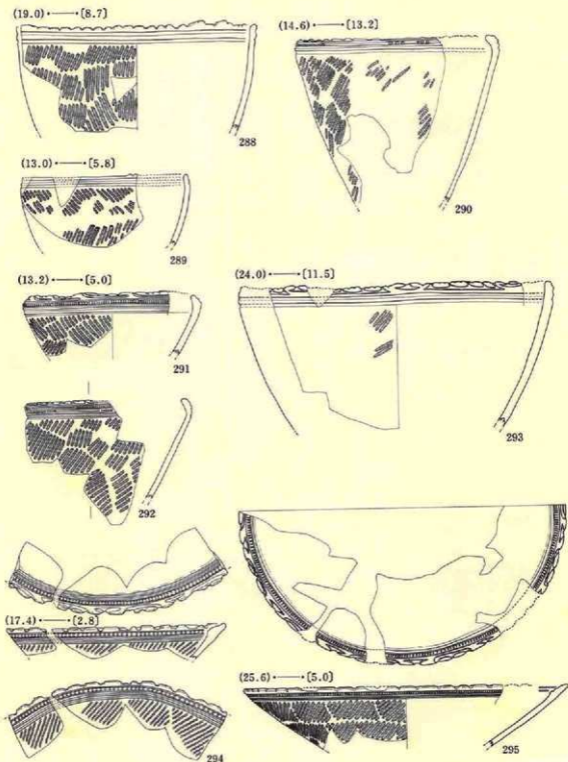


286



287

第29图 第V群2類土器

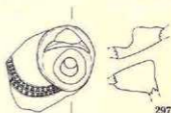


第30图 第V群2類土器

(20.6) → [10.1]



296



297

(3.2) → [6.4]



298



299



300

第V群2類土器



301

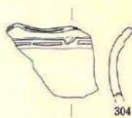


302

(4.8) → [3.0]



303



304

(4.0) → [5.6]

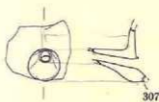


305

→ 7.8 [6.2]



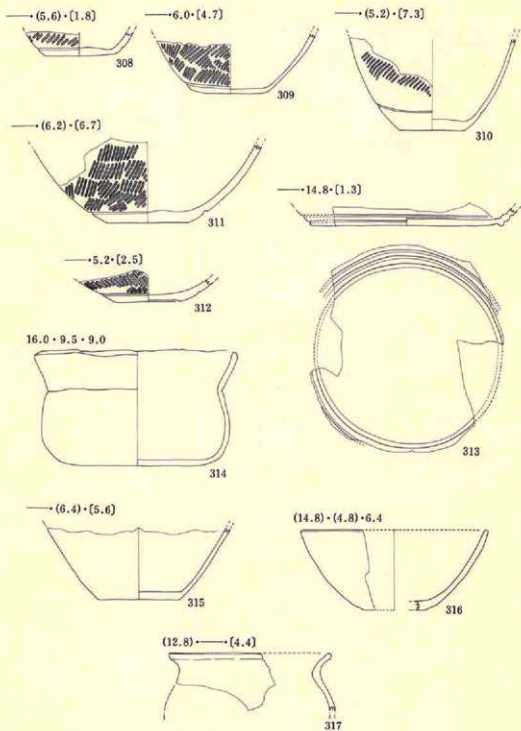
306



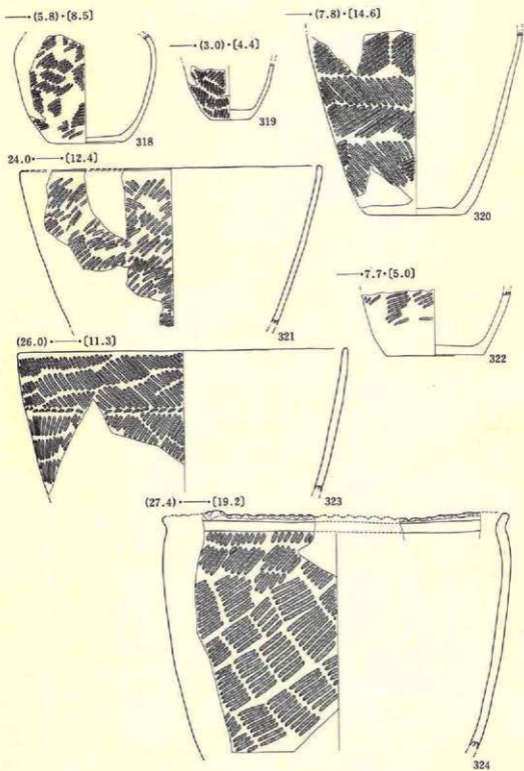
307

第V群3類土器

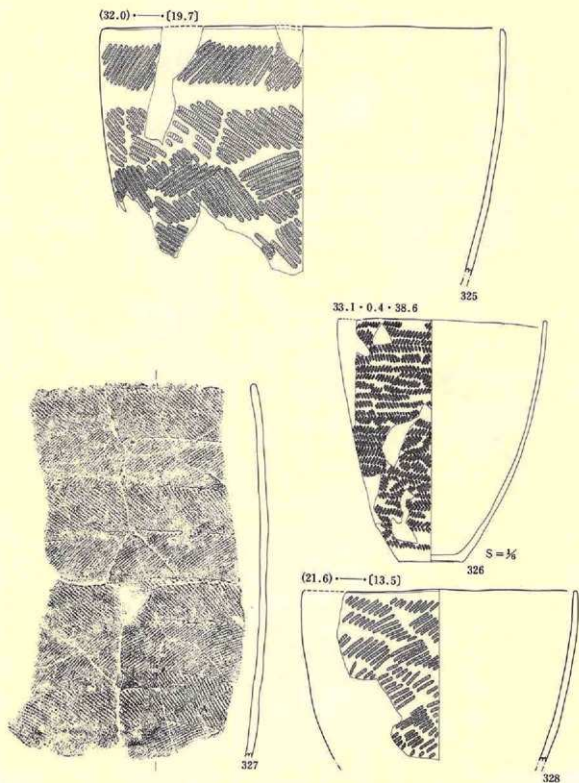
第31図 第V群2～3類土器



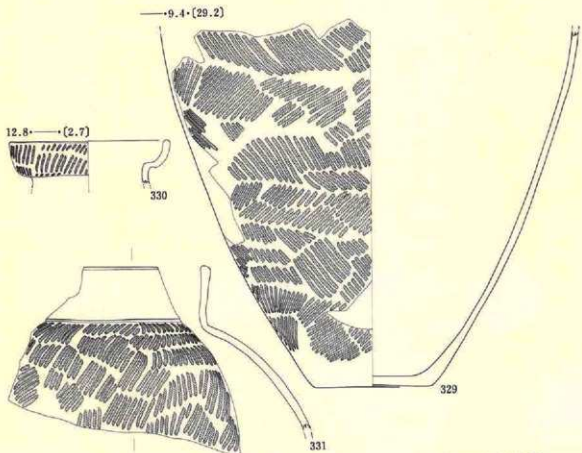
第32图 第V群4類土器



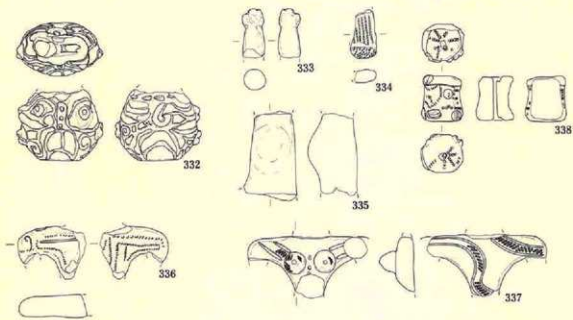
第33图 第V群4類土器



第34図 第V群4類土器



第V群4類土器



第35图 第V群4類土器・第VII群土製品



339



340



341



342



343



344



345



346

第Ⅶ群土製品

第36图 第Ⅶ群土製品

第1表 土器・土製品観察表

遺物 番号	器 名 称	種 分 類	法 量 (cm)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	出土 地点	図 版 番号	写真 図版
			口 径	底 径	高 さ							
1	破片	I				原体を引きずる	砂	灰褐色	焼成良好	3C	第11図	5
2	鉢	"	—	(5.6)	(4.0)	摺糸文	織織	褐色		6F	"	"
3	破片	"				"		内一氧化物		4D	"	"
4	"	"				表裏縄文、刷込み		"		A区	"	"
5	"	"				表裏縄文、沈線文	砂	褐色		5E	"	"
6	"	II-1				原体正底、沈線文		"		7I	"	"
7	"	"				原体正底、陸帯、刷込み		"		3B	"	"
8	"	"				原体正底	織織	"		6G	"	"
9	"	"				摺糸文		黒褐色		4E	"	"
10	鉢	"	(32.0)	—	(15.0)	波状口縁	織織	褐色		3C	"	"
11	破片	"				ループ文	織織	"	風化が著しい	3B	"	"
12	"	"				ループ文		"		6F	"	"
13	"	"				山形口縁、肩々段合凸、羽状縄文		暗褐色		4D	"	"
14	"	"				山形口縁、肩々段合凸、羽状縄文		"	13と同一個体	4C	"	"
15	"	"				羽状(菱形)		黒褐色		A区	第12図	"
16	"	"				羽状(菱形)		褐色		6F	"	"
17	"	"				0段の組み紐		黒褐色		4C	"	"
18	"	"				0段の組み紐	織織	"		3D	"	"
19	鉢	"	(13.2)	(8.0)	9.1	絞絡文		"		5D	"	"
20	破片	"				摺糸文	織織	褐色	底部	3B	"	6
21	"	"				"	"	"		3D	"	"
22	"	"				"	"	"		4D	"	"
23	"	"				"	"	"		5D	"	"
24	"	"				網代底		"		C区	"	"
25	"	"				原体正底		赤褐色	"	"	"	"
26	"	"				原体正底	織織	"	"	"	"	"
27	"	"				摺糸文、ループ文	"	褐色		4D	"	"
28	"	"				摺糸文、ループ文	"	"	27と同一個体	"	"	"
29	"	"				摺糸文、ループ文、山形口縁	"	"	"	4C	"	"
30	"	"				摺糸文、ループ文、山形口縁	"	"	"	"	"	"
31	"	"				摺糸文	"	"		7E	第13図	"
32	"	"				摺糸文、斜縄文		黒褐色		5D	"	"
33	"	"				摺糸文		褐色		5E	"	"
34	"	"				摺糸文		黒褐色		3C	"	"
35	"	"				網目状摺糸文、沈線文		"		4B	"	"
36	"	"				網目状摺糸文	織織	褐色		7F	"	"
37	"	"				不整摺糸文、斜縄文	"	"		8D	"	"
38	"	"				網目状摺糸文	"	暗褐色		C区	"	"
39	"	"				網目状摺糸文		赤褐色		7H	"	"
40	"	"				木目状摺糸文	織織	暗褐色		3B	"	"
41	"	"				木目状摺糸文、絞絡文	"	赤褐色		7I	"	"
42	"	"				羽状(結束)	"	褐色		6D	"	"
43	鉢	"	(39.0)	—	(25.7)	塊脚、突起、山形口縁		"		5D	"	"
44	破片	"				沈線文(半截竹管)		黒褐色		3C	"	7
45	"	"				沈線文(半截竹管)		褐色		6D	"	"
46	"	"				沈線文(半截竹管)		"	45と同一個体	4C	"	"
47	"	"				沈線文、絞絡文	織織	"		5D	"	"

遺物 番号	器 種		法 量 (cm)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	出土 地点	図 版 番号	写真 図版
	名 称	分 類	口 径	底 径	高 さ							
48	破片	Ⅱ-1				黄々黒斜縄文		黒褐色		4 E	第13回	7
49	"	"				直筒段多条、山形口縁	織紐	褐色		7 F	第14回	"
50	"	"				直筒段多条	"	黒褐色		5 E	"	"
51	破片	"				沈線文(半截竹管)		暗褐色		3 C	"	"
52	"	"				綾絡文		赤褐色		6 D	"	"
53	"	"				捺糸文	織紐	黄色		7 E	"	"
54	"	"				不整綫絡文		"		4 C	"	"
55	"	"				不整捺糸文		黒褐色		A区	"	"
56	"	"				"		褐色		6 F	"	"
57	"	"				"	織紐	"		A区	"	"
58	"	"				"	"	"		4 D	"	"
59	"	"				"	織紐	暗褐色		6 G	"	"
60	"	"				不整捺糸文、山形口縁		赤褐色		C区	"	"
61	"	"				不整捺糸文	織紐	褐色		3 C	"	"
62	"	"				付加糸文	"	赤褐色		C区	"	"
63	"	Ⅱ-2				竹管文		褐色		2 B	"	"
64	"	"				刻み目	織紐	"		7 G	"	"
65	"	Ⅱ-3				沈線文(半截竹管)		暗褐色	一部割落	3 B	"	"
66	"	"				沈線文(半截竹管)		褐色		3 C	"	"
67	"	"				沈線文(半截竹管)		"		4 C	"	"
68	"	"				沈線文(半截竹管)		赤褐色		3 C	"	"
69	"	"				沈線文(半截竹管)		褐色		6 D	"	"
70	"	"				沈線文		"		3 C	第15回	"
71	"	"				"		"		"	"	"
72	"	"				"	粗砂	"		2 B	"	"
73	"	"				"	"	"		3 C	"	"
74	"	"				沈線文、刻み目		赤褐色		A区	"	"
75	"	"				沈線文(半截竹管)		褐色		"	"	"
76	"	Ⅱ-4				網目状捺糸文	粗砂	黒褐色		9 G	"	8
77	"	Ⅲ-1				沈線文(半截竹管の押し引き)		褐色	地文なし	4 C	"	"
78	"	"				沈線文(半截竹管の押し引き)		"	第15回、 77と同一個体	"	"	"
79	"	"				沈線文(押し引き)		"		4 E	"	"
80	鉢	"	(15.0)	—	(8.2)	隆帯		"		3 B	"	"
81	破片	"				"		"		3 C	"	"
82	"	"				隆帯、刻み目		"		"	"	"
83	"	"				隆帯、刻み目、沈線文		赤褐色		5 G	"	"
84	"	Ⅲ-2				磨消縄文		褐色	地皮良好	7 E	"	"
85	"	"				沈線文		"	縮径孔	5 F	"	"
86	壺(?)	Ⅲ-1	(13.4)	—	(5.7)	磨消縄文	砂	青灰色		7 G	第16回	"
87	破片	"				磨消縄文、羽状縄文	"	黒褐色	外一残滓	4 C	"	"
88	鉢	"				磨消縄文		褐色		"	"	"
89	破片	"				"		"		7 H	"	"
90	"	"				"	粗砂	黒褐色		4 C	"	"
91	鉢	"				"	粗砂	褐色		"	"	"
92	破片	"				"	"	"		7 I	"	"
93	"	"				"	"	"	内一残滓	7 F、 1土層	"	"
94	"	"				磨消縄文、竹管文	粗砂	"		6 G	"	"
95	"	"				沈線文(磨消状)	砂	黒色		3 C	"	"
96	"	Ⅲ-2				刻み目帯	"	褐色		4 C	"	"

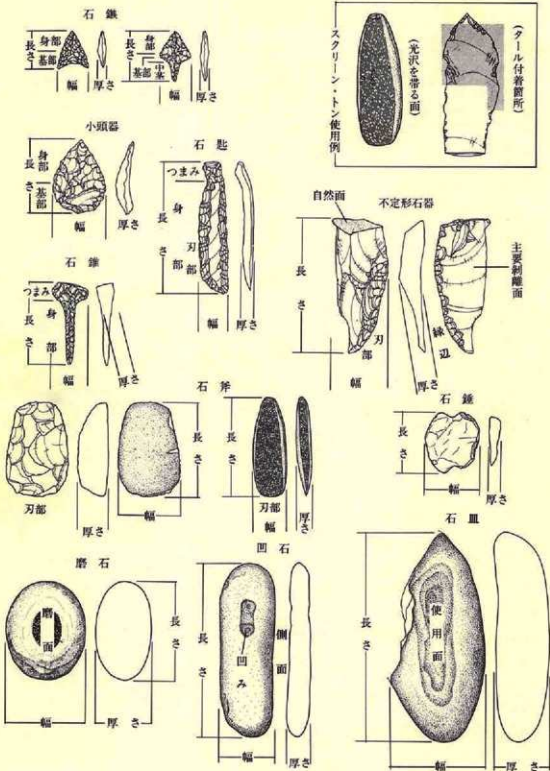
遺物 番号	器 種			法 量 (cm)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	出土 地点	国 版 番号	写真 図版
	名 称	分類	口径	底径	高さ								
97	破片	N-2					刻み目帯	砂	褐色		6 D	第16図	8
98	"	"					"	"	暗褐色		不明	"	"
99	"	"					"	"	青灰色		7 F	"	"
100	"	"					"	金雲母	褐色	内外一様	4 C	"	9
101	"	"					"	砂	"		4 C	"	"
102	"	"					"	"	黒褐色		7 F 2上段	第17図	"
103	"	"					刻み目帯、羽状縄文	砂	褐色		3 C	"	"
104	"	"					刻み目帯、羽状縄文	"	"	内一残滓	"	"	"
105	"	"					刻み目帯、羽状縄文	"	"	内一残滓 104と同	4 C	"	"
106	"	"					刻み目帯	粗砂	"		C区	"	"
107	"	"					"	"	暗褐色	内面黒色処理	4 C	"	"
108	鉢	"	—	5.0	[5.7]		刻み目帯、羽状縄文	"	黒色	"	"	"	"
109	破片	"					刻み目帯、羽状縄文	砂	褐色	内一残滓	C区	"	"
110	鉢	"	(18.0)		[8.6]		刻み目帯、羽状縄文、磨消縄文	"	"		4 C	"	"
111	破片	"					磨消縄文	砂	赤褐色		C区	"	"
112	"	"					"	砂	"		"	"	"
113	"	"					"	粗砂	褐色		3 C	"	"
114	"	"					"	"	赤褐色		5 D	"	"
115	"	"					磨消縄文、羽状縄文、突起	"	褐色		3 C	"	"
116	"	"					磨消縄文、羽状縄文、突起	砂	"		4 D	"	"
117	"	"					磨消縄文、羽状縄文、突起	"	"	内外一致化物	不明	"	"
118	"	"					突起	"	黒褐色	"	4 C	"	"
119	"	"					刻み目帯、突起	砂	褐色		5 D	"	"
120	"	"	(7.4)	—	[4.3]		磨消縄文、突起	"	"		5 D	"	"
121	"	"					羽状縄文(縦位)	粗砂	"	内面黒色処理	3 F 1上段	"	"
122	"	"					磨消縄文、コブ付き	"	"		3 C	"	"
123	"	"					磨消縄文	粗砂	"		4 C	"	"
124	"	"					"	"	"		"	"	"
125	"	"					"	"	"		"	第18図	"
126	"	"					"	金雲母	"		5 D	"	10
127	"	"					磨消縄文、羽状縄文	"	黒褐色		3 C	"	"
128	"	"					"	"	"		"	"	"
128	"	"					"	"	"		7 F	"	"
130	"	"					"	粗砂	褐色		4 C	"	"
131	"	"					"	"	"		A区	"	"
132	"	"					"	"	"		不明	"	"
133	"	"					"	粗砂	"		7 F 2上段	"	"
134	"	"					"	"	"		4 C	"	"
135	"	"					磨消縄文	粗砂	赤褐色		3 C	"	"
136	"	"	—	3.0	[2.4]		磨消縄文、羽状縄文	"	黒褐色		3 B	"	"
137	鉢	"	(29.5)	—	[21.0]		"	粗砂	褐色		4 C	"	"
138	破片	N-3					瘤付き、突起	"	"		"	第19図	"
139	"	"					瘤付き、比喩文、突起	"	黒褐色		3 C	"	"
140	"	"					瘤付き、突起	"	褐色	有孔、炭化物	4 C	"	"
141	鉢	"					瘤付き、比喩文	"	"		3 C	"	"
142	"	"					瘤付き、比喩文	"	"		6 G	"	"
143	"	"					瘤付き、入組文	砂	"		A区	"	"
144	破片	"					"	"	黒褐色	内一残滓	3 C	"	"
145	"	"					"	"	"		6 I	"	"
146	"	"					"	金雲母	褐色		C区	"	"

遺物 番号	器 種		法 量(㎝)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	出 土 地 点	図 版 番 号	写 真 図 版
	名 称	分 類	口 径	底 径	高 さ							
147	破片	B-3				瘤付き、人組文、割目		褐色		7 G	第19図	10
148	"	"				瘤付き、人組文		"	灰化物	7 I	"	"
149	"	"				"		黒色	"	?	"	11
150	"	"				"		褐色	灰化物	3 C	"	"
151	"	"				瘤付き、磨消縄文		"	"	2 B	"	"
152	"	"				"		"	外一灰化物	3 C	"	"
153	"	"				瘤付き	金雲母	黒色	"	A区	"	"
154	"	"				隆起線文		褐色	内一残滓	6 F	"	"
155	"	"				瘤付き		"	"	3 C	"	"
156	"	"				瘤付き、沈線文	砂	黒褐色	"	4 C	第20図	"
157	"	"				瘤付き、磨消縄文		褐色	"	3 C	"	"
158	鉢	"				瘤付き、磨消縄文、突起	粗砂	"	"	"	"	"
159	破片	"				瘤付き		黒褐色	"	6 G	"	"
160	"	"				瘤付き、隆起線文		"	内一残滓 内面褐色処理	3 C	"	"
161	注口土器(?)	"	(14.4)	—	(9.5)	瘤付き	砂	赤褐色	"	"	"	"
162	破片	"				瘤付き、突起	粗砂	褐色	"	7 I	"	"
163	"	"				瘤付き、磨消縄文	"	"	"	3 C	"	"
164	"	"				瘤付き、刻み目帯	砂	"	外一灰化物	A区	"	"
165	"	"				磨消縄文	金雲母	"	"	4 C	"	"
166	"	"				割目、突起	粗砂	"	内一残滓、 褐色処理	"	"	"
167	"	"				磨消縄文、突起	"	"	内外一残滓	5 D	"	"
168	"	"				"	"	"	"	丹一残滓	"	"
169	"	"				"	"	"	"	"	"	"
170	"	"				"	"	"	"	7 I	"	"
171	"	"				"	"	"	"	C区	"	"
171	"	"				磨消縄文	金雲母	"	"	A区	"	"
172	"	"				磨消縄文、羽状縄文	"	"	内面黒色処理	不明	"	"
173	"	"				沈線文	"	"	"	3 C	"	"
174	"	"				磨消縄文、突起	"	"	"	第21図	12	"
175	"	"				"	"	"	"	7 H	"	"
176	"	"				刻み目、突起	"	灰白色	"	A区	"	"
177	鉢	"				刻み目帯(人組文)突起	金雲母	黒褐色	"	"	"	"
178	破片	"				"	"	褐色	"	3 C	"	"
179	"	"				"	"	黒色	"	5 F	"	"
180	"	"				"	"	褐色	"	A区	"	"
181	"	"				" 突起	"	"	"	"	"	"
182	"	"				刻み目帯(人組文)	"	"	残滓	"	"	"
183	"	"				"	"	"	外一塩	3 C	"	"
184	"	"				刻み目帯(人組文)瘤付き	"	黒褐色	"	"	"	"
185	"	"				"	"	"	内一残滓	6 F	"	"
186	"	"				刻み目帯(人組文)沈線文	"	黒色	褐色処理	3 C	"	"
187	"	"				刻み目帯(人組文)	"	褐色	"	"	"	"
188	"	"				刻み目(半籠竹管)	"	暗褐色	"	不明	"	"
189	"	"				刻み目帯(人組文)(?)	"	褐色	"	C区	"	"
190	"	"				磨消縄文	"	"	"	5 C	"	"
191	"	"				"	"	"	"	5 F	"	"
192	"	"				刻み目帯、突起	"	褐色	"	6 F	"	"
193	"	"				磨消縄文	"	"	"	4 C	"	"
194	"	"				磨消縄文(人組文)	"	赤褐色	"	3 D	"	"
195	"	"				"	金雲母	褐色	"	8 H	"	"
196	"	"				"	"	黒褐色	"	7 G	"	"

遺物 番号	器 種		法 量 (cm)			文 樣 体 等	胎 土	色 調	備 考	出土 地点	図版 番号	写真 図取
	名 称	分類	口径	底径	高さ							
197	破片	B-3				磨滑縄文(渦巻文)		褐色	内一残片	8 H	第22図	12
198	"	"				磨滑縄文(渦巻文)		"		4 D	"	"
199	"	"				三叉文		"		A区	"	"
200	"	B-4				羽状縄文		黒褐色	外一様	4 D	"	13
201	"	"				"	金雲母	褐色		3 B	"	12
202	鉢	"				"		"		4 C	"	13
203	"	"				"		黒色	黒色処理	6 G	"	12
204	"	"				"	金雲母	褐色		8 H	"	13
205	"	"				羽状縄文		灰白色	片一 上残	"	"	"
206	破片	"				"		赤褐色		8 H	"	12
207	鉢	"				刷目	粗砂	褐色	外一灰化跡	3 C	"	13
208	破片	"				柳歯状沈線文	"	赤褐色		A区	"	"
209	"	"				刷目	金雲母	暗褐色		3 C	"	"
210	鉢	"	3.4	2.0	4.6	"		褐色	ミニチュア土器	6 F	"	"
211	浅鉢	"	(4.6)	(2.6)	2.0	刷目、沈線文	"	灰白色	ミニチュア土器 片一破片	4 C	"	"
212	"	"	5.8	丸	2.2	無文		褐色	ミニチュア土器	C区	"	"
213	破片(把手)	"				"		黒褐色		4 D	"	"
214	破片(突起)	"				"		"		4 E	"	"
215	破片(突起)	"				人面		褐色		6 E	"	"
216	鉢	V-1				三叉文、羽状縄文		"		8 H	第23図	"
217	"	"				三叉文		"	外一様	3 D	"	"
218	破片	"				"		暗褐色		7 I	"	"
219	鉢	"				"		褐色	黒色処理	C区	"	"
220	"	"	(6.8)	—	[4.3]	"		赤褐色	ミニチュア土器 片一	7 G	"	"
221	"	"	(6.0)	—	[4.0]	"		暗褐色	"	7 I	"	"
222	"	"	11.0	4.7	5.9	"		褐色	内面黒色処理	8 H	"	"
223	破片	"				沈線文		黒褐色	内一残片 内面黒色処理	片一 上残	"	"
224	鉢	"	(15.0)	(5.6)	11.7	三叉文		暗褐色	内面黒色処理	C区	"	"
225	"	"	16.2	(7.4)	9.0	三叉文、高台付き		褐色	黒色処理 内一残片	"	"	14
226	"	"				三叉文	破	暗褐色		6 I	"	13
227	破片	"				"		黒褐色	黒色処理	4 C	"	"
228	鉢	"	(10.2)	(5.2)	6.3	人面文		褐色	外一灰化跡	8 H	"	"
229	破片	"				人面文、突起		"		6 F	"	14
230	注口土器	"				三叉文		"	注口部	4 D	"	"
231	"	"				"	粗砂	灰白色	朱塗り	C区	"	"
232	"	"	—	丸	[4.4]	半円状人面文		褐色	丸底黒色処理	8 H	第24図	"
233	"	"	(10.9)	—	[4.2]	渦巻状人面文		褐色	"	7 G	"	"
234	"	"	—	—	[4.9]	三叉文、半円状人面文		灰褐色	"	7 I	"	"
235	"	"	—	—	[3.7]	沈線文(1条)		暗褐色	"	C区	"	"
236	破片	"				菱形彫文		褐色	内面黒色処理	7 I	"	"
237	鉢	"	(12.4)	—	(10.2)	人面文		黒褐色	"	C区	"	"
238	壺	"	—	—	(12.4)	"		"	内一残片	7 I	"	"
239	鉢	"	11.6	丸	6.5	三叉文		明褐色	一部欠損	8 H	"	"
240	壺	"	(10.6)	—	(21.6)	三叉文、菱形彫文		"	朱塗り	7 H	"	"
241	鉢	"	13.3	—	[6.4]	三叉文、高台付き		褐色	"	C区	第25図	"
242	"	"	[6.4)	—	[7.5]	五輪三叉文		黒褐色	高台(片一) 片一上残	7 F	"	"
243	皿	"	(10.4)	(8.5)	3.6	三叉文		明褐色	"	6 I	"	"
244	鉢	"	(14.0)	—	[7.5]	半面沈文		黒褐色	内一残片	8 H	"	15
245	"	"	(20.4)	(6.4)	7.6	"		浅黄褐色	"	7 I	"	"
246	"	"	(11.4)	—	[5.7]	"		暗褐色	内一残片	8 H	"	14

遺物 番号	器 種		法 量 (cm)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	出土 地点	図版 番号	写真 図版
	名 称	分類	口径	底径	高さ							
247	鉢	V-1				半曲状文		褐色	底に黒い土質 斑が著しい	5E	第25図	15
248	"	"	(20.4)	—	[16.5]	"		暗褐色	底に黒い 斑が著しい	8H	"	14
249	"	"	(20.8)	—	[16.9]	"		"	外一残片	5D	第26図	15
250	"	"				"		赤褐色	内一残片	5E	"	"
251	洗鉢	"	(13.2)	—	[5.7]	"		黒褐色	内面黒色処理	6F	"	"
252	"	"	(24.4)	—	[5.0]	半曲状文、羽状縄文		"	"	7G	"	"
253	鉢	"				半曲状文		黒色	黒色処理	5D	"	"
254	注口土器(?)	"	(15.0)	—	[2.0]	半曲状文、魚列状文		褐色	"	6F	"	"
255	鉢	"	(12.1)	3.6	6.7	魚列状文		黒褐色	"	4F	"	"
256	"	"	(15.2)	5.0	12.8	"		暗褐色	内一残片	7I	"	"
257	"	"	(15.0)	—	[8.7]	"		明褐色	"	8H	"	"
258	"	"	(5.8)	—	[3.0]	沈線文、割み目		赤褐色	ミニチュア土器	"	"	"
259	甕(?)	"	(9.2)	—	[3.3]	"		灰白色	"	A区	"	"
260	洗鉢(?)	"	(15.6)	—	[4.3]	"		灰褐色	"	7I	第27図	"
261	鉢	"	(15.4)	—	[6.2]	"		褐色	内面黒色処理 (底面のみ)	"	"	"
262	破片	"				魚列状文		"	"	"	"	"
263	鉢	"				"		"	白黒色処理 難得札	8H	"	"
264	皿	"				入組文		"	"	C区	"	16
265	甕(?)	"				"		"	磨耗が著しい	8E	"	"
266	破片	"				"		暗褐色	"	7H	"	"
267	"	"				"		明褐色	"	"	"	"
268	"	"				"		褐色	磨耗が著しい	"	"	"
269	"	"				変形菱形文		黒褐色	"	C区	"	"
270	"	"				入組文		赤褐色	"	7I	"	16
271	皿	V-2	—	(16.4)	[1.4]	"		暗褐色	"	7H	第28図	16
272	"	"	(40.6)	(22.6)	6.6	"		暗赤褐色	"	6E	"	"
273	"	"				"		褐色	"	7E	"	"
274	"	"				入組文、割み目		黒褐色	"	7H	"	"
275	"	"	—	14.8	[2.9]	入組文		褐色	"	7E	"	"
276	洗鉢	"	(26.0)		[12.8]	入組文、割み目		黒色	黒色処理	7I	"	"
277	甕	"				入組文		赤褐色	磨耗している	"	"	"
278	皿	"	(20.0)	(9.3)	3.9	"		暗褐色	"	6I	第29図	"
279	鉢	"	(12.8)	—	[12.8]	"		黒褐色	内外一残片	6E	"	17
280	洗鉢	"	(18.2)	(3.0)	[9.0]	"		褐色	"	7E	"	"
281	鉢	"	(24.2)	—	[16.7]	"		"	底一残片	8H	"	"
282	皿	"				"		暗褐色	"	不明	"	"
283	破片	"				"		黒褐色	"	7I	"	"
284	"	"				"		褐色	"	3C	"	"
285	"	"				"		"	"	7H	"	"
286	"	"				"		赤褐色	"	7I	"	"
287	"	"				沈線文		灰白色	朱塗り	5G	"	"
288	鉢	"	(19.0)	—	[8.7]	"		黒褐色	"	7G	第30図	"
289	"	"	(13.0)	—	[5.8]	沈線文、羽状縄文、突起		"	"	4D	"	"
290	"	"	(14.6)	—	[13.2]	沈線文、割み目		暗褐色	内一残片	5G	"	"
291	"	"	(13.2)	—	[5.0]	"		"	"	6I	"	"
292	"	"				"		黒褐色	内一残片 内面黒色処理	7I	"	"
293	"	"	(24.0)	—	[11.5]	沈線文、突起		暗褐色	"	7G	"	"
294	皿	"	(17.4)	—	[2.8]	沈線文、割み目、突起		黒褐色	磨耗	6E	"	"
295	"	"	(25.6)	—	[3.0]	"		"	"	"	"	"
296	鉢	"	(20.6)	—	[10.1]	沈線文、割み目		"	内一残片 底一遺	6I	第31図	18

器物 番号	器 種		法 量 (cm)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	出 土 地点	図 版 番号	写 真 回数
	名 称	分 類	口 徑	底 徑	高 さ							
297	注口土器	V-2				刻み目帯		褐色	朱塗り	4 C	第31図	18
298	壺	"	(3.2)	—	(6.4)	隆帯		"	"	7 H	"	"
299	"	"				"		黒褐色	"	3 E	"	"
300	片口土器	"				無文帯		褐色	"	C区	"	"
301	壺	"				隆沈文、留付	金雲母	灰白色	"	3 C	"	"
302	破片	V-3				腹部無文帯、刻み目		褐色	内—炭化物	6 G	"	"
303	壺	"	(4.8)	—	(3.0)	隆沈文		赤褐色	"	5 G	"	"
304	"	"				"		褐色	"	6 G	"	"
305	"	"	(4.0)	—	(5.6)	沈線(1条)		赤褐色	"	"	"	"
306	"	"	—	7.8	(6.2)	無文		褐色	"	"	"	"
307	注口土器	"				"		"	"	A区	"	"
308	破片	V-4	—	(5.0)	(1.8)	沈線	長石	暗褐色	"	C区	第32図	"
309	"	"	—	6.0	(4.7)	"		暗褐色	内—残片	7 I	"	"
310	鉢	"	—	(5.2)	(7.2)	"		赤褐色	"	C区	"	"
311	洗鉢(?)	"	—	(6.2)	(6.7)	"		"	"	8 H	"	"
312	破片	"	—	5.2	(2.8)	沈線、羽状縄文		黒褐色	"	6 E	"	"
313	皿	"	—	14.8	(1.3)	沈線		褐色	"	6 I	"	"
314	鉢	"	16.0	9.5	9.0	無文		暗褐色	"	8 H	"	"
315	"	"	—	(8.4)	(5.6)	"		褐色	"	7 I	"	"
316	"	"	(14.8)	(4.9)	6.4	"		黒褐色	"	C区	"	"
317	"	"	(12.8)	—	(4.4)	"		暗褐色	"	7 I	"	"
318	壺(?)	"	—	(5.8)	(8.4)	草部斜縄文		明褐色	"	8 H	第33図	19
319	鉢	"	—	(3.0)	(4.4)	"		暗褐色	内—残片、外—煤	6 G	"	18
320	"	"	—	(7.8)	(14.6)	羽状縄文(無結束)		明褐色	"	7 I	"	19
321	"	"	24.0	—	(12.4)	草部斜縄文		褐色	外—煤	7 H	"	"
322	"	"	—	7.7	(5.0)	"		明赤褐色	"	8 H	"	18
323	"	"	(26.0)	—	(11.3)	"		暗赤褐色	内—残片、外—煤	"	"	"
324	"	"	(27.4)	—	(19.2)	腹部無文帯、刻み目		暗褐色	外—残片	7 H	"	19
325	"	"	(32.0)	—	(19.7)	草部斜縄文		褐色	"	3 D	第34図	"
326	"	"	33.1	10.4	38.6	羽状縄文(無結束)		"	外—残片	8 H	"	20
327	"	"				羽状縄文(無結束)		"	"	"	"	"
328	"	"	(21.6)	—	(13.6)	草部斜縄文		"	"	6 F	"	"
329	"	"	—	9.4	(29.2)	"		"	"	8 H	第35図	19
330	壺(?)	"	12.8	—	(2.7)	腹部無文帯		黒褐色	"	7 I	"	20
331	"	"				"		褐色	"	C区	"	"
332	土偶	Ⅱ-1				隆沈線		"	中空	8 H	"	"
333	"	"				"		黒色	平	4 D	"	"
334	"	"				沈線文、削突文		褐色	"	6 G	"	"
335	"	"				無文		黒色	胴体	6 I	"	"
336	"	"				押し引き削突文		褐色	瓶状	"	"	"
337	"	"				帯縄文		"	"	4 C	"	"
338	耳輪	Ⅱ-2				首管文、留付き		赤褐色	一部割漆	3 C	"	"
339	円盤状土製品	Ⅱ-3				"		褐色	有孔	C区	第36図	"
340	"	"				沈線文		"	"	7 H	"	"
341	"	"				羽状縄文		"	"	"	"	"
342	"	"				"		"	"	"	"	"
343	"	"				"		"	"	"	"	"
344	"	"				"	縞縞	"	"	4 E	"	"
345	"	"				"	"	"	"	7 I	"	"
346	"	"				"	"	"	"	7 F	"	"



挿 図 2 : 主な石器の部位名称と計測位置
スクリーン・トンの使用例

(2) 石器・石製品

本遺跡から出土した全ての石器・石製品を一括し、器種別に分けて述べることにする。なお、各項目毎の細分とその説明は寺前II遺跡と共通するため、その取扱に付いては土器と同様単一のものとした。各器種毎の部位の名称や計測箇所等に付いては挿図2に示したとおりである。

1 石鏃 (第37図～第44図、第2表P. 154～157、写真図版21～24)

定義：矢の先に付けて用いたと考えられる小型の石器。

中茎の有無によって二つに分けられる。

第I群 無茎鏃…中茎が無いもの。基部の形態によって三つに細分される。

1類 平基……中心線に対して基部がほぼ直交するもの。身部と基部の形態によって三つに細分される。

- a 全体の形状がほぼ正三角形なもの。 (347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357)
- b 全体の形状がほぼ二等辺三角形となるもの。 (358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369)
- c 両端が丸味を帯びるもの。 (370, 371, 372, 373, 374, 375, 376)

「ほぼ正三角形」とは基部の長さを1とした場合、側辺の長さが0.8～1.2の範囲にあるものである。cと3類の違いは、cは基部が直線的に作り出されその両端部のみが丸みを帯びるのに対し、3類の方は基部全体を丸く作り出しているものである。

数量的にはaが11点、b-12点、c-7点であり、aとbは大差がない。しかし、bには図化を省略したものが4点あり、ややbが多い。大きさは平均でaが19.5mm、b-25.4mm、c-33mmとしだいに大型化する傾向にある。また、破損が少ないのも本類の特徴の一つとなっている。

2類 凹基……基部に抉入のあるもの。抉入の状態によって三つに細分される。

- a 抉入が大きくゆるい弧を描くもの。 (377, 378, 379, 380, 381, 382, 383)
- b 抉入が直線的となり、基部の両端がハの字状に開くもの。
(384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403)
- c 抉入が逆U字状を呈するもの。
イ 抉入が浅いもの。 (404, 405, 406, 407, 408, 409, 410)

- ロ 挿入が深いもの。 (411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421)

aの基部はゆるやかな弧状を描いており、1類の直線状のものとは明らかに異なっているが、381のように直線に近いものから384のようにcに近いものまである。しかし、いずれも基部の中央付近をくぼませるように作り出したもので、且つb、c程極端にはなっていないものである。

bはa、cに比し厚みのあるものが多い。

cはイ、ロの二つに分けられる。ロの両端部は非常に細くなっている。ロは完形のもの1点のみで、破損している割合が異常に多い。

- 3類 円基……基部全体が丸味を帯びるもの。 (422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431)

基部は丸味をもって作り出されており、しかも厚みがあるため二次調整の角度は急になっている。2類cのロとは逆に破損しているものは少ない。また、全体の整形や刃部の調整などは他と比較して粗い。

第II群 有茎鎌…中茎があるもの。基部の形態によって二つに細分される。

1類 凸基……中茎が明瞭に作り出されているもの。身部の形態によって二つに細分される。

- a 身部の形態がほぼ正三角形なもの。 (432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444)

- b 身部の形態がほぼ二等辺三角形となるもの。 (445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480)

aよりbが圧倒的に多い。これはaでは最小のものが17mm、最大のものが32mm、平均23.2mmと比較的小さいものが多いに対し、bでは最小のものが18mm、最大のものは45mm、平均28mmとなり、小さいものはa、bともほぼ同じであるが、bの方がより大きいものも含んでいる。30mmを超えるものは殆どbの形態をとることによる。また、aでは身部が欠損するものはわずか

に2点で、それも先端がわずかに欠損するのみであるが、bは445~469の25点は身部が完形なもの、470~480の11点は身部の一部が欠損するものであり、aに比して破損率が高い。

2類 尖基……中茎の作り出しが不明瞭で、基部が尖るもの。二つに細分される。

a 両端部から中茎の先端部へ直線的にすばまるもの。

(481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488,
489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496,
497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504,
505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512,
513, 514, 515, 516, 517, 518)

b 全体が棒状で両先端が尖るもの。

(519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526,
527)

aのうち481~509の29点は完形、510~518の9点が一部欠損するものである。破損している割合は高い。破損の状況を細かく見ると、中茎が破損しているのはわずかに1例で、しかもそれを含めてすべて先端部から身部にかけて破損しているのが特徴である。それに対してbには殆ど欠損が見られない。

小 結

石鏃、特に大型の石鏃と次にとり上げる尖頭器との区分に付いては尖頭器の項で触れることにする。

出土した石鏃は総計226点である。破損しているものの接合・復元を試みたが、接合・復元できたものも、同一個体を思わせるものも見あたらなかった。したがって、一応出土した総数をもって総個体数と考えることにする。

完形品は86点で全体の38%である。これを群別で見ると、第I群は総数85点のうち38点で44.7%、第II群は総数96点のうち48点で50%であり、それほど大きな差ではない。更に類別で見ると次のようになる。

第I群1類は30点のうち17点で56.6%、第I群2類は45点のうち13点で28.8%、第I群3類は10点のうち8点80%である。第II群1類は49点のうち17点34.7%、第II群2類は55点のうち31点56.4%である。すなわち、第I群2類と第II群1類は明らかに完形品が少なくなっている。

次に、石鏃の一つの特徴でもあるター^{or 1)}ル状のもの¹⁾の付着に付いてまとめておくことにする。タールが付着していたのは合計13点である。内訳は第I群2類1点、第II群1類8点、第II群

2類4点である。そのうち第I群2類1点は全面にかつ多量に附着しており他とは著しく異なっており、装着の際の固定剤として塗られたものかどうかは即断できない。仮にそうであったとして、タールの使用例は明らかに第II群に偏重しており、石鏃の中茎を矢柄に差込み固定するときの装着剤として使用されたことを示しているものと思われる。

2 尖頭器 (第44図～第47図、第2表P. 157～158、写真図版24～25)

定義：ものを突き刺すことを主たる目的として、先端を鋭利に尖らせた石器のうち石鏃と石鏃を除いたもの。

形状によって細分される。

第I群 槍先形…断面形が厚く、棒状をなすもの。二次調整が全面に施され、鋭い刃部が作り出されているもの。 (528, 529, 530, 531, 532)

第II群 木葉形…扁平で、基部が丸味を帯びるもの。二次調整の仕方によって二つに細分される。

1類 側縁に丁寧な二次調整が施され、鋭い刃部を作り出しているもの。

(533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540,
541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548,
549, 550, 551, 552, 553, 554)

2類 二次調整が雑で、未製品のなもの。

(555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562,
563, 564, 565, 566, 567, 568, 569)

第I群は所謂石槍と呼ばれているものである。出土したのは図示した5点のみである。完形品は1点であり、欠損するものうち3点は横に折れている。しかし、折れ面以外には加撃に伴うような欠損部分は見あたらない。

第II群1類は報告者によっては石鏃とされるものである。しかし、ほぼ同一の石材を用い、同様の形状と大きさを持つものであることから、これらは一群を形成するものと考えられる。ただし、2類の一部は所謂スクレーパーに分類されるものかもしれない。

小 結

本項第二群1類は石鏃の第I群3類と似ていることからその対比をし、両者の相違を明確にしておきたい。

第1に大きさの観点から見ると次のことが言える。まず、長さであるが、石鏃は最小22mm、最大43mm、平均32.5mmであるのに対して、本項第II群1類は最小28mm、最大45mm、平均38mmで

ひとまわり大きくなっている。重さも同様にして比較すると、石鏃は最小0.9g、最大で6.4g、平均3.0g、第II群1類は最小4.2g、最大18.7g、平均8.2gとなる。すなわち、当該遺物は石鏃の第I群3類より約3倍近い重さを有している。

第2に石材である。当該遺物は1点を除けばすべて凝灰質硬質泥岩であるのに対し、石鏃のそれは珪質細粒凝灰岩、凝灰質硬質泥岩とチャートの3種類からなり特定の石材に集中しているわけではない。

第3に二次調整の違いがあげられる。石鏃はその形状がどんなに変化しても（ここでは2群5類に分類された）、形態的には表裏・左右が対称^(註2)となり、製作技術上から見れば基本的に扁平で、先端が鋭く尖り、刃部は極めて鋭利に作られている。ところが、本項第II群1類は厚さに於て石鏃の2倍であり、整形のための二次調整も多くのものが粗いものに終わっており、主要剥離面の一部がそのまま残っている。その結果、側面から観察すると刃部の位置は石鏃の場合はほぼまん中にくるのに対し、本項第II群1類は片側に偏るものも相当数にのぼる。刃部形成のための二次調整も粗く、個々の剥離痕の大小・重複もさることながら、二次調整そのものが全縁にまわらず部分的なものが多い。そのため鋭い先端を作り出し得ないものが相当数に達するのである。

以上のことはこれらを石鏃とみなそうとすれば、当然そのほとんどは未製品とか半製品とかの範疇になるものである。しかし、これだけ規格性のあるものは、やはりこれ自体が一群を構成すると考えるのが妥当であろう。むしろ第II群2類とされたものの幾つかは1類に入れてもよいものかもしれない。

3 石鏃（第48図～第49図、第2表P. 158～159、写真図版25～26）

定義：細身の先端を尖られた打製石器で、孔を穿つのに用いられた（八幡^(文1)1962）と思われるもの。

身部の作り出しと長さによって二分される。

第I群 身部が明瞭に作り出され、かつ一定の長さとしさを有するもの。

1類 長さが概ね2cm以上のもの。 (570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594)

2類 長さが概ね2cm以下のもの。 (595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606)

第II群 身部が明瞭には作り出されず、つまみの部の一部を身部とするもの。

石錐に分類されたもの42点はすべて図示した。第Ⅰ群は完形品が少なく極めて破損率が高い。破損する箇所は特定の部分に集中しているわけではないが、比較的つまみ部に近いところからの破損が目につく。588～594は破損した石錐の身部と思われるものであるが、592は石錐第Ⅱ群2類bの可能性もある。また、588～590は1類ではなく2類の破損品かもしれない。

第Ⅱ群は殆ど完形である。

小 結

石錐42点の出土地点を検討してみると、上記の分類には無関係に他の遺物の出土量にあたかも比例するかのように偏りなく出土している。

錐の場合、身部の長さや太さは穿孔される側の厚さと材質、及び孔の性格によって規制を受ける。たとえば、土器の補修孔を穿とうとするならば孔は一定の厚さをあまり大きくはならずに貫通させることが要求される。一方、革に穿孔しようと思えば、厚さはそれほど問題とはならないため身部の細長い形と長さより、むしろ丈夫さと使いやすさが要求される。したがって、第Ⅰ群と第Ⅱ群の形態の違いは時間的なものではなく用法上の差からくるものと思われる。そのことが類別による出土地点に相違がみられない理由と思われる。

4 石匙 (第50図～第55図、第2表P. 159～160、写真図版26～29)

定義：両側辺からノッチを入れることによって作り出されたつまみを有し、刃部を有する打製石器。

剥片の種類と使用方法によって、二つに分けられる。

第Ⅰ群 縦長石匙…つまみ部を上にした時、主要な刃部が縦となり側辺をなすもの。刃部の数と全体の形状によって更に細分される。

1類 両側辺と末端(つまみ部の反対側)の三辺に刃部を有するもの。

(612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619,
620, 621, 622, 623)

2類 末端が尖り、両側辺ないし一側辺に刃部があるもの。側辺の形状により二つに分けられる。

a 両側辺が直線的または緩やかな弧状を描くもの。

(624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631,
632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639,

640, 641, 642)

b 一つの側辺がくの字状に大きく屈曲するもの。(643, 644, 645)

3類 縦長石匙ではあるが身部の一部が欠損するため、1類、2類のいずれにも分けられないもの。(646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653)

4類 つまみ部を欠損した縦長石匙を一括する。(654, 655, 656, 657, 658)

5類 縦長石匙の未製品。(659, 660, 661)

第II群 横長石匙…つまみ部を上にした時、主要な刃部が横となるもの。身部の形状により三つに細分される。

1類 二等辺三角形形状を呈するもの。(662, 663, 664)

2類 直角三角形形状を呈するもの。(665, 666, 667, 668, 669)

3類 隅丸長方形形状を呈するもの。(670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677)

4類 横長石匙ではあるが、身部を欠損するため上位のいずれかに分類できないもの。(678)

623は5類に入れることも考えられる。637、638は尖頭器ないし石鏃に分類できるのかもしれない。

小 結

第I群が50点、第II群は17点で、前者は後者の3倍である。二次調整から言えば、片面調整なもの46点、両面調整となるもの21点で、前者は後者の2倍強である。すなわち本遺跡においては、縦長石匙で片面調整であるものが石匙の典型的な形態と言える。大きさは第I群、第II群とも大きさまぎまであり、石鏃等のように大きさに強い規制はない。しいて言えば第I群より第II群の方がやや厚手の剥片を使用していると言える。破損率は30%で石鏃よりはるかに低い。

5 筥状石器 (第56図、第2表P、160、写真図版29)

定義：左右対称で上方が狭く、下方が広まっている(鈴木 1981)扁平な打製石器である。

背面に連続するフルーティング様の特徴ある剝離を施して刃部を作り出しているものもある。(679, 680, 681, 682)

出土したのは4点のみである。679と680は片刃、681と682は両刃となっている。調整技法から見れば、679と681は同様にフルーティング様の丁寧な調整も見られ、680と682は粗い。

6 ビエス・エスキュー (第56図、第2表P. 160、写真図版29)

定義：両極刺離痕が認められ、2個1対の刃部を有する四角形の打製石器。

(683, 684, 685, 686)

本項にとり上げたのは図示した4点のみであるが、567等他にもその可能性を有するものが何点かある。とり上げた4点は上下の両辺のみ使用されているものである。

7 不定形石器 (第57図～第71図、第2表P. 160～165、写真図版29～34)

定義：剥片石器のうち石鏃、尖頭器、石鏃、石匙、筒状石器及びビエス・エスキューを除いたもの。

形状、大きさ、刃部加工の仕方等によって細分される。

第I群 平面形は隅丸長方形ないし台形状を呈し、断面形はカマボコ状を呈する。全縁または三辺に急角度の刃部を形成し、主要な刃部は剥片の長軸上の一端に認められる。調整は概ね粗い。

(687, 688, 689, 690, 691)

主要な刃部は片刃に作られている。破損しているものは1点であるが、完形品にも明瞭な使用痕は見られない。所謂エンド・スクレーパー状のものである。

第II群 桶状の細長い剝離によって得られた剥片の端部に、両側辺から斜めに切り落とす形に二次調整が加えられ鋭利な刃部（彫刀面）を作り出しているもの。

(692)

桶状の細長い剥片はこの1点だけである。所謂ビュアリンと思われる。ほぼ全面に炭化物が付着し、更にごろより先端部にかけての縁辺にタール状の光沢のある炭化物が付着している。これは二次使用による付着と思われる。

第III群 連続する二次調整によって刃部を形成するもの。

刃部の数と形成する場所によって細分される。

1類 楕円形を基調としたやや扁平な剥片を用い、縁辺の一箇所を除いてほぼ全縁に二次調整を加えて刃部を形成するもの。大きさによって二分される。

a 最小径が3 cm以上のもの。 (693, 694, 695, 696, 697)

b 最大径が3 cm以下のもの。 (698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705,

706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713,
714)

2類 刃部が全縁には施されないもの。刃部の作り出しによって五分される。

a 一つの側辺にのみ刃部を構成するもの。

イ 二次調整が片面からのみ施されるもの。(715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722,
723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730,
731, 732, 733, 734, 735)

ロ 二次調整が両面から施されるもの。(736, 737, 738, 739, 740, 741, 742)

b 二つの刃部が隣合うもの。

イ 二次調整が片面からのみ施されるもの。(743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750,
751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758,
759, 760, 761, 762, 763, 764, 765)

ロ 二次調整が両片面から施されるもの。(766, 767, 768, 769, 770, 771)

ハ 二次調整が両面から施されるもの。(772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779,
780, 781, 782, 783, 784, 785, 786)

c 二つの刃部が直接には隣合わないもの。

イ 二次調整が片面からのみ施されるもの。(787, 789, 790, 791, 792)

ロ 二次調整が両片面から施されるもの。(793)

ハ 二次調整が両面から施されるもの。(794, 795)

d 三つの刃部が「コ」の字形に配されるもの。

イ 二次調整が片面からのみ施されるもの。(796, 797, 798, 801)

ロ 二次調整が両片面から施されるもの。(799, 800, 802)

e 縁辺の一部にのみ刃部が形成されないもの。

イ 二次調整が片面からのみ施されるもの。(803, 804)

ロ 二次調整が両片面から施されるもの。(805)

ハ 二次調整が両面から施されるもの。(806, 807, 808, 809, 810)

1類は所謂ラウンド・スクレーパー状のものである。平均で長軸27.4mm、短軸23.1mmの小型な楕円形をしており大きさ・形とも強い規格性を有している。二次調整はほとんどが両面から丁寧に行われている。

2類は刃部の作り出しによって細かく細分されるが、細分自体にはそれほど大きな意味はなく、剝片のとり方による相違程度のもと考えられる。本類は所謂サイド・スクレーパー状のものであるが、明らかに破損しているものもあり、他の器類に分類されるべきものも含まれて

いると思われる。たとえば、759、761、764、765、775、776、786、789、810等は石匙の破損したもので、763と774は石錐に分類できるかもしれない。これらを各々の器種に分類できなかったのは、これらがその器種に該当する明確な根拠を欠くと言う消極的な理由によるものである。

第IV群 縁辺の一部に挟入の刃部を形成するもの。

1類 挟入部分以外に刃部を持たず、挟入は片面調整となっているもの。

(811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818,
819)

2類 挟入部分以外に刃部を持たず、挟入は両面調整となっているもの。

(820, 824)

3類 挟入部分以外に剥片の周囲にも片面から二次調整が施され刃部を形成するもの。

(821, 822, 823, 825, 826)

4類 挟入部分を有すると同時に剥片の周囲に所謂刃こぼれが認められるもの。

(827)

本類は所謂ノッチ状のものであるが、811、812、814、820～822、827は意識的に挟入部分を作り出したものかどうかは不明瞭である。819を除けばすべて挟入部分は1箇所である。すべての挟入部分は第III群の刃部と比べると若干摩耗しており、特に818と819のそれは摩滅している。

第V群 剥片の縁辺に二次調整で鋸歯状の刃部が作り出されたもの。

(828, 829)

828は粗く、829は細かな刃部である。ともに明瞭な擦痕は見られない。

第VI群 位置、長さ等が不定で部分的な二次調整がみられるものと、微少剥離痕が見られるものを一括する。二次調整は概ね1mm程度の微小な剥離であり、第III群のそれとは明瞭に異なる。

1類 直線的な縁辺に二次調整がみられるもの。 (830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837,
838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845,
846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853,
854, 855, 856, 857, 858)

2類 弧を描く縁辺に二次調整がみられるもの。 (859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866
867, 868, 869, 870, 871, 872)

3類 断続的に二次調整が加えられるもの。 (873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880,

881, 882, 883, 884)

4類 微小剝離痕（刃こぼれ）を有するもの。（885, 886, 887, 889, 890, 891, 892,
893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900)

5類 部分的な二次調整と微小剝離痕の両方を有するもの。（図化は省略）

本群も第Ⅲ群と同様に類別にはあまり大きな意味はない。所謂リタッチド・フレイク類を一括したものである。数量的には土器をも含む全器種中最大である。図示したものはその中の一例にしか過ぎず、4類などはなお100点以上のものを確認している。また、5類は18点出土しているが、小片のための図化は割愛した。

小 結

不定形石器は出土量に於て最大であり、出土地点は偏在することなく全面から出土している。石材も剥片石器に使用された全ての石材をほぼ偏りなく網羅している。

本来、不定形石器という概念は同様の機能を果たしたと思われるものが形態的には定形とはならなかったことから付与された名称であろう。その意味では本項第Ⅰ群から第Ⅲ群Ⅰ類まではそれぞれ固有のタイプとして一群を構成し得るとと思われるものであり、本来的な概念からは外れるものであろう。それにもかかわらず当該遺物を本項に含めたのは、第Ⅲ群Ⅱ類以降の遺物と機能的には分離できない面を持っていると考えられることによる。換言すれば拯器の概念規定の吟味を徹底する必要があると思われる。

また、本項の細分に当たって所謂「折衝調整石器」は取り上げていない。これは筆者が当該遺物に付いて明瞭な認識を確立していないことによる。したがって当該遺物が本項の中に何点か入っているかもしれない。

8 石錘（第72図、第2表P. 165、写真図版35）

定義：二個一対の挟入を有する礫石器で、円形または楕円形の扁平な小型の川原石が用いられているもの。（901, 902, 903, 904）

石錘は4点出土した。いずれも短軸方向の縁辺に挟入を持つ礫石錘である。石材は4点中3点がホルンフェルスである。

9 石斧（第73図～第76図、第2表P. 165、写真図版35～36）

定義：斧状の石器。

製作技法によって二つに分けられる。

第I群 打製石斧。調整の方法によって細分される。

1類 両面調整によるもの。(905, 906, 907, 908, 909, 910)

2類 片面調整によるもの。(911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918)

第II群 磨製石斧。(919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930)

905は調整方法と風化の様子から、時期的には相当遅るかもしれない。第I群2類のうち911~916の6点の片面には円礫の自然面を残し、全く調整を受けない。出土地点も7Fを中心に限られた範囲から出土しており、特定の時期に限られたタイプかもしれない。917は表面の一部に自然面を残し、大部分は大きな剝離面を残しているが、片面調整であることにはかわりがない。918は薄く層状に自然剝離する粘板岩であるため、面的な調整については不明瞭である。

第II群は十数センチ以上となるような大型のものは出土していない。材質も殆どが硬砂岩である。

10 磨石・凹石・タタキ石(第76図~第85図、第2表P. 165~166、写真図版36~40)

これらは使用痕から分類された石器である。それぞれが単独の使用痕を有するならば独立して扱えばよいが、往々にして互いに複数の使用痕を有するものが多く、ここでは一括して取り扱うことにする。

使用痕の複合状況によって以下のとおりに分類することにする。

第I群 磨石

定義：円味を帯びた拳大の川原石の面が、摩擦痕を有するもの。(永峯^[23] 1962)とあるが、ここでは形状にはとらわれず、摩擦痕を有する小型の礫石器とする。

1類 球状をなす円礫の全面をまんべんなく使用しているもの。

(931, 932, 933)

2類 やや扁平な円礫の両面を使用しているもの。

(934, 935)

3類 円礫及び亜角礫等の一面のみを使用しているもの。

(936)

934は片面に敲打痕ないし凹面を認めるかどうかはかなり微妙であり、もしも敲打痕を認めるなら第III群に分類される。935は材質上多孔なものであって人為的なものではない。936は砥石かもしれない。

第II群 磨石+凹石

- 1類 凹みが一面に一つだけのもの。 (937)
- 2類 凹みが両面に一つあるもの。 (938, 939)
- 3類 凹みが複数あるもの。 (940, 941, 942, 943, 944, 945)

941は欠損した方にも凹みがあったと思われるものである。943は著しく欠損しており、別に転用されたものかもしれない。

第III群 磨石+タタキ石

- 1類 棒状の亜角礫を用い、その稜部を使用しているもの。
(946, 947, 948, 949, 950)
- 2類 円礫を用いるもの。 (951, 952, 953, 954, 955, 956)

1類は棒状磨石とか特殊擦石とか呼ばれているものである。この稜部に見られる使用痕は「する」とか「たたく」という単一の使用痕であるかどうか極めて疑問である。少なくとも949は明らかに「すり、たたいた」ものであり、他も同様な使用法と考えられる。

2類に見られる打痕は所謂敲打痕というより叩打痕と思われる。

第IV群 磨石+凹石+タタキ石

- 1類 III-1)に凹みが加わったもの。 (957)
- 2類 III-2)に凹みが加わったもの。 (寺前II遺跡から出土)

第V群 凹石

定義：小形の楕円または扁平な自然石の片面・両面・側面などに擦り凹めるか、または敲打(X3)して作った凹みのある石器 (永峯 1962)。

- 1類 片面・両面・側面などに各々一つの凹みを有するもの。所謂単孔式。
- a 片面にのみ一個の凹みを有するもの。 (958, 959, 960, 961)
- b 両面に一個の凹みを有するもの。 (962, 963)
- 2類 凹みが連続して作られるもの。所謂連孔式。
- a 片面にのみ複数の凹みを有するもの。 (964, 965)
- b 片面に一個、他の面に複数の凹みを有するもの。
(966, 967)

c 両面に複数の凹みを有するもの。

(968, 969, 970, 971, 972)

凹みは大きさ、深淺、重複状況等がさまざまであり、單純に數量化できるものではなく、1類、2類と分類しても、全てを判然と區別し得るものではない。

本遺跡から出土した典型的な凹み石は962である。すなわち材料としては、片手で自由に持ち運べる程度の大きさで扁平な川原石を利用している。材質は砂岩系統のものを多用する。凹みの位置は扁平な面の中央またはやや縁辺に寄った所であるが、縁辺にかかることはない。表裏に凹みを有する場合はほぼ真後ろの位置である。凹みの大きさは1~2cm、深さは3~5mm、摺り鉢状の凹みは鋭い針のようなもので敲打されたようにざらざらしている。

以上を凹み石の典型的なものとした場合、958は大きく異なっている。材質は粘板岩できわめて硬い。凹みは一つである。その凹みは鋭い刃を持つもので割り込まれたように筋状に凹んでいる。959は凹みが非常に浅い。960は雨にでもうがたれたかのように滑らかな凹みである。957、954、968、969、976は凹みが重複しながら帯状に連結している。966は円礫を半截し、その半截面にも深い凹みを付けたものである。975は四面のいたる處に凹みを付けたもので、特に扁平な両面は1cm以上の深い溝となっている。

第VI群 凹石+タタキ石

(973, 974, 975, 976)

第VII群 タタキ石

定義：タタキ石には二種類がある。一つは小さな力で反復して使用されたもので使用面はざらざらした潰滅痕（敲打痕）を有する礫石器であり、もう一つは大きな力で叩いたもので使用面は凹凸の激しい剝離面となっているものが多い礫石器である。所謂ハンマー・ストーンである。前者を敲石と呼び、後者を叩き石と呼ぶことにする。

1類 敲石

(977, 978)

2類 叩き石

(979, 980)

1類はどちらも手のひらにのる程度の大きさで敲打面が凹面となっている。

2類は円筒状ないし柱状の川原石を用いており、ともに握りやすい。

11 石皿（第85図～第86図、第2表P. 166、写真図版40）

定義：中央を凹めた皿形の石器で、砂岩質の材料を用いることが多い。

(981, 982, 983)

981と982は自然石をそのまま使い、983は縁辺を作り出している。981と983は、使用面が平坦ないし僅かに凹面状になっておりざらざらしている。982の使用面は非常に滑らかであり、石皿と言うより砥石として使用されたのかもしれない。

12 砥石 (第86図～第87図、第2表P. 166、写真図版41)

定義：研磨することを目的にしたと思われるもので、平坦あるいは溝状の研磨痕を有する礫石器。

大きさによって細分される。

第I群 置き砥石……置いて使用したと思われるもの。

(984, 985, 986, 987)

第II群 手持ち砥石…小型で、手に持って使用したと思われるもの。

(988)

第III群 特殊な砥石…使用面が溝状となるものや擦痕を有するもの。

(989, 990)

第III群は第I群、第II群のいずれにも分類できないものを一括した。一定方向に擦痕を有することから、一応本項で取り上げたものである。明瞭な溝を有する989は砥石的に使用されたとしても、990は使用痕が淡く砥石とは言い切れない。

13 円盤状打製石器 (第87図、第2表P. 166、写真図版41)

定義：表面は自然面で、裏面（第一次剝離面）は円盤状を呈し、縁辺に粗い刃部調整をしたもの。

(991, 992, 993, 994)

本項に一括した遺物は田老町小堀内 I 遺跡⁽³¹⁷⁾から多量に出土しているが、県内の他の遺跡からの報告例はない。県内の発掘調査は内陸部に集中している傾向があるために発見例が少ないとすれば、このような遺物は沿岸部に立地し特定の時期に限定されるものかもしれない。

14 石剣・石刀・石棒類 (第88図、第2表P. 166～167、写真図版42)

石剣は、切っ先が鋭く尖り、切っ先から基部まで直線状の身部でその断面は円形ないし卵形である。石刀は、身部が反り、背がやや平らで刃部側は細くなる。石棒は先端が丸く作り出され、体部の断面は円形である。と形態から分類できるが、それが破片となって出土する例が多く、明瞭に分類が出来ない場合が多い。またこれらは非実用品と考えられ、シンボルないし装

飾品という共通の属性を有することからここでは一括することにする。

第Ⅰ群 石剣	(995, 996, 997, 998, 999, 1000, 1001)
第Ⅱ群 石刀	(1002, 1003)
第Ⅲ群 石棒	(1004, 1005, 1006)

第Ⅰ群では特徴的なのは材質が全て粘板岩であることである。完形品はないが、995はほぼ完形に近いと思われる。断面形は円形に近いが、縦方向に研磨されているため部分的に稜部が出現し、多角形状となるところもある。

1004は袈裟懸け状に幅2cmほどの浅い溝が彫り込まれている。1006は完形品である。

15 石製品 (第89図～第94図、第2表P. 167～168、写真図版43～45)

定義：石を材料として作製されたもののうち、上記の分類のいずれにも属さない非道具類を一括する。

第Ⅰ群 「寺前型石製品」…板状の石材を用いて、両側縁から挟入をいれ円形状の頭部と隅丸な二等辺三角形の体部を作り出しているもの。

1類 線刻のあるもの。	(1007)
2類 線刻のないもの。	(1008, 1009, 1010, 1011, 1012, 1013, 1014)

本群にまとめられた遺物に対して冠せられた「寺前型石製品」と言う名称は他に類例を見ないために筆者が付与した仮称である。

1007は長さ8.8cm、最大幅4.8cm、厚さ0.7cmで片手に握れるほどのものである。石材は粘板岩のスレートである。形状は隅丸な二等辺三角形である。両側辺のほぼ中央に挟りがはいる、くびれている。挟りは両面加工され剝離の痕跡は明瞭であるが、表面は摩耗しておりざらざらした感じはない。遺物の表裏両面には彫りの浅い線刻が施されている。くびれより上には円形状の曲線が描かれ、くびれより下には表裏とも鱗状の文様が描かれている。くびれより上の表は中央の上方にV字状のものが描かれ、その下の両わきに大きな円形状の曲線が描かれる。曲線の間でV字状の屈折部のすぐ下に1個の、曲線の下には数個の三角形が配される。裏は、U字状の曲線文がなかば渦巻状に描かれる。

1008は1007と全く同型であるが、線刻がされていない。1009～1014は当該遺物の半製品的なものと思われる。

当該遺物の出土例がないため時期・用途等は不明である。しかし、後に見るように時期別の出土地点がある程度異なることから次のように挿り込むことができる。1007は3Dグリッドか

ら、1008は4 Bグリッド、1011と1013は5 Dグリッド、1009と1010は6 Fグリッド、1012は5 Gグリッドからそれぞれ出土したものである。ところが、3 D、4 B、5 Dは前期と後期が主体のグリッド、6 Fと5 Gは後期と晩期が中心となるグリッドである。このことから言えば当該遺物は後期の可能性が高いと言えるであろう。

第II群 岩偶……………動物の頭部を作り出しているもの。

(1015)

川原石の一部に目と口を彫り込むことによって、顔を作り出したものである。顔のみ作られていることからそれが人間を表したものであるのか、人間以外の動物を表したものは不明である。

第III群 異形石製品…鋸刃状に凹凸のあるものや、星形のもので用途不明のもの。

(1016, 1017, 1018)

1017は長は6.8cmとやや大きい。鋸刃状ではあるが、全面を丁寧に調整したものを切断するような鋭い刃部はない。このような調整の仕方は1018も同じであり、形態は異なるが同様のものかもしれない。

第VI群 装身具……………装飾のために作られたと思われるもの。

(1019, 1020)

1019は挾状耳飾りである。半分が欠損している。1020は所謂ペンダントである。2孔あり、どちらも両側から穿孔されている。

第V群 線刻石……………石に線刻されたもの。 (1021, 1022)

1021は川原石の両面に複数の細い直線や太い削り痕の様なもの、1022は石斧状に整形されたものに袈裟懸け状に数本の線が刻されている。前者は細工の台石に使用されたとも考えられるが、材質が軟らかくその可能性は薄い。

第VI群 その他の石製品…形状、石材等によって細分される。

1類 カツオブシ形石製品 (1023)

2類 軽石製石製品 (1024, 1025)

3類 円盤状石製品	(1026, 1027, 1028, 1029, 1030, 1031, 1032, 1033, 1034, 1035, 1036, 1037, 1038, 1039, 1040, 1041, 1042, 1043)
4類 隅丸長方形石製品	(1044, 1045, 1046, 1047, 1048, 1049, 1050, 1051, 1052)
5類 短冊状石製品	(1053, 1054, 1055, 1056)

カツオブシ形石製品は秋田県上ノ山II遺跡で大量に出土している^(文32)。同報告書では前期に位置づけられるとしていることから、ここでもそのように位置づけておきたい。

2類は縁辺や一部を欠損しているため詳細は不明である。

3類は大きささまざまであるが、平均値は5.2cm×5.1cmである。

4類は隅丸方形の薄くて扁平な製品で、大きさは3類ほどのばらつきはなくほぼ一定である。平均値は8.0cm×5.1cmである。1047や1049の様に縁辺は研いで整形しているものもあり、丁寧な作りとなっている。

5類も薄くて扁平な製品である。ただ、平面形が隅丸な二等辺三角形であるところが異なっている。4類も5類も石材は殆ど粘板岩を使用している。

16 その他の礫石器及び礫 (第95図、第2表P. 167、写真図版46)

定義：石材からみて他から故意に持ち込まれたと考えられるものや未製品、あるいは使用痕を有するもの等の礫石器及び礫を一括する。

第I群 花崗岩で球形またはフットボール状の形状をなし、風化が著しく明瞭な使用痕を欠くもの。(1057)

合計22点出土している。大きさは700g以下のもの(磨石大)14点、701g～2000gのもの6点、200g以上のものは1057を含む2点である。表面は全く風化しぼろぼろとなっており、僅か数点に研磨痕が極めて部分的に見られる程度である。しかし、形は一律に球形ないしフットボール状をしており、欠損しているものは僅かに1点のみである。

材質からみても、また幾つかに研磨痕が見られることから明らかに他から持ち込まれ使用された石器ではある。しかし、用途は不明である。

1057は柱穴状土坑(P. 18)内より出土したものである。根固め石として使用されたかどうかは不明である。

第II群 ストーン・リタッチャー

(1058)

所謂鼠歯状痕を有する礫石器と思われるもの4点(図化は省略)と1058の1点とが出土している。前者は完形のもの1点と欠損するもの3点である。しかし、いずれもその痕跡が明瞭に鼠歯状痕と認定できるほどのものではなく、ここでは資料化することを見送りそのような疑いを持つものが出土したことを指摘しておくにとどめたい。

1058は凹み石と同様のものであるが、その凹みは壺の様な細いもので順序よく削り取られたような痕跡である。裏側は大きく欠損しており詳細な不明である。したがって、凹み石にもこのような凹みを持つものがあるとすれば凹み石として分類されるものかもしれないが、そのような報告例がない現状ではむしろ「石器製作に用いた道具」(加藤・鶴丸^(文14) 1980)とする本項に分類させておくのが妥当と考えたものである。なお、958も本項に分類させるものかもしれない。

第IV群 加工痕ないし使用痕を有する礫。

(1059, 1060, 1061)

1059は両面が光沢を帯びるほど研磨したものである。1060と1061は有溝石器である。前者は2cm以上もの深い溝となっているにもかかわらず、明瞭な擦痕や摩滅痕をまったく見出すことが出来ない。後者は7mmの薄い小片に、幅3mm弱の溝が2mm程の深さに彫られたものである。石質が軟らかく粒子が細かい玻璃質流紋岩であることから、砥石として使用されたのかもしれない。

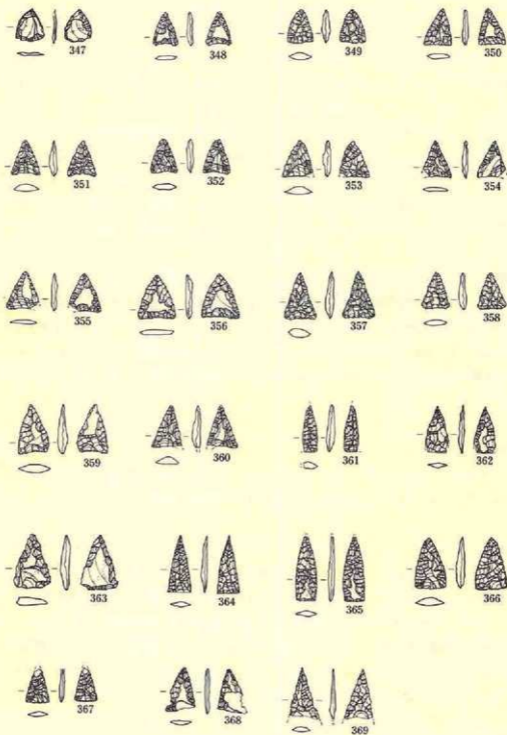
第V群 台石

(1062)

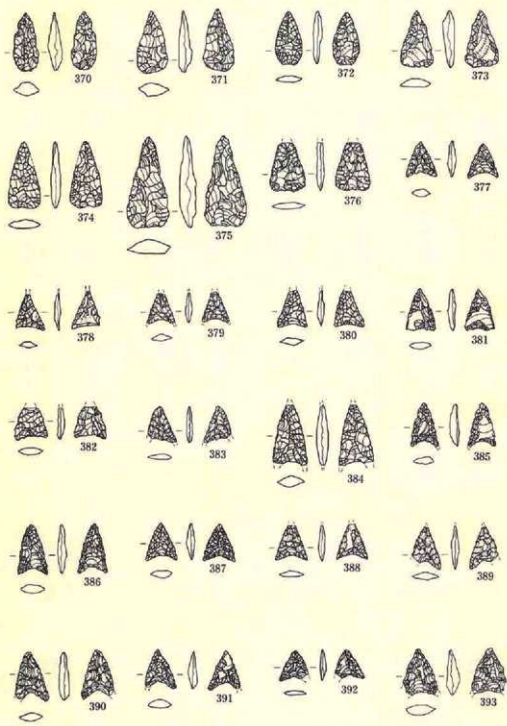
長さ36cm以上の大きな石である。しかし、欠損しているので本来の大きさではない。扁平な両面は凹凸を持ちながらも光沢を持っている。線条痕等は見られない。

〈注〉

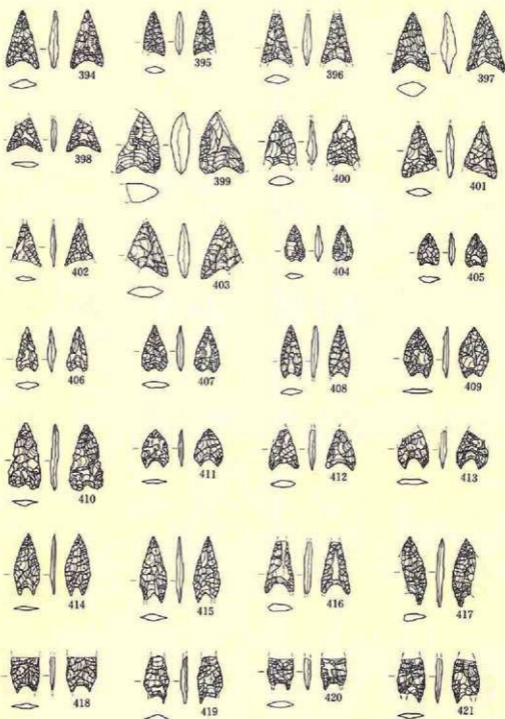
1. ここで「タール状」としたのは専門家の鑑定を経ていないためであり、曲田I遺跡等から出土した同様のものはすべてタールと鑑定されたものである。したがって、厳密には「タール状」とするべきではあるが便宜的に以下では「状」として述べることにする。
2. 稀には所謂長脚獣やトラピースのように左右対称とならないものもある。また、箭矢のように扁平でないものもある。しかし、それらは基本的な矢の特性からみれば極めて特殊で例外的なものとして考えられるものである。



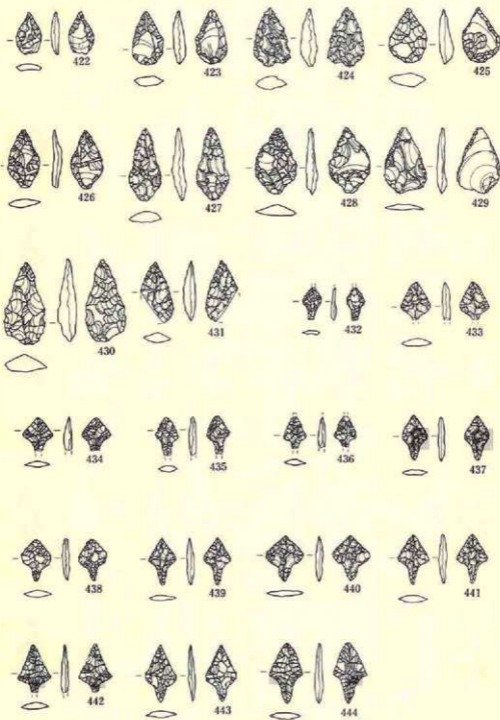
第37图 石鏃 第I群1類



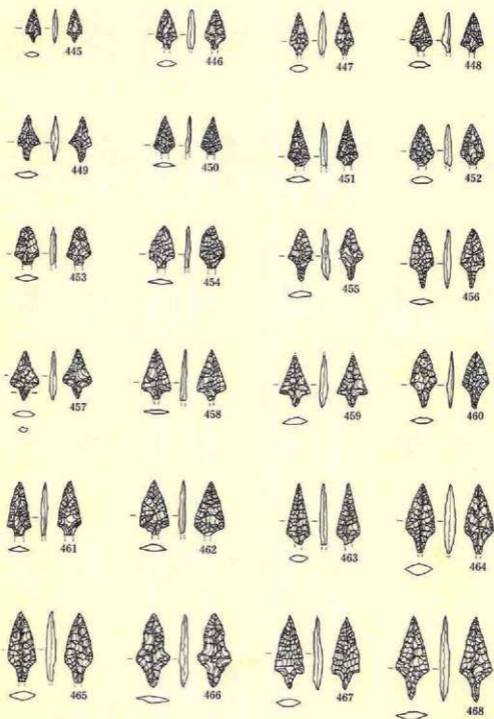
第38圖 石鏃 第I群1~2類



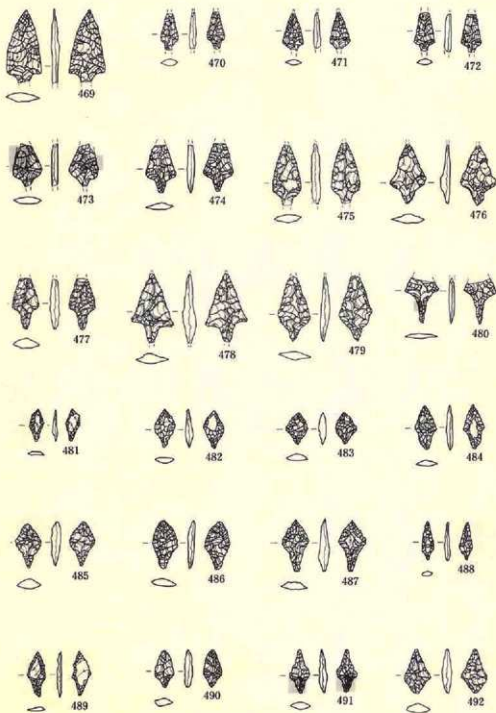
第39圖 石鏃 第1群2類



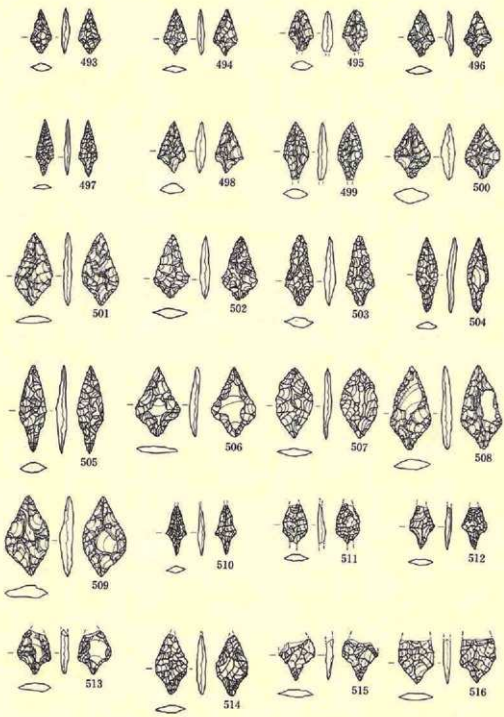
第40図 石鏃 第I群3類・第II群1類



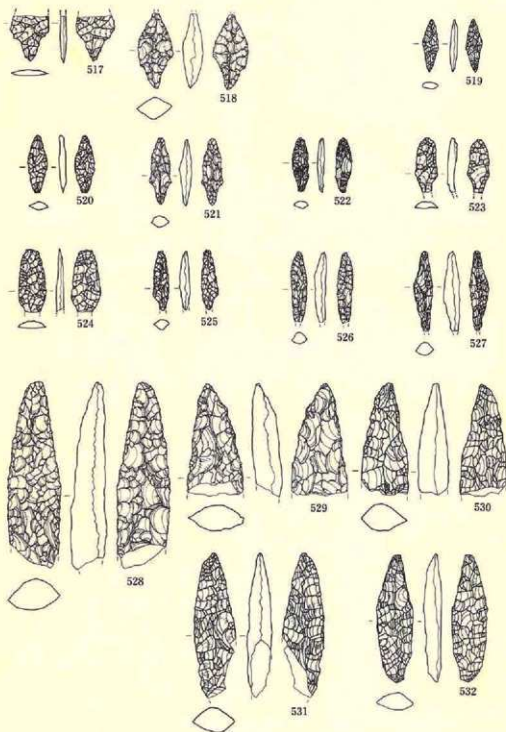
第41图 石箭头 第II群1类



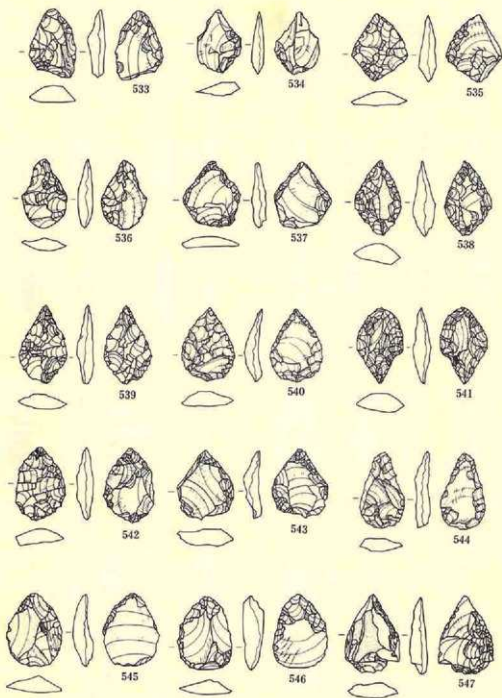
第42图 石炭 第II群 1~2類



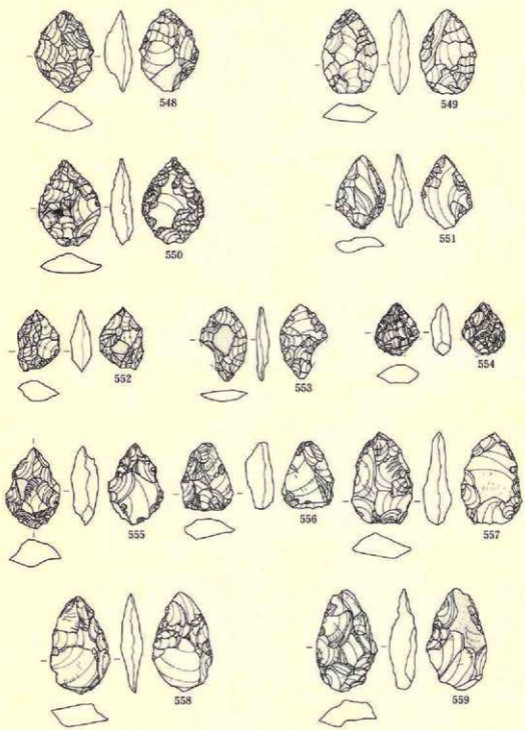
第43図 石鏃 第II群2類



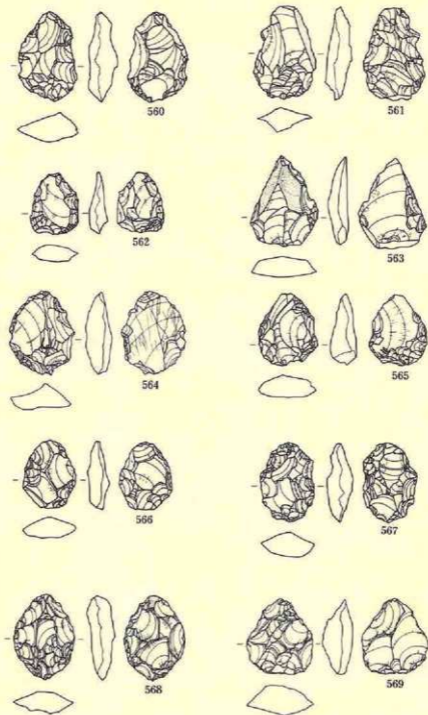
第44圖 石鏃 第II群2類・尖頭器 第I群



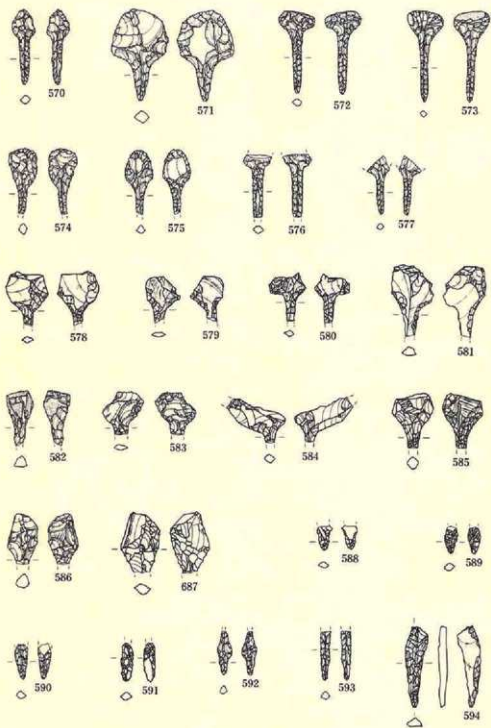
第45圖 尖頭器 第II群1類



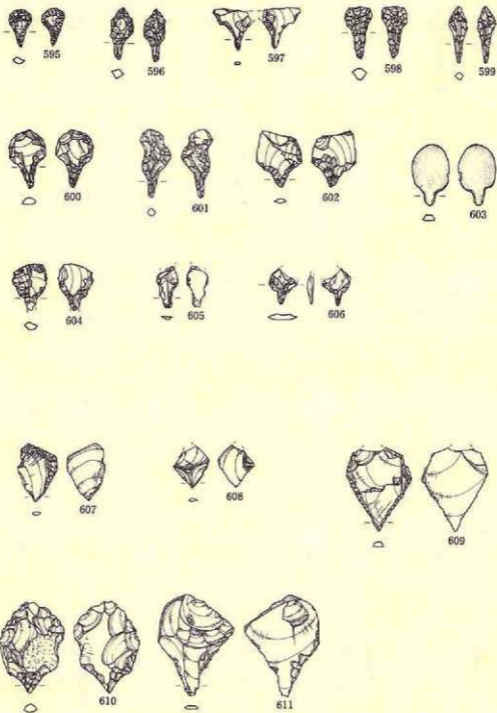
第46圖 尖頭器 第II群1~2類



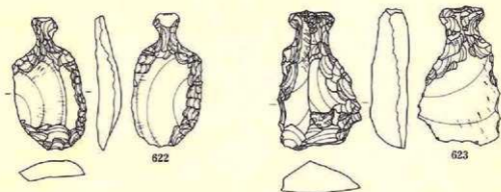
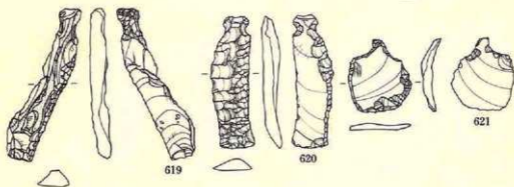
第47图 尖頭器 第II群2類



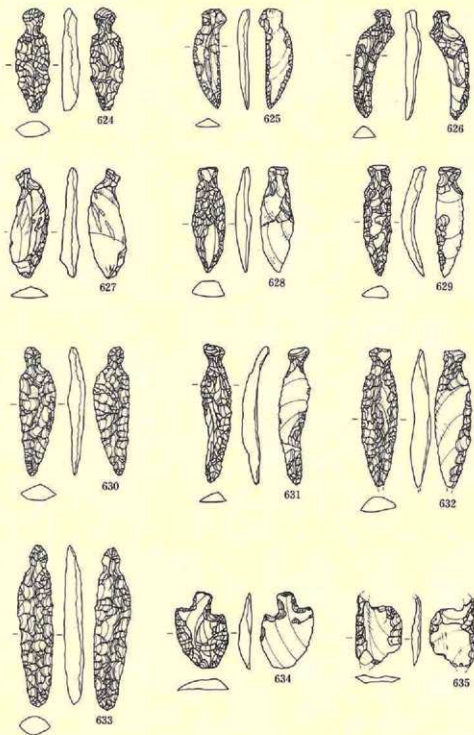
第48圖 石錐 第I群·第IV群



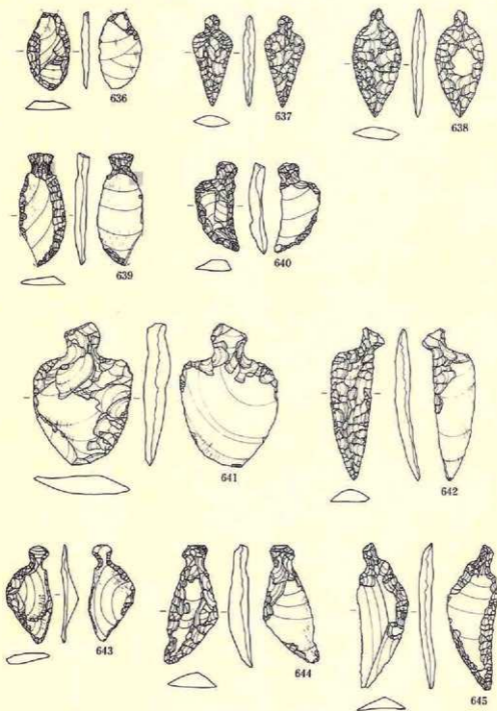
第49图 石錘 第II~III群



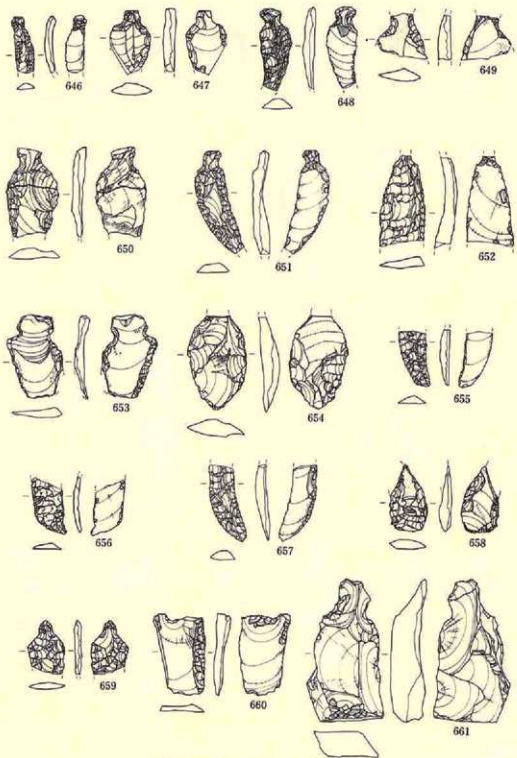
第50圖 石匙 第I群1類



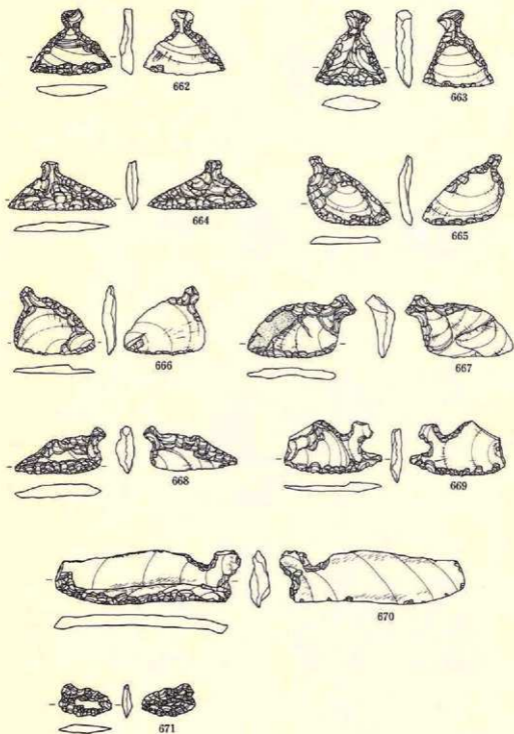
第51图 石匙 第1群2類



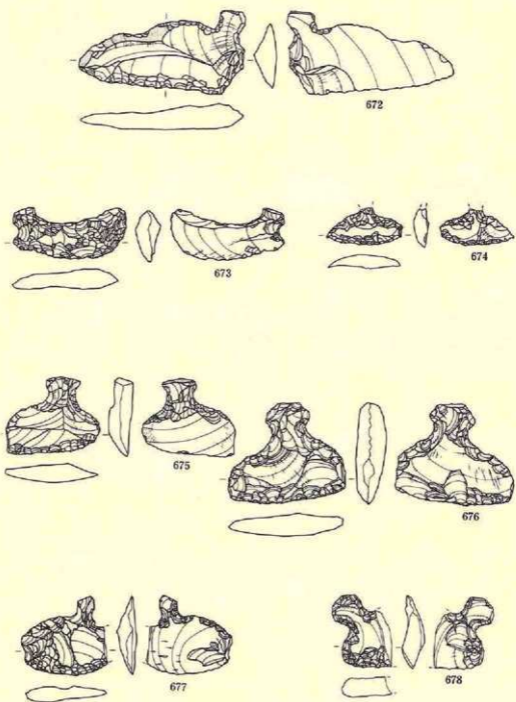
第52图 石匙 第1群2類



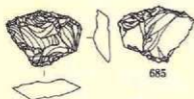
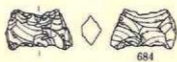
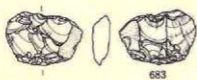
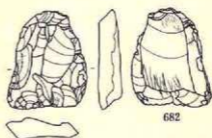
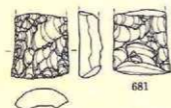
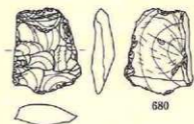
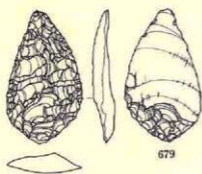
第53图 石匙 第I群2類・第III群



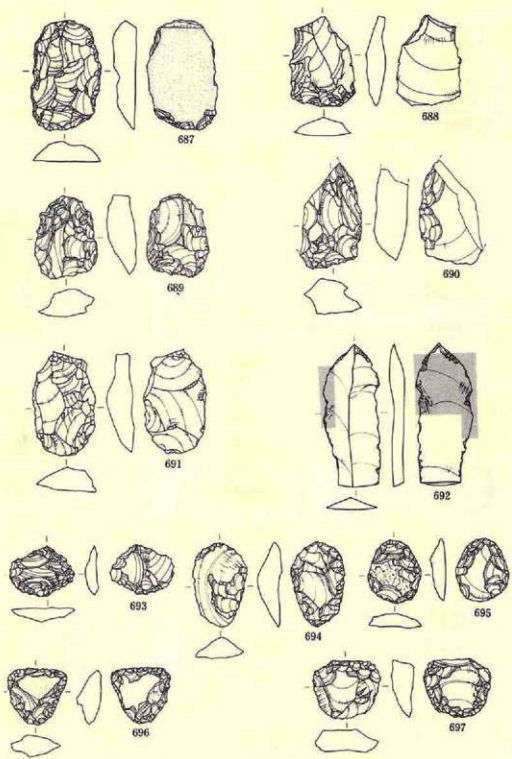
第54圖 石匙 第II群1~3類



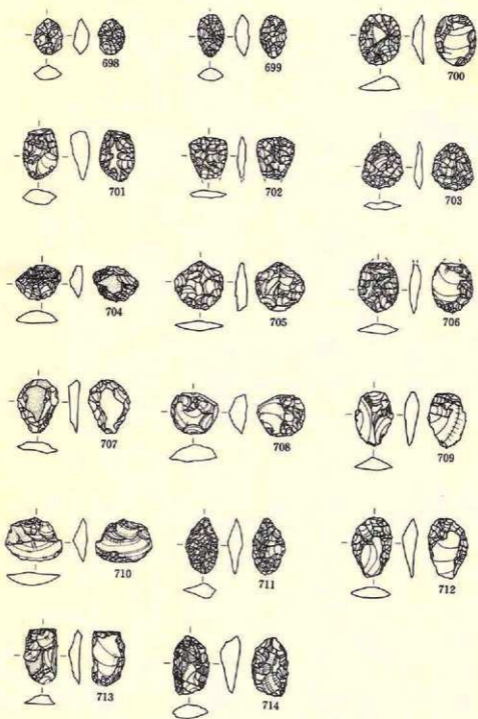
第55圖 石匙 第II群3類



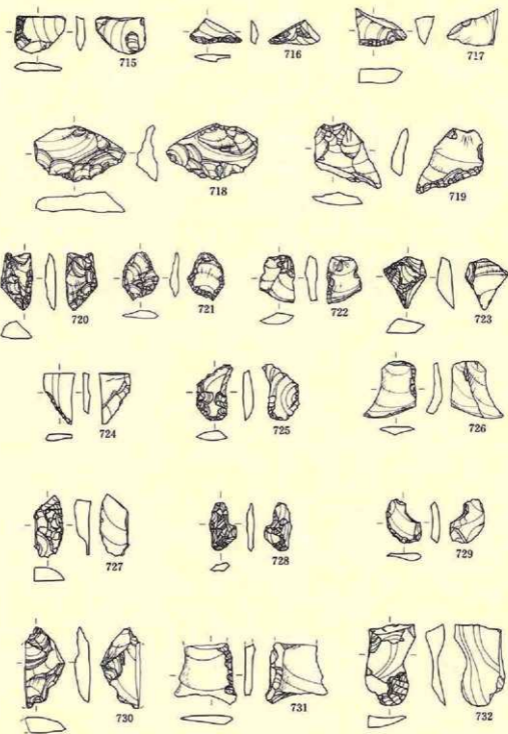
第56図 筒状石器・ピース・エスキーユ



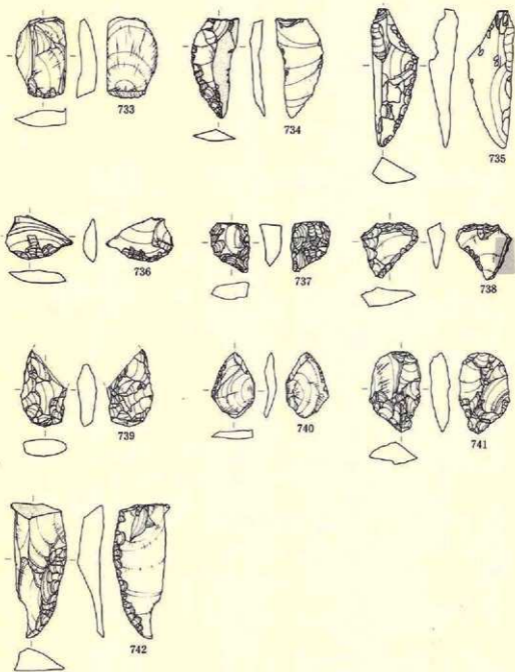
第57图 不定形石器 第I~II群·第III群1類



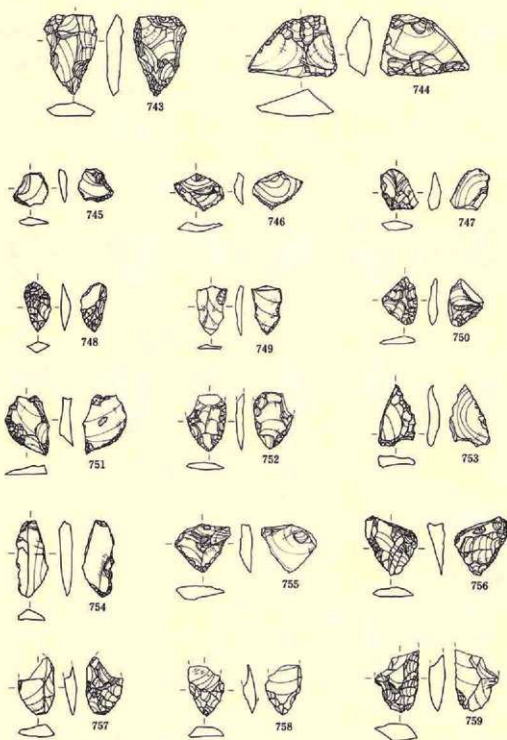
第58图 不定形石器 第Ⅲ群1類



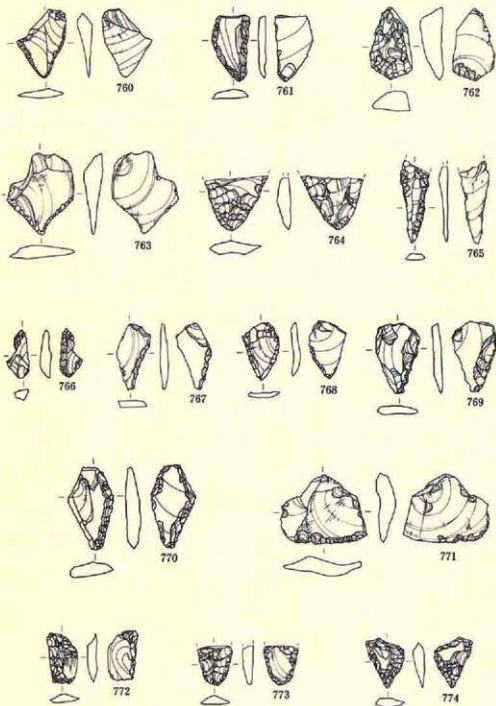
第59圖 不定形石器 第Ⅲ群2類



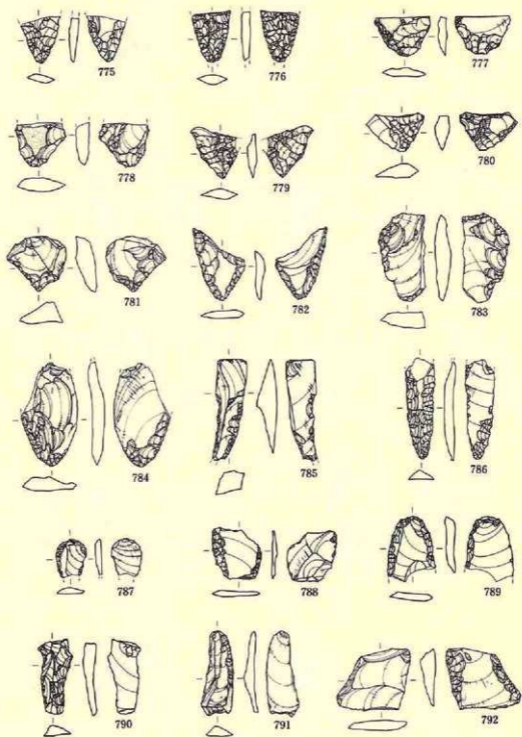
第60図 不定形石器 第Ⅲ群2類



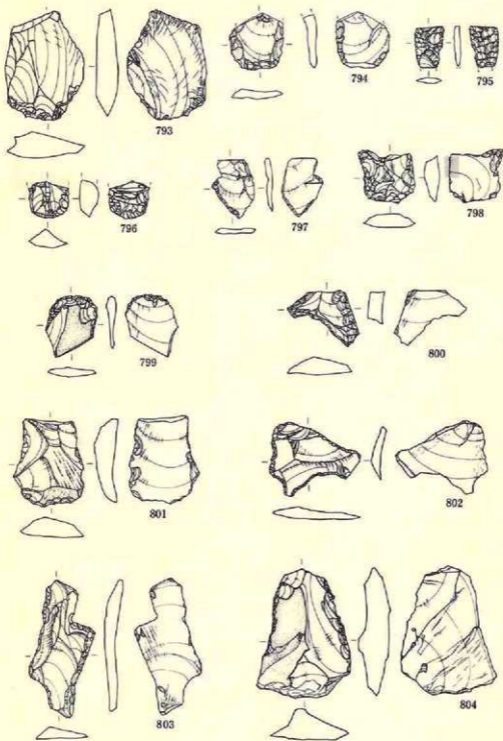
第61圖 不定形石器 第Ⅲ群2類



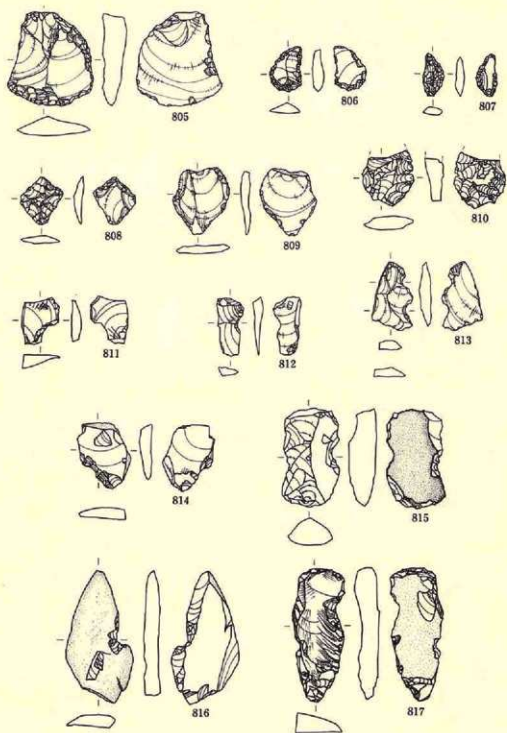
第62圖 不定形石器 第三群2類



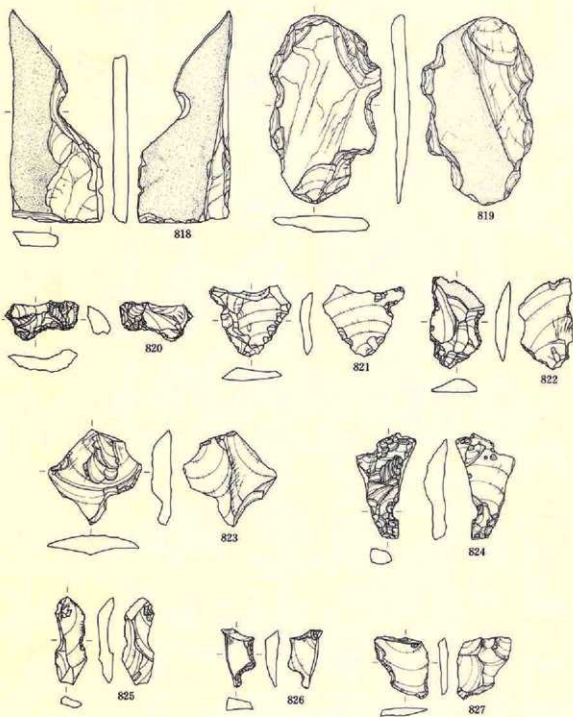
第63图 不定形石器 第三群2類



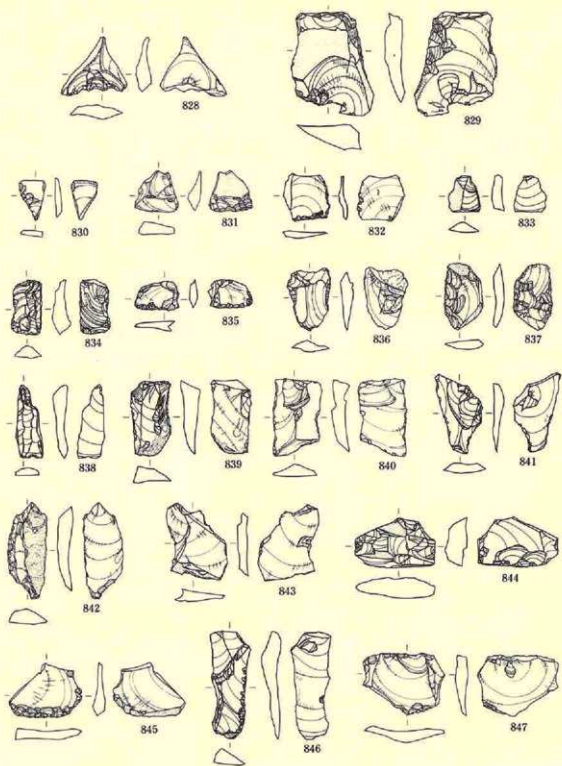
第64图 不定形石器 第Ⅲ群2類



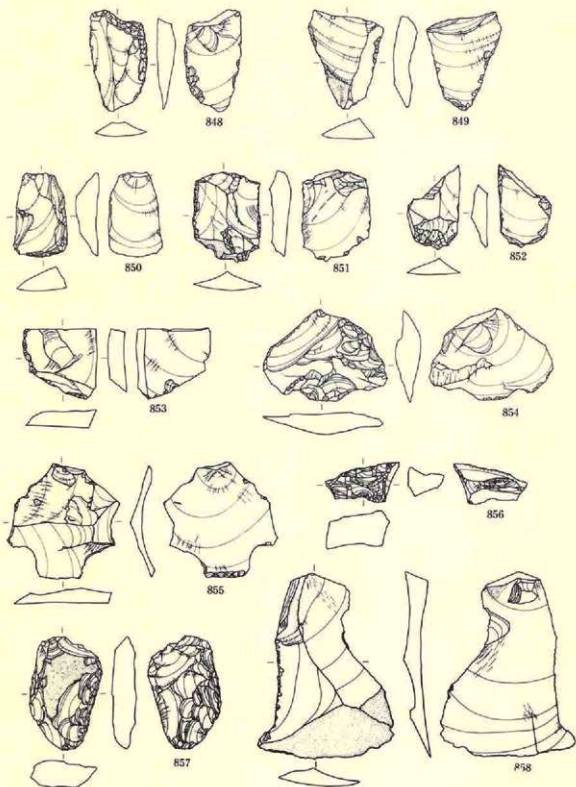
第65圖 不定形石器 第Ⅲ群2類・第Ⅳ群1類



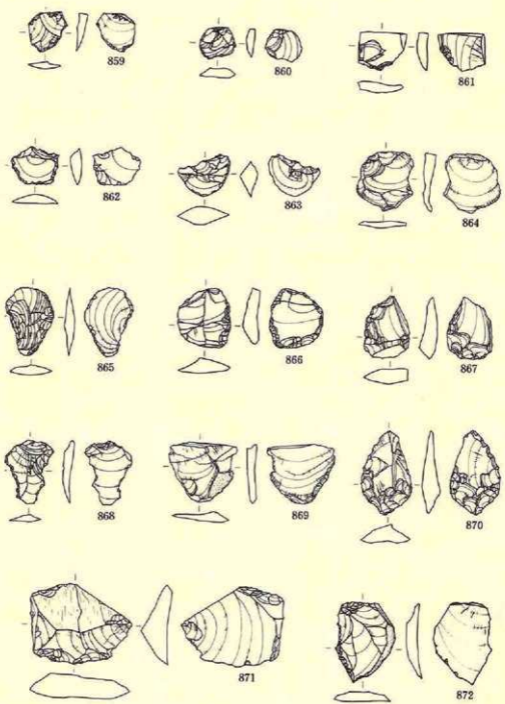
第66图 不定形石器 第IV群1~4類



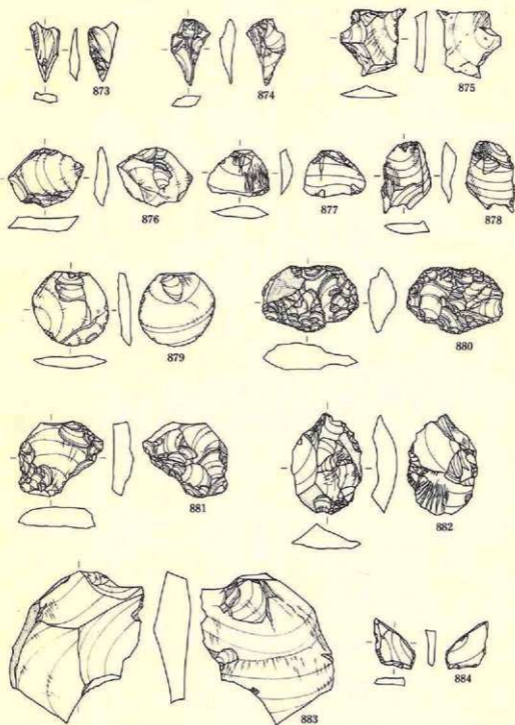
第67圖 不定形石器 第V群・第VI群1類



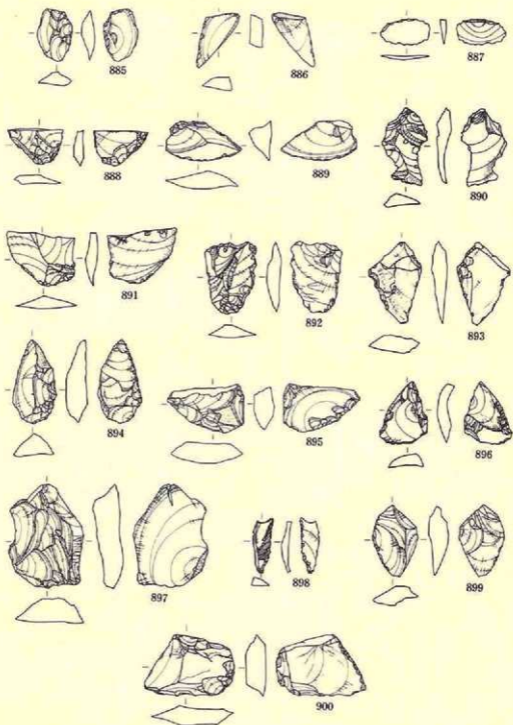
第68图 不定形石器 第VI群1類



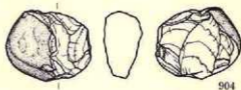
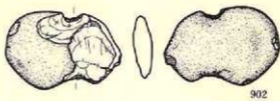
第69圖 不定形石器 第VI群2類



第70图 不定形石器 第VI群3類



第71图 不定形石器 第VI群4類



905



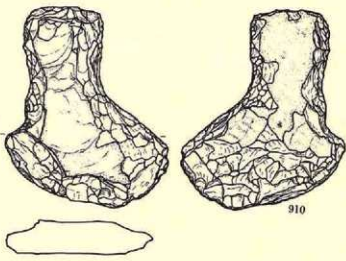
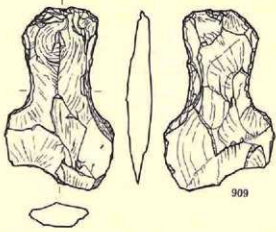
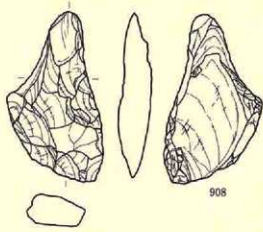
906



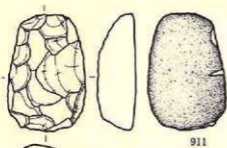
907



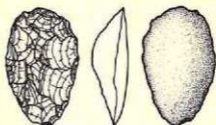
第72圖 石錘・石斧 第I群I類



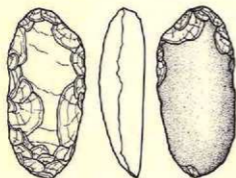
第73图 石斧 第I群I類



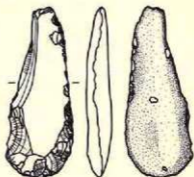
911



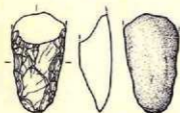
912



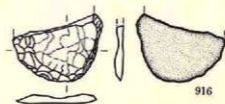
913



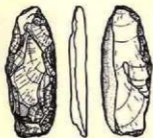
914



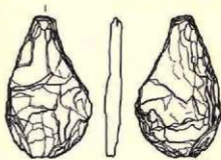
915



916

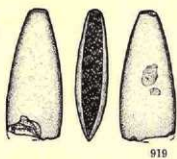


917

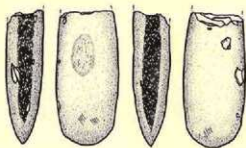


918

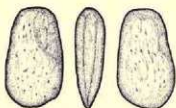
第74图 石斧 第1群2類



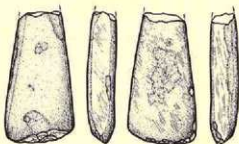
919



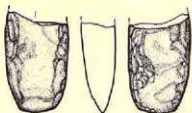
920



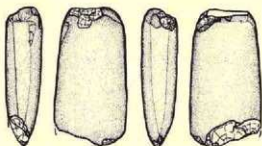
921



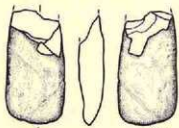
922



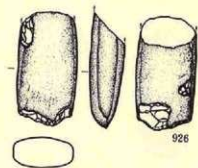
923



924

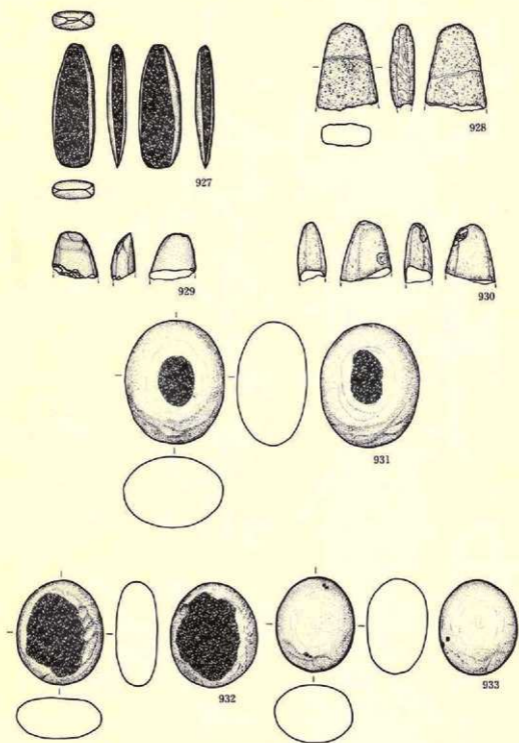


925

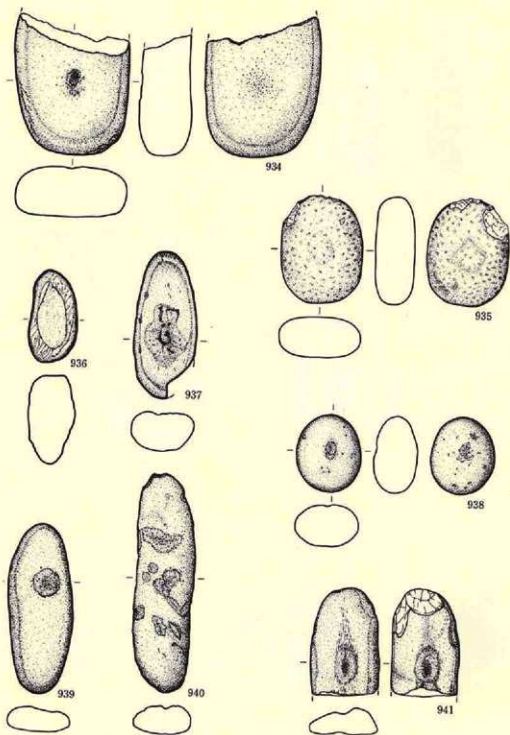


926

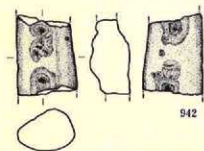
第75图 石斧 第II群1類



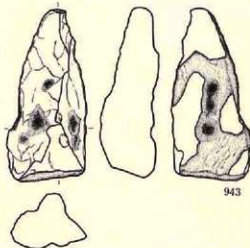
第76図 石斧 第II群1類・磨石類 第I群1類



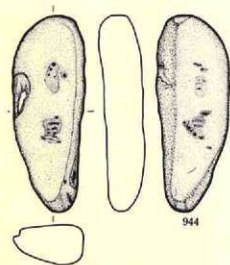
第77図 磨石類 第I群 2~3類
磨石類 第II群 1~3類



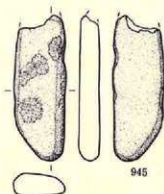
942



943

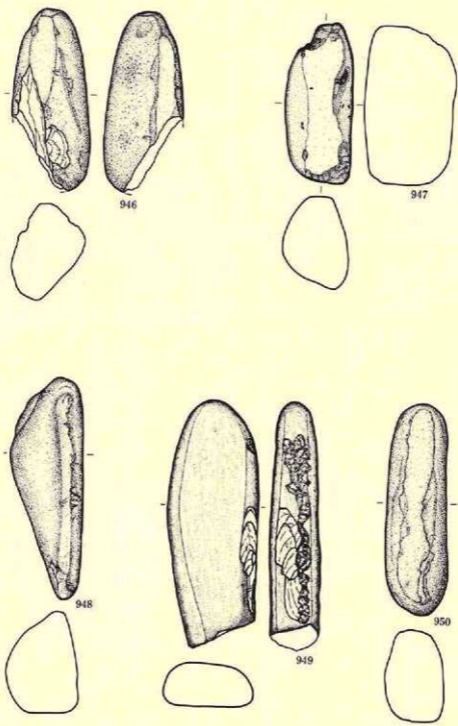


944

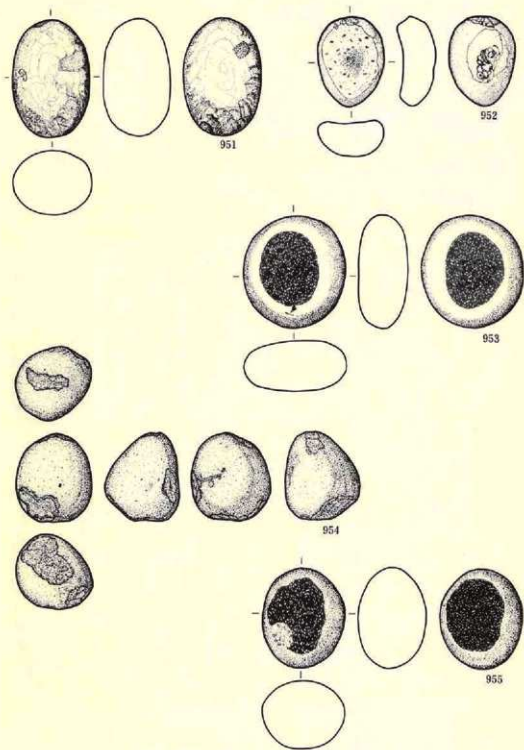


945

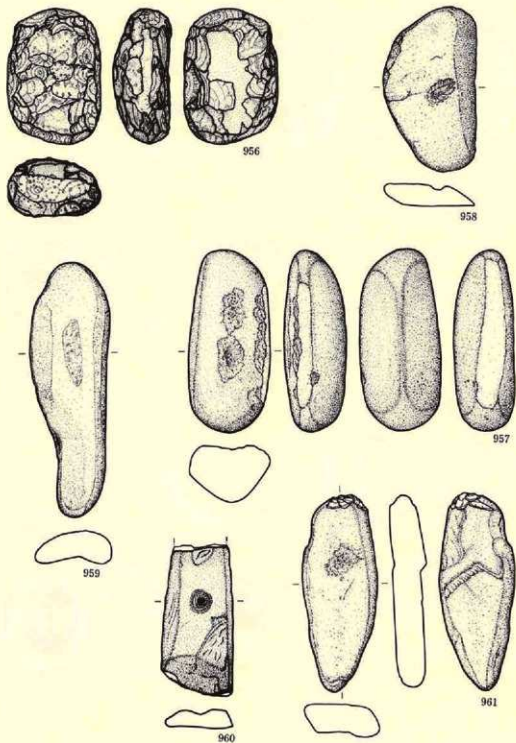
第78圖 磨石類 第II群3類



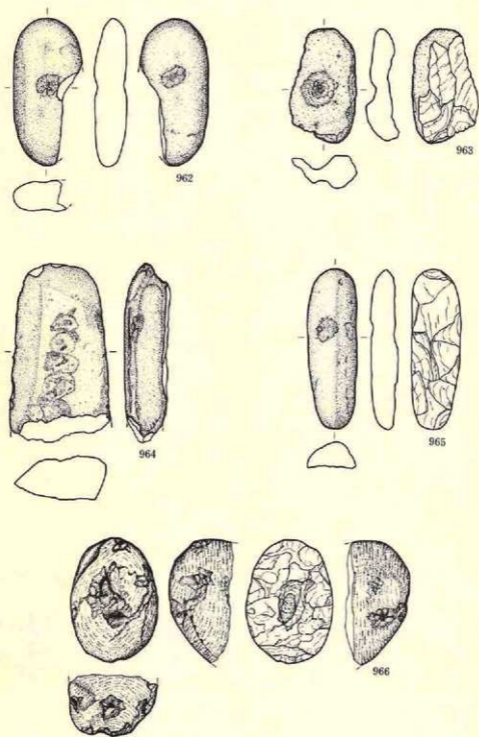
第79図 磨石類 第Ⅲ群1類



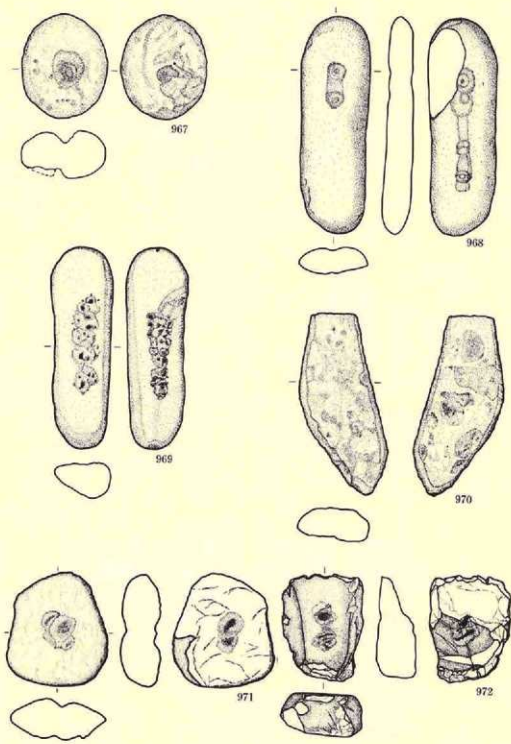
第80圖 磨石類 第Ⅲ群2類



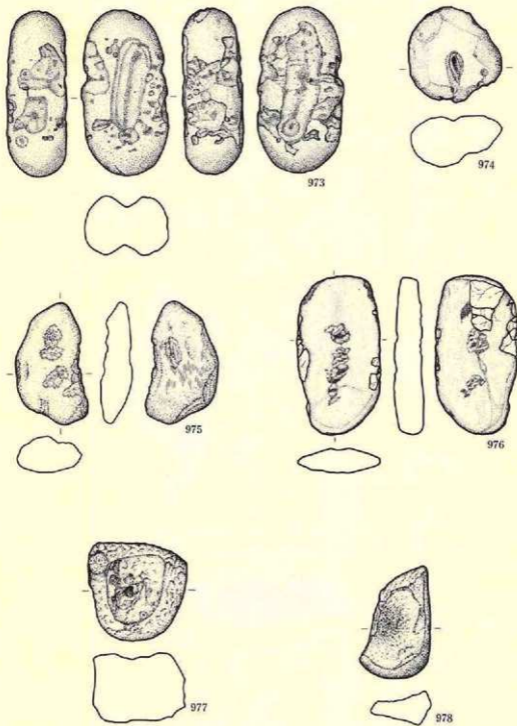
第81図 磨石類 第Ⅲ群2類・第Ⅳ群1類
第Ⅴ群1類



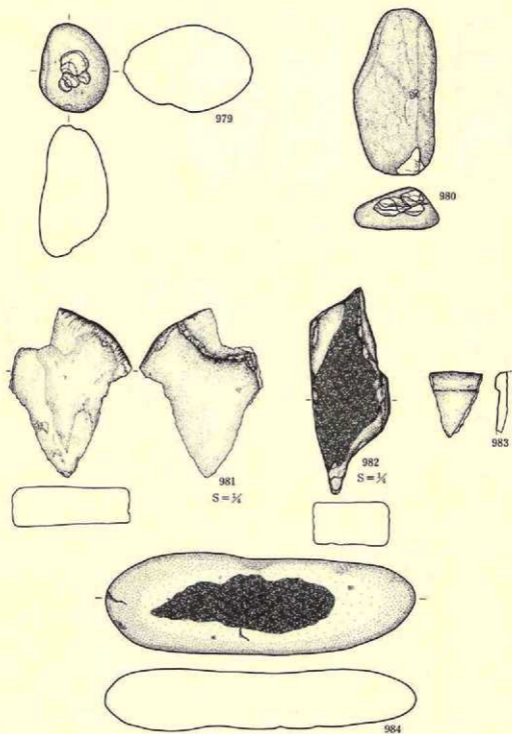
第82図 磨石類 第V群1~2類



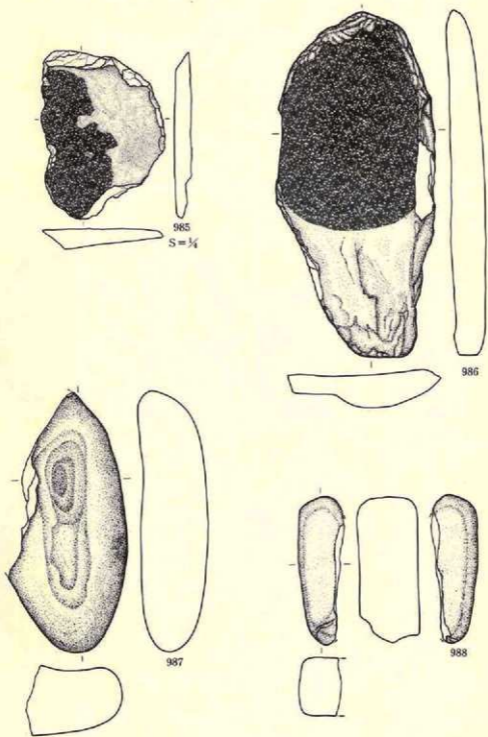
第83圖 磨石類 第V群2類



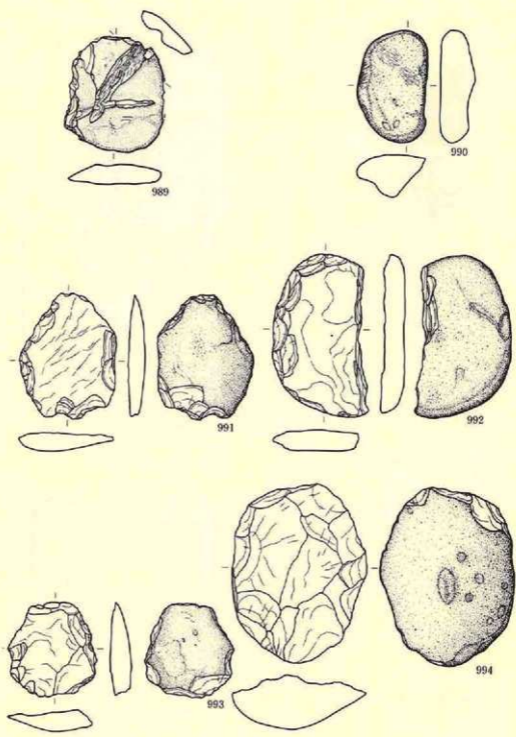
第84図 磨石類 第VI～VII群1類



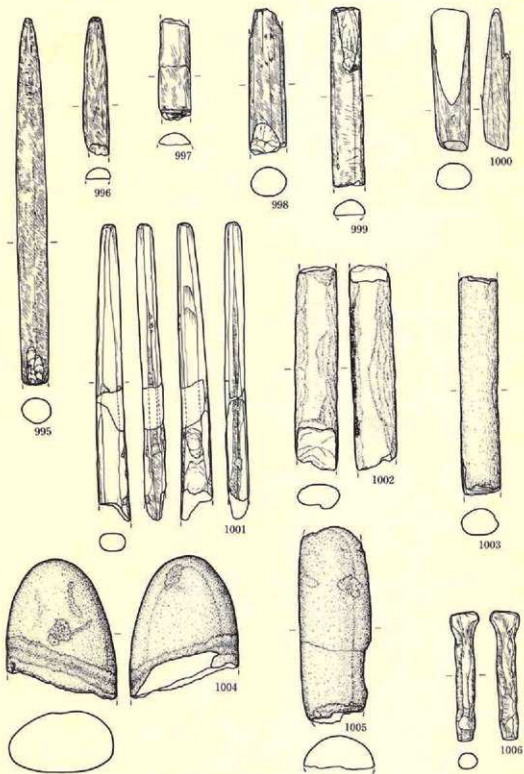
第85圖 磨石類 第Ⅶ群2類・石皿
 砥石 第Ⅰ群



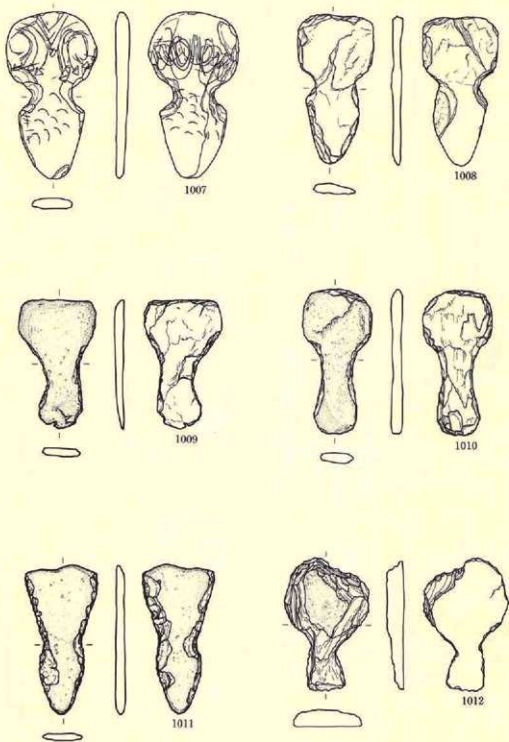
第86图 砥石 第I~II群



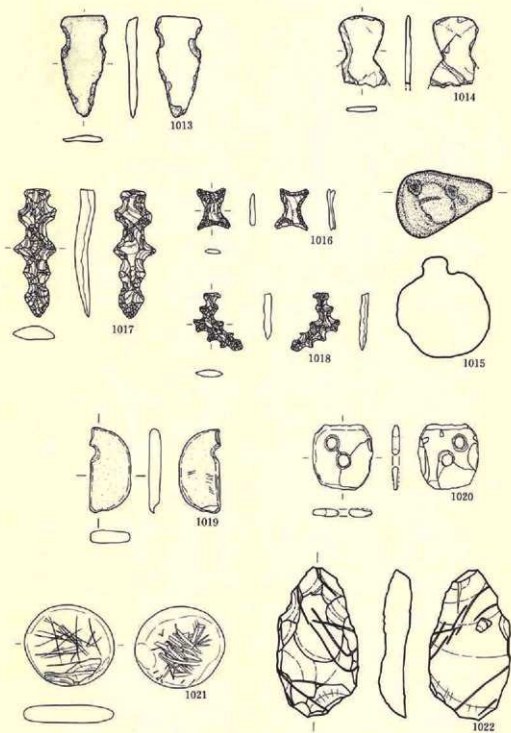
第87圖 砥石 第三群・円盤状打製石器



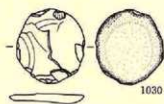
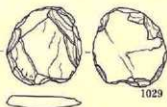
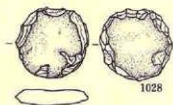
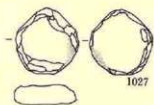
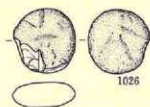
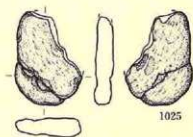
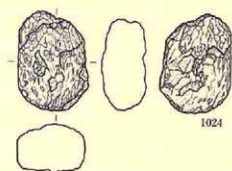
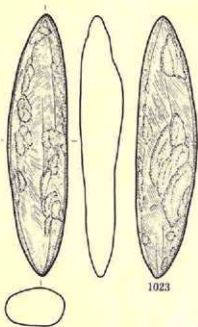
第88图 石劍類 第I~IV群



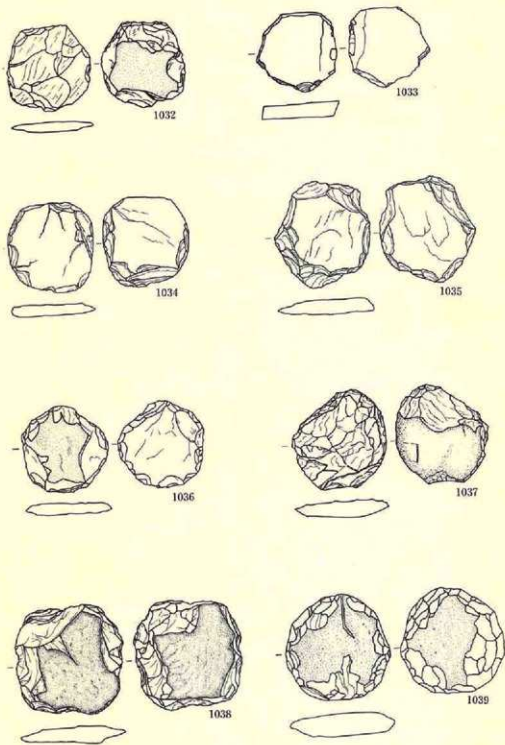
第89図 石製品 第I群1~2類



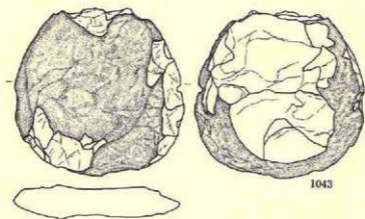
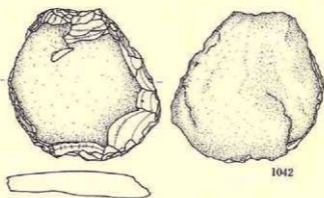
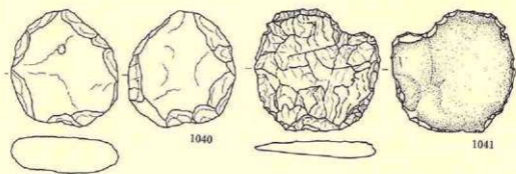
第90図 石製品 第I群2類~第V群



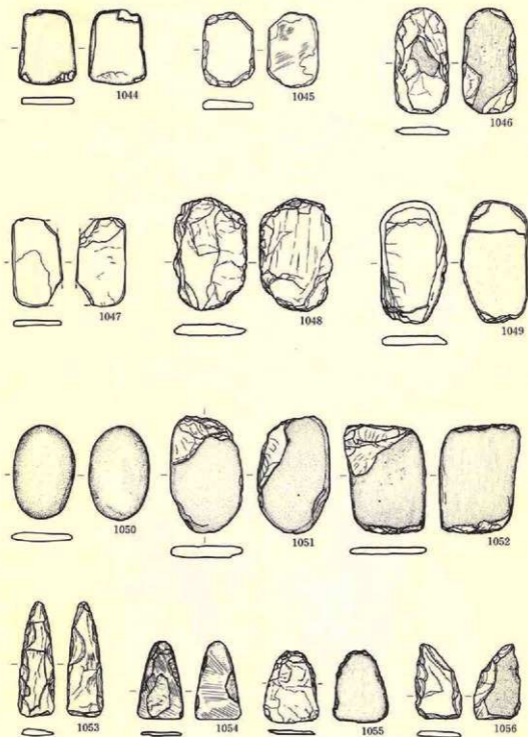
第91圖 石製品 第VI-VIII群



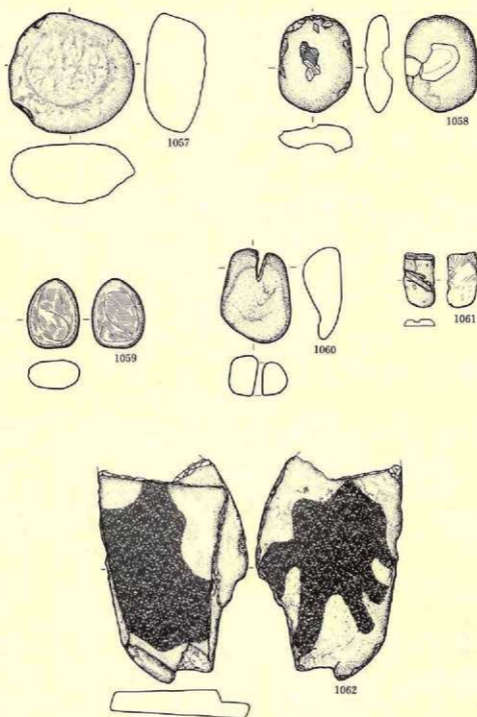
第92図 石製品 第Ⅷ群



第93圖 石製品 第Ⅷ群



第94図 石製品 第Ⅸ-X群



第95図 その他の礫石器

第2表 石器・石製品計測表

遺物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	図 号 番号	写真 国紙
	名 称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部 欠損					
347	石鏃	1-1	1.8	1.5	0.2	0.7	○		珪質細粒凝灰岩		6 D	第17図	21
348	"	"	1.8	1.3	0.3	0.4	○		"		4 C	"	"
349	"	"	1.8	1.4	0.3	0.9	○		"		3 B	"	"
350	"	"	1.9	1.4	0.3	0.6	○		凝灰質珪質泥		7 E	"	"
351	"	"	1.9	1.5	0.4	0.6	○		珪質細粒凝灰岩		5 C	"	"
352	"	"	1.8	1.4	0.3	0.7	○		"		A区	"	"
353	"	"	1.9	1.6	0.4	0.9		○	"		3 B	"	"
354	"	"	1.9	1.5	0.3	0.5		○	"		4 D	"	"
355	"	"	2.0	1.7	0.3	0.7		○	"		不明	"	"
356	"	"	2.3	2.0	0.3	1.3	○		"		5 D	"	"
357	"	"	2.4	1.7	0.5	1.2	○		珪質流紋岩		5 C	"	"
358	"	"	1.9	1.5	0.4	0.7	○		珪質細粒凝灰岩		4 C	"	"
359	"	"	2.6	1.6	0.5	1.6	○		粘板岩		7 F 主地	"	"
360	"	"	2.2	1.6	0.4	0.9	○		珪質細粒凝灰岩		5 C	"	"
361	"	"	2.5	0.8	0.5	0.9	○		"		4 D	"	"
362	"	"	2.5	1.2	0.3	1.0	○		"		A区	"	"
363	"	"	2.9	1.9	0.4	2.4	○		チャート質粘板岩		5 E	"	"
364	"	"	3.0	1.3	0.3	1.3	○		珪質細粒凝灰岩		7 I	"	"
365	"	"	3.4	1.1	0.3	1.2	○		"		5 E	"	"
366	"	"	2.7	1.6	0.5	2.0	○		チャート		A区	"	"
367	"	"	1.5	1.2	0.3	0.5	○		珪質細粒凝灰岩		C区	"	"
368	"	"	2.4	1.5	0.2	1.2	○		"		2 B	"	"
369	"	"	2.5	1.4	2.5	0.9	○		"		7 E	"	"
370	"	"	3.1	1.4	0.7	2.5	○		"		2 B	第38図	"
371	"	"	3.3	1.6	0.7	2.2	○		"		6 F	"	"
372	"	"	2.8	1.4	0.5	1.5	○		珪質流紋岩		4 D	"	"
373	"	"	3.0	1.7	0.6	2.3	○		珪質細粒凝灰岩		4 C	"	"
374	"	"	3.5	1.7	0.5	2.5	○		チャート		6 F	"	"
375	"	"	4.8	2.2	0.9	7.3	○		珪質細粒凝灰岩		2 B	"	"
376	"	"	2.6	1.9	0.4	2.1	○		凝灰質珪質泥岩		7 I	"	"
377	"	1-2	1.9	1.7	0.5	0.8	○		珪質細粒凝灰岩		4 C	"	"
378	"	"	1.8	1.5	0.3	0.8	○		"		5 D	"	"
379	"	"	1.6	1.5	0.4	0.6	○		"		6 D	"	"
380	"	"	1.9	1.6	0.4	1.2	○		凝灰質珪質泥岩		"	"	"
381	"	"	2.2	1.6	0.4	0.9	○		珪質細粒凝灰岩		A区	"	"
382	"	"	1.7	1.7	0.4	1.5	○		"		3 C	"	"
383	"	"	1.9	1.5	0.3	0.7	○		"		5 D	"	"
384	"	"	3.2	1.8	0.6	2.9	○		黒曜石		5 F	"	"
385	"	"	2.3	1.5	0.5	1.1	○		珪質細粒凝灰岩		7 F 主地	"	"
386	"	"	2.6	1.6	0.5	1.2	○		"		A区	"	"
387	"	"	2.0	1.7	0.5	0.8	○		チャート質粘板岩		2 B	"	"
388	"	"	1.9	1.7	0.4	0.7	○		粘板岩		6 F	"	"
389	"	"	2.3	1.6	0.4	0.8	○		珪質細粒凝灰岩		5 C	"	"
390	"	"	2.6	1.8	0.5	1.6	○		粘板岩		22F	"	"
391	"	"	2.1	1.7	0.5	1.0	○		珪質細粒凝灰岩		2 B	"	"
392	"	"	1.6	1.5	0.3	0.5	○		"		4 C	"	"
393	"	"	2.4	1.8	0.6	2.1	○		"		7 E	"	"

透物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出 土 地 点	図 帳 番 号	写 真 図 帳
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ	定形	最大損					
394	石織	I-2	3.1	1.8	0.5	1.6	○		珪質粗粒凝灰岩		3B	第39回	21
395	"	"	2.3	1.2	0.4	0.8	○		"		7E	"	"
396	"	"	2.7	1.6	0.5	1.3	○		"		5E	"	"
397	"	"	3.2	2.0	0.8	2.6	○		"		4D	"	"
398	"	"	1.8	1.9	0.3	0.6	○		"		5D	"	"
399	"	"	3.2	2.3	1.0	5.2	○		"		4C	"	"
400	"	"	2.4	1.6	0.5	1.7	○		チャート		2B	"	"
401	"	"	2.8	1.8	0.4	1.7	○		珪質質流紋岩		5B	"	"
402	"	"	2.9	1.4	0.2	0.8	○		珪質粗粒凝灰岩		3C	"	"
403	"	"	2.9	2.1	0.6	2.3	○		粘板岩		4C	"	22
404	"	"	1.8	1.0	0.4	0.5	○		チャート		4D	"	"
405	"	"	1.7	1.1	0.4	0.5	○		珪質質流紋岩		3C	"	"
406	"	"	2.4	1.2	0.4	0.8	○		チャート		4D	"	"
407	"	"	2.5	1.4	0.4	1.1	○		珪質粗粒凝灰岩		1E	"	"
408	"	"	2.8	1.1	0.4	1.0	○		凝灰質珪質泥岩		4C	"	"
409	"	"	2.7	1.6	2.0	1.4	○		"		7I	"	"
410	"	"	3.5	1.8	0.4	1.8	○		珪質質流紋岩		"	"	"
411	"	"	2.0	1.4	0.2	0.7	○		"		"	"	"
412	"	"	2.1	1.5	0.4	1.0	○		"		"	"	"
413	"	"	2.0	1.6	0.3	1.3	○		チャート質粘板岩		7H	"	"
414	"	"	2.9	1.4	0.2	1.3	○		珪質粗粒凝灰岩		7I	"	"
415	"	"	3.5	1.4	3.5	1.7	○		"		8H	"	"
416	"	"	2.7	1.6	0.4	1.7	○		珪質質流紋岩		7E	"	"
417	"	"	3.6	1.3	0.4	1.5	○		凝灰質珪質泥岩		7H	"	"
418	"	"	1.9	1.5	0.3	1.1	○		珪質泥岩		C区	"	"
419	"	"	2.8	1.4	0.4	1.4	○		凝灰質珪質泥岩		7E	"	"
420	"	"	1.7	1.4	0.4	1.0	○		珪質粗粒凝灰岩	全面にタール付着	12G	"	"
421	"	"	2.4	1.4	0.4	1.1	○		凝灰質珪質泥岩		C区	"	"
422	"	1-3	2.2	1.3	0.3	0.9	○		珪質粗粒凝灰岩		3C	第40回	"
423	"	"	2.8	1.6	0.6	2.4	○		"		4C	"	"
424	"	"	3.1	1.9	0.9	3.8	○		チャート		7I	"	"
425	"	"	2.9	1.9	0.7	3.0	○		珪質粗粒凝灰岩		1B	"	"
426	"	"	3.1	1.7	0.4	1.9	○		凝灰質硬質泥岩		7I	"	"
427	"	"	3.9	1.8	0.7	3.0	○		珪質粗粒凝灰岩		3C	"	"
428	"	"	3.5	2.2	0.7	3.2	○		凝灰質硬質泥岩		3E	"	"
429	"	"	3.5	2.3	0.3	2.6	○		"		3D	"	"
430	"	"	4.3	2.2	1.0	6.4	○		チャート		3E	"	"
431	"	"	3.2	1.7	0.6	2.4	○		凝灰質珪質泥岩		A区	"	"
432	"	II-1	1.7	0.9	0.3	0.5	○		珪質質流紋岩		4C	"	"
433	"	"	2.0	1.6	0.4	1.1	○		珪質泥岩		3B	"	"
434	"	"	1.8	1.6	0.4	0.7	○		チャート		4B	"	"
435	"	"	2.0	1.2	0.4	0.7	○		チャート質粘板岩		22E	"	"
436	"	"	1.7	1.2	0.4	0.5	○		珪質泥岩		C区	"	"
437	"	"	2.4	1.3	0.3	0.8	○		珪質粗粒凝灰岩	舟部の下等～中葉にタール付着	3C	"	"
438	"	"	2.2	1.5	0.4	0.9	○		"		3D	"	"
439	"	"	2.5	1.4	0.4	0.7	○		"		7I	"	"
440	"	"	2.4	2.0	0.4	1.1	○		"		3C	"	"
441	"	"	2.7	1.7	0.4	1.0	○		チャート		4C	"	"

遺物 番号	形 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出 土 地 点	図 版 番 号	写 真 図 版
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	高さ	完形	一部 欠損					
442	石蔵	Ⅱ-1	2.5	1.7	0.4	1.0		○	埴貫泥岩	中基と基部にタール付着	C区	第40図	22
443	＊	＊	3.1	1.7	0.4	1.2		○	埴貫細粒凝灰岩		3 B	＊	＊
444	＊	＊	3.2	1.7	0.5	1.5		○	粘板岩	中基と基部にタール付着(少)	7 G	＊	＊
445	＊	＊	1.8	0.8	0.3	0.2		○	チャート		21 F	第41図	＊
446	＊	＊	2.1	1.1	0.4	0.7		○	＊		C区	＊	＊
447	＊	＊	2.3	1.0	0.4	0.6		○	凝灰質硬質泥岩	基部～中基にタール付着	4 C	＊	＊
448	＊	＊	2.1	1.7	0.3	1.0		○	チャート		2 B	＊	＊
449	＊	＊	2.3	1.1	0.4	0.7		○	粘板岩		3 C	＊	＊
450	＊	＊	2.0	1.2	0.3	0.6		○	チャート		12 G	＊	＊
451	＊	＊	2.5	1.1	3.5	0.9		○	埴貫泥岩	基部にタール付着	4 C	＊	＊
452	＊	＊	2.2	1.3	0.4	1.0		○	粘板岩		4 D	＊	＊
453	＊	＊	2.0	1.3	0.3	0.9		○	埴貫泥岩		4 C	＊	＊
454	＊	＊	2.3	1.3	0.3	0.8		○	＊		5 B	＊	＊
455	＊	＊	2.8	1.2	0.4	0.8		○	埴貫細粒凝灰岩		4 D	＊	＊
456	＊	＊	3.1	1.2	0.4	1.0		○	凝灰質埴貫泥岩		3 C	＊	＊
457	＊	＊	2.6	1.5	0.3	0.7		○	埴貫細粒凝灰岩		5 C	＊	＊
458	＊	＊	2.7	1.5	0.3	0.7		○	チャート		6 G	＊	＊
459	＊	＊	2.7	1.6	0.4	1.0		○	埴貫細粒凝灰岩		4 D	＊	＊
460	＊	＊	3.1	1.3	0.3	1.1		○	凝灰質硬質泥岩		4 C	＊	＊
461	＊	＊	2.9	1.3	2.0	1.1		○	埴貫泥岩		3 C	＊	23
462	＊	＊	2.9	1.5	0.4	1.5		○	チャート		6 F	＊	＊
463	＊	＊	3.3	1.2	0.4	1.1		○	＊		A区	＊	＊
464	＊	＊	3.7	1.5	0.6	2.6		○	埴貫泥岩		7 H	＊	＊
465	＊	＊	3.7	1.5	0.5	2.1		○	＊	中基にタール付着	7 G	＊	＊
466	＊	＊	3.9	1.8	0.4	1.5		○	凝灰質硬質泥岩		4 C	＊	＊
467	＊	＊	3.9	1.5	0.4	1.7		○	凝灰質埴貫泥岩		C区	＊	＊
468	＊	＊	4.5	1.8	0.5	2.3		○	埴貫細粒凝灰岩		7 G	＊	＊
469	＊	＊	3.8	1.9	0.5	2.8		○	埴貫泥岩		8 H	第42図	＊
470	＊	＊	1.9	0.9	0.4	0.6		○	＊		4 D	＊	＊
471	＊	＊	1.9	1.1	0.4	0.6		○	＊		3 C	＊	＊
472	＊	＊	2.0	1.1	0.4	0.7		○	＊		6 D	＊	＊
473	＊	＊	2.2	1.5	0.4	1.1		○	埴貫細粒凝灰岩	基部の上半部にタール付着	7 F	＊	＊
474	＊	＊	2.5	1.6	0.4	1.3		○	埴貫泥岩		9 G	＊	＊
475	＊	＊	3.2	1.5	0.5	2.0		○	凝灰質硬質泥岩		8 I	＊	＊
476	＊	＊	3.1	1.8	0.5	1.7		○	＊		3 C	＊	＊
477	＊	＊	2.7	1.4	0.5	1.6		○	＊		5 E	＊	＊
478	＊	＊	3.7	2.3	0.7	2.5		○	埴貫細粒凝灰岩		2 B	＊	＊
479	＊	＊	3.5	1.7	0.4	2.0		○	＊		7 H	＊	＊
480	＊	＊	2.2	1.2	0.3	0.8		○	チャート	中基にタール付着	7 F 3区	＊	＊
481	＊	Ⅱ-2	1.7	0.6	0.2	0.3		○	埴貫泥岩		C区	＊	＊
482	＊	＊	2.1	1.5	0.4	0.6		○	埴貫細粒凝灰岩		3 C	＊	＊
483	＊	＊	1.7	1.1	0.4	0.5		○	チャート		6 D	＊	＊
484	＊	＊	2.4	1.1	0.4	0.7		○	埴貫細粒凝灰岩		7 F 3区	＊	＊
485	＊	＊	2.4	1.4	0.5	1.3		○	チャート		5 D	＊	＊
486	＊	＊	2.5	1.3	0.4	0.9		○	＊		22 F	＊	＊
487	＊	＊	2.6	1.5	0.4	1.7		○	埴貫泥岩		8 E	＊	＊
488	＊	＊	2.1	0.7	0.3	0.3		○	埴貫細粒凝灰岩		2 B	＊	＊
489	＊	＊	2.4	0.6	0.2	0.5		○	埴貫泥岩		3 C	＊	＊

建物 番号	器 種		計 測 値				欠陥状況 定形(一) 欠陥	石 材	備 考	出 土 地 点	図 版 番 号	写真 図版
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ						
490	石造	II-2	2.0	1.0	0.4	0.7	○	凝灰質硬質泥岩	中基にタール付着(多い)	6D	第42図	23
491	"	"	2.4	1.1	0.4	0.7	○	粘板岩	中基にタール付着(多い)	A区	"	"
492	"	"	2.4	1.4	0.5	1.0	○	チャート		不明	"	"
493	"	"	2.4	1.2	0.5	0.8	○	珪質細粒凝灰岩		4D	第43図	"
494	"	"	1.5	1.3	0.4	0.8	○	玻璃質流紋岩		3C	"	"
495	"	"	2.2	1.3	0.6	1.3	○	粘板岩		6G	"	"
496	"	"	2.4	1.5	0.5	0.9	○	珪質細粒凝灰岩		2B	"	"
497	"	"	3.1	0.9	0.2	0.6	○	珪質泥岩		7I	"	"
498	"	"	2.8	1.5	0.5	1.5	○	粘板岩		A区	"	"
499	"	"	3.1	1.3	0.5	1.7	○	凝灰質硬質泥岩	中基にタール付着	4D	"	"
500	"	"	2.9	1.9	0.8	3.0	○	珪質細粒凝灰岩	身部下半~中基にタール付着(背面)	4C	"	"
501	"	"	3.9	2.0	0.4	2.4	○	"		3C	"	"
502	"	"	3.4	1.9	0.5	2.2	○	"		4C	"	"
503	"	"	3.7	1.5	0.7	2.3	○	"		7F	"	"
504	"	"	3.0	1.1	0.4	1.5	○	チャート		5F-1 1.1.1.1	"	"
505	"	"	4.0	1.4	0.8	2.5	○	"		6G	"	"
506	"	"	3.7	2.4	0.5	3.2	○	凝灰質硬質泥岩		4C	"	"
507	"	"	3.7	1.9	0.4	2.4	○	凝灰質珪質泥岩		4D	"	"
508	"	"	4.4	2.2	0.6	3.8	○	凝灰質硬質泥岩		4C	"	"
509	"	"	4.2	2.3	0.8	4.7	○	珪質細粒凝灰岩		"	"	"
510	"	"	2.6	0.8	0.4	0.8	○	珪質泥岩		7D	"	"
511	"	"	2.0	1.3	0.4	1.0	○	珪質細粒凝灰岩		11G	"	"
512	"	"	2.3	1.8	0.4	1.0	○	"		4C	"	"
513	"	"	2.3	1.8	0.5	1.5	○	凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
514	"	"	3.2	1.7	0.5	2.0	○	珪質泥岩		4D	"	"
515	"	"	2.0	1.8	0.4	1.3	○	珪質細粒凝灰岩		"	"	"
516	"	"	2.2	1.9	0.4	1.6	○	凝灰質珪質泥岩		4E	"	"
517	"	"	2.4	2.1	0.4	2.0	○	チャート		4C	第44図	24
518	"	"	4.0	1.9	1.1	4.8	○	玻璃質流紋岩		6D	"	"
519	"	"	2.8	0.9	0.4	0.5	○	チャート		3B	"	"
520	"	"	2.1	1.1	0.4	1.1	○	玻璃質流紋岩		6D	"	"
521	"	"	3.5	1.2	0.7	1.7	○	チャート		5G	"	"
522	"	"	2.9	0.8	0.4	0.8	○	硬質泥岩		7F	"	"
523	"	"	2.9	1.1	0.4	2.0	○	珪質細粒凝灰岩		3C	"	"
524	"	"	3.3	1.5	0.4	2.6	○	"		6F	"	"
525	"	"	3.7	0.9	0.5	1.4	○	凝灰質珪質泥岩		4D	"	"
526	"	"	3.5	0.9	0.7	2.2	○	玻璃質流紋岩		6F	"	"
527	"	"	4.3	1.0	0.9	2.8	○	珪質泥岩		7E	"	"
528	光燼岩	I	9.9	2.0	1.9	45.8	○	玻璃質流紋岩		7F-1 1.1.1.1	"	"
529	"	"	6.0	3.0	1.5	19.0	○	凝灰質硬質泥岩		5D	"	"
530	"	"	5.9	2.5	1.6	19.6	○	硬質泥岩		7I	"	"
531	"	"	7.6	2.2	1.3	18.9	○	珪質泥岩		5C	"	"
532	"	"	6.8	1.9	1.0	11.7	○	凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
533	"	II-1	3.5	2.5	1.4	7.9	○	"		4C	第45図	"
534	"	"	3.3	2.4	0.6	4.2	○	"		6E	"	"
535	"	"	3.5	2.0	0.9	6.9	○	"		7E	"	"
536	"	"	3.1	2.4	0.8	4.7	○	"		4C	"	"
537	"	"	3.5	3.0	0.7	5.5	○	"		2B	"	"

遺物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	図 版 番号	写真 図版
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ	定形	一部 欠損					
538	瓦綫部	II-1	4.0	2.5	1.2	5.7	○		凝灰質硬質泥岩		C区	第43図	24
539	"	"	4.1	2.5	0.0	6.8	○		"		3C	"	"
540	"	"	3.8	2.8	1.0	7.4	○		"		A区	"	"
541	"	"	4.0	2.5	1.0	7.8	○		"		6F	"	"
542	"	"	3.9	2.6	0.9	8.0	○		"		A区	"	"
543	"	"	3.7	3.0	0.8	9.3	○		"		7E	"	"
544	"	"	4.1	2.4	0.9	6.0	○		"		4C	"	"
545	"	"	3.9	2.9	1.0	9.0	○		"		2B	"	"
546	"	"	3.8	2.8	1.1	10.0	○		"		3C	"	"
547	"	"	4.1	2.9	1.0	9.7	○		"		2B	"	"
548	"	"	4.3	3.1	1.4	15.3	○		"		"	第44図	"
549	"	"	4.5	3.9	1.2	18.7	○		"		4C	"	"
550	"	"	4.5	3.2	1.1	13.6	○		"		"	"	"
551	"	"	3.8	2.5	1.0	6.6	○		"		"	"	"
552	"	"	3.1	2.1	1.1	7.0	○		硬質泥岩		A区	"	"
553	"	"	3.9	2.4	0.6	4.7	○		凝灰質硬質泥岩		4C	"	"
554	"	"	2.8	2.3	1.0	6.3	○		"		4B	"	"
555	"	II-2	4.3	2.9	1.5	13.8	○		"		3C	"	"
556	"	"	3.5	3.6	1.4	11.3	○		"		"	"	"
557	"	"	4.9	3.1	1.5	15.9	○		"		"	"	25
558	"	"	5.3	3.2	1.2	17.0	○		"		"	"	"
559	"	"	5.4	3.2	1.4	19.4	○		"		4C	"	"
560	"	"	4.8	3.2	1.5	17.7	○		"		3C	第47図	"
561	"	"	4.9	3.2	1.3	17.2	○		"		4C	"	"
562	"	"	3.3	2.5	0.9	8.1	○		硬質泥岩		A区	"	"
563	"	"	4.8	3.5	1.1	17.2	○		凝灰質硬質泥岩		2B	"	"
564	"	"	4.4	3.5	1.3	16.3	○		凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
565	"	"	3.8	3.1	1.4	14.5	○		"		4C	"	"
566	"	"	3.6	2.7	1.2	10.0	○		凝灰質硬質泥岩		5B	"	"
567	"	"	4.2	2.8	1.3	14.7	○		凝灰質硬質泥岩		5D	"	"
568	"	"	4.6	3.2	1.5	17.8	○		凝灰質硬質泥岩		7I	"	"
569	"	"	4.1	3.5	1.6	19.0	○		凝灰質硬質泥岩		C区	"	"
570	石鏃	I	4.0	1.2	0.7	2.0	○		鉄石片		7F 上段	第48図	"
571	"	"	4.8	3.0	1.0	8.5	○		凝灰質硬質泥岩		4C	"	"
572	"	"	4.4	1.9	1.0	3.3	○		チャート質粘板岩		8H	"	"
573	"	"	4.8	1.9	0.9	3.8	○		凝灰質硬質泥岩		5D	"	"
574	"	"	3.5	1.5	1.0	4.0	○		"		6D	"	"
575	"	"	3.4	1.5	0.7	2.3	○		"		3C	"	"
576	"	"	3.3	1.6	0.5	1.4	○		"		C区	"	"
577	"	"	3.1	1.2	0.5	0.9	○		"		7I	"	"
578	"	"	2.7	2.0	0.8	4.1	○		凝灰質硬質泥岩		6D	"	"
579	"	"	2.9	1.5	0.5	1.8	○		"		6G	"	"
580	"	"	2.3	1.9	0.5	1.7	○		麻痺質流紋岩		7I	"	"
581	"	"	3.7	2.1	0.8	4.8	○		凝灰質硬質泥岩		7I 上段	"	"
582	"	"	2.9	1.5	1.2	3.5	○		麻痺質流紋岩		6D	"	"
583	"	"	2.3	2.2	0.7	2.7	○		"		3D	"	"
584	"	"	2.4	3.1	0.9	4.2	○		チャート		8E	"	"
585	"	"	3.0	2.2	1.1	5.0	○		凝灰質硬質泥岩		7G	"	"

通物 番号	品 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出 土 地 点	図 版 番 号	写 真 図 数
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一 部 欠損					
586	石鏝	I	2.7	1.6	1.1	5.1	○		チャート質粘板岩	つまみ部にタール付着	7G	第48図	25
587	"	"	3.3	2.1	1.0	6.3	○		埴貫泥岩		A区	"	"
588	"	II	1.4	0.8	0.4	0.2	○		チャート		"	"	"
589	"	"	1.4	0.7	0.4	0.4	○		"		4D	"	"
590	"	"	1.9	0.7	0.6	0.6	○		成層質流紋岩		2B	"	"
591	"	"	2.9	1.5	0.5	0.5	○		埴貫泥岩		6G	"	"
592	"	"	2.3	0.8	0.7	0.9	○		チャート質粘板岩		7E	"	"
593	"	"	2.6	0.5	0.4	0.6	○		凝灰質埴貫泥岩		7I	"	"
594	"	"	4.4	1.0	0.6	2.8	○		凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
595	"	III	2.0	1.2	0.2	1.0	○		チャート		4C	第49図	26
596	"	"	2.8	1.1	0.7	2.3	○		"		2B	"	"
597	"	"	2.2	2.0	0.5	0.8	○		埴貫泥岩		7E	"	"
598	"	"	2.8	1.3	0.6	1.8	○		凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
599	"	"	3.0	1.0	0.9	1.6	○		"		A区	"	"
600	"	"	3.1	2.0	0.6	3.2	○		"		7H	"	"
601	"	"	3.6	1.6	0.8	3.5	○		"		7I	"	"
602	"	"	3.0	2.3	0.4	2.6	○		"		16F	"	"
603	"	"	3.2	2.0	0.4	3.2	○		粘板岩		7G	"	"
604	"	"	2.4	1.8	0.5	1.6	○		チャート		7D	"	"
605	"	"	2.2	1.2	0.4	0.7	○		埴貫泥岩		7F	"	"
606	"	"	1.8	1.5	0.3	0.7	○		柱貫細粒凝灰岩		4D	"	"
607	"	IV	2.8	2.1	0.3	2.6	○		凝灰質硬質泥岩		2B	"	"
608	"	"	2.1	1.8	0.5	1.3	○		"		3D	"	"
609	"	"	4.3	3.4	0.6	9.1	○		細砂質凝灰岩		6F	"	"
610	"	"	4.8	3.5	1.2	13.9	○		硬質泥岩	つまみ部にタール付着	7H	"	"
611	"	"	5.4	3.9	0.6	11.5	○		"		7E	"	"
612	石柱	I-1	3.6	1.5	0.6	2.6	○		埴貫泥岩		6D	第50図	"
613	"	"	3.4	1.5	0.5	2.4	○		チャート		6H	"	"
614	"	"	3.7	1.9	0.5	4.7	○		凝灰質埴貫泥岩		7F	"	"
615	"	"	4.1	1.6	0.7	3.6	○		チャート		C区	"	"
616	"	"	3.1	2.1	0.5	6.2	○		凝灰質硬質泥岩		7E-1 7E-2	"	"
617	"	"	5.9	1.9	0.8	6.9	○		埴貫泥岩		7E	"	"
618	"	"	7.0	1.5	0.6	7.1	○		凝灰質埴貫泥岩		6E	"	"
619	"	"	8.6	1.8	1.0	12.7	○		凝灰質硬質泥岩		7I	"	"
620	"	"	7.0	2.0	0.9	11.0	○		埴貫泥岩		5C	"	"
621	"	"	3.9	3.3	0.6	5.3	○		"		7E-1 7E-2	"	"
622	"	"	7.2	3.7	1.2	28.3	○		凝灰質埴貫泥岩		3B	"	"
623	"	"	7.4	4.3	2.1	36.8	○		埴貫泥岩		"	"	"
624	"	I-2	5.5	1.8	1.0	8.2	○		"		7I	第51図	27
625	"	"	3.3	1.3	0.5	3.3	○		成層質流紋岩		7E	"	"
626	"	"	5.7	1.9	0.8	4.8	○		凝灰質硬質泥岩		7D	"	"
627	"	"	5.8	1.9	1.0	8.3	○		粘板岩		7F	"	"
628	"	"	5.6	1.8	0.9	7.7	○		凝灰質硬質泥岩		A区	"	"
629	"	"	5.9	1.4	0.7	6.5	○		埴貫泥岩		5C	"	"
630	"	"	6.8	1.9	0.9	8.2	○		"		7F	"	"
631	"	"	7.3	1.7	0.9	6.4	○		成層質流紋岩		5E	"	"
632	"	"	7.3	2.0	0.8	12.6	○		埴貫泥岩		2B	"	"
633	"	"	6.7	1.9	1.0	17.5	○		"		6F	"	"

通物 番号	部 名 称	計 分 類	計 測 値				欠損状況 完形 一部 欠損	石 材	備 考	出土 地点	図 板 番 号	写真 図版
			長さ	幅	厚さ	重さ						
634	石礎	I-2	4.1	2.7	0.7	7.2	○	埴貫泥岩		7 I	第51図	27
635	"	"	3.7	2.5	0.4	2.7	○	凝灰質埴貫泥岩		C区	"	"
636	"	"	4.0	2.3	0.4	4.3	○	"		6 D	第52図	"
637	"	"	4.8	2.1	0.6	4.5	○	千ヶート		4 D	"	"
638	"	"	5.7	2.6	0.7	8.2	○	凝灰質埴貫泥岩		3 C	"	"
639	"	"	4.9	2.4	0.6	7.8	○	埴貫泥岩		6 D	"	"
640	"	"	4.6	2.0	0.7	6.7	○	凝灰質埴貫泥岩		4 D	"	"
641	"	"	7.5	5.2	1.3	34.0	○	埴貫泥岩		3 C	"	"
642	"	"	8.1	2.2	0.7	11.4	○	凝灰質埴貫泥岩		6 F	"	"
643	"	"	5.1	2.2	0.9	5.2	○	凝灰質硬質泥岩		3 D	"	"
644	"	"	6.3	2.5	1.1	11.3	○	枹板岩		5 C	"	"
645	"	"	7.6	2.6	0.8	13.9	○	埴貫泥岩		"	"	"
646	"	I-3	3.0	1.9	0.4	1.1	○	"		7 E	第53図	28
647	"	"	3.3	2.1	0.7	4.1	○	凝灰質硬質泥岩		A区	"	"
648	"	"	4.3	1.6	0.7	4.2	○	埴貫泥岩		4 C	"	"
649	"	"	2.4	2.7	0.7	3.9	○	"		A区	"	"
650	"	"	4.7	2.7	0.9	7.1	○	枹板岩		4 D	"	"
651	"	"	5.5	1.6	0.8	6.1	○	埴貫泥岩		7 E	"	"
652	"	"	4.6	2.4	0.5	9.9	○	地溝貫流軟岩		7 I	"	"
653	"	"	4.4	2.6	0.8	6.1	○	埴貫泥岩		3 B	"	"
654	"	I-4	4.9	3.2	1.0	14.4	○	"		4 D	"	"
655	"	"	2.9	1.4	0.5	1.7	○	凝灰質硬質泥岩		4 C	"	"
656	"	"	2.4	1.5	0.3	2.0	○	地溝貫流軟岩		6 D	"	"
657	"	"	4.9	1.4	0.6	3.3	○	埴貫泥岩		7 D	"	"
658	"	"	3.5	2.0	0.5	4.1	○	凝灰質埴貫泥岩		7 E	"	"
659	"	I-5	2.9	2.0	0.4	2.0	○	"		3 C	"	"
660	"	"	4.3	2.8	0.7	5.4	○	埴貫泥岩		7 I	"	"
661	"	"	7.6	4.0	1.8	54.1	○	凝灰質硬質泥岩		4 C	"	"
662	"	II-1	3.3	4.4	0.7	6.6	○	埴貫泥岩		6 G	第54図	"
663	"	"	4.0	3.7	1.0	8.7	○	凝灰質埴貫泥岩		6 D	"	"
664	"	"	2.6	3.7	0.6	5.7	○	"		3 C	"	"
665	"	II-2	3.6	4.4	0.6	7.1	○	"		5 C	"	"
666	"	"	3.7	4.2	0.7	7.1	○	枹板岩		4 C	"	"
667	"	"	3.4	3.7	1.1	12.5	○	"		6 D	"	"
668	"	"	2.5	4.8	1.0	8.1	○	凝灰質硬質泥岩		7 F P. 1. 45	"	"
669	"	"	2.8	5.1	0.8	6.4	○	埴貫泥岩		7 H	"	"
670	"	II-3	2.8	9.7	1.1	20.5	○	凝灰質埴貫泥岩		8 H	"	"
671	"	"	1.7	2.8	0.5	2.1	○	埴貫泥岩		7 I	"	"
672	"	"	4.8	8.8	1.5	47.0	○	"		C区	第55図	"
673	"	"	2.7	2.9	1.3	17.9	○	凝灰質硬質泥岩		3 B	"	"
674	"	"	1.9	4.0	0.8	4.6	○	"		3 C	"	"
675	"	"	4.1	4.9	1.2	17.7	○	埴貫泥岩		7 I	"	"
676	"	"	5.3	6.2	1.4	39.1	○	"		5 G	"	29
677	"	"	4.1	4.5	1.0	13.9	○	凝灰質硬質泥岩		6 F	"	"
678	"	II-4	3.9	3.1	1.2	16.3	○	埴貫泥岩		7 I	"	"
679	筒状石基		7.1	4.0	0.2	21.1	○	"		3 C	第56図	"
680	"		3.6	4.6	1.1	18.2	○	凝灰質硬質泥岩		7 P. 1. 46	"	"
681	"		3.5	3.1	1.2	8.3	○	凝灰質埴貫泥岩		5 C	"	"

遺物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況 完形 一次品	石 材	備 考	出土 地点	図 版 番号	写真 図版
	名 称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ						
682	鹿状石器		5.2	4.2	1.1	26.3	○	埴貫細粒凝灰岩		4D	第56図	29
683	三五等二玉		2.9	4.1	1.0	11.7	○	凝灰質珪質泥岩		3C	"	"
684	"		2.1	3.5	1.1	15.6	○	凝灰質硬質泥岩		4D	"	"
685	"		3.0	4.0	1.1	11.2	○	"		7F	"	"
686	"		2.9	2.2	1.0	6.2	○	埴貫泥岩		2B	"	"
687	不定形石器	I	5.8	3.7	1.5	33.5	○	"		4C	第57図	"
688	"	"	4.7	3.4	1.0	15.4	○	埴貫細粒凝灰岩		4D	"	"
689	"	"	4.4	3.3	1.6	22.4	○	チャート質粘板岩		3B	"	"
690	"	"	5.6	3.3	1.9	31.4	○	埴貫泥岩粘板岩		6F	"	"
691	"	"	5.5	3.3	1.4	24.8	○	埴貫細粒凝灰岩		4D	"	"
692	"	II	7.5	3.0	0.4	15.4	○	粘板岩	全面にケール及び炭化物が付着	8H	"	"
693	"	III-1	8.7	3.4	0.7	5.7	○	凝灰質硬質泥岩		3D	"	"
694	"	"	4.5	2.9	1.1	11.9	○	埴貫泥岩		A区	"	"
695	"	"	3.4	2.9	0.8	7.4	○	凝灰質硬質泥岩		6D	"	"
696	"	"	3.0	3.1	1.2	8.8	○	凝灰質珪質泥岩		8H	"	"
697	"	"	3.1	3.6	1.2	15.5	○	埴貫泥岩		5G	"	"
698	"	"	1.8	1.4	0.7	2.0	○	チャート質粘板岩		8E	第58図	"
699	"	"	2.3	1.4	0.7	1.9	○	チャート		7I	"	"
700	"	"	2.7	2.1	0.7	4.0	○	チャート質粘板岩		8H	"	"
701	"	"	2.7	1.9	1.0	4.6	○	埴貫泥岩		4B	"	"
702	"	"	2.2	2.0	0.4	1.9	○	"		19E	"	"
703	"	"	2.5	2.2	0.4	2.5	○	チャート		7I	"	"
704	"	"	1.8	2.3	0.7	3.0	○	チャート質粘板岩		4D	"	"
705	"	"	2.5	2.6	0.6	3.4	○	凝灰質珪質泥岩		4C	"	"
706	"	"	2.7	2.2	0.7	3.3	○	埴貫泥岩		不明	"	"
707	"	"	3.0	1.9	0.6	3.6	○	埴貫細粒凝灰岩		3C	"	"
708	"	"	2.2	2.5	0.9	4.6	○	埴貫泥岩		7I	"	"
709	"	"	2.9	2.0	0.8	3.3	○	凝灰質硬質泥岩		3B	"	"
710	"	"	2.3	3.0	0.7	4.1	○	粘板岩		7E	"	"
711	"	"	2.9	1.7	0.9	3.0	○	チャート		7I	"	30
712	"	"	3.2	2.1	0.8	4.0	○	凝灰質硬質泥岩		3B	"	"
713	"	"	2.9	1.7	0.5	3.3	○	"		6D	"	"
714	"	"	3.1	1.9	0.9	4.9	○	"		4C	"	"
715	"	III-2	1.9	2.7	0.5	3.5	○	チャート		7I	第59図	"
716	"	"	1.3	2.7	0.4	1.0	○	埴貫細粒凝灰岩		A区	"	"
717	"	"	2.7	2.0	1.0	3.8	○	埴貫泥岩		"	"	"
718	"	"	3.0	4.8	1.1	14.3	○	凝灰質硬質泥岩		7E	"	"
719	"	"	3.6	3.4	0.7	8.1	○	"		4C	"	"
720	"	"	3.0	1.7	0.9	4.3	○	チャート質粘板岩		7G	"	"
721	"	"	2.6	1.9	0.5	1.8	○	チャート		3C	"	"
722	"	"	2.5	1.8	0.6	3.0	○	凝灰質硬質泥岩		8D	"	"
723	"	"	2.7	2.2	0.9	4.4	○	"		8E	"	"
724	"	"	2.7	1.6	0.3	1.5	○	"		4D	"	"
725	"	"	2.9	2.0	0.5	2.3	○	チャート質粘板岩		C区	"	"
726	"	"	3.0	2.8	0.5	3.8	○	玻璃質流紋岩		7E	"	"
727	"	"	3.3	1.5	0.8	3.8	○	粘板岩		A区	"	"
728	"	"	2.6	1.4	0.4	1.3	○	チャート		6I	"	"
729	"	"	2.3	1.8	0.4	1.4	○	凝灰質硬質泥岩		A区	"	"

通物 番号	部 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出 土 地 点	図 版 番 号	写 真 図 版
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ	変形	一 面 欠損					
730	不定形石部	田一2	4.3	2.1	0.9	7.7		○	粘板岩		20F	第50図	30
731	"	"	3.3	3.3	0.5	5.8		○	埴貫泥岩		7F	"	"
732	"	"	4.3	2.6	1.0	8.7		○	"		7I	"	"
733	"	"	4.3	3.7	1.1	14.1		○	凝灰質硬質泥岩		4C	第60図	"
734	"	"	5.3	2.5	0.7	7.0		○	埴貫泥岩		7F	"	"
735	"	"	7.3	2.4	1.5	17.6		○	埴貫細粒凝灰岩		4C	"	"
736	"	"	2.3	3.5	0.7	4.5		○	埴貫泥岩		7I	"	"
737	"	"	2.5	2.0	1.1	5.6		○	地溝貫流砂岩		4D	"	"
738	"	"	2.8	3.0	1.0	7.5		○	埴貫泥岩	万部分にタール付着	3C	"	"
739	"	"	4.1	2.5	1.0	9.9		○	凝灰質硬質泥岩		4D	"	"
740	"	"	3.5	2.2	0.6	3.3		○	"		"	"	"
741	"	"	4.2	2.7	1.2	10.7		○	埴貫泥岩		7I	"	"
742	"	"	7.1	3.0	1.4	22.7		○	凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
743	"	"	4.2	2.8	0.7	9.4		○	"		6F	第61図	"
744	"	"	3.2	4.7	1.4	18.5		○	チャート		8H	"	"
745	"	"	1.7	1.8	0.4	1.9		○	埴貫泥岩		3D	"	"
746	"	"	2.0	2.6	4.0	1.6		○	凝灰質硬質泥岩		AR	"	"
747	"	"	2.2	1.7	0.5	1.9		○	埴貫泥岩		CR	"	"
748	"	"	2.5	1.4	0.5	1.3		○	粘板岩		AR	"	"
749	"	"	2.6	1.6	0.3	1.4		○	凝灰質硬質泥岩		"	"	"
750	"	"	2.5	1.8	0.5	1.0		○	地溝貫流砂岩		4D	"	"
751	"	"	2.9	2.3	0.5	4.4		○	チャート		20F- 2, 3, 4	"	"
752	"	"	3.0	2.1	0.4	2.2		○	凝灰質埴貫泥岩		AR	"	"
753	"	"	3.1	1.0	0.6	2.7		○	チャート質粘板岩		14F	"	"
754	"	"	4.0	1.7	0.6	3.8		○	凝灰質硬質泥岩		4B	"	"
755	"	"	2.5	3.0	0.7	4.6		○	チャート質粘板岩		3D	"	"
756	"	"	3.1	2.8	0.8	4.9		○	凝灰質硬質泥岩		7E	"	"
757	"	"	3.0	1.9	0.7	3.5		○	"		3C	"	"
758	"	"	2.6	1.9	0.6	2.1		○	チャート質粘板岩		4C	"	"
759	"	"	3.3	2.3	1.0	6.0		○	埴貫泥岩		4D	"	"
760	"	"	3.6	2.6	0.8	4.2		○	"		7I	第62図	31
761	"	"	3.5	1.9	0.6	4.5		○	粘板岩		3C	"	"
762	"	"	3.9	2.3	1.2	9.3		○	埴貫泥岩		6F	"	"
763	"	"	4.3	3.6	1.0	10.9		○	"		CR	"	"
764	"	"	2.9	3.4	0.8	6.3		○	"		3C	"	"
765	"	"	4.4	1.6	0.5	2.3		○	凝灰質硬質泥岩		3D	"	"
766	"	"	2.6	1.2	0.6	1.3		○	チャート		AR	"	"
767	"	"	3.5	1.9	0.4	2.4		○	埴貫泥岩		5E	"	"
768	"	"	3.0	1.9	0.3	1.9		○	"		8H	"	"
769	"	"	3.7	2.3	0.5	4.2		○	"		7I	"	"
770	"	"	4.4	2.4	0.8	7.6		○	埴貫細粒凝灰岩		4C	"	"
771	"	"	3.7	4.6	1.0	13.2		○	埴貫泥岩		7D	"	"
772	"	"	2.6	1.6	0.5	2.5		○	凝灰質硬質泥岩		7F	"	"
773	"	"	2.1	1.8	0.6	2.5		○	地溝貫流砂岩		19F	"	"
774	"	"	2.7	2.0	0.8	3.2		○	凝灰質硬質泥岩		3C	"	"
775	"	"	2.4	2.1	0.5	2.2		○	"		2B	第63図	"
776	"	"	2.8	2.1	0.5	2.2		○	埴貫泥岩		CR	"	"
777	"	"	2.0	2.9	0.5	3.6		○	埴貫細粒凝灰岩		7I	"	"

遺物 番号	器 種			計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	図版 番号	写真 図版
	名 称	分類		長さ	幅	厚さ	重量	欠形	指 欠出					
776	不定形石器	Ⅱ-2	2.3	2.6	0.8	3.1		○	チャート			7 I	第63図	31
779	"	"	2.3	2.0	0.6	3.2		○	"			"	"	"
780	"	"	2.0	3.1	0.8	3.7		○	凝灰質硬質泥岩			A区	"	"
781	"	"	2.9	3.1	1.1	8.0		○	珪質細粒凝灰岩			5 D	"	"
782	"	"	3.8	2.7	0.5	3.6		○	凝灰質硬質泥岩			4 E	"	"
783	"	"	2.5	4.7	0.9	10.1		○	"			7 I	"	"
784	"	"	5.5	3.0	0.9	9.8		○	凝灰質珪質泥岩			"	"	"
785	"	"	5.2	1.5	1.3	9.4		○	チャート質粘板岩			7 H	"	"
786	"	"	5.3	1.5	0.6	4.4		○	珪質泥岩			4 C	"	"
787	"	"	2.0	1.6	0.4	1.2		○	凝灰質珪質泥岩			2 B	"	"
788	"	"	2.7	2.5	0.3	2.6		○	珪質泥岩			6 F	"	"
789	"	"	3.5	2.6	0.5	5.4		○	チャート質粘板岩			4 D	"	"
790	"	"	4.0	1.8	0.7	3.9		○	珪質細粒凝灰岩			6 F	"	"
791	"	"	4.5	1.7	0.6	3.8		○	凝灰質硬質泥岩			6 G	"	"
792	"	"	3.2	3.9	0.8	8.2		○	珪質泥岩			2 B	"	"
793	"	"	5.8	4.1	1.4	28.9		○	凝灰質珪質泥岩			4 C	第64図	"
794	"	"	3.0	2.9	0.6	5.6		○	チャート			2 B	"	"
795	"	"	2.2	1.6	0.4	1.3		○	珪質泥岩			C区	"	"
796	"	"	2.0	2.1	1.0	3.9		○	チャート			4 C	"	"
797	"	"	3.1	2.1	0.3	2.8		○	凝灰質硬質泥岩			3 C	"	"
798	"	"	2.5	2.8	0.8	7.3		○	珪質細粒凝灰岩	チール付着 石籠中(?)		6 D	"	"
799	"	"	3.0	2.5	0.5	4.9		○	凝灰質硬質泥岩			A区	"	"
800	"	"	3.0	3.9	1.0	7.4		○	"			5 C	"	"
801	"	"	4.7	3.7	1.1	19.9		○	珪質細粒凝灰岩			5 D	"	"
802	"	"	3.9	3.8	0.6	9.5		○	硬質泥岩			4 C	"	32
803	"	"	7.3	3.5	0.6	14.1		○	凝灰質硬質泥岩			5 E	"	"
804	"	"	6.8	4.9	1.6	51.7		○	珪質細粒凝灰岩			3 C	"	"
805	"	"	5.0	4.6	1.5	20.1		○	凝灰質硬質泥岩			4 C	第65図	"
806	"	"	2.4	1.7	0.6	1.9		○	チャート質粘板岩			8 H	"	"
807	"	"	2.3	1.1	0.5	1.4		○	玻璃質流紋岩			7 I	"	"
808	"	"	2.5	2.3	0.5	1.9		○	珪質泥岩			5 C	"	"
809	"	"	3.5	3.0	0.5	4.1		○	珪質細粒凝灰岩			6 F	"	"
810	"	"	3.0	2.8	1.0	6.9		○	チャート			4 D	"	"
811	"	N-1	2.4	2.0	0.6	2.2		○	凝灰質硬質泥岩			"	"	"
812	"	"	3.1	1.5	0.5	2.1		○	"			"	"	"
813	"	"	3.6	2.2	0.6	4.2		○	珪質泥岩			6 D	"	"
814	"	"	3.5	2.9	0.6	7.3		○	チャート			4 C	"	"
815	"	"	5.2	3.0	1.5	24.0		○	珪質細粒凝灰岩			7 E 5.区	"	"
816	"	"	7.1	3.6	0.9	19.1		○	"			7 G	"	"
817	"	"	7.0	2.6	1.3	25.9		○	凝灰質珪質泥岩			7 E 5.区	"	"
818	"	"	11.3	4.9	0.8	47.1		○	粘板岩			4 C	第66図	"
819	"	"	3.9	3.9	0.9	54.7		○	"			A区	"	"
820	"	N-2	2.0	3.9	1.0	7.9		○	チャート質粘板岩			C区	"	"
821	"	N-3	3.8	4.3	0.9	8.4		○	珪質細粒凝灰岩			3 C	"	"
822	"	"	4.8	2.9	0.8	8.8		○	硬質泥岩			4 C	"	"
823	"	"	5.0	5.0	1.0	19.4		○	"			7 E	"	"
824	"	N-2	5.6	3.2	1.3	12.9		○	チャート質粘板岩			8 H	"	"
825	"	N-3	4.7	1.7	0.9	4.7		○	珪質泥岩			7 E	"	"

遺物 番号	器 種		計 画 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	区 画 番号	写真 図版
	名 称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	完形	部 欠損					
826	不定形石器	B-3	3.1	1.8	0.7	3.2	○		凝灰質硬質泥岩		7 G	第66図	32
827	"	B-4	3.3	2.9	0.8	4.5	○		埴質細粒凝灰岩		8 G	"	"
828	"	Y	3.1	3.5	0.8	3.6	○		埴質泥岩		A区	第67図	"
829	"	"	5.4	4.4	1.4	26.4	○		"		7 I	"	"
830	"	W-1	2.1	1.4	0.3	0.9	○		凝灰質硬質泥岩		3 D	"	"
831	"	"	2.2	2.3	0.7	3.2	○		埴質泥岩		6 E	"	"
832	"	"	2.5	2.4	0.4	2.2	○		凝灰質硬質泥岩		3 B	"	"
833	"	"	1.9	1.7	0.8	1.7	○		チャート		7 H	"	"
834	"	"	2.9	1.6	0.9	4.4	○		チャート質粘板岩		C区	"	33
835	"	"	1.6	2.4	0.5	1.9	○		埴質泥岩		7 H	"	"
836	"	"	3.3	2.3	0.7	3.6	○		"		5 B	"	"
837	"	"	3.5	2.1	0.7	4.9	○		凝灰質硬質泥岩		C区	"	"
838	"	"	3.8	1.4	0.6	3.3	○		チャート質粘板岩		A区	"	"
839	"	"	3.9	2.1	1.0	7.1	○		凝灰質硬質泥岩		3 C	"	"
840	"	"	4.1	2.6	0.9	7.8	○		チャート質粘板岩		4 D	"	"
841	"	"	4.1	2.5	0.5	4.7	○		埴質泥岩		A区	"	"
842	"	"	5.1	2.0	0.8	7.4	○		"		4 C	"	"
843	"	"	4.0	3.3	0.6	7.0	○		チャート質粘板岩		6 D	"	"
844	"	"	2.6	4.2	1.2	15.2	○		凝灰質硬質泥岩		3 C	"	"
845	"	"	2.9	3.9	0.7	7.3	○		埴質泥岩		7 I	"	"
846	"	"	5.7	2.2	1.0	8.3	○		"		3 D	"	"
847	"	"	3.3	4.3	0.7	9.3	○		埴質泥岩		7 I	"	"
848	"	"	5.4	2.9	0.9	13.9	○		凝灰質硬質泥岩		6 G	第68図	"
849	"	"	5.2	4.0	1.3	17.9	○		チャート質粘板岩		6 F	"	"
850	"	"	4.4	4.9	1.2	17.7	○		埴質細粒凝灰岩		6 D	"	"
851	"	"	4.8	3.6	1.0	20.9	○		凝灰質埴質泥岩	一部にタール付着	3 C	"	"
852	"	"	4.4	2.9	0.6	10.4	○		"		4 C	"	"
853	"	"	3.7	4.0	1.0	18.4	○		"		4 D	"	"
854	"	"	4.9	6.6	1.3	27.9	○		埴質泥岩		4 C	"	"
855	"	"	6.1	6.0	0.9	22.2	○		"		8 H	"	"
856	"	"	2.1	3.9	2.1	11.9	○		凝灰質硬質泥岩		4 C	"	"
857	"	"	6.0	3.9	1.4	33.1	○		"		4 D	"	"
858	"	"	9.9	7.2	1.3	54.2	○		埴質泥岩		3 D	"	"
859	"	W-2	2.0	2.0	0.5	1.8	○		輝緑凝灰岩		4 D	第69図	"
860	"	"	1.7	1.9	0.5	1.7	○		凝灰質硬質泥岩		8 H	"	"
861	"	"	2.0	2.5	0.6	3.8	○		"		3 C	"	"
862	"	"	2.0	2.5	0.6	2.8	○		埴質泥岩		A区	"	"
863	"	"	2.3	2.7	0.9	3.0	○		"		7 I	"	"
864	"	"	3.2	3.0	0.6	4.2	○		"		5 G	"	"
865	"	"	3.6	2.5	0.5	3.5	○		"		3 C	"	"
866	"	"	3.1	2.3	0.9	7.5	○		凝灰質硬質泥岩		7 G	"	"
867	"	"	3.3	2.4	0.9	6.5	○		"		4 C	"	34
868	"	"	3.3	2.6	0.5	7.7	○		"		A区	"	"
869	"	"	3.2	3.6	0.6	5.4	○		"		7 D	"	"
870	"	"	4.5	2.6	1.1	7.9	○		"		4 C	"	"
871	"	"	4.2	5.4	1.6	33.4	○		"		A区	"	"
872	"	"	3.8	3.2	0.6	8.8	○		埴質細粒凝灰岩		5 E	"	"
873	"	W-3	2.8	1.5	0.5	1.7	○		凝灰質埴質泥岩		2 B	第70図	"

通物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	国 庫 番号	写真 図版
	名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ	定形	部 欠損					
874	不定形石器	Ⅲ-3	3.5	2.1	0.6	3.3	○		チャート質粘板岩		4 C	第70回	34
875	"	"	3.5	3.5	0.7	7.2	○		凝灰質硬質泥岩		4 C	"	"
876	"	"	3.2	4.0	0.6	9.9	○		凝灰質硬質泥岩		3 C	"	"
877	"	"	2.5	3.3	0.7	4.5	○		"		4 C	"	"
878	"	"	3.6	2.5	0.6	6.4	○		珪質泥岩		5 E	"	"
879	"	"	3.9	4.0	0.7	11.4	○		凝灰質硬質泥岩		4 D	"	"
880	"	"	3.6	5.1	1.4	22.8	○		"		4 B	"	"
881	"	"	4.0	4.5	1.1	21.6	○		珪質泥岩		4 D	"	"
882	"	"	5.3	3.7	1.4	22.4	○		凝灰質硬質泥岩		4 C	"	"
883	"	"	8.1	7.0	1.9	80.0	○		珪質泥岩		C区	"	"
884	"	"	2.7	2.1	0.5	2.9	○		凝灰質硬質泥岩		5 B	"	"
885	"	Ⅲ-4	2.6	1.6	0.7	2.7	○		"		7 E	第71回	
886	"	"	2.9	2.2	0.7	3.6	○		珪質泥岩		7 H	"	"
887	"	"	1.4	2.6	0.4	0.7	○		"		7 I	"	"
888	"	"	1.9	2.6	0.6	3.5	○		"		8 H	"	"
889	"	"	2.1	4.0	1.2	6.5	○		"		6 J	"	"
890	"	"	4.1	2.4	0.8	5.1	○		凝灰質硬質泥岩		5 E	"	"
891	"	"	3.0	3.7	0.7	6.1	○		"		7 F 2.13A	"	"
892	"	"	3.9	3.7	0.7	7.3	○		チャート質粘板岩		6 E	"	"
893	"	"	4.3	2.8	1.0	10.3	○		凝灰質硬質泥岩		不明	"	"
894	"	"	4.5	2.3	1.3	10.1	○		"		A区	"	"
895	"	"	4.0	2.6	1.1	11.1	○		珪質泥岩		3 C	"	"
896	"	"	3.3	2.5	0.8	4.9	○		"		C区	"	"
897	"	"	3.5	3.9	1.5	29.6	○		"		6 F	"	"
898	"	"	2.9	1.0	0.4	1.2	○		珪質細粒凝灰岩		4 D	"	"
899	"	"	3.7	2.4	1.1	6.8	○		凝灰質硬質泥岩		C区	"	"
900	"	"	4.5	3.3	1.0	19.1	○		"		3 C	"	"
901	石鏡		6.0	5.5	1.2	25.8	○		ホルンフェルス		7 E 2.13A	第72回	35
902	"		6.2	9.2	1.5	90.0	○		"		C区	"	"
903	"		4.7	5.3	1.1	24.3	○		"		A区	"	"
904	"		5.7	6.8	3.0	140	○		凝灰質砂岩		14 C	"	"
905	石斧	Ⅰ-1	8.0	7.0	3.4	210	○		硬砂岩	全体がやや風化している	C区	"	"
906	"	"	10.9	8.0	2.8	290	○		凝灰質硬砂岩		7 E	"	"
907	"	"	12.8	10.9	4.4	700	○		"		7 G	"	"
908	"	"	13.6	7.8	2.7	250	○		硬砂岩		4 D	第73回	
909	"	"	14.5	8.7	2.1	220	○		粘板岩		8 H	"	"
910	"	"	16.0	13.2	2.7	370	○		硬砂岩		C区	"	"
911	"	Ⅰ-2	9.4	6.3	3.1	270	○		凝灰質硬砂岩	片割が自然面	7 F	第74回	
912	"	"	9.5	5.8	2.9	140	○		硬砂岩	"	7 G	"	"
913	"	"	13.8	6.2	3.7	370	○		"	"	4 D	"	"
914	"	"	13.6	5.4	2.0	150	○		粘板岩	"	6 G	"	"
915	"	"	8.1	4.4	2.7	100	○		硬砂岩	"	7 F	"	36
916	"	"	5.4	7.1	0.7	28.0	○		"	"	C区	"	"
917	"	"	10.6	4.0	1.4	80.0	○		粘板岩		"	"	"
918	"	"	11.4	6.9	1.4	120	○		"		A区	"	"
919	"	Ⅱ	10.5	4.5	2.6	190	○		硬砂岩	刃こぼれ	8 H	第75回	
920	"	"	10.7	4.9	2.1	260	○		粘板岩		7 I	"	"
921	"	"	8.6	4.6	2.4	130	○		硬砂岩		7 H	"	"

遺物 番号	器 種			計 測 値				欠損状況 完形 欠損	石 材	備 考	出土 地点	図 版 番号	写真 図版
	名 称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ							
922	石斧	II	10.5	5.5	2.3	230	○	硬砂岩	月こぼれ、積層状	C区	第74図	36	
923	"	"	8.0	5.0	2.0	160	○	"		8H	"	"	
924	"	"	11.0	5.7	2.9	290	○	"	月こぼれ	5D	"	"	
925	"	"	9.0	4.7	2.0	130	○	"	幅1mmほどの隙打による曇	C区	"	"	
926	"	"	9.1	4.8	2.7	170	○	"	月こぼれ	7I	"	"	
927	"	"	9.9	3.4	1.5	80.0	○	細粒凝灰岩		8D	第76図	"	
928	"	"	7.0	4.8	2.0	90.0	○	凝灰質硬砂岩	風化が著しい	C区	"	"	
929	"	"	3.6	3.5	1.9	40.9	○	細砂質凝灰岩		3C	"	"	
930	"	"	4.8	4.0	2.2	60.0	○	硬砂岩		6F	"	"	
931	磨・削・直石	I-1	9.9	7.9	3.5	590	○	輝石安山岩		2B	"	"	
932	"	"	8.4	6.9	3.3	290	○	硬砂岩		4C	"	"	
933	"	"	7.6	6.2	4.8	300	○	花崗閃緑岩		C区	"	"	
934	"	I-2	11.2	9.2	4.2	690	○	半花崗岩		6G	第77図	37	
935	"	"	8.6	6.5	3.2	320	○	花崗閃緑岩		8H	"	"	
936	"	I-3	7.4	3.9	7.0	290	○	粘板岩		C区	"	"	
937	"	II-1	11.7	5.0	3.0	250	○	凝灰質硬砂岩		4C	"	"	
938	"	II-2	6.2	5.2	3.5	130	○	砂質凝灰岩		5F	"	"	
939	"	"	13.5	5.2	2.9	230	○	凝灰質硬砂岩		3C	"	"	
940	"	II-3	17.4	4.9	2.4	220	○	"		C区	"	"	
941	"	"	8.7	5.5	2.2	160	○	硬砂岩		7F	"	"	
942	"	"	6.5	4.8	3.3	110	○	凝灰質硬砂岩		3C	第78図	"	
943	"	"	13.7	6.4	4.7	370	○	硬砂岩		C区	"	"	
944	"	"	15.8	5.9	3.6	450	○	"		6G	"	"	
945	"	"	11.6	4.2	1.8	140	○	凝灰質硬砂岩		23E	"	"	
946	"	III-1	14.4	6.3	7.7	750	○	"		6F	第79図	38	
947	"	"	12.9	5.4	7.4	700	○	硬砂岩		6F	"	"	
948	"	"	17.6	5.8	8.1	1130	○	凝灰質硬砂岩		6D	"	"	
949	"	"	19.9	7.2	3.5	880	○	"		3B	"	"	
950	"	"	16.9	5.0	7.3	1000	○	硬砂岩		3B	"	"	
951	"	III-2	9.5	6.2	5.4	560	○	"		7F	第80図	"	
952	"	"	7.2	5.4	3.1	160	○	凝灰質硬砂岩		6E	"	"	
953	"	"	8.9	6.2	4.0	430	○	半花崗岩		C区	"	"	
954	"	"	7.1	6.1	5.9	300	○	安山岩		7I	"	"	
955	"	"	8.1	6.5	5.5	480	○	輝石安山岩		4C	"	"	
956	"	"	10.8	7.5	4.6	600	○	凝灰質硬砂岩	今前二測所、第82の部、第83行へも贈付	C区	第81図	"	
957	"	IV-1	14.4	6.5	4.5	660	○	硬砂岩		3C	"	"	
958	"	V-1	13.2	7.5	1.7	230	○	粘板岩		5D	"	"	
959	"	"	20.1	6.4	2.7	450	○	凝灰質硬砂岩		5F	"	"	
960	"	"	12.1	5.8	1.5	170	○	硬砂岩	石刀の転用(?)	C区	"	28	
961	"	"	16.7	6.0	2.7	340	○	粘板岩		A区	"	"	
962	"	"	11.7	5.4	2.6	220	○	凝灰質硬砂岩		7H	第82図	"	
963	"	"	9.1	5.4	2.6	120	○	硬砂岩		7H	"	"	
964	"	V-2	14.3	8.1	3.5	540	○	"		4E	"	"	
965	"	"	12.8	4.0	2.1	140	○	粘板岩	縦位に半分が欠損する	A区	"	"	
966	"	"	9.9	7.0	5.0	320	○	砂質凝灰岩		7H	"	"	
967	"	"	8.4	6.8	3.8	190	○	"		4D	第83図	"	
968	"	"	17.3	5.5	2.3	350	○	硬砂岩		4D	"	"	
969	"	"	16.0	5.0	2.9	300	○	凝灰質硬砂岩		3C	"	"	

遺物 番号	形 種			計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	図 版 番 号	写真 図版
	名 称	分 類		長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部 欠損					
970	磨・凹・嵌石	Ⅴ-2		14.3	7.2	3.0	250	○		硬砂岩		A区	第82図	39
971	"	"		9.2	8.1	3.2	240	○		"		7 I	"	"
972	"	"		8.5	6.5	3.2	210	○		粘板岩		7 F	"	"
973	"	Ⅳ		13.2	6.9	4.6	470	○		硬砂岩		5 D	第84図	40
974	"	"		7.6	7.4	4.1	250	○		凝灰質硬砂岩		9 G	"	"
975	"	"		9.7	5.8	2.9	140	○		粘板岩		7 G	"	"
976	"	"		12.6	6.6	2.4	230	○		"		C区	"	"
977	"	Ⅵ-1		7.9	7.9	5.6	690	○		凝灰岩	凝石	8 H	"	"
978	"	"		9.0	5.7	1.8	140	○		粘板岩	"	C区	"	"
979	"	Ⅵ-2		7.1	5.5	10.5	480	○		硬砂岩	卵石	7 I	第85図	"
980	"	"		13.2	6.6	3.3	380	○		粘板岩	"	C区	"	"
981	石皿			19.7	14.4	4.6	1530	○		硬砂岩		8 H	"	"
982	"			24.1	9.5	3.1	1770	○		凝灰質硬砂岩		6 D	"	"
983	"			5.3	4.3	1.0	20.0	○		硬砂岩		7 F	"	"
984	嵌石	I		24.4	8.2	5.0	1560	○		凝灰質硬砂岩		7 I	"	"
985	"	"		19.8	14.5	2.4	800	○		"		8 H	第86図	41
986	"	"		27.6	12.8	3.0	1330	○		粘板岩		4 D	"	"
987	"	"		30.8	9.5	5.6	1200	○		砂岩		5 D	"	"
988	"	Ⅱ		11.9	3.6	5.0	350	○		凝灰質硬砂岩		7 I	"	"
989	"	Ⅲ		9.2	7.9	1.7	130	○		砂岩	有溝嵌石	C区	第87図	"
990	"	"		9.0	5.7	3.4	170	○		粘板岩	一部に押痕が見られる	4 C	"	"
991	四角状打製石部			10.1	7.7	1.5	180	○		粘板岩	片面は自然面	C区	"	"
992	"	"		13.0	7.6	1.9	210	○		"	"	9 G	"	"
993	"	"		7.6	7.1	1.8	96.0	○		"	"	C区	"	"
994	"	"		14.3	10.7	4.4	520	○		凝灰質硬砂岩	"	4 C	"	"
995	石剣・石挿箱	I		29.1	2.4	2.1	200	○		粘板岩	研摩痕が明瞭	7 G	第88図	42
996	"	"		10.9	2.1	0.9	32.1	○		"	研摩痕が明瞭。先端部	7 F	"	"
997	"	"		8.1	2.6	0.9	28.5	○		"	研摩痕が明瞭	8 H	"	"
998	"	"		11.5	3.0	2.3	130	○		"	"	C区	"	"
999	"	"		14.2	2.6	1.2	69.9	○		"	"	4 D	"	"
1000	"	"		11.2	3.0	2.1	110	○		"	研摩痕が明瞭。基部	C区	"	"
1001	"	"		23.5	2.6	1.8	130	○		"	"	3 D	"	"
1002	"	Ⅱ		16.2	3.5	2.0	190	○		"	"	8 H	"	"
1003	"	"		17.3	3.2	2.1	240	○		粘板岩 ホルンフェルス	"	7 G	"	"
1004	"	Ⅲ		11.2	8.7	4.9	690	○		アルコース砂岩	幅1.5cmの彫り込み部	2 B	"	"
1005	"	"		15.7	5.7	2.8	360	○		粘板岩 ホルンフェルス	"	6 E	"	"
1006	"	"		10.4	2.3	1.3	37.6	○		粘板岩	研摩痕が明瞭	7 H	"	"
1007	石製品	I-1		8.9	4.8	0.6	35.5	○		"	線刻	3 D	第89図	43
1008	"	I-2		7.8	4.0	0.6	19.4	○		"	"	4 B	"	"
1009	"	"		6.8	4.1	0.6	17.0	○		"	"	6 F	"	"
1010	"	"		7.7	3.6	0.6	20.3	○		"	"	"	"	"
1011	"	"		7.9	3.9	0.6	17.4	○		"	"	5 D	"	"
1012	"	"		7.0	4.5	0.9	27.9	○		"	"	5 G	"	"
1013	"	"		5.4	2.5	0.6	6.5	○		凝灰質砂岩	"	5 D	第90図	"
1014	"	"		3.8	2.5	0.3	3.1	○		粘板岩	"	A区	"	"
1015	"	Ⅱ		3.5	5.0	5.3	11.0	○		凝灰質砂岩	首領	8 H	"	"
1016	"	Ⅲ		2.2	1.8	0.5	0.9	○		チヤート	"	C区	"	"
1017	"	"		6.8	2.2	1.0	9.0	○		"	"	6 F	"	"

産物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	出土 地点	器 種 番号	写真 図版
	名 称	分類	長さ	幅	厚さ	重さ	完形	欠損					
1018	石製品	皿	3.0	3.6	0.5	1.4	○		チャート		7 F	第20図	43
1019	"	W	4.5	2.1	0.7	11.6	○		"	両面破損	3 B	"	"
1020	"	"	3.5	3.2	0.4	4.9	○		埴質細粒凝灰岩	2孔	4 D	"	"
1021	"	V	4.4	4.8	1.0	29.8	○		"	裏一線刻、裏一銅板	5 D	"	"
1022	"	"	8.0	4.3	1.7	60.0	○		粘板岩	泥状状態に3本の浅溝	6 F	"	"
1023	"	W-1	20.8	4.8	3.4	420	○		アルゴース砂岩	肩帯状が明確	下層二 1土坑	第91図	"
1024	"	W-2	7.9	5.6	3.8	40.0	○		浮石質凝灰岩		7 I	"	"
1025	"	"	7.4	5.3	1.5	10.0	○		"		6 F	"	"
1026	"	W-3	3.4	3.3	1.3	10.0	○		砂質凝灰岩		8 E	"	44
1027	"	"	3.5	3.4	1.0	10.0	○		"		3 B	"	"
1028	"	"	3.8	3.9	0.9	20.0	○		凝灰質硬砂岩		22 E	"	"
1029	"	"	4.2	4.0	0.7	20.0	○		粘板岩		6 D	"	"
1030	"	"	4.0	3.6	0.5	10.0	○		"		C区	"	"
1031	"	"	4.7	4.5	0.5	20.0	○		"		22 F	"	"
1032	"	"	4.5	4.5	0.5	10.0	○		"		20 F	第92図	"
1033	"	"	4.2	4.3	0.8	30.0	○		"		4 D	"	"
1034	"	"	4.8	4.6	0.6	20.0	○		"		A区	"	"
1035	"	"	5.7	5.1	0.8	30.0	○		"		6 G	"	"
1036	"	"	4.6	4.6	0.7	20.0	○		千枚岩		4 C	"	"
1037	"	"	5.2	5.0	0.9	30.0	○		粘板岩		6 F	"	"
1038	"	"	5.9	5.7	10.0	50.0	○		"		7 I	"	"
1039	"	"	5.7	5.5	1.4	50.0	○		"		14 F	"	"
1040	"	"	6.2	5.7	2.0	70.0	○		砂質凝灰岩		1土坑	第93図	"
1041	"	"	6.5	6.7	0.9	50.0	○		凝灰質硬砂岩		5 E	"	"
1042	"	"	8.1	8.0	1.5	130	○		粘板岩		3 C	"	"
1043	"	"	8.9	9.0	1.9	220	○		硬質泥質凝灰岩		A区	"	"
1044	"	W-4	6.0	4.5	0.6	30.0	○		粘板岩		7 H	第94図	45
1045	"	"	6.0	4.1	0.8	30.0	○		"		A区	"	"
1046	"	"	8.4	4.3	0.7	40.0	○		"		7 E	"	"
1047	"	"	7.1	5.0	0.5	20.0	○		"		4 C	"	"
1048	"	"	9.0	5.8	1.2	80.0	○		"		6 F	"	"
1049	"	"	9.7	5.2	0.7	70.0	○		"		A区	"	"
1050	"	"	7.5	4.9	0.9	40.0	○		凝灰質硬砂岩		3 B	"	"
1051	"	"	9.4	5.8	0.9	80.0	○		粘板岩		C区	"	"
1052	"	"	8.7	6.5	0.6	60.0	○		"		3 D	"	"
1053	"	W-5	9.2	2.8	0.6	20.0	○		"		5 D	"	"
1054	"	"	6.3	3.7	0.5	10.0	○		"	一部に肩帯状が明確	8 D	"	"
1055	"	"	5.8	4.4	0.4	20.0	○		"	片面は自然面	3 C	"	"
1056	"	"	6.0	3.7	0.5	10.0	○		"		C区	"	"
1057	数層面を有する 石器	I-3	14.1	14.6	7.2	2000	○		花崗閃緑岩	上面は扁平に整形	8 D	第95図	46
1058	"	皿	7.7	6.9	2.2	130	○		硬砂岩	ストーン・リタチャーヌは石灰質?	7 I	"	"
1059	"	W	5.5	4.1	2.3	80.0	○		アルゴース砂岩	両面は光沢を帯びる	C区	"	"
1060	"	"	7.5	5.6	3.2	150	○		硬砂岩	擦切り状の溝	3 D	"	"
1061	"	"	4.4	2.5	0.7	10.0	○		凝灰質流紋岩	"	6 G	"	"
1062	台石	W	36.6	24.1	5.1	6000	○		硬質泥質凝灰岩		4 C	"	"

(3) 出土状況について

寺前遺跡の明確な範囲は不詳であるが、今回調査したところを東端とし西に大規模に広がっていることは間違いない。したがって、今回調査した尾根の部分の寺前Ⅰ遺跡、尾根の脚部を寺前Ⅱ遺跡と呼称するのは遺跡本来から言えば便宜的なものと思われる。したがって、以下寺前Ⅰ遺跡と述べる場合は、すべて今回調査した範囲に限定した用法であり、遺跡全体を問題にする場合は寺前遺跡と呼ぶことにする。

寺前Ⅰ遺跡の86%弱は金を採掘したと思われる大規模な採掘跡となっている。そこは岩盤に達するまで掘り返されているため、縄文時代からすくなくとも古代までの遺構や遺物は遺存していない。縄文土器、土製品、石器、石製品等が出土したのは、縄文時代の地形が残る13%強の調査区東端の約270㎡余から出土したものである。同地点は山地縁辺で東側に向かって急角度で落ち込む地形となっている。現状は、その大部分は上に盛土をして平地地を作り出し畑地として利用し、残りの一部は杉を植林していた。同所は一時桑畑として利用するため植林をしたり、近年にはその一部は農道にしたりしていたが、盛土が斜面上方で10cm程度しかなかったものの、幸いにも斜面下方では1mを越える程の厚さであったためその地点だけは旧地形が良好に遺存していたものである。盛土には殆ど遺物は含まれてはいないが、表土には若干の遺物が含まれている。

以上のような状況で前述のグリッドを設定したのであるが、グリッドは調査区全体を網羅することに主眼をおいてなされたため地形を無視する形となった。すなわち斜面の傾斜方向がグリッドの方向と一致せず、部分的には傾斜方向はグリッドに対して縦になる所と斜め、あるいは横になる所もでてきた。

調査の進行は雑物を撤去しながら3m×3mの大ききでグリッド杭を設置して行った。しかし、雑物撤去が容易でなかったためグリッド杭を設置する前に幾つかの遺物を採取することになった。したがってこの間に採集された遺物には現地形にもとづいてA～C区を定めて取り上げた。上段の平坦地のうち農道（寺前Ⅰ遺跡のほぼ中央に位置し南北に走る道路）より東側をA区、西側をB区、下段の平坦地（農道より東側）はC区とした。これをグリッド名に置き換えると次のようになる。

A区…2B～3B, 3C～7C, 4D～9D, 6E～18E, 8F～18F, 13G～18G

B区…19E～23E, 19F～26F, 19G～25G, 19H～21H

C区…8G～9G, 9H～13H, 9I～13I, 9J～13J, 10K～13K

出土地不明としたものはグリッドを組む以前に取り上げたものと、盛り土の中から発見したものである。

次に、縄文時代からの土層がそのまま残っている所と採掘に伴って土が動いている所の境を

グリッド名で示すと14E, 13E, 12E, 11E, 10F, 9F, 9 G, 9 H, 9 I, 8 Jを結ぶ線であり、これらのグリッドが両者の入会いになっている。ただし、14E～9 Fの間は、上位は削刺され下位は採掘によって消失しているが、その間は褐色土は遺存している。

遺物の取り上げはグリッド毎にまとめ、グリッド名、日にち、層位を記入して行ったが、グリッド間に水糸を張って慎重に掘り進んだわけではないので境目から出土したものの中には、厳密に言えば隣のグリッドに入ったのも多少あることは認めざるを得ない。したがって、ここで取り扱う数値の性質は、グリッド毎の絶対的な数値と捉えるよりも、隣接するグリッドを考慮に入れた相対的なものと理解して頂きたい。以上のことを念頭において以下を見ていくことにする。

図表1は寺前I遺跡から出土した土器の総量を重さで表したものである。出土量を把握するのにいくつかの方法があるが、本遺跡のように完形品がなく殆どが小破片の状態出土したものの総量を把握するにはこの方法が最も妥当な方法と考えた。

次に、遺物を出土したグリッドは図表1にあげたものより多いが、さきに述べた境界線より西側のグリッドから出土したのはすべて表土層からの出土でありその量も極めて僅かなためここでは割愛した。また、9 D, 9 Eは遺物包含層が流失(削刺されたのかもしい)し、8 G, 9 Hは後世の擾乱(林道建設による削刺等)を受けて遺物包含層は殆ど消失していたため統計処理できるほどの土器は出土しなかった。したがって、これらもグラフからは割愛した。

グラフには大きな山が3箇所認められる。すなわち、3 C, 4 C, と4 D, 5 Dそれぞれに7 H, 8 Hである。ところがこれをグリッド配置図に落としてみると3 C, 4 Cと4 D, 5 Dは互いに隣接し合う一つのエリアを構成している。したがってここをAブロックと呼ぶことにする。次に、7 Hや8 Hについて多いのは7 Gと7 Iであるが、これに既に包含層自体が消失していた9 Hを想定して考えるならこれも隣接し合う一つのエリアである。これをBブロックと呼ぶことにする。AブロックとBブロックは互いに一定の間隔をもって並存することから遺物の集積地点が2箇所あると指摘できる。

次に、出土した土器を時期別に分け同様の方法で資料化したのが図表2～4である。早期と中期は出土量が少ないため割愛した。ここで注意しておきたいのは各グラフに使用されている数値はそのグラフ内での相対的な数値であり、決してそのグリッドから出土した当該時期の全ての土器量を表す絶対値ではないのである。なぜなら縄文のみの土器片の扱い方が異なるためである。前期の土器にはそれらの一部(胎土に植物性繊維が認められるもの)が含まれているのに対し、後・晩期のものには縄文のみの土器片は含まれていない。すなわち、資料化された後・晩期の土器は文様を持つ所謂精製土器の破片が殆どであり、粗製土器は除かれているためである。したがって、各グラフを相互に比較するとき、その示す数値を絶対量とみなし

での単純比較は無意味である。

図表2は前期の土器の出土状況である。このグラフから前期の土器がAブロックに偏在している様子が見て取れるが、それを数字にしてみると次のようになり一層明瞭になる。すなわちここで取り上げたグリッドから出土した前期の土器総量に対するA・B各ブロック割合(占有率)を出してみると、Aブロックに占める割合は49%、Bブロックに占める割合は僅かに3%である。

図表3の後期の土器の分布状況は前期のそれとかなりの部分でオーバー・ラップするが、Bブロックからも相当数出土している。同様にして占有率を出してみるとAブロックでは51%で半数を越える。しかし、Bブロックからも21%が出土しており、前期ほど極端に偏在してはいない。すなわち、後期の土器は広く分布しつつも、特にAブロックに集中していると言える。

図表4の晩期の土器の分布状況はちょうど後期のそれと逆に分布となっている。すなわちBブロックは45%を、Aブロックは20%を占めている。しかし、後期の土器は出土量が0というグリッドは3箇所だけであるのに、晩期のそれは7箇所にのぼる。もとより出土量0とは全く出土していないことを意味するものではないことは前に指摘しておいたとおりであるが、同時にまた相対的に出土量が少ないのも事実である。すなわち、晩期の土器は数字以上にAブロックの周辺には少なく、Bブロックの周辺に偏在していたのである。以上のような結果から次のようにまとめることができる。

- ①前期の土器はAブロックを中心に分布すること。
- ②後期の土器は前期の土器と重なり合うように分布しつつ、より広く分布していること。
- ③晩期の土器はBブロックを中心に分布すること。

以上のように、土器の分布状況には時期的な特色があることが判明した。このことは土器のみ見られる現象とは考えられないことから、石器の分布も同様な傾向を持つであろうと思われる。そこで次に石器についても同様の操作を試みた。ただし、この場合は母集団は石器全体ではなく器種となるため少なくとも30個以上の個数を有する器種が対象となる。したがって、ここでは石鉄第I群(73点)、石鉄第II群(82点)、尖頭器第II群(31点)、石錐(37点)、石匙(59点)、不定形石器第III群(95点)、不定形石器第VI群(59点)、磨石・凹み石・タタキ石類(35点)に限定されることになる。

また、ある器種の石器がある時期に限定されて使用されたのであればその器種を問題にすればよいが、時期によって形態を変えて存続したのであればその形態毎(器種内の群別ないし類別)の把握こそが問題とならねばならない。したがって、本来、形態毎の統計資料こそが欲しいのであるが、数量的制限のため石鉄と不定形石器のみが群別の資料となり他は器種毎となってしまった。したがって、そこで問われている意味合いが両者の間では異なっていることに留

意して置かねばならない。

はじめに石鏃から見て行くことにする。まず、石鏃全体の分布は土器の分布と比べてどのようになっているかを見ることにする。図表5が石鏃全体の分布を表しているグラフである。図表1と比べてAブロックに集中していることが分かる。これを先に見たブロックの占有率をとって比較すると次のような結果となった。Aブロックの占有率41%は土器の総量の占有率より高いが、前期ほどの集中も見せてはいない。次に、石鏃第I群と石鏃第II群を同様にして比較してみた。結果は第I群と第II群では顕著な差はみられない。つまり、石鏃は縄文時代の全期を通して使用されたものであり、形態による差も時期的なものではない、と言える。

図表8が尖頭器の分布状況である。このグラフから尖頭器は明らかにAブロック及びその周辺に偏在していることが分かる。したがって前期か後期が考えられるが、その偏在ぶりからすれば前期と考えるのが妥当であろう。

図表9が石鏟の分布状況である。ほぼ全域から偏りなく出土している。したがって、石鏃と同様全期を通して使用されていた器種であろう。

図表10は全部の石鏃の分布状況であり、図表11、12は石匙の第I群と第II群の分布状況である。もっとも第II群は数量が不足するため参考程度のものである。これら3グラフとも殆ど地域的な偏りがなく石鏃と同じである。

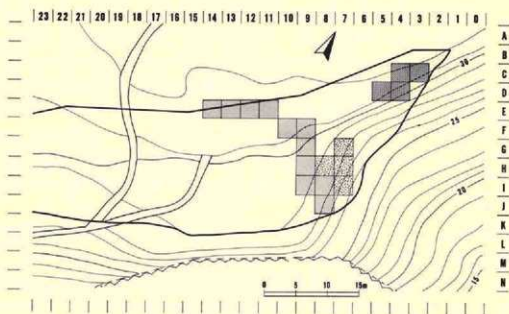
図表13は不定形石器第III群の分布状況である。図表1とほぼ同様な分布状況を示す。ちなみにA・Bブロックの占有率を見ると土器の総量と一致する。

図表14は不定形石器第VI群の分布状況である。不定形石器第III群と同じく一様に分布する。

図表15は磨石・凹み石・タタキ石類の分布状況であるが、これらを一括した場合は一応一様に分布するとは言える。しかしこれらの中には数こそ少ないもののその有り様が大きく異なるものもあって一つの器種として取り扱えないものであるから、少なくとも群毎の資料で無ければ意味がない。しかし、形態等は時期的な変遷があるかもしれないが、縄文時代全期を通して「擦る」、「たたく」と言う道具にこのような石器が使用されていた、と言うことができるであろう。

以上の結果から次のようにまとめることができる。

- ①寺前I遺跡から出土した土器は前期と晩期は明瞭に異なる位置を占める。
- ②後期の土器は主要部分は前期の土器と重複するが、包含層全域に広がっている。
- ③石器も土器と同様の占地となるとすれば、Aブロックから出土した石器は前期かまたは後期の可能性が高い。Bブロックから出土したのは晩期の可能性が高い。
- ④殆どの石器は時期的な偏りがなく縄文時代の全期を通して使用されていたと思われるが、尖頭器の一部は前期に限られる可能性が高い。

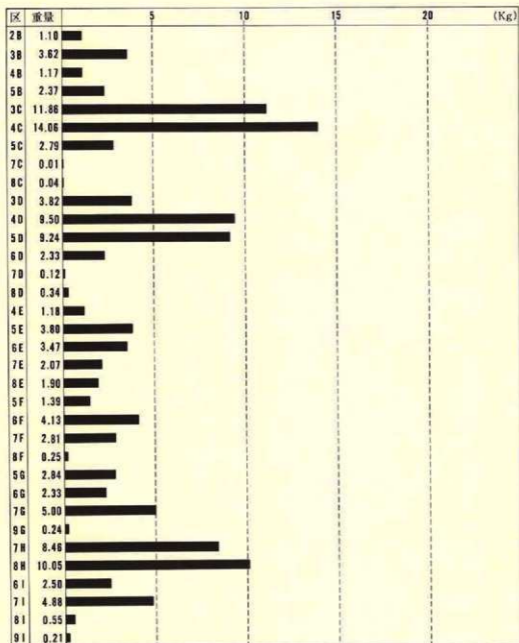


第96図 A・Bブロック位置図

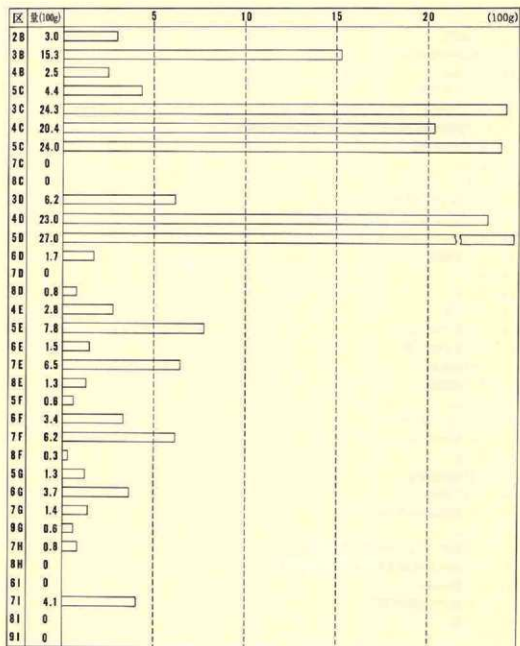
第3表 ブロック別の占有率

	土 器				石 器			不定形石器	
	総量	前期	後期	晩期	全体	I 群	II 群	III 群	IV 群
Aブロック	33%	49%	51%	20%	41%	34%	43%	37%	44%
Bブロック	24%	3%	21%	45%	12%	11%	10%	24%	19%

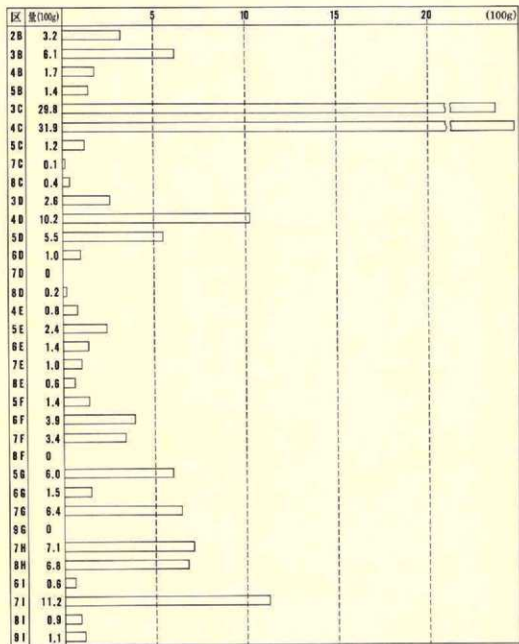
図表1 土器・土製品の総量



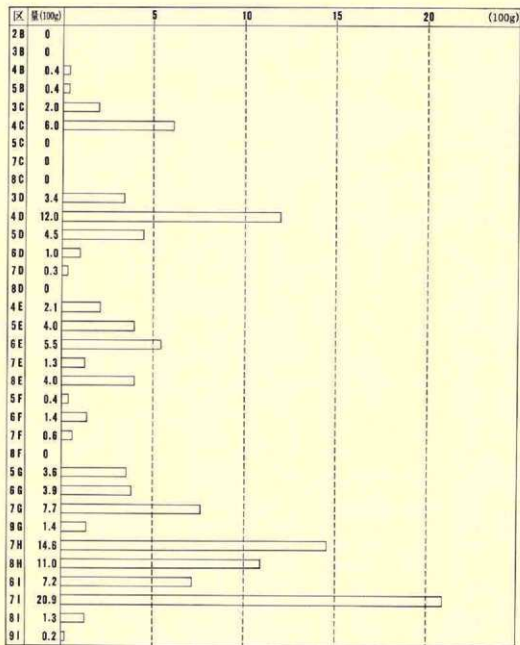
図表2 前期の土器の分布状況



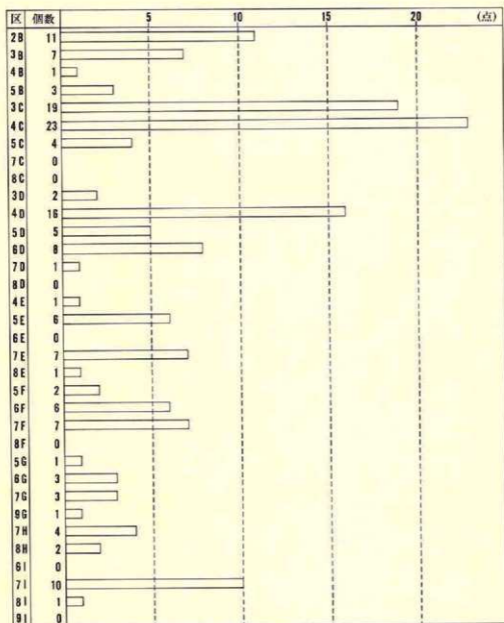
図表 3 後期の土器の分布状況



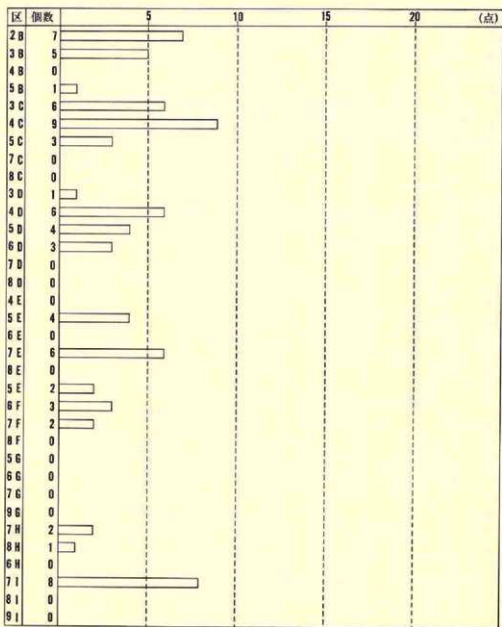
図表4 晩期の土器の分布状況



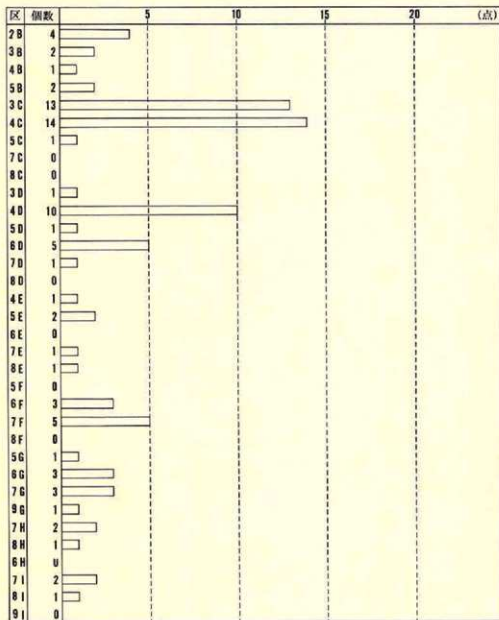
図表 5 石炭(全体)の分布状況



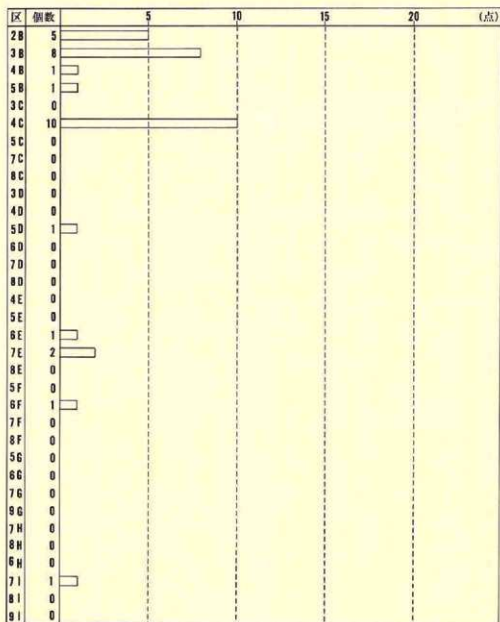
図表6 石鑑(I群)の分布状況



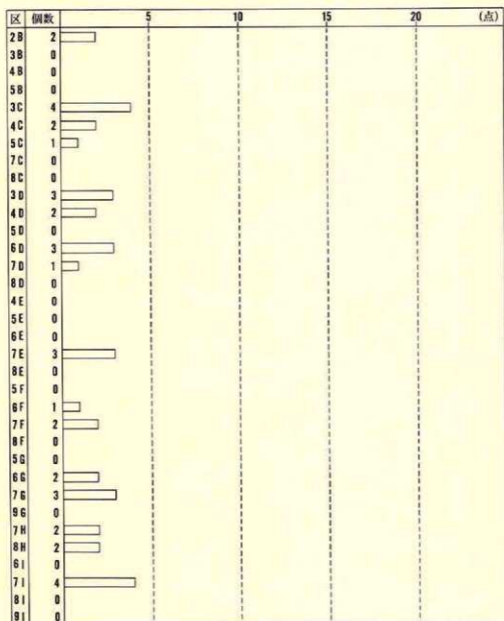
図表 7 石鐵(II群)の分布状況



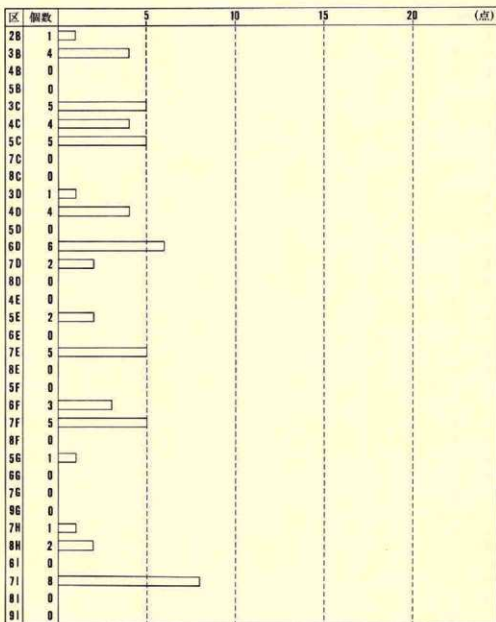
図表 8 尖頭器の分布状況



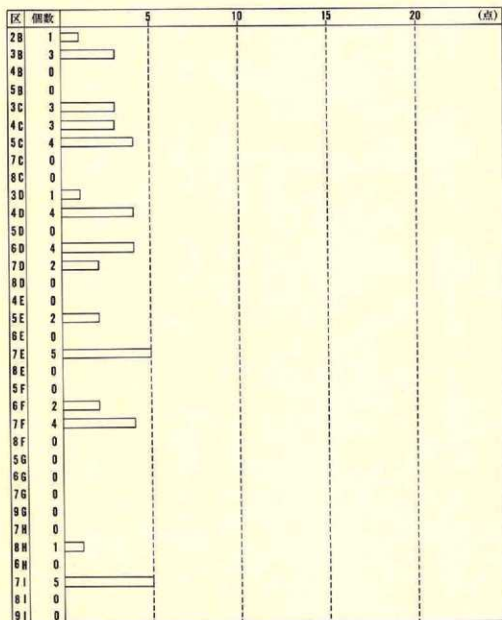
図表9 石錐の分布状況



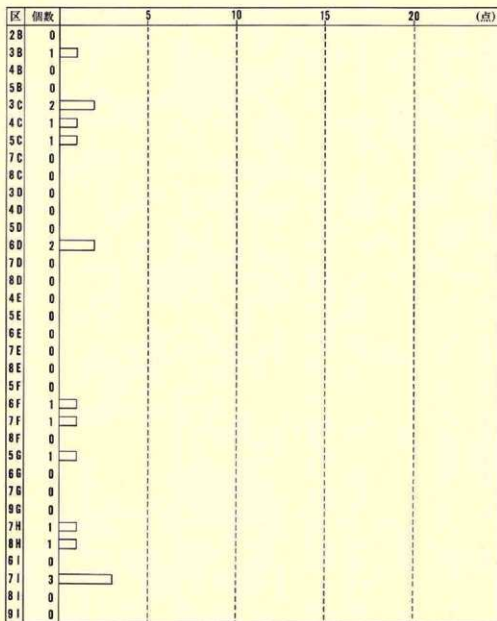
図表10 石匙(全体)の分布状況



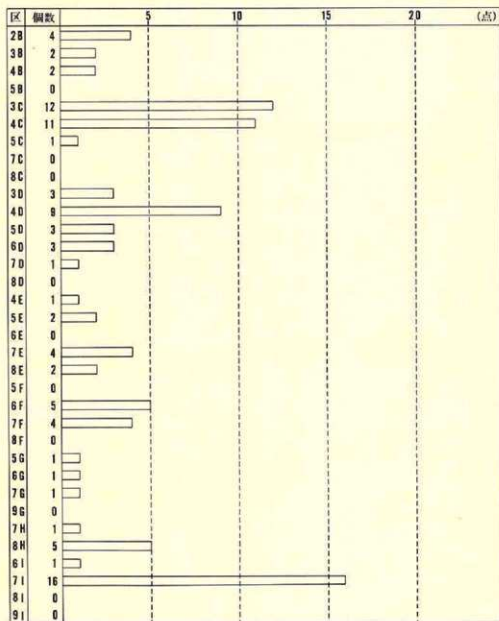
図表11 石匙(Ⅰ群)の分布状況



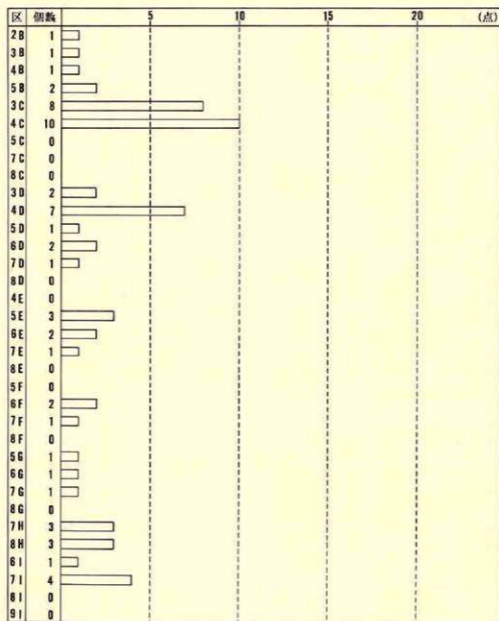
図表12 石匙(II群)の分布状況



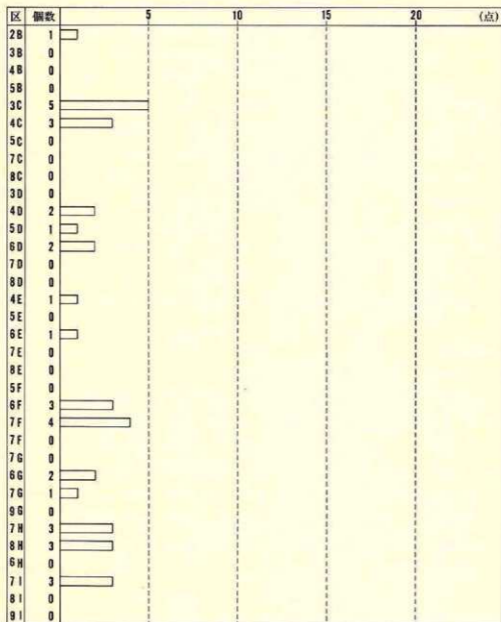
図表13 不定形石器(Ⅲ群)の分布状況



図表14. 不定形石器(VI群)の分布状況



図表15 磨・凹・タタキ石類の分布状況



〔3〕 まとめ

○遺構について

寺前Ⅰ遺跡から検出した遺構は土坑7基、柱穴状土坑18基、築土遺構2基である。

土坑7基のうち5E-1土坑、7F-1土坑、7F-2土坑の3基は深さ2メートルもあり、大型のものである。それらの占地を遺物との関連で捉えたと前期と後期が遺物が集中するAブロックに位置するが、いずれの土坑にも確実に共伴する遺物はなく、時期は不詳である。しかし、特に5E-1土坑は周囲から相当量の前期と後期の遺物が出土していたにもかかわらずそれらの遺物は埋土の上位に僅かに見られたのみであった。このことは逆にそれらの遺物が廃棄された後に構築されたことを示唆するものと言える。したがって、晩期の可能性が強い。

8H-1土坑は大半を林道建設に伴って削り取られ原形をとどめていないため詳細は不明であるが、少なくとも前述の大型の土坑とは規模や形態は異なっている。9E-1土坑は小型で、一方の壁が傾斜していることから、一定の構造や機能を必要とされる穴として掘られたものではなく、何かを埋めるために掘りくぼめられたもののように思われる。

8D-1土坑と8D-2土坑は柱穴の掘り方を思わせる程度の小規模のものである。柱当りも、またそれに類する何等の痕跡もなかったため柱穴とはみられなかったものである。

以上のように規模と形態からは3分類できるが、いずれもその用途は不明である。

○遺物について

出土した遺物は土器、土製品、石器、石製品である。

土器は早期から晩期に至るまで出土しているが、特に前期、後期、晩期が多い。

前期は1類と3類が主体を占める。前期の土器は胎土の作りから見れば植物性繊維を含むものと含まないものという分類の他に、砂が多くざらざらして焼成も悪く脆い土器と緻密で均一な胎土で焼成も良好なものに大きく別れる。この傾向は後葉において特に顕著である。

後期は1類が少なく、2～3類はほぼ同程度の出土量である。中期末葉から後期初頭にかけての土器は僅かな出土であり主体をなすものではないが、門前式土器の標識遺跡となった門前貝塚が本遺跡の東南約10kmに位置するにもかかわらず、門前式土器が一点も出土していない。

晩期は1～2類が主体であり3類は殆ど出土していない。しかし、晩期と思われる粗製土器も含めるとその出土量は最も多い。器種もほとんどのものが出土している。

時期別の土器の出土状況はきわめて自然な様相を呈している。すなわち、人間生活の営みは異常な要因による急激な変化に襲われない限り徐々に変貌しつつ営々として継続して行くのが自然な姿である。これを文化の視点からみれば、一つの文化が発生し興隆期を経て花開く盛期を迎え、やがて衰退し次なる文化へと変容して行く。このような流れの中で寺前Ⅰ遺跡を考

えるとき、早期の土器が何点か出土しているから早期の時代にここに人々が生活していたと捉えるより、早期末から前期初頭にかけての時代、換言すれば早期の技法がまだ一部に残存していた時分から大木3式が次代の文化として登場してくる時代に生活が営まれていたと思われる。これを盛行期の土器型式で言えば大木1～2式の時代と言えるであろう。このように、一部に見られる前代のものや次代のはしりとなるものを除くと、寺前I遺跡は大木1～2式の時代、大木5～6式の時代（以上前期）、宮戸II～III式（以上後期）、大洞B～C2式（以上晩期）の時代に生活が営まれていたと言える。なかんずく後期中葉から晩期中葉までは切れ目なく生活が営まれたと考えられる。

石器については石鏃、尖頭器、不定形石器、石製品、フレイクについて簡単にふれておく。

石鏃は所謂長脚鏃、局部磨製石鏃等の特殊なものは出土しなかった。出土したものはオーソドックスなものではあるが、全てが同様の使われ方をしたかどうかは疑問である。その長さを比較すると最小1.5cm、最大4.8cmでその差は3.3cmである。同様に重さで比較すると最小0.2g、最大7.3g、その差は7.1gである。1.5cmの石鏃も4.8cmの石鏃も同じ太さの矢柄に装着し同じ弓を用いたとは考えにくい。同様に7.3gの石鏃も実用性があったか疑問である。ちなみに長さにおいては1.8cm～3.9cmに集中し、2.4cmが最も多い。重さでは0.5g～1.7gに集中し、0.7gが最も多い。この値は鈴木（1981）の指摘した「長さ10～30ミリメートル、重量0.5～2.0グラムの^(註1)もの」の範囲におさまる。

尖頭器は第I群とした所謂石槍タイプのもものと第II群とした石鏃タイプのもものが出土した。前者はすべて破損品であるのに対して、後者は殆ど破損品はない。第II群については石鏃とはみなされない理由は小結の中で、またそれは前期に限定されることは(3)出土状況についての項で触れたとおりである。用途としては槍に準ずるものが想定されるのが想像の域をでない。

不定形石器は小結でも触れたとおり、単一の概念を持つ器種に冠した用語ではない。各類がむしろ独立した器種としてもよいほどである。しかし、それらは「剥片の縁辺に二次調整を施し刃部を形成し、もっぱら切る・削るを目的に使用されたと思われるもの」であることには違いない。とすればその対象物や使用法によって形態や刃部の付け方に差が生じたものであろう。しかし、形態はまさに不定であるから、観察の主体は刃部の作り方とならざるを得ない。以上の観点から分類を試みたものである。したがって「所謂○○○」とは言っても、従来の定義がそのまま適用できないものも含んでいる。たとえば、加藤、鶴丸によって規定されたサイド・スクレイパーとリタッチド・フレイクの区分の指標とされた「縁辺の長さの二分の一以上^(註2)」と言う点よりも、より刃部形成のために施された調整痕の相違を重点に置くことになった。

石製品の中で同様のものが複数出土したものは石剣、「寺前型石製品」、軽石製石製品、円盤状石製品、隅丸長方形石製品、短冊状石製品である。これらはいずれも形状や大きさはもちろ

んその製作技法まで強い規格性を有しており、時期が限定できるものも含まれているかもしれない。石剣は7点のうち5点がBブロックないしその周辺から出土しており晩期に作製された可能性が高い。「寺前型石製品」は前述したとおり後期のものかもしれない。軽石製石製品は僅か2点であることと出土地点が特定のブロックに偏していないことなどから、出土地点からの類推はできない。円盤状石製品は全城から出土していることやこれまでの報告例も縄文時代の全期にわたってその出土例が報告されていること等から、本遺跡から出土した当該遺物も時期的には全期にわたっているものと考えられる。隅丸長方形石製品と短冊状石製品は円盤状石製品と同様出土地点が広範囲ではあるが、円盤状石製品ほど縄文時代に普遍的にみられるものではないことから、後期の遺物は広範囲に分布するという本遺跡の特徴に従い共に後期のものではないかと考えておきたい。

石器の出土状況をみれば多量のフレーク・チップ類の出土は明らかにここで石を加工していたことの証であり、出土した器種も狩猟・生産にかかわる道具類から石器製作用の道具類、あるいはアクセサリーに至るまで多様である。これらの遺物を丹念にみて行くと寺前Ⅰ遺跡からは住居跡が発見されなかったものの、人々がこの付近に長い間居住していたことは間違いない。

居住空間は既に採掘によって消滅してしまったのか、あるいは寺前Ⅰ遺跡の北側の斜面上方にあるのかは不明である。しかし、ここに堆積した包含層が斜面上方から自然の営力で流されて来たものであれば前期と後期の居住空間はなお遺存している可能性が強く、晩期のそれは既に採掘によって消滅してしまった可能性が高い。

人間が長期にわたって生活し、その産物として手を加えた痕跡のある遺物は多岐にわたり本報告書でとった分類項目では全てを網羅することはできなかった。これは単に項目設定に関する問題ではなく、遺物の認定に関する問題と同時に人間生活の有り様に関する洞察を含んでいる。すなわち、何に使用されたものであるのか、どのようにして製作されたものであるのか理解を越えるものが幾つか見られたのである。たとえば、1006は形状から石棒には分類したものの一般的にみられる石棒とは異なっているのは事実である。あるいは1060、1061等はまさに用途不明である。また、風化が著しい花崗岩の丸石も同様である。そして、報告書には取り上げなかったものの中には直径10cm程の川原石を半載されたものがある。石材は節理が明瞭な堆積岩であるにもかかわらず、節理に直行する方向にあたかも鋭利な刃物で切ったようになっている。切口面には研磨痕はもちろん僅かな擦痕も見られない。このような面を持つ石は複数出土しており、人工遺物か自然遺物かを含めて判断を保留したものである。

〈注〉

1. 文献15 P. 38
2. 文献14 P. 76

2 古代以降

〔1〕遺構

寺前1遺跡の87%弱は採掘跡である。現地表面を覆う表土は腐葉土を入れても10cm足らずであり、その下から岩盤までは大小の川原石や細かなスレートが混入する褐色土や赤褐色の粘土質シルト、黒褐色土等が複雑に堆積している。所謂採掘に伴うズリである。岩盤から上はすべて自然堆積の土がないことから、どのような採掘方法を探り、何度掘り返したのか等まったく不明ではあるが、少なくとも一度は掘り返されたものである。

表土を剥ぐと坑道掘りの出入口が3箇所発見された。3基の坑道はすべて同じである。ズリを更に掘り込み、杭木は使用されず素掘りしたものである。断面形はアーチ型、幅1.5m、高さ2m、奥行きは不明である。3基とも概ね北に向かって掘られているが、掘り込む角度と方角は僅かずつ異なっている。出土遺物は全くなく、採掘年代は不明である。

本遺跡が所在する気仙地方は古くから金を産出し、戦国時代末期には最盛期であったと伝えられている。往時のものとは断定できないものの、沢山の廃坑が本遺跡の西側の山々にも広く見られ、更に矢作川の川沿いに幾つもの露天掘りした跡がみられると言う。しかし、時代や採掘者、産金の状況などを記録した文書等は残っておらず、発掘によっても明確に時期決定できる資料は発見されていない。

〔2〕遺物

古代以降の遺物は第96図に掲載したものである。1063は須恵器の甕である。表には叩き目文が見られるが、裏は無文で当て具痕等は見られない。平安時代のものである。これは22Fグリッドの表土内から3点の小片となって一括出土したものである。図化したもの以外は全く何も出土していない。

1064～1068は「寛永通寶」、1069は「一銭」である。これは14Dグリッド（調査区外）にお宮が立っていたのであるが、そこにあげられたお寶銭であろう。すべてお宮のまわりから表採されたかまたは表土内から出土したものである。1064～1066は所謂新寛永で裏は無文である。1067と1068は腐食が著しく不鮮明であるが1067の裏は波文である。鉄銭かもしれない。

〔3〕まとめ

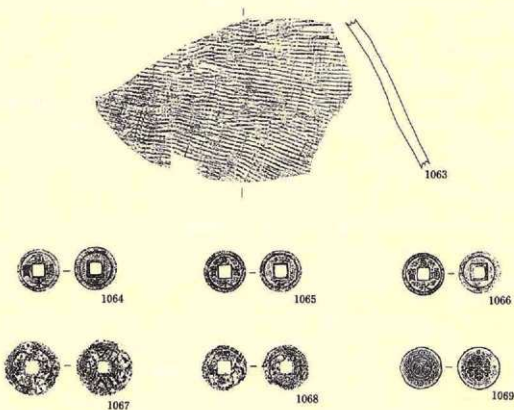
本遺跡は南面する傾斜地であり、下の平地との比高は約20mである。鉱脈さえ見つかるなら採掘場所としては恵まれた条件下にあったと思われる。産金に成功したかどうかは不明であるが、金が入っていると言われる石英の岩石片は発見された。しかし、採掘跡の時期決定資料は

発見できなかった。

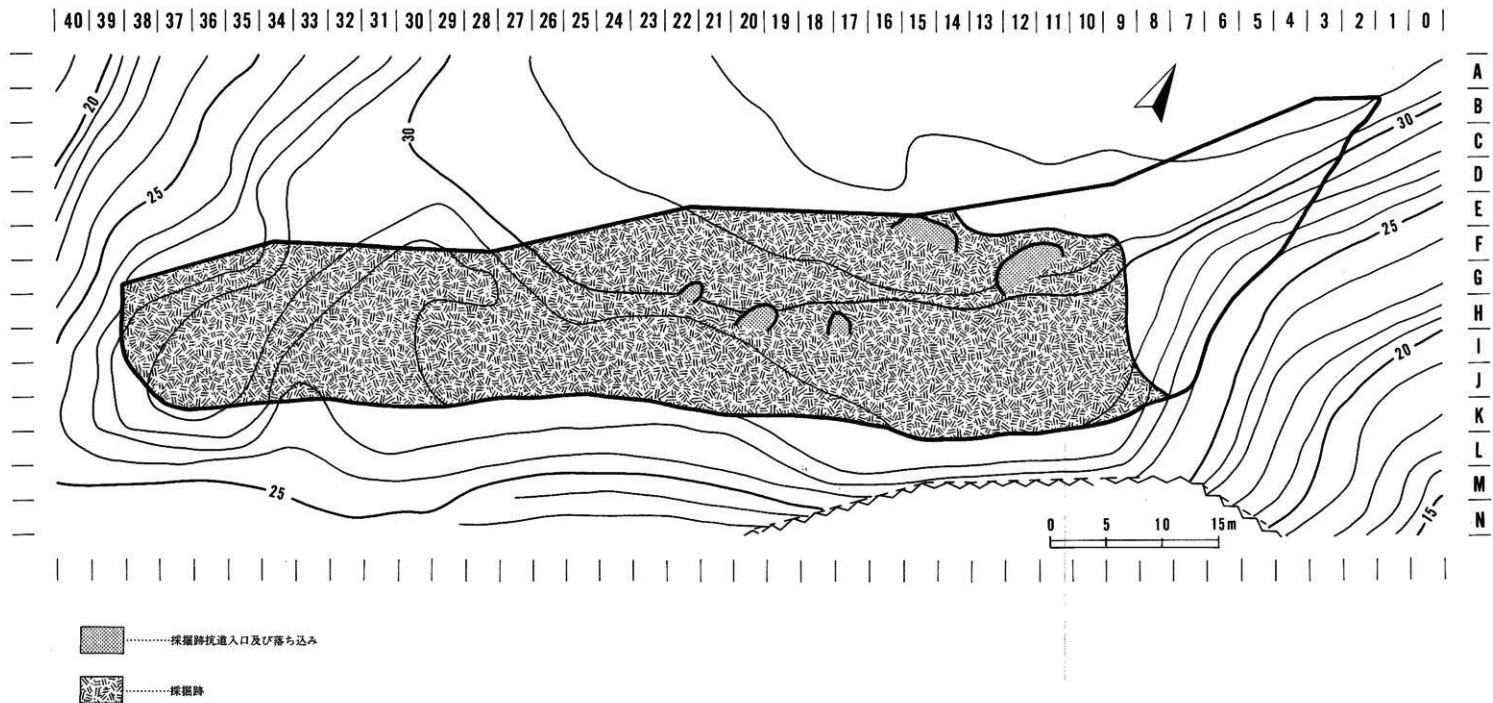
寺前I遺跡の西側は近代の墓域として、東側の一段下がった所（調査区外）も同様に墓域として使用されていた。そして尾根のほぼ中央にお堂が立っており、周りには樹齢が百年を有に越える大木が何本か立っていた。このことから少なくとも近・現代は一つの霊域としてあったのであり、そのことがある面では開発を受けずに存続してきた理由の一つなのかもしれない。また、そのような大木が存在していたことは、採掘が行われたのは幕末以前であることを雄弁に物語っている。

《注》

1. 佐藤正彦氏のご教示による。



第97図 古代以降の遺物



第98図 探掘跡遺構配置図

引用・参考文献

教育委員会は「教委」、(財)岩手県埋蔵文化財センターおよび(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターは「岩手埋文」と略記する。「」は論文名を「」は本の題名または雑誌名を表す。順番は発刊年順である。

- 1 東登 (1957) 『陸前高田の大昔』 陸前高田市教委
- 2 吉田義昭 (1960) 『門前貝塚』 盛岡市公民館
- 3 日本考古学協会 (1962) 『日本考古学辞典』 東京堂出版
- 4 後藤勝彦 (1962) 「陸前宮戸島里浜台岡貝塚出土の土器について」
(『考古学雑誌』第48巻1月号所収)
日本考古学協会
- 5 興野義一 (1967～1970) 「大木式土器の理解のために」1～6
(『考古学ジャーナル No13, 16, 18, 24, 32, 48』所収)
ニューサイエンス社
- 6 宮城教育大学歴史研究会 (1968) 『仙台湾周辺の考古学的研究』 宮城教育大学
- 7 興野義一 (1970) 「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」
(『古代文化』第22巻11号所収) 古代学協会
- 8 草間俊一・金子浩昌・編 (1971) 『貝島貝塚』 花泉町教委
- 9 草間俊一・編 (1974) 『崎山弁天遺跡』 大槌町教委
- 10 及川洵・遠藤勝博・金子浩昌・柳沢清一 (1974) 『門前貝塚』 陸前高田市教委
- 11 北上市教委 (1978～1987) 『九年橋遺跡第4～10次調査報告書』文化財調査報告第23～44集
- 12 山内清男 (1979) 『日本先史の土器の縄文』 先史考古学会
- 13 芹沢長介・編 (1979) 『聖山』 東北大学文学部考古学研究会
- 14 加藤晋平・鶴丸俊明 (1980) 『図録石器の基礎知識Ⅰ』 柏書房
- 15 鈴木道之助 (1981) 『図録石器の基礎知識Ⅲ』 柏書房
- 16 丹羽 茂 (1981) 「土木式土器」(『縄文文化の研究4』所収)
雄山閣

- 17 岩手埋文 (1981) 『小堀内 I 遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第52集
- 18 高橋文夫 (1982) 「縄文時代の彫器」(『紀要II』所収)
岩手埋文
- 19 岩手県立博物館 (1982) 『岩手の土器』
- 20 岩手埋文 (1984) 『安堵屋敷遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第74集
- 21 岩手埋文 (1985) 『平船III遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第76集
- 22 岩手埋文 (1985) 『曲田 I 遺跡発掘調査報告書』岩手埋文報告書第87集
- 23 熊谷常正 (1986) 『門前式土器の検討』(『岩手県立博物館研究報告』第4号所収)
岩手県立博物館
- 24 田鎖寿夫 (1986) 「『瘤付土器』から『晩期前葉』までの土器文様の変遷過程」
(『紀要VI』所収) 岩手埋文
- 25 宮城県教委 (1986) 『田柄貝塚II』宮城県文化財報告書第111集
- 26 滝沢村教委 (1986) 『湯沢遺跡』滝沢村文化財報告書第2集
- 27 久慈市教委 (1987) 『大尻遺跡発掘調査報告書』久慈市埋蔵文化財報告書第7集
- 28 陸前高田市教委 (1987) 『中沢浜貝塚発掘調査概報III』
陸前高田市埋蔵文化財報告書第11集
- 29 田鎖寿夫 (1987) 「縄文晩期の文様構成とその系統的変遷についての一考察」
(『紀要VII』所収) 岩手埋文
- 30 高柳圭一 (1988) 「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から
晩期初頭にかけての編年動向」
(『古代』第85号所収) 早稲田大学考古学会
- 31 岩手埋文 (1988) 『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』
岩手埋文報告書第131集
- 32 秋田県教委 (1988) 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II』
秋田県文化財調査報告書第166集

写 真 图 版



寺前 I 遺跡遠景



遺物包含層調査終了後近景



遺物出土状況



精査風景

写真図版 1 遺跡遠景等



5E-1土坑 (平面)



(断面)



7F-1土坑 (平面)



(断面)



7F-2土坑 (平面)



(断面)

写真图版 2 土坑



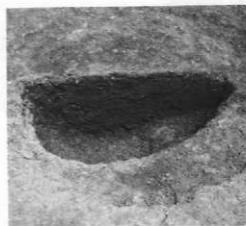
8H-1土坑 (平面)



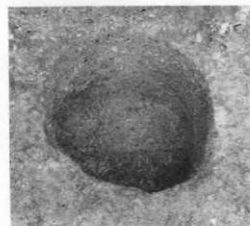
(断面)



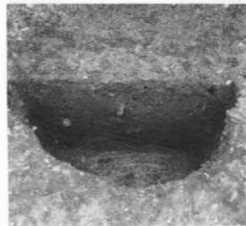
9E-1土坑 (平面)



(断面)



8D-2土坑 (平面)



(断面)

写真図版3 土坑



坑道入口跡



8D-1土坑 (断面)



P₉内遺物出土状況

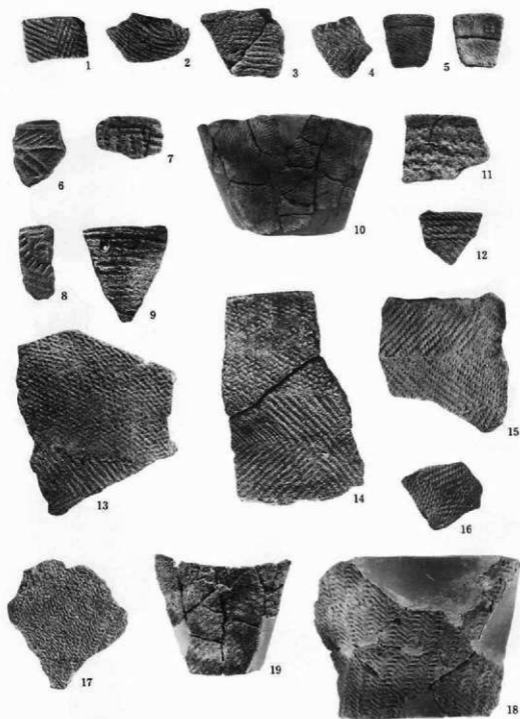


焼土遺構 1

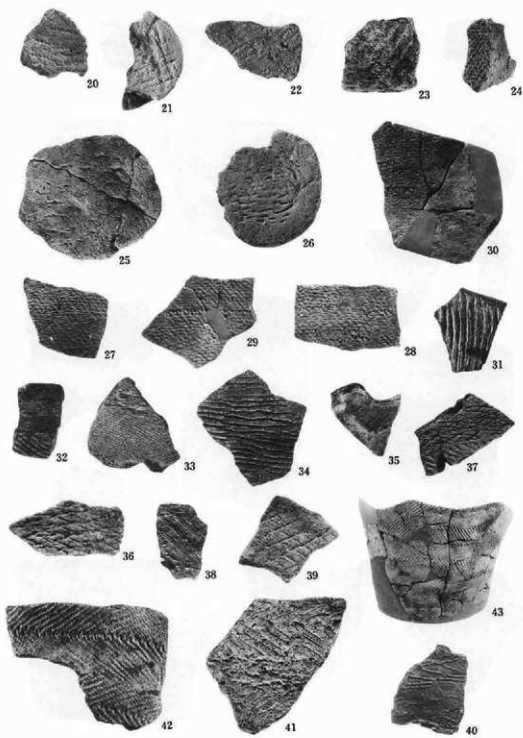


焼土遺構 2

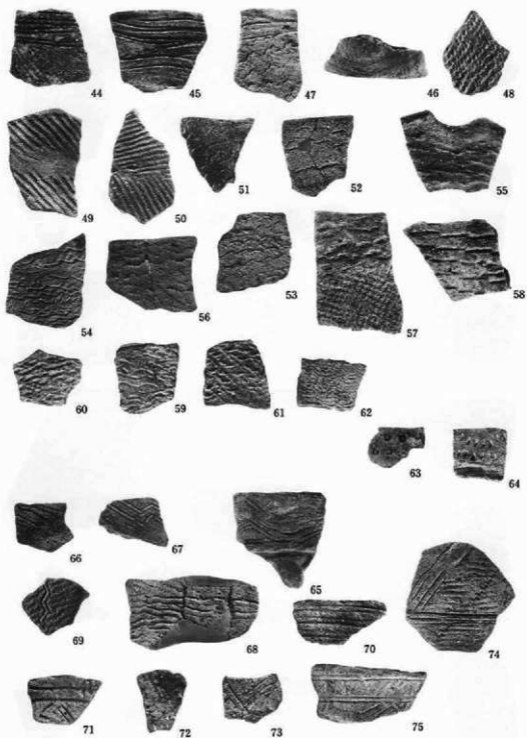
写真図版 4 坑道入口跡・等



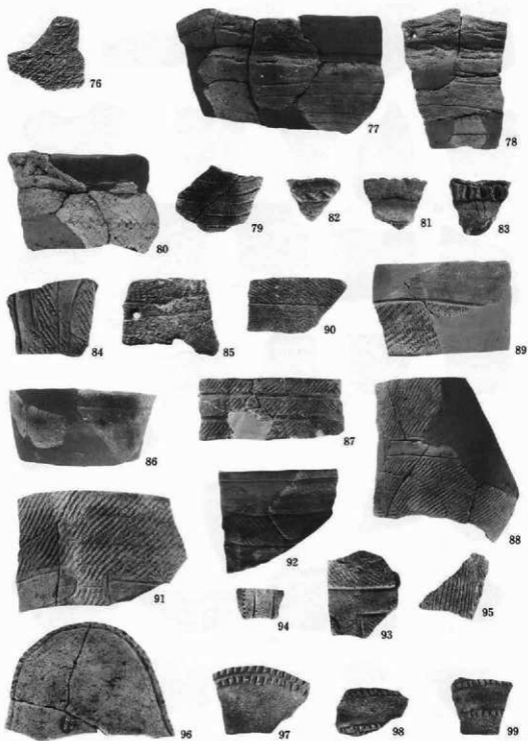
写真图版5 第I~II群土器



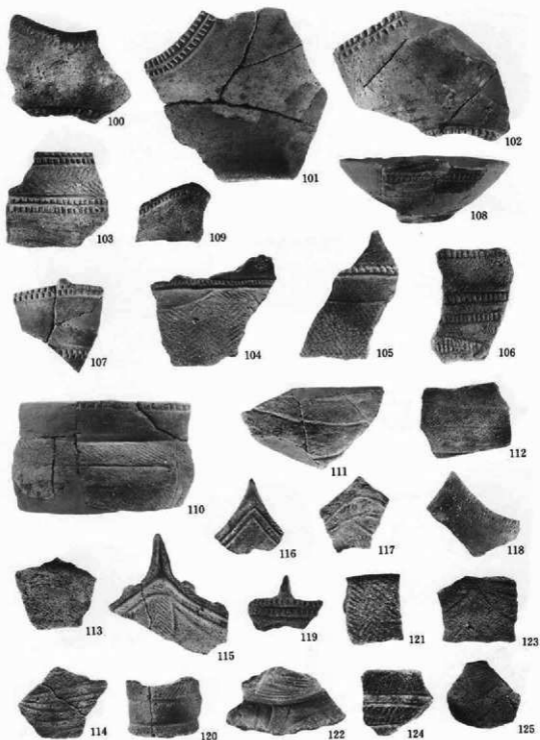
写真图版 6 第II群土器



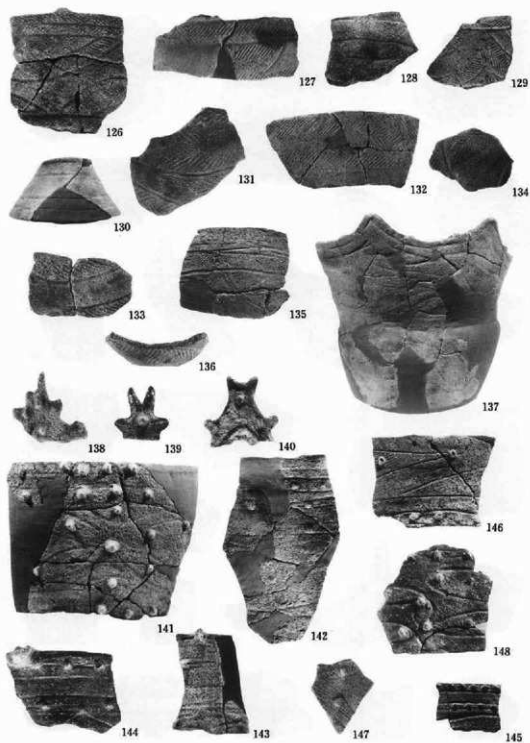
写真図版7 第II群土器



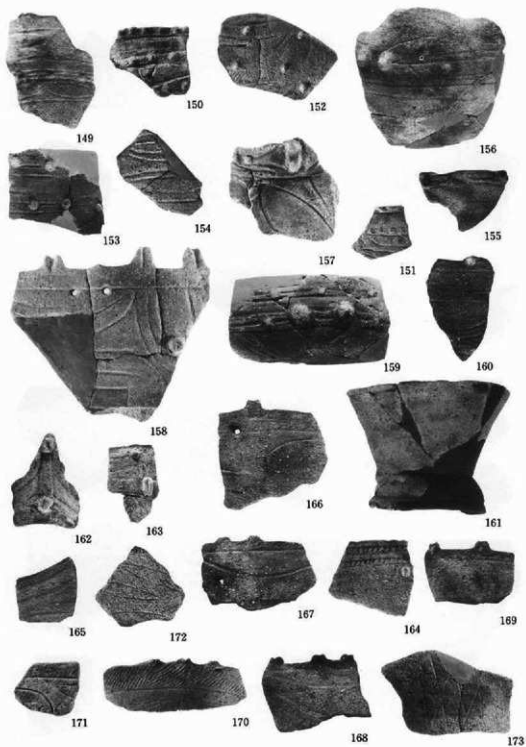
写真图版 8 第II~IV群土器



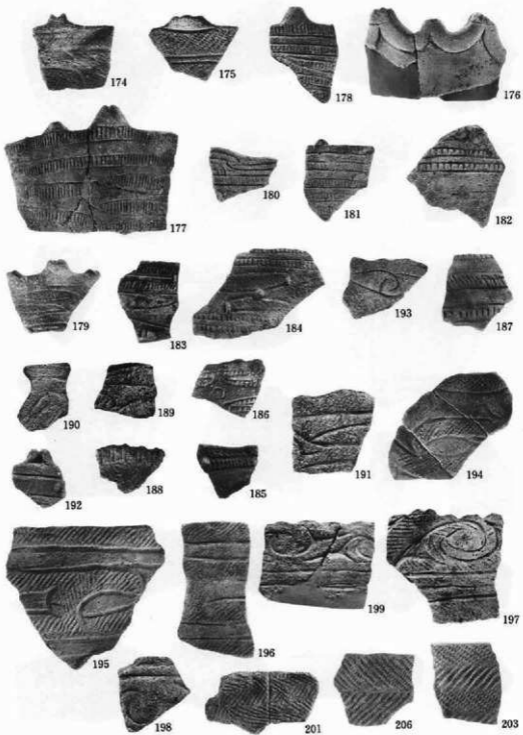
写真图版 9 第IV群土器



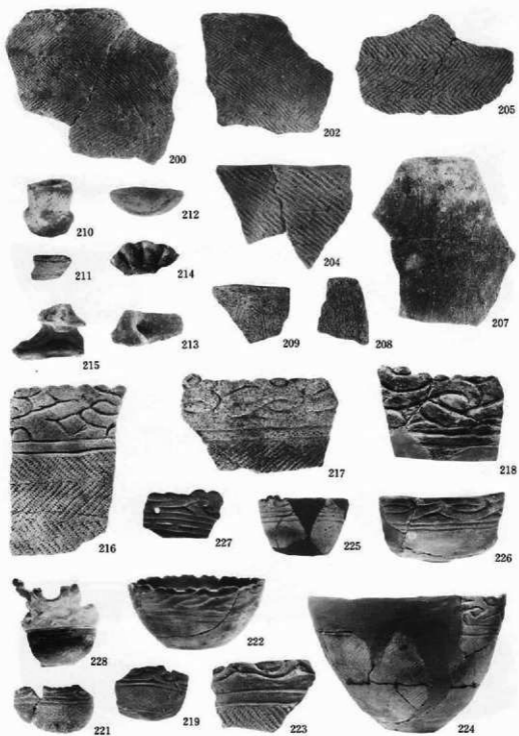
写真図版10 第IV群土器



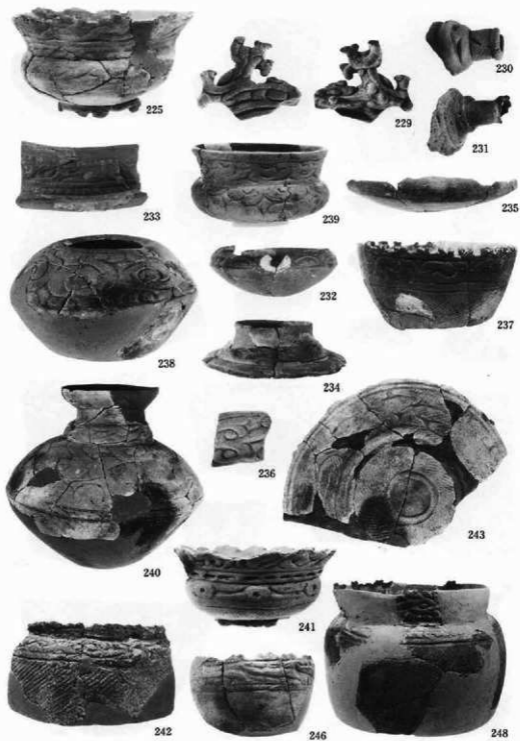
写真図版11 第IV群土器



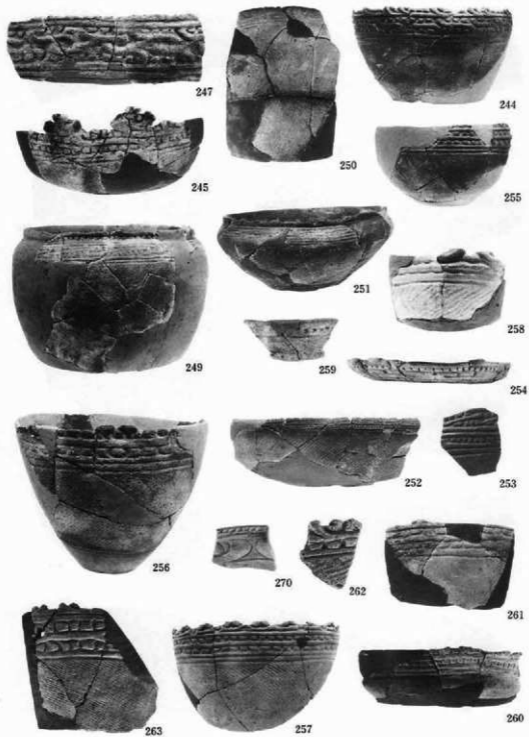
写真图版12 第IV群土器



写真图版13 第IV~V群土器



写真図版14 第V群土器



写真図版15 第V群土器



265



269



268



271



264



267



266



274



272



276



273



278

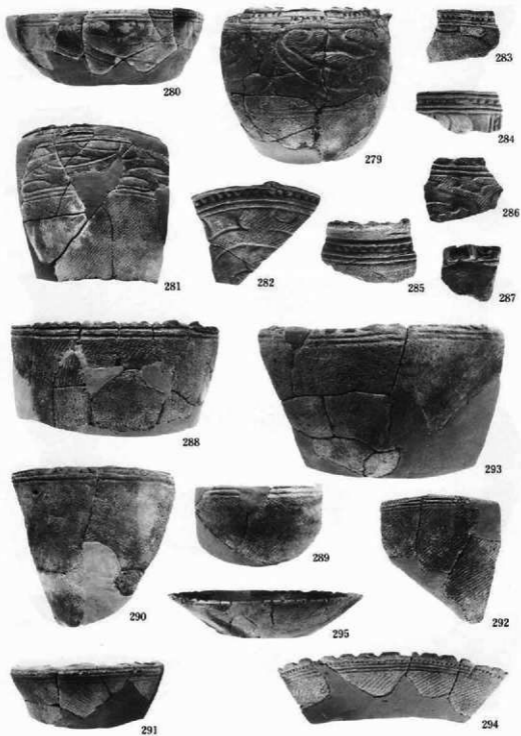


277

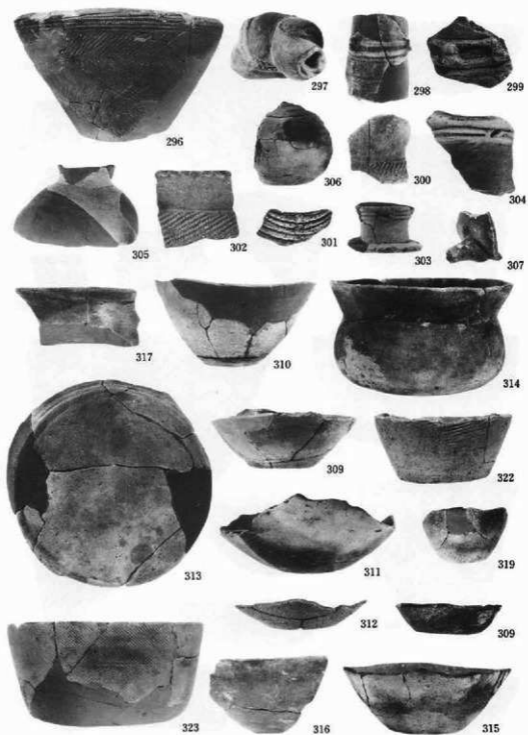


275

写真図版16 第V群土器



写真図版17 第V群土器



写真図版18 第V群土器



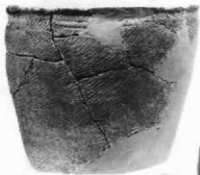
320



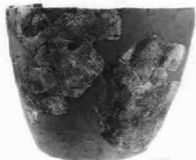
318



321



324

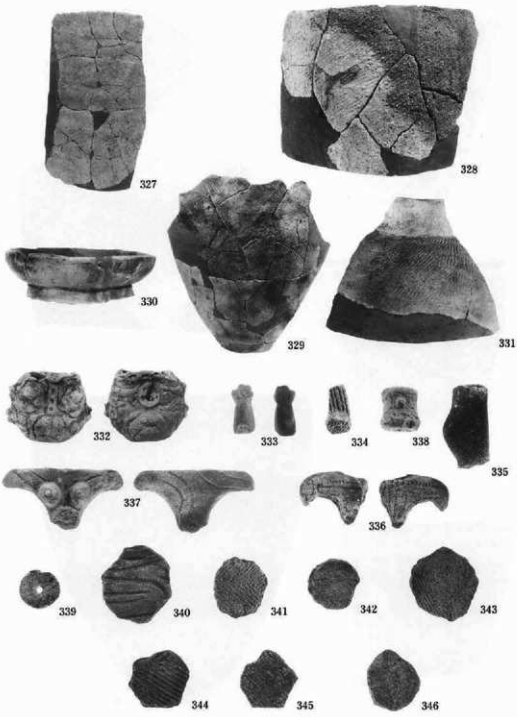


325

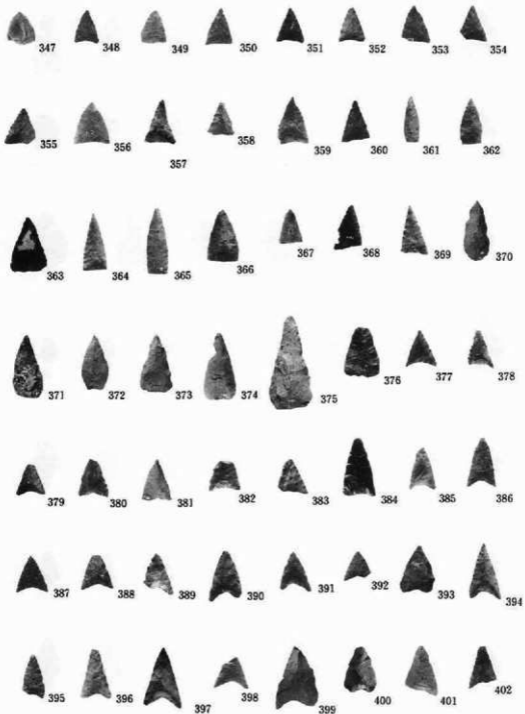


326

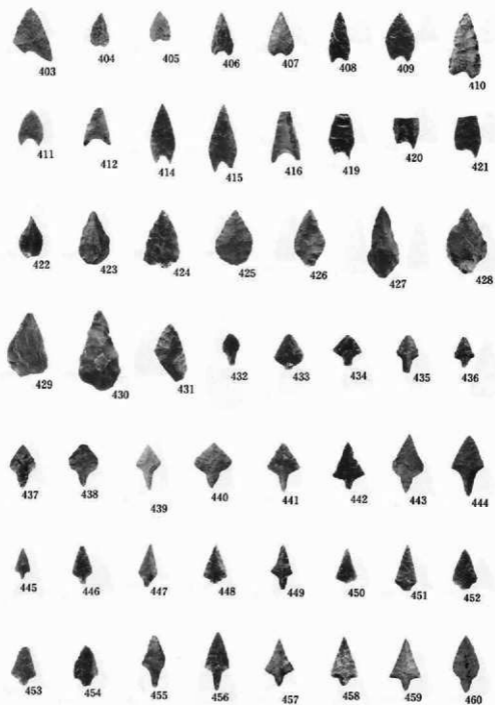
写真図版19 第V群土器



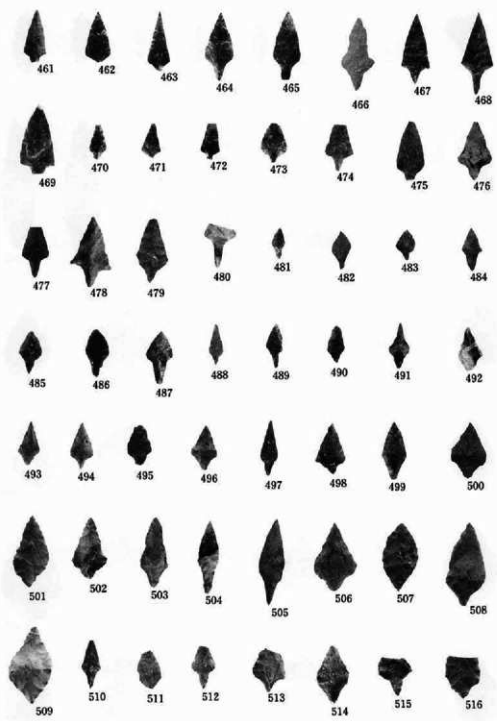
写真図版20 第V・VI群土器



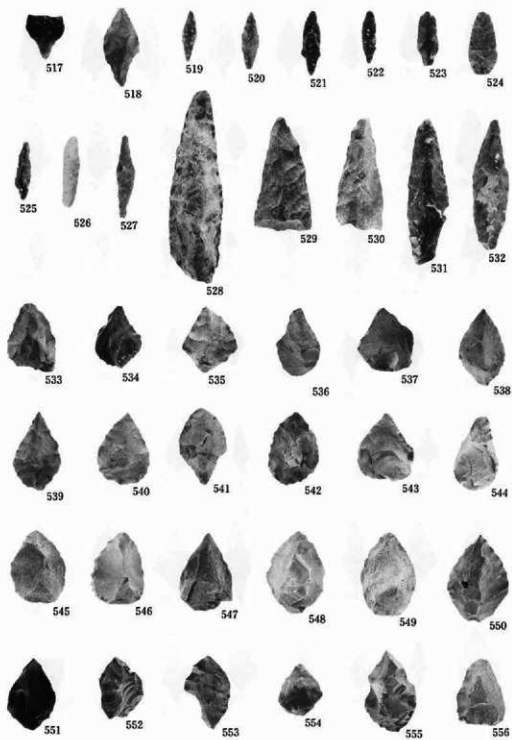
写真図版21 石 鉄



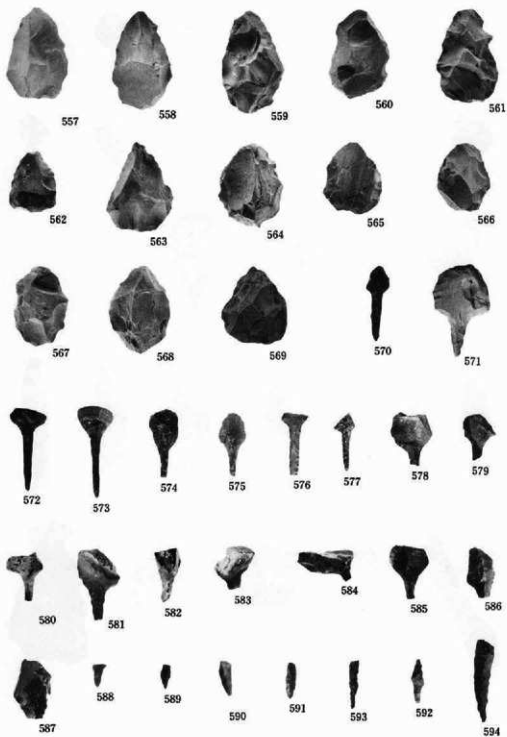
写真図版22 石 鏃



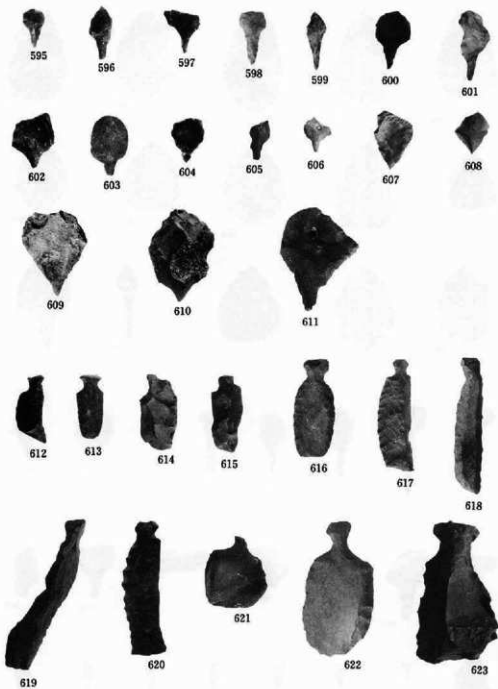
写真図版23 石 鐵



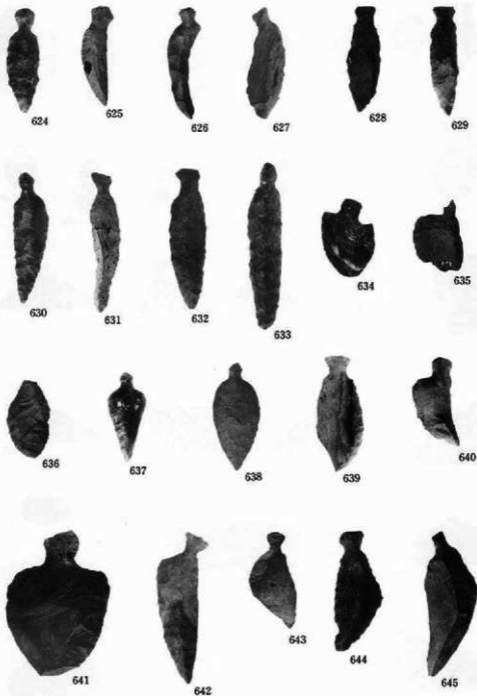
写真図版24 石鏃・尖頭器



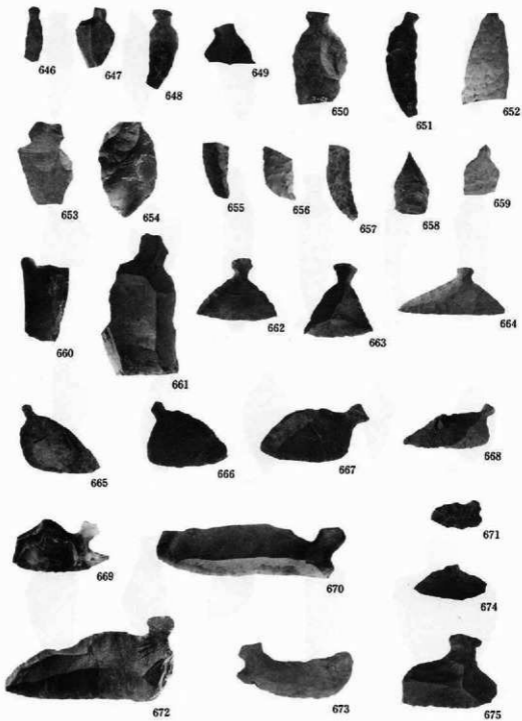
写真図版25 尖頭器・石鏃



写真図版26 石錐・石匙



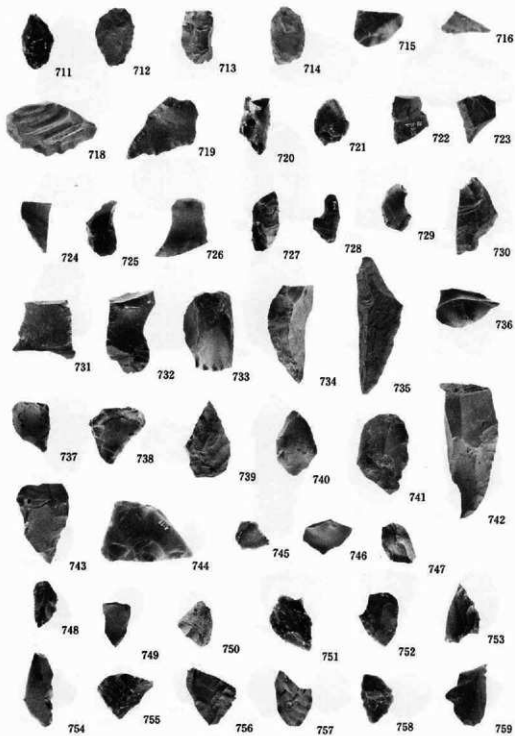
写真図版27 石 匙



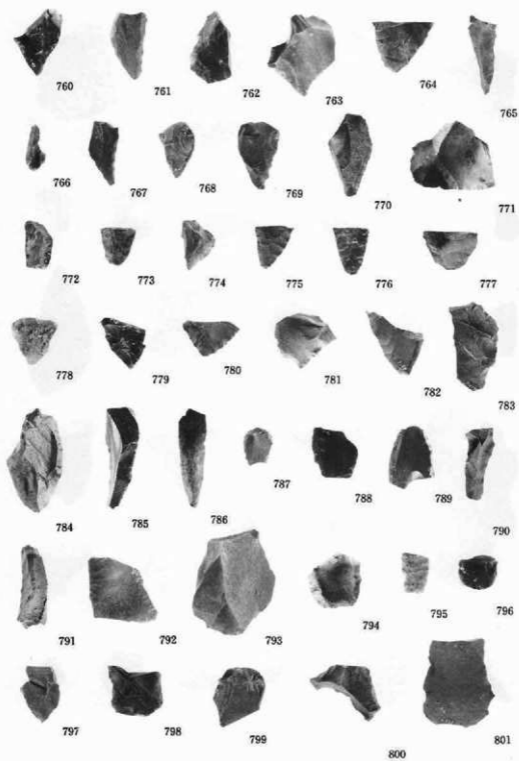
写真图版28 石 匙



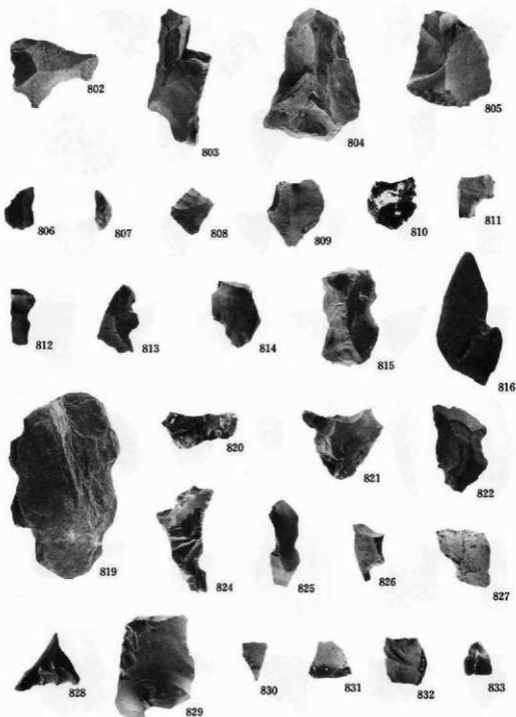
写真図版29 石匙・筥状石器
不定形石器



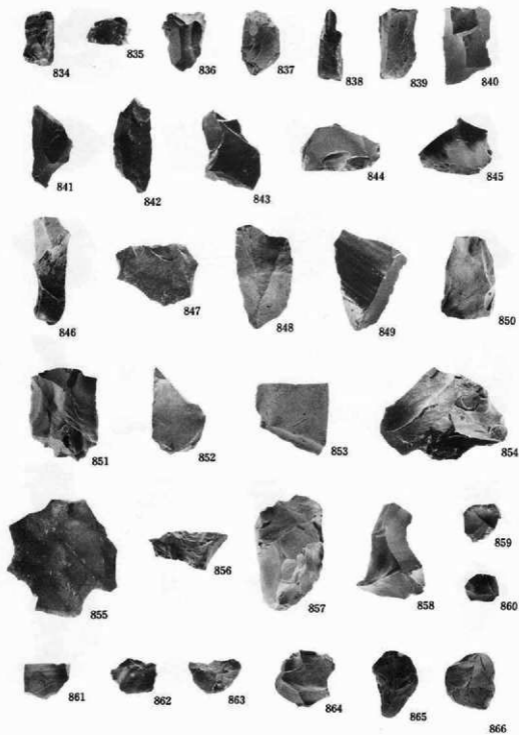
写真図版30 不定形石器一



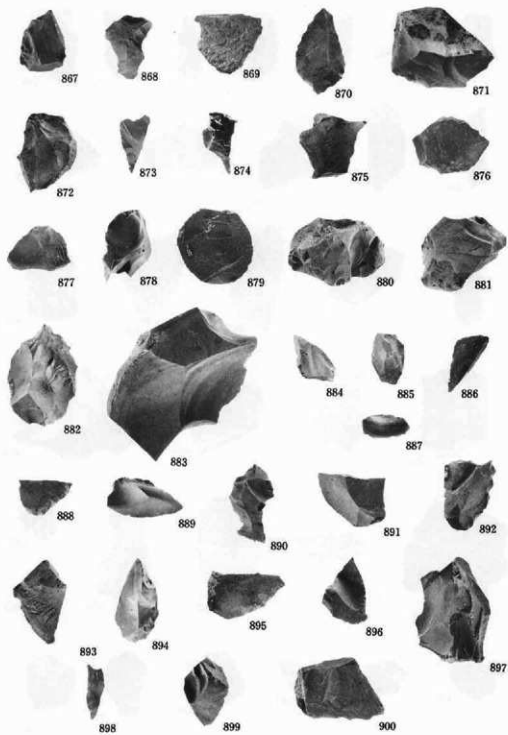
写真図版31 不定形石器



写真図版32 不定形石器



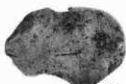
写真图版33 不定形石器



写真図版34 不定形石器



901



902



903



904



905



906



907



908



909



910



911



912

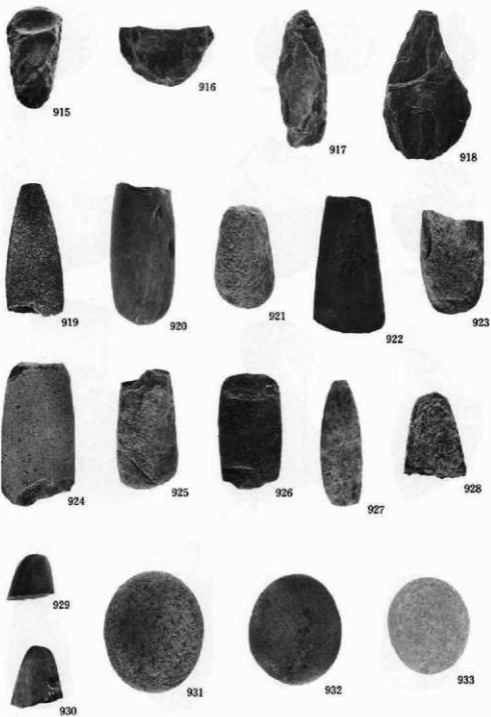


913

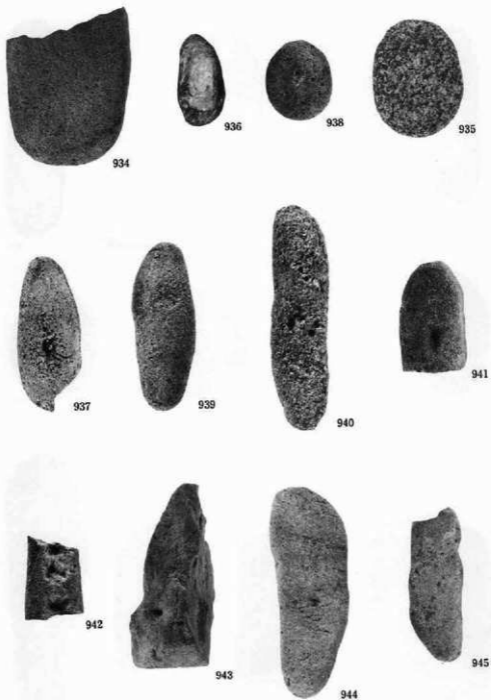


914

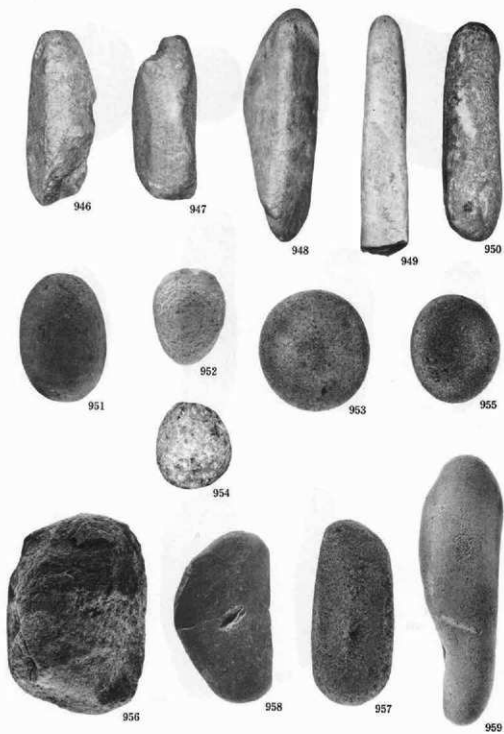
写真図版35 石錘・石斧



写真図版36 石斧・磨石・凹石・タタキ石



写真図版37 磨石・凹石・タタキ石



写真図版38 磨石・凹石・タタキ石



960



961



962



963



964



965



966



968



967



969



970

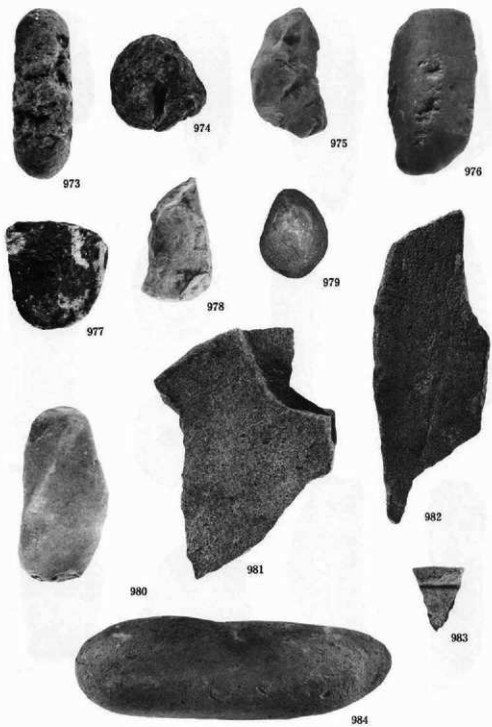


971

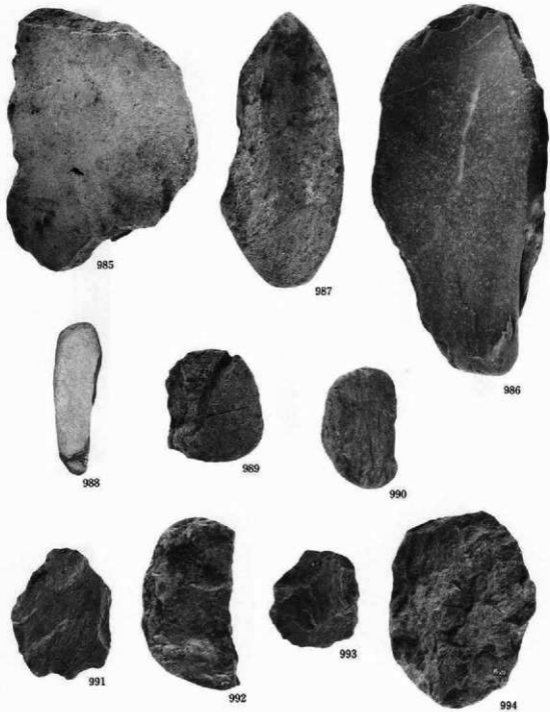


972

写真図版39 磨石・凹石・タタキ石



写真図版40 磨石・凹石・タタキ石
石皿



写真図版41 砥石・円盤状打製石器



995



996



997



998



999



1000



1001



1002



1003



1004

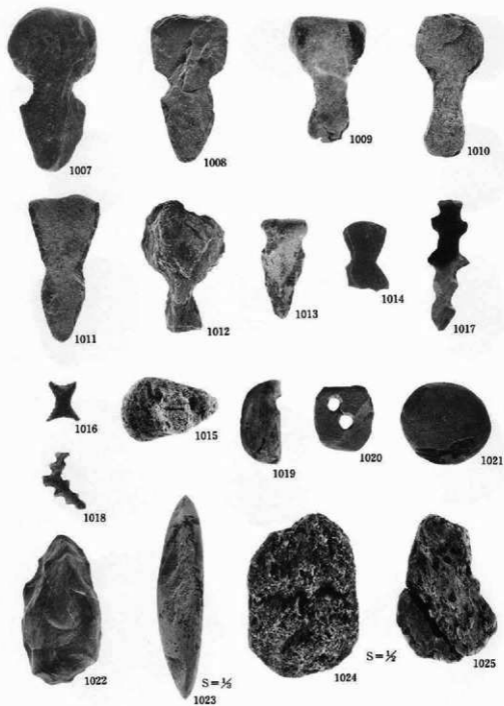


1005

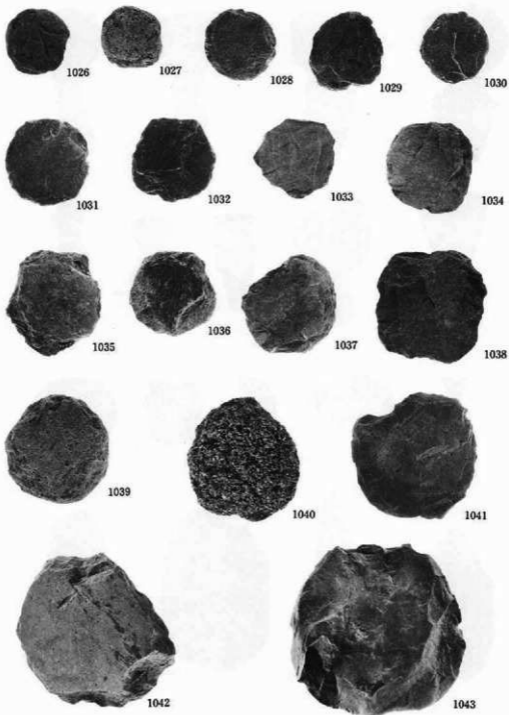


1006

写真図版42 石剣・石刃・石棒類



写真図版43 石製品



写真図版44 石製品



1044



1045



1046



1047



1048



1049



1050



1051



1052



1053



1054



1055



1056

写真図版45 石製品



1057



1058



1059



1062



1060



1063



1064



1065



1066



1067



1068

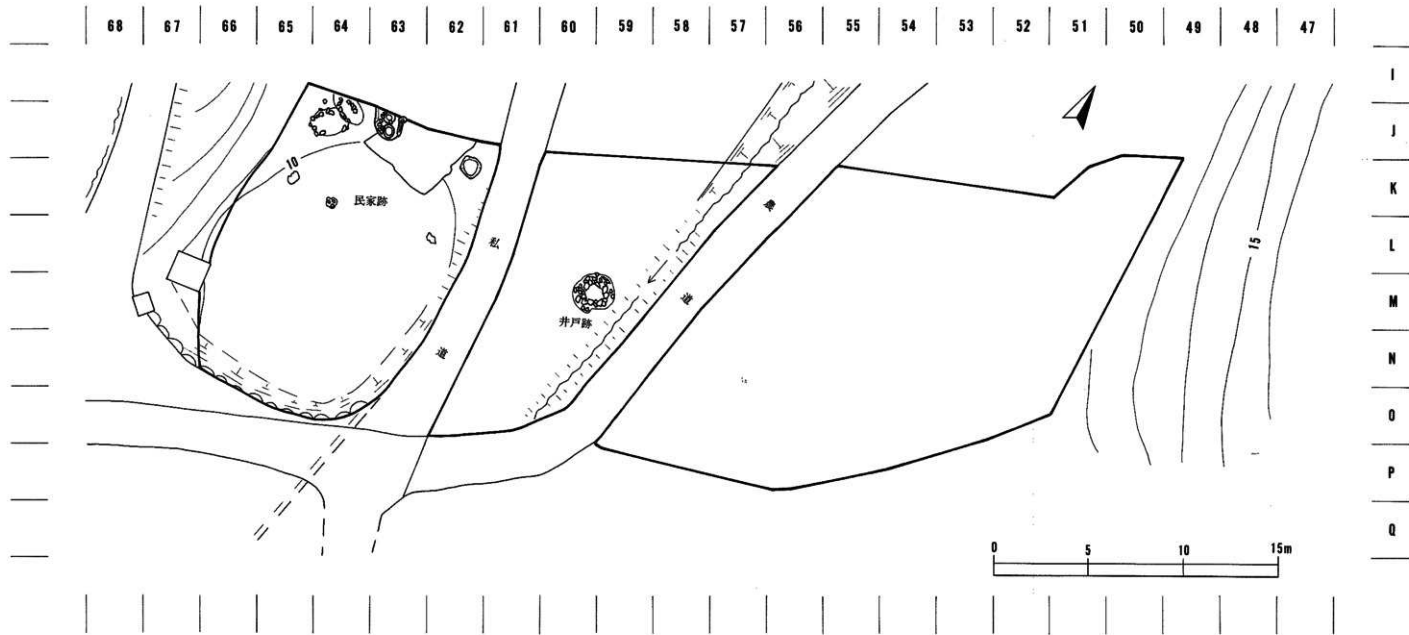


1069

写真図版46 その他の礫石器・須恵器・古銭

V 寺 前 II 遺 跡

所 在 地 陸前高田市矢作町寺前40-2ほか
委 託 者 岩手県土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 昭和63年6月23日～9月22日
整 理 期 間 昭和63年10月5日～平成元年3月31日
調査対象面積 965㎡
発掘調査面積 965㎡
遺跡番号・略号 NF56-2272・TMII-88
調査担当者 平井 進・中村良一
協 力 機 関 陸前高田市教育委員会



第1図 寺前II遺跡遺構配置図

1 遺跡の概要

調査区は東西に帯状に広がっている。調査区のほぼ中央を道路が横断しており、道路より東側は水田、西側は畑地として利用されていた。水田は岩盤に至るまで掘削された後、少なくとも1.5m以上の厚さに盛土をして作られており、自然に堆積した土層は全く遺存していない。ただし盛土された現表土からは若干のフレーク類が採集された。道路より西側の畑地はすぐそばに住んでいる吉田氏の所有地だったところで吉田氏の家との関連で畑地と言うよりむしろ前庭的に、一部は小規模な畑地として、一部は生姜畑として草地的に利用されていた。この畑地の所は吉田氏の元の家が明治18年に焼失するまで建っていた所と言われていた。また現表土は幅2~3cm、長さ数センチ程のスレートを主体とした礫が多量に含まれており、その下層は縄文期からの層序を保ってはいたが土砂と礫層の互層であり多量の伏流水が流れていた。以上の状況から、近世から明治期と思われる民家跡の一部以外には縄文期はもちろん古代・中世の遺構は検出されなかった。

縄文時代の遺物はその土砂と礫層の互層の中に含まれていたものである。バックホーを用いて最も深いところでは現表土から約2m程掘り下げたがなお岩盤までは達しなかった。しかし、作業が危険なことと遺物が出土しなくなったためその時点で調査を終了させた。

以上の調査から、遺構としては民家跡と井戸跡が、遺物としては縄文土器、土製品、石器、石製品、近世の遺物としては「寛永通寶」2点が出土した。また、表土には金属器、陶磁器等が含まれていたがこれらは現代のものであり割愛することにする。

2 縄文時代

土器・土製品は総重量約24kg、遺物収納用コンテナで3個分が出土した。完形品はもちろん接合するものもなく、すべて小破片である。石器・石製品は若干のフレークを除くと66点が出土した。以下項目にしたがってその概要を述べるが、分類項目やその記載の仕方は寺前I遺跡に準ずる。また、寺前I遺跡と寺前II遺跡は同時に整理を行ったためその際の混同を防ぐため、遺物番号は両遺跡にまたがって連番を付した。

(1) 土器・土製品

第1群土器……早期に属する土器を一括する。(第2図、第1表P. 258、写真図版1)

- a 燃糸文の原体を回転させずに引きずり、沈線状の文様を施文したもの。
(1070, 1071)
- b 燃糸文が施文されるもの。
(1072, 1073)
- d 原体は不明であるが、胎土や焼成からみて早期と考えられるもの。

(1074)

1070と1071は同一個体である。本群に属する土器は焼成が良好で極めて硬いという特徴を持っている。1074の原体は組紐かもしれない。

第II群土器……前期に属する土器を一括する。(第1図、第1表P. 258、写真図版1)

1類……前期初頭から前葉に属する土器を一括する。

〈大木2 a 式ないしそれと併行するもの〉

i 燃糸文が施文されるもの。 (1075, 1076, 1077)

〈大木2 b 式ないし大木1～2式に併行するもの〉

o 多軸絡条体回転圧痕文が施文されるもの。 (1078)

2類……前期中葉に属する土器を一括する。

〈大木3式ないしそれと併行するもの〉

b 刻み目を有するもの。 (1079)

3類……前期後葉に属する土器を一括する。

〈大木5式ないしそれと併行するもの〉

a 山形沈線文が施文されるもの。 (1080)

〈大木6式ないしそれと併行するもの〉

b 沈線文が施文されるもの。 (1081)

4類……前期には属するが、細分ができない土器を一括する。

a 網目状燃糸文が施文されるもの。 (1082)

b 単節斜縄文が施文されるもの。 (1083)

c 縦位に粗い羽状縄文が施文されるもの。 (1084)

本群に属する土器は本遺跡から出土した土器の5%弱であり、極めて少ない。特に胎土に植物性繊維を含む土器が少ない。

第III群……中期に属する土器を一括する。(第2図、第1表P. 258、写真図版1)

1類……中期前葉に属する土器を一括する。

〈大木7 a 式ないしそれと併行するもの〉

a 縦位に木目状燃糸文が施文され、燃糸文の両端に綾絡文が施文される。
(1085)

c 粘土紐を貼付するもの。
(1086)

2類……中期後葉に属する土器を一括する。

〈大木9式〉

a 縦に長い楕円文を磨消縄文によって描くもの。(1087)

〈大木10式ないしそれと併行するもの〉

b 大きな磨消縄文が横位に展開するもの。
(1088, 1089, 1090)

本群に属する土器は地文のみの破片を除き全点を掲載した。縄文土器の中では最も少ない。

第IV群……後期に属する土器を一括する。(第2図、第1表P. 258、写真図版1～2)

2類……後期中葉に属する土器を一括する。

〈宮戸2a式ないしそれと併行するもの〉

a 刻み目帯を有するもの。
(1091)

〈宮戸2b式ないしそれと併行するもの〉

e 縦位の羽状縄文が施文されるもの。
(1092)

3類……後期後葉に属する土器を一括する。

〈宮戸3b式ないしそれと併行するもの〉

f 口縁部には大小の突起を有し、文様体の中には縄文の代わりに篋状工具による刻みを充填するもの。
(1093, 1094)

4類……後期には属するが、時期を細分できないものを一括する。

e 沈線を有する高台。
(1095)

本群に属する土器は全出土量の約4分の1であり、地文のみの土器片も含めると相当量になると思われる。その主体は2類であり、瘤付き土器は多くない。

第V群……晩期に属する土器を一括する。(第2図～第5図、第1表P. 258～259、写真図版2～4)

2類……晩期中葉に属する土器を一括する。

- a 口縁部はB型突起が連続し、体部には磨消縄文による入り組み文が展開する。
(1096, 1097)
- c 口縁部に突起を有するもの。頭部に刻み目帯1条が回るものが多い。
(1098, 1099, 1100, 1101, 1102)
- d 口縁部は短く、無文帯となり、小さな波状口縁となるもの。
(1103, 1104, 1105)
- e 文様帯は口縁部に凝縮され極めて幅の狭い平行沈線文帯を作るもの。口唇部や沈線の間に刻み目が付けられる。
(1106)
- h 頭部は無文帯で口唇部に棒状圧痕や口縁端部に縄文が施文されるもの。
(1107, 1108, 1109)

3類……晩期後葉に属する土器を一括する。

- a 工字文を有するもの。
(1110, 1111, 1112, 1113, 1114, 1115, 1116, 1117, 1118)
- b 工字文が圧縮して重なり、平行沈線の集合体状となる。刺突帯が加わるものもある。
(1119, 1120, 1121, 1122)
- c 楕円文を有するもの。
(1123, 1124, 1125, 1126)
- d 平行沈線文を有するもの。
(1127, 1128)
- e 隆起線文を有するもの。
(1129)
- f 矢羽状沈線文を有するもの。
(1130, 1131, 1132, 1133)
- g 頭部は無文帯で口唇部に棒状圧痕や口縁端部に縄文が施文されるもの。
(1134, 1135)
- h 壺形土器を一括する。
(1136, 1137, 1138, 1139, 1140, 1141, 1142, 1143, 1144, 1145, 1146)
- i 変形工字文を有するもの。
(1147, 1148, 1149, 1150, 1151, 1152)
- j 沈線文に2個1対の粘土粒が貼付されるもの。(1153)

4類……晩期には属するが、細分ができないもの。

- b 無文のもの。
(1154)
- c 地文のみのもの。
(1155, 1156)
- d 頭部が無文体となるもの。
(1157, 1158, 1159, 1160)
- e 工字文または楕円文をえがき中に刺突を充填するもの。

本群が本遺跡の主体をなす土器である。しかも3類に集中する。器種からみれば、注口土器や皿、浅鉢が少なく、甃が非常に多い。

第VI群……弥生時代に属する土器群を一括する。(第6図、第1表P. 259、写真図版4)

- 1類……変形工字文状の沈線文を有し、文様体の一部に渦巻文や平行沈線が傾斜するなどの変化がみられる。 (1162, 1163)

本群に属するのはこの2点のみである。これらも晩期に編年されるとする見方もある。しかし、本遺跡から出土した土器を詳細に観察する限りでは文様構成と同時に胎土が異なっており、本遺跡出土の晩期の土器に包摂するには無理がある。大洞A'式に後続するものと捉えておきたい。

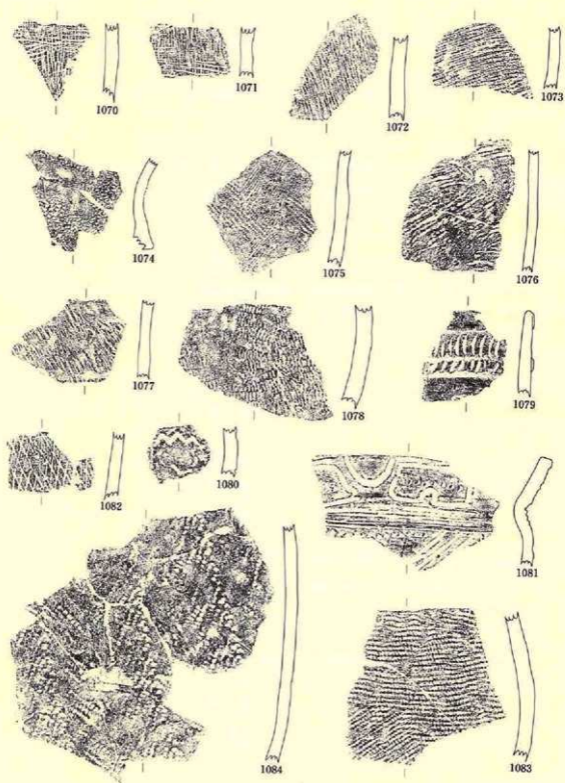
第VII群……土製品を一括する。(第6図、第1表P. 259、写真図版4)

1類……土偶

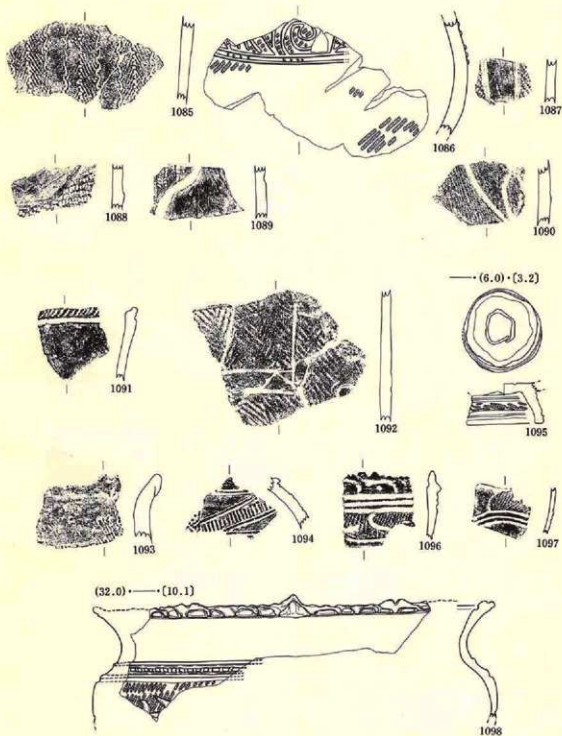
- a 中空土偶 (1164, 1165)
 b 中空とはなっていないもの。 (1166, 1167)
 c 板状となっているもの。 (1168, 1169)

小 結

本遺跡から出土した土器・土製品は何層にも堆積された砂礫層の中から出土したものである。したがって、その供給源は谷頭に向かう上流のどこかであろう。出土した土器は明らかに前期後葉、後期中葉、晩期後葉に集中している。しかも、この3期の前後につながる土器が若干ながらも出土し、そこに生活が営まれていたことを暗示している。このことは本遺跡の北側に同じ場所に複合しているかどうかは別として、時期的にあるまとまりを持った複数の集落跡を想定できるものとなっている。

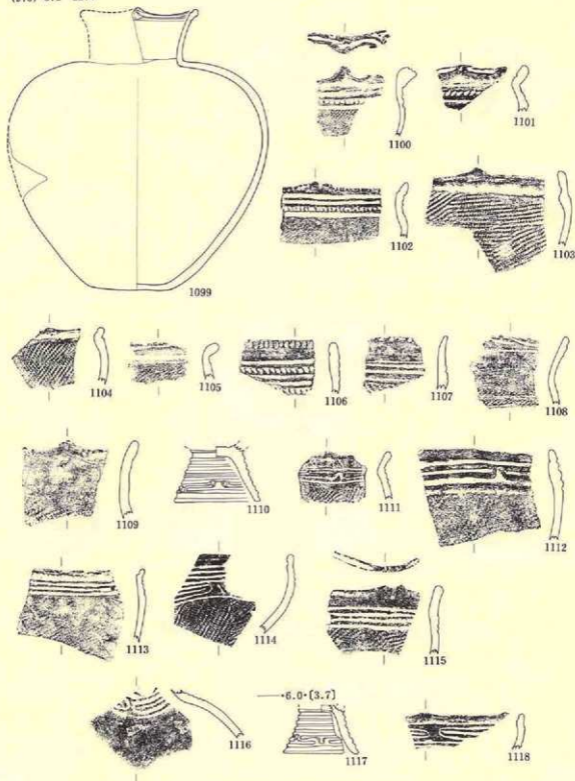


第2图 第I~II群土器

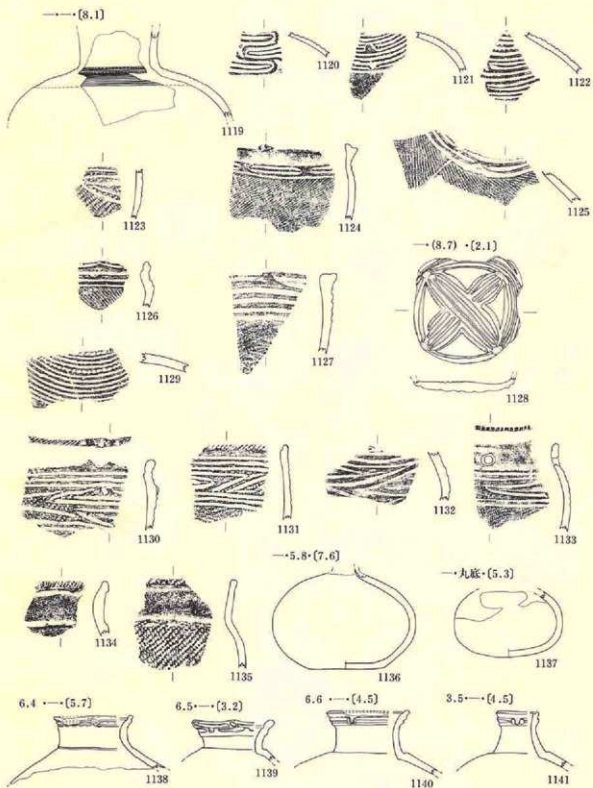


第3圖 第三～V群土器

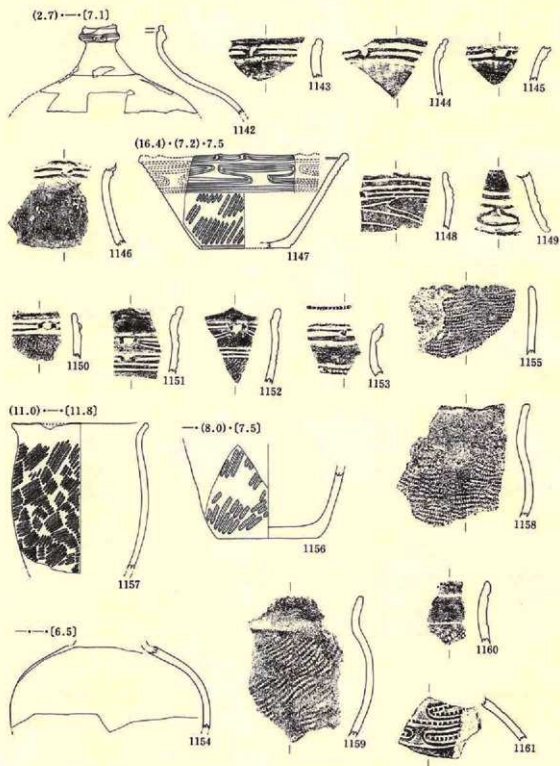
(9.0)·6.2·22.4



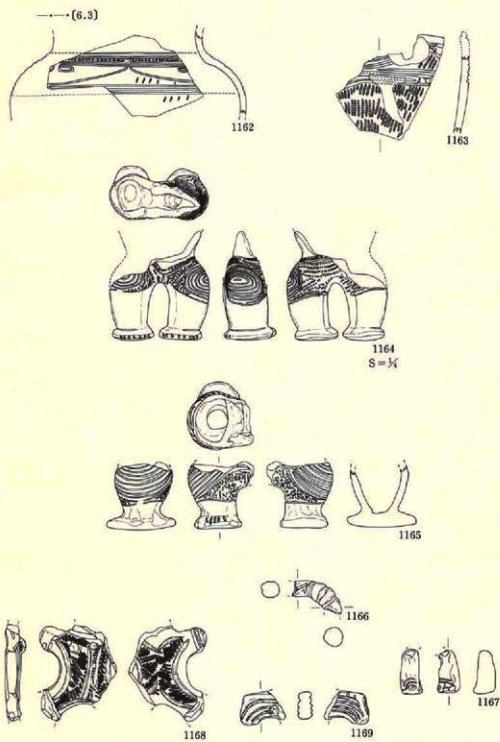
第4图 第V群土器



第5图 第V群土器



第6图 第V群土器



第7图 第VI—VII群土器

第1表 土器・土製品観察表

通物 番号	器 種		法 量(m)			文 様 体 等	土 色 調	備 考	図 版 番号	写真 図版	
	名 称	分類	口径	直径	高さ						
1070	磁片(鉢)	I				沈線	灰石	赤褐色	外一帯付着	第2図	1
1071	磁片	"				"	"	"	1071と同一個体	"	"
1072	"	"				不整然点文	砂・金雲母	黒褐色	焼成良好	"	"
1073	"	"				"	粗砂	褐色	"	"	"
1074	"	"				細線小?	"	褐色	"	"	"
1075	"	II-1				不整然点文	粗砂	赤褐色	焼成良好、外一帯付着	"	"
1076	"	"				不整然点文、無筋	"	褐色	"	"	"
1077	"	"				不整然点文	粗砂	"	焼成良好	"	"
1078	"	"				多線跡垂体	"	黒褐色	"	"	"
1079	"	II-2				隆帯、割み目	"	褐色	"	"	"
1080	"	II-3				山形沈線文(手籠首管)	"	赤褐色	"	"	"
1081	鉢	"				沈線文、刺突文	"	黒褐色	"	"	"
1082	磁片	II-4				網目状刺突文	粗砂	"	"	"	"
1083	鉢	"				直而段多象	"	褐色	"	"	"
1084	"	"				羽状刺突文	"	"	"	"	"
1085	"	III-1				粗状刺突文、磯状文	"	"	"	第3図	"
1086	"	"				起付文	砂	"	"	"	"
1087	磁片	III-2				磨消刺突文	"	"	"	"	"
1088	"	"				"	"	"	"	"	"
1089	"	"				"	"	"	"	"	"
1090	"	"				"	粗砂	"	"	"	"
1091	"	IV-2				割み目帯	砂、金雲母	"	外一帯付着	"	"
1092	"	"				磨消刺突文、羽状刺突文	砂	"	"	"	2
1093	"	IV-3				B形突起	粗砂	"	"	"	"
1094	"	"				沈線文、割み目	砂	"	内一帯付着	"	"
1095	磁片(高台)	V-4	—	6.0	[3.2]	沈線文	"	"	内側の底にも沈線文	"	"
1096	磁片	V-2				磨消入組文	"	黒褐色	"	"	"
1097	"	"				"	"	"	"	"	"
1098	鉢	"	(32.0)	—	[10.1]	沈線文、割み目、A型突起	"	"	外一帯	"	"
1099	壺	"	(9.0)	6.2	22.4	沈線文、体部は無文	"	赤褐色	"	第4図	"
1100	磁片	"				沈線文、割み目帯、A型突起	"	褐色	"	"	"
1101	"	"				"	"	明褐色	"	"	"
1102	"	"				沈線文、割み目帯、1つ山突起	細砂	赤褐色	"	"	"
1103	"	"				口縁部は無文、1つ山突起	"	褐色	"	"	"
1104	"	"				口縁部は無文	"	"	"	"	"
1105	"	"				"	"	"	"	"	"
1106	"	"				沈線文、割み目	"	"	"	"	"
1107	"	"				"	"	"	"	"	"
1108	"	"				沈線文	"	"	"	"	"
1109	"	"				口縁部は広く無文	細砂	"	"	"	"
1110	磁片(高台)	V-3	—	6.8	[4.2]	工字文	"	"	未塗り	"	"
1111	磁片	"				"	細砂	"	"	"	"
1112	"	"				"	"	"	外一帯多量	"	"
1113	"	"				沈線文(工字文?)	"	"	"	"	"
1114	"	"				工字文	"	黒褐色	"	"	"
1115	"	"				沈線文(工字文?)	金雲母	褐色	外一帯	"	"
1116	磁片(蓋)	"				工字文	砂	"	"	"	"
1117	磁片(高台)	"	—	6.0	[3.7]	"	"	褐色	内外面着色処理	"	"
1118	磁片	"				"	"	赤褐色	"	"	"
1119	壺	"	—	—	[8.1]	沈線文、割み目	"	"	"	第5図	3

器物 番号	器 種			法 量(cm)			文 様 体 等	胎 土	色 調	備 考	国 版 番号	写真 回数
	名 称	分 類		口 径	底 径	高 さ						
1120	壶	V-3					流小文(沈線文)	細砂	黑褐色	内外面黑色处理	第5图	3
1121	"	"					工字文(沈線文)	"	褐色		"	"
1122	"	"					工字文(沈線文)	"	赤褐色		"	"
1123	"	"					沈線文、刺突帯	"	"		"	"
1124	破片	"					流小文(?)	粗砂	"		"	"
1125	"	"					"	"	褐色		"	"
1126	壶	"					"	細砂	黑褐色	外面黑色处理	"	"
1127	破片	"					沈線文	"	黑色	内外面黑色处理, 外一底	"	"
1128	"	"					"	砂	褐色		"	"
1129	残片(底部)	"	—	8.7	[2.1]		隆起線文	細砂	暗褐色		"	"
1130	破片	"					矢羽状沈線文、2つ山突起	砂	黑色	内外面黑色处理, 内一残片	"	"
1131	"	"					矢羽状沈線文、刻み目	"	黑褐色	内外一残片	"	"
1132	"	"					矢羽状沈線文	細砂	褐色		"	"
1133	"	"					"	"	黑褐色	罅け孔, 内一残片, 外一底	"	"
1134	"	"					雲脚無文帯	砂	褐色		"	"
1135	"	"					"	砂、金雲母	"		"	"
1136	壶	"	—	5.8	[7.6]		無文	"	"		"	"
1137	"	"	—	丸座	[5.3]		"	"	"		"	"
1138	"	"	6.4	—	[5.7]		口縁端部に隆起線文、体部無文	"	"		"	"
1139	"	"	6.3	—	[3.2]		"	"	赤褐色		"	"
1140	"	"	6.6	—	[4.5]		"	"	褐色		"	"
1141	"	"	3.5	—	[4.5]		"	"	"		"	"
1142	"	"	2.7	—	[7.1]		体部無文	"	"		第6图	"
1143	破片	"					口縁端部に隆起線文	"	赤褐色		"	"
1144	"	"					"	"	"		"	"
1145	"	"					"	細砂	"		"	"
1146	"	"					"	"	"		"	4
1147	鉢	"	(16.4)	(7.2)	7.5		雲脚工字文	"	褐色		"	"
1148	破片	"					"	"	黑褐色		"	3
1149	破片(片方)	"	—	—	4.7		"	細砂	"		"	4
1150	破片	"					雲脚工字文、刻み目、瘤付	"	暗褐色		"	"
1151	"	"					雲脚工字文	"	"	内外面黑色处理, 内一残片	"	"
1152	"	"					雲脚工字文、瘤付、山部突起	"	灰白色		"	"
1153	"	"					平行沈線文、瘤付、刻み目	細砂	暗褐色		"	"
1154	壶	V-4	—	—	[6.3]		無文	"	褐色		"	"
1155	破片	"					雲点文	粗砂、金雲母	灰白色		"	"
1156	鉢	"	—	(8.0)	[7.5]		付加条文(?)	"	赤褐色		"	"
1157	"	"	(11.0)	—	[11.8]		早期新縄文	粗砂	"	内一残片, 外一底	"	"
1158	"	"					早期横走縄文	粗砂、金雲母	黑褐色	内外一残片多量	"	"
1159	"	"					早期新縄文	"	褐色		"	"
1160	破片	"					雲脚無文帯	粗砂	"		"	"
1161	"	"					縞目文に刺突文を充填	"	黑色	内外面黑色处理, 外一底	"	"
1162	鉢	Ⅱ-1	—	—	[6.3]		沈線文、雲条文	細砂	褐色		第7图	"
1163	"	"					沈線文	"	"		"	"
1164	土偶	Ⅱ-1	—	—	[12.2]		下半身、渦巻状沈線文、刺突文	"	赤褐色	中空	"	"
1165	"	"	—	—	[5.3]		足、渦巻状沈線文、刺突文	"	灰白色	"	"	"
1166	"	"					手	砂	褐色		"	"
1167	"	"					足	"	灰白色		"	"
1168	"	"					新清縄文	細砂	赤褐色	残欠	"	"
1169	"	"					新、沈線文	"	"		"	"

(2) 石器・石製品

本遺跡から出土した石器・石製品のうち、フレークと図化するまでにいたらなかった13点を除く53点について述べることにする。なお、各項目毎の細分等は寺前I遺跡と共通である。

1 石鏃 (第8図、第2表P. 271、写真図版5)

第II群 有茎鏃

1類 凸基

- b 身部の形態がほぼ二等辺三角形となるもの。(1170)

3 石鏃 (第8図、第2表P. 271、写真図版5)

第II群 身部が明瞭には作り出されず、柄み部の一部を身部とするもの。

(11171)

7 不定形石器 (第8図、第2表P. 271、写真図版5)

第III群 連続する二次調整によって刃部を形成するもの。

2類 刃部が全縁には施されないもの。刃部の作り出しによって五分される。

- a 一つの側辺にのみ刃部を構成するもの。

イ 二次調整が片面からのみ施されるもの。(1172, 1173)

ロ 二次調整が両面から施されるもの。(1174)

- c 二つの刃部が直接には隣合わないもの。

ハ 二次調整が両面から施されるもの。(1175)

第IV群 縁辺の一部に挿入の刃部を形成するもの。

- 1類 挿入部分以外に刃部を持たず、挿入は片面調整となっているもの。

(1176)

第VI群 位置、長さ等が不定で部分的な二次調整がみられるものと、微小剝離痕が見られるものを一括する。二次調整は概ね1mm程度の微小な剝離である。

- 1類 直線的な縁辺に二次調整がみられるもの。(1177)

- 4類 微小剝離痕(刃こぼれ)を有するもの。(1178, 1179)

9 石斧 (第9図、第2表P. 271、写真図版5)

第I群 打製石斧

- 1類 両面調整によるもの。 (1180, 1181, 1182, 1183)
2類 片面調整によるもの。 (1184)

10 磨石・凹石・タタキ石 (第10図～第11図、第2表P. 271、写真図版5～6)

第I群 磨石

- 1類 球状をなす円盤の全面をまんべんなく使用しているもの。
(1185, 1186)

第III群 磨石+タタキ石

- 1類 棒状の亜角礫を用い、その後部を使用しているもの。
(1187, 1188)

第IV群 磨石+凹石+タタキ石

- 1類 III-①に凹みが加わったもの。 (1189, 1190)
2類 III-②に凹みが加わったもの。 (1191)

第V群 凹石

- 1類 片面・両面・側面などに各々一つの凹みを有するもの。所謂単孔式。
b 両面に一個の凹みを有するもの。 (1192)
2類 凹みが連続して作られるもの。所謂連孔式。
b 片面に一個、他の面に複数の凹みを有するもの。
(1193, 1194)

第VII群 タタキ石

- 1類 敲石 (1195)

12 砥石 (第12図、第2表P. 271、写真図版6)

第I群 置き砥石……置いて使用したと思われるもの。(1196, 1197)

第II群 手持ち砥石……小形で、手に持って使用したと思われるもの。

(1198, 1199)

第III群 特殊な砥石…使用面が溝状となるものや擦痕を有するもの。

14 石剣・石刀・石棒類 (第12図、第2表P. 271、写真図版6)

第II群 石刀 (8点) (1200, 1201)

15 石製品 (第13図～第15図、第2表P. 271～272、写真図版7～8)

第VI群 その他の石製品…形状、石材等によって細分される。

2類 軽石製石製品 (1219)

3類 円盤状石製品 (1202, 1203, 1204, 1205, 1206, 1207,
1208, 1209, 1210, 1211, 1212, 1213, 1214,
1215, 1216, 1217, 1218)

4類 隅丸長方形石製品 (1220)

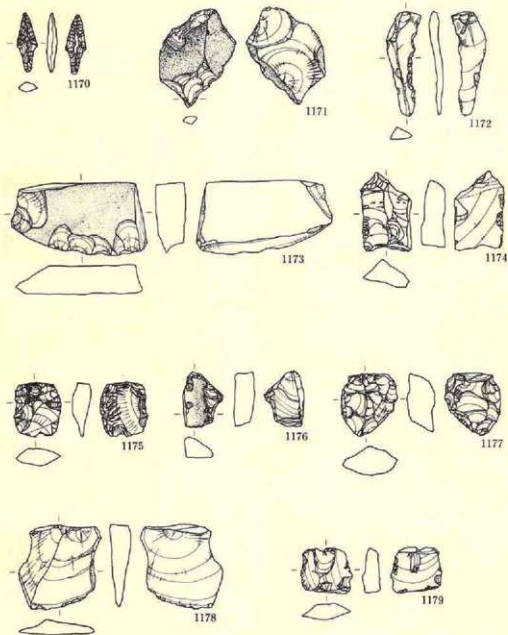
16 その他の礫石器及び礫 (第15図、第2表P. 272、写真図版8)

第II群 ストーン・リタッチャー (1221)

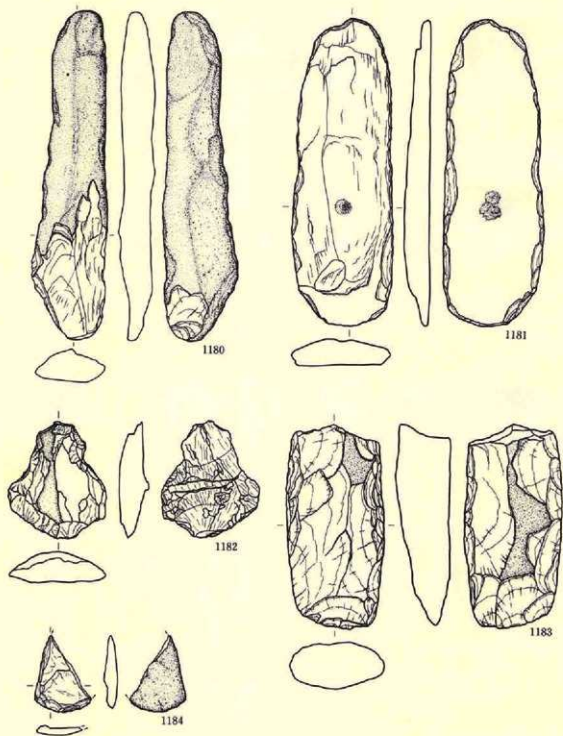
第V群 台石 (1222)

小 結

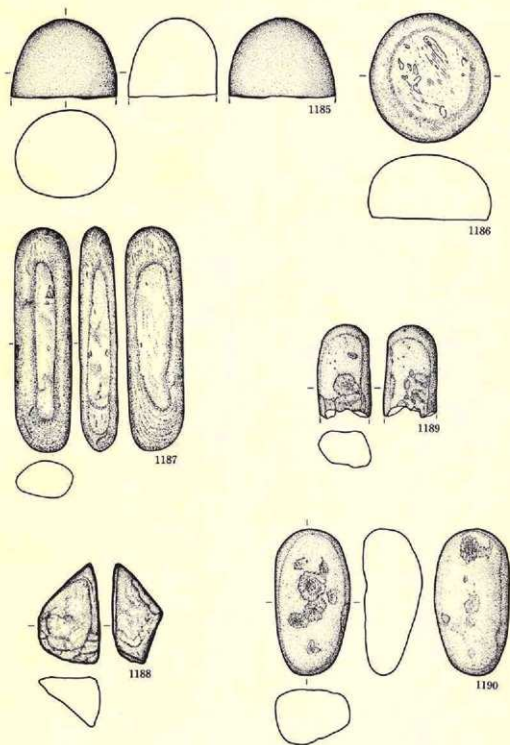
土器・土製品と同様、砂礫層の中から出土したため、小さな剝片石器は相当量が採集できなかったと思われる。したがって、数量的な検討は殆ど意味を持たないと思われる。それにもかかわらず、器種別では殆どものが出土しており、寺前I遺跡と同様多量の石器を有する文化が存在していたことを暗示している。



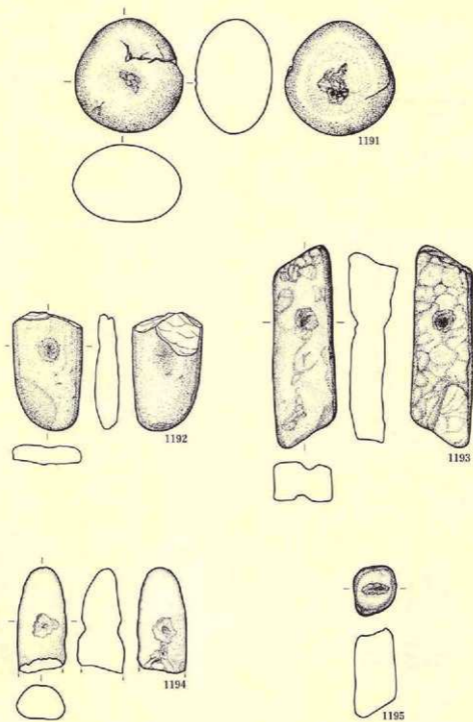
第8図 石鏃・石錐・不定形石器



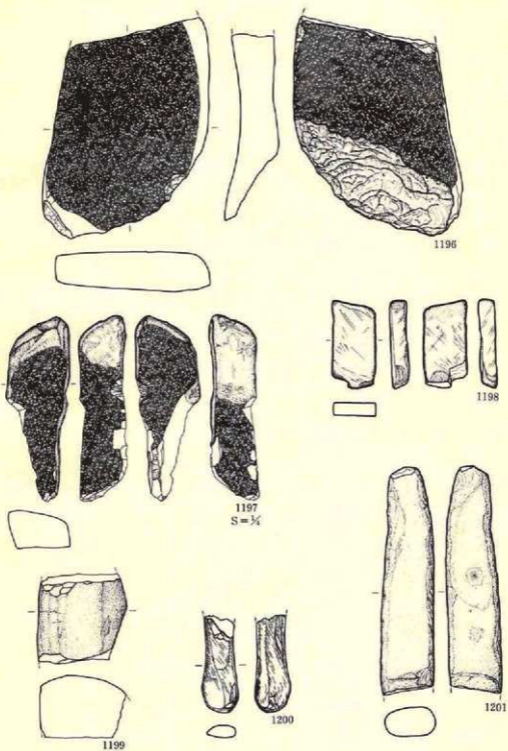
第9图 石斧第1群



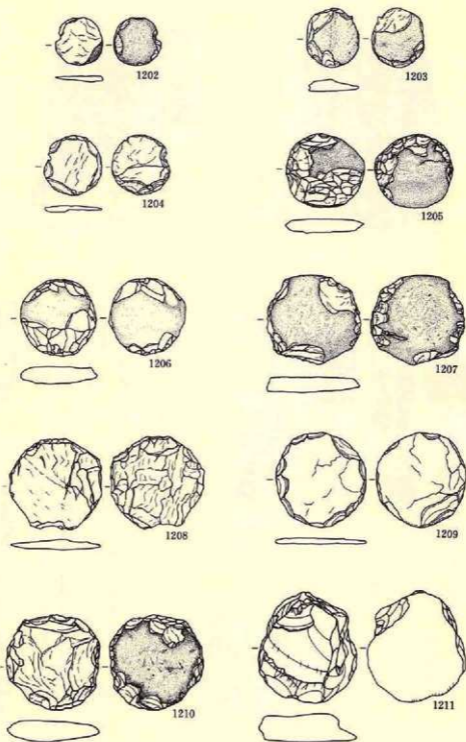
第10図 磨石類 第 I - IV 群



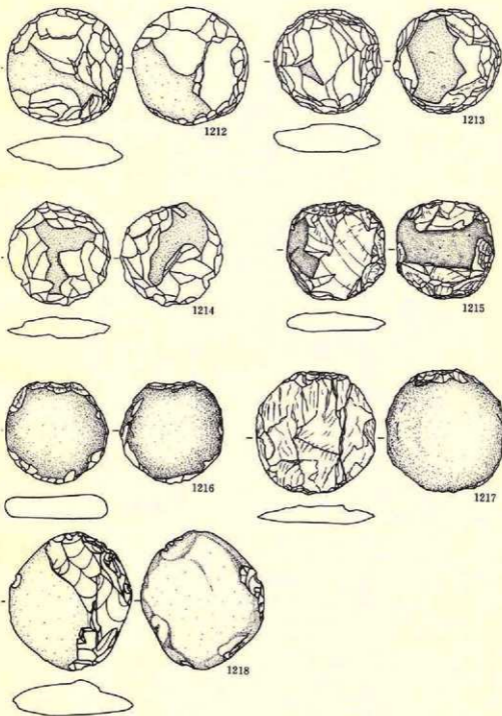
第11圖 磨石類 第IV~VI群



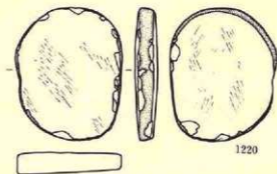
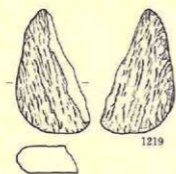
第12図 砥石 第I～II群・石剣類 第II群



第13圖 石製品 第VI群



第14圖 石製品 第VI群



第15図 石製品 第VI群・その他の礫石器

第2表 石器・石製品計測表

収番 号	遺物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況 一部 欠損	石 材	備 考	図 版 番号	写真 図版
		名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ					
1-234	1170	石鏃	II-1	3.1	1.1	0.6	1.2	○	珪質細粒凝灰岩		第8図	5
7-224	1171	石鏃	IV	5.2	4.1	1.2	19.5	○	凝灰質珪質岩		"	"
7-300	1172	不定形石鏃	III-2-a	5.6	1.8	0.7	4.9	○	チャート質粘板岩		"	"
7-202	1173	"	"	3.9	7.2	1.6	70.9	○	細砂質凝灰岩		"	"
7-40	1174	"	"	4.2	2.7	1.3	15.5	○	チャート質粘板岩		"	"
7-339	1175	"	"	2.9	2.4	1.0	7.0	○	粘板岩		"	"
7-110	1176	"	IV-1	2.9	2.1	1.1	7.3	○	チャート		"	"
19-18	1177	"	V-1	3.2	3.0	1.6	80.0	○	硬質泥質凝灰岩		"	"
7-351	1178	"	V-4	4.5	4.4	1.1	17.5	○	チャート		"	"
19-26	1179	"	"	2.4	2.7	0.9	7.3	○	硬質泥質凝灰岩		"	"
9-47	1180	石斧	I-1	38.3	8.7	4.1	1650.9	○	粘板岩		第9図	"
9-46	1181	"	"	24.5	8.0	2.2	580.0	○	"	石鏃、凹石の転用か?	"	"
9-32	1182	"	"	9.2	7.8	2.4	130.0	○	"	"	"	"
9-67	1183	"	"	16.3	7.8	4.4	710.0	○	凝灰質砂岩		"	"
9-56	1184	"	I-2	6.1	4.5	1.1	25.4	○	粘板岩		"	"
10-40	1185	磨・凹・タタキ石	I	6.3	8.5	7.1	370.0	○	アルコース砂岩		第10図	"
10-47	1186	"	"	10.3	9.6	5.2	810.0	○	花崗閃緑岩	半断面も研磨されている	"	"
10-41	1187	"	III	26.2	6.6	4.5	1470.0	○	凝砂岩		"	"
10-43	1188	"	"	8.0	5.0	4.0	160.0	○	凝灰質硬砂岩		"	6
10-3	1189	"	IV-1	7.4	4.4	3.0	130.0	○	凝灰角礫岩		"	"
10-74	1190	"	"	11.7	6.0	4.7	440.0	○	凝灰質硬砂岩		"	"
10-86	1191	"	IV-2	9.1	8.6	6.1	530.0	○	凝砂岩		第11図	"
10-78	1192	"	V-1	9.4	5.5	1.9	150.0	○	"		"	"
10-69	1193	"	V-2	16.2	5.1	4.0	470.0	○	凝灰質硬砂岩		"	"
10-72	1194	"	"	8.5	3.9	3.8	110.0	○	砂質凝灰岩		"	"
10-96	1195	"	VI-1	3.4	4.1	7.1	140.0	○	凝砂岩		"	"
12-1	1196	礫石	I	27.4	12.8	3.0	940.0	○	砂岩		第12図	"
12-3	1197	"	"	21.6	7.5	4.4	810.0	○	凝灰質硬砂岩		"	"
12-2	1198	"	II	7.0	3.5	1.6	50.0	○	白色細粒凝灰岩		"	"
12-6	1199	"	"	7.2	7.2	5.2	360.0	○	凝砂岩		"	"
9-45	1200	石鏃・石鏃類	"	7.8	2.9	1.0	30.0	○	粘板岩	研摩痕が明瞭。石製品か?	"	"
14-44	1201	"	"	18.2	4.3	2.4	280.0	○	"		"	"
13-16	1202	石製品	W-3	2.5	2.5	0.3	2.0	○	硬質泥質凝灰岩		第13図	7
13-15	1203	"	"	3.1	2.8	0.6	6.3	○	粘板岩		"	"

序号	遺物 番号	器 種		計 測 値				欠損状況		石 材	備 考	図版 番号	写真 図版
		名 称	分 類	長さ	幅	厚さ	重さ	完形	一部 欠損				
13- 4	1204	石製品	Ⅱ-3	3.2	3.1	0.3	3.4	○		千板岩		第13図	7
13- 1	1205	"	"	3.9	4.1	0.9	17.5	○		粘板岩		"	"
13-14	1206	"	"	4.1	4.0	1.0	19.5	○		"		"	"
13- 2	1207	"	"	4.8	5.0	0.8	35.1	○		"		"	"
13-17	1208	"	"	4.9	4.8	0.6	17.2	○		"		"	"
13-18	1209	"	"	5.1	4.8	0.3	8.7	○		"		"	"
13- 9	1210	"	"	5.1	5.0	1.2	37.6	○		凝灰質砂岩		"	"
13- 3	1211	"	"	5.9	5.2	1.4	55.0	○		粘板岩		"	"
13-12	1212	"	"	6.3	6.1	2.0	80.0	○		"		"	"
13- 7	1213	"	"	5.6	5.7	1.6	60.0	○		"		第14図	"
13- 5	1214	"	"	5.5	5.4	1.2	40.0	○		"		"	"
13-11	1215	"	"	5.3	5.2	1.0	40.0	○		"		"	"
13-29	1216	"	"	5.4	5.4	1.2	60.0	○		凝灰質硬砂岩		"	"
13- 8	1217	"	"	6.5	6.3	0.9	50.0	○		粘板岩	片面調整	"	"
13- 6	1218	"	"	7.4	6.5	2.0	110.0	○		"	"	"	"
13-45	1219	"	Ⅱ-4	9.9	5.9	2.2	180.0	○		アルコーヌ砂岩		第15図	8
13-59	1220	"	"	10.6	8.5	1.8	290.0	○		粘板岩	研磨痕	"	"
19- 9	1221	礎石部	Ⅲ	23.1	6.4	5.0	930.0	○		凝砂岩		"	"
19-33	1222	"	Ⅳ	30.4	14.5	8.4	6000.0	○		凝結岩	石皿か?	"	"

(3) まとめ

寺前Ⅱ遺跡は上流から運ばれ堆積した砂礫に混じって縄文時代の多量の遺物を包蔵していた遺跡である。調査面積が僅かに965㎡であり、しかもその3分の2は土取り跡や道路、小河川等で調査不能箇所であったことを考慮すれば、相対的に遺物量は多量であると言わざるを得ない。これらの遺物は現表土下30cm程から出土しはじめて、1.5～1.8mを下限として堆積している。埋没谷の層厚は不明であるが、周囲の地形の観察から考えるに本遺跡の上では比較的浅く、岩盤の傾斜はやや急に思われる。したがって、これらの遺物の供給源は比較的近いところに求められるかもしれない。このことは遺物の破損面の観察によっても裏付けられる。遺物の破損面は摩耗しておらず、また器表面にも傷を受けているものは殆どない。

寺前遺跡の範囲と性格に言及するには、今回の調査で得た資料はあまりにも部分的・限定的である。しかしながら得られた資料から次のことが考えられる。寺前Ⅰ遺跡は地形的制約から遺跡の東～東南端にあたる。その土地縁辺のうち南面するところには縄文時代晩期のはじめの頃の居住空間が、北側には前期のはじめ頃、北～北西にかけては後期中頃から終り頃までの居住空間が想定された。寺前Ⅱ遺跡の北～北西には晩期の終り頃が、そしてそこよりもやや奥まった所かまたは東南に前期の終り頃が想定される。また、寺前Ⅱ遺跡の北約100m程の所の畑地からは後期を中心とする遺物が多数発見されている。以上のことを総合してみると寺前遺跡は縄文時代の各時期を通じて時期毎に居住する場所を若干替えながらも堂々として人々が生活を営んできた所であったと思われる。このように考えるとき今回の調査では確認されなかった縄文時代中期の居住空間もこの近辺へ求められ、今後の調査を待つことにしたい。

寺前Ⅰ遺跡から出土した石器にも見られたことであるが、本遺跡から出土した石器にも二次使用されたと考えられるものがある。1181はその典型である。石斧としての使用が主たるものか、砥石であったのか、あるいは凹み石であったのか詳細は不明である。1201も同様である。1200は砥石であるのか、別の石製品であるのか不詳である。あるいは1198や1199は果して縄文時代のもものと認定してよいか躊躇するものもある。それにもかかわらずそれらを敢えてここに報告したのは言わば「雑多な遺物」に対する重要性を意識したからに他ならない。今後の資料を蓄積して行く上で何らかの一助となれば幸いである。

3 近世以降

近世以降に属する遺構は民家跡と井戸跡である。遺物は「寛永通寶」2点である。

民家跡（第16図～第17図、写真図版8～9）

民家跡は表土直下で確認された。カマドないし炉を構築していた石の一部は露出していたものである。民家跡を構成する個々の遺構は土間、カマド、焼土遺構、柱穴状土坑である。

土間

一部は調査区外となるため形状・規模等不明な点がある。土色は地山の黒色土と同じであるが、硬く締まっており比較的容易に区別できる。一辺が4m弱の方形か、または長方形である。中央部ほど硬く締まっており周辺は若干軟らかくなる。土間の西側に1～2cm程溝状にくぼむ所がある。数カ所に淡い焼土が形成されている。比較的強く焼けている2箇所を図化しておいた。しかしながら断面図を作成できるほどの層厚には達していない。土間の東側に形成された焼土付近から1223の古銭が出土した。

カマド・焼土遺構

カマドは上部の本体は完全に破壊され消滅していたが、燃焼部の掘り込みは残っていた。燃焼部は地面を60cm程掘りくぼめ、西側の半分には20～25cmの川原石を3段に重ねて埋置し、東側には1段のしかも2個だけが確認された。底部には赤ないし白っぽくなった赤橙色の硬い焼土が形成されている。平面形はやや横長の円形で、直径80cm程である。カマドは土間の隅に設けられたものである。

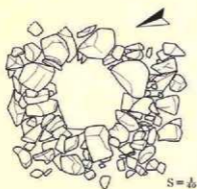
カマドの1m程西側に若干低くなった所に焼土が検出された。焼土も淡くしっかりした掘り込みも見られずカマドとは考えられない。焼土の広さは約1.8m、幅1.2mである。この焼土遺構の南西60cm程の所にも同様の焼土遺構が見られる。この両方の焼土遺構の周りには小さな角礫が多数囲むように見られる。しかし角礫は加熱を受けていない。また埋置したようにも見られない。この焼土遺構は現表土の10～20cm下位であることも考慮し本民家跡に共伴するものかどうか判断を保留したものである。もしも供伴するものであるなら炉の可能性も考えられる。この焼土遺構付近から1224の古銭が出土した。

柱穴状土坑

土間の東側に1基検出された。開口部はほぼ90cmの方形で、検出面からの深さは30cmであるが、本来は40cm程あったと思われる。底部に4個の亜角礫が囲まってあり、根固め石と思われる。このことから柱痕跡は確認されなかったが掘立柱の土坑と考えられる。

礎石建物跡

本民家跡の遺構の下20cm程下げた面から大きな扁平な石が4m程の間隔を持って同一レベル



第16図 井戸跡と近世の遺物

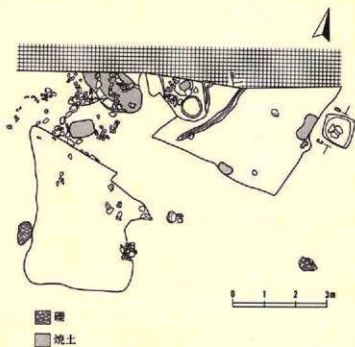
で一列に検出された。中の1個は使用していた重機によって重さ、正確な位置を測定することはできなかった。西端の石がある所を中心に整地層が見られることなどから本民家跡に先行する礎石建物跡の礎石と考えられる。

井戸跡（第17図、写真図版9）

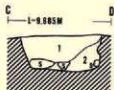
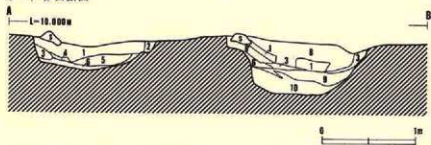
井戸跡は民家跡の土間の端から約7 m東に位置する。石積みみの井戸で内径が約80cmの円形である。この井戸は昭和まで使用されていたと言われている。現在は近くを流れる小川がより井戸の近くに流れを変えたため、小川からの浸透が激しく掘り下げることが出来なかった。したがって全容は不明である。

まとめ

検出された民家跡は明治18年に焼失したと言われている吉田栄喜氏の旧宅跡である。当時の図面が残っていないことと調査したのが建物跡の一部であること等から全容は明らかに出来なかった。しかし、土間とカマドの向きからほぼ東向きに建てられたものであること、掘り込みが見当たらないことから礎石建物であったと考えられる。カマドからは離れた所に複数の焼土が形成されていたことは焼失したとの冒伝えを裏付けたものであろう。また、その民家に先行する礎石建物があり、その建物の軸線は若干異なっていること等が判明した。



カマド・炉跡断面

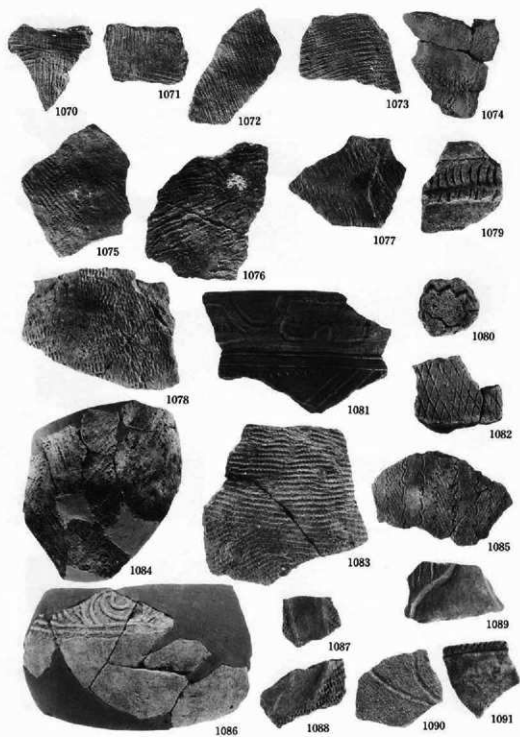


1. 10YR写と灰黒褐色土と褐色土の混土
2. 10YR写、黒褐色土

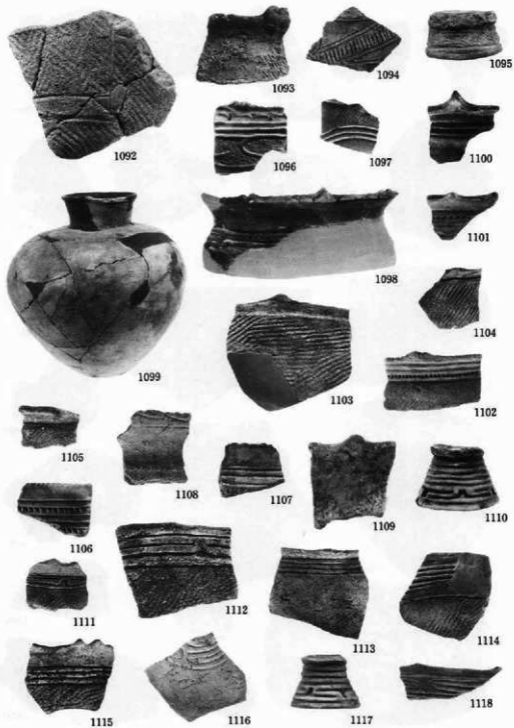
1. 2.5YR写、赤褐色と10YR写、にぶい黄褐色の混土
2. 2.5YR写、にぶい黄褐色
3. 10YR写、黒褐色土
3. 10YR写、黒褐色土
5. 10YR写、2.5YR写、10YR写の混土、炭含
6. 炭と2.5YR写、極暗赤褐色の混土
7. 10YR写、黒褐色土(地山)小石、ストレート含
8. 10YR写、にぶい黄褐色土
8. 全体に赤色化している
9. 2.5YR写、極暗赤褐色
10. 10YR写、灰黄褐色

第17図 近世の民家跡

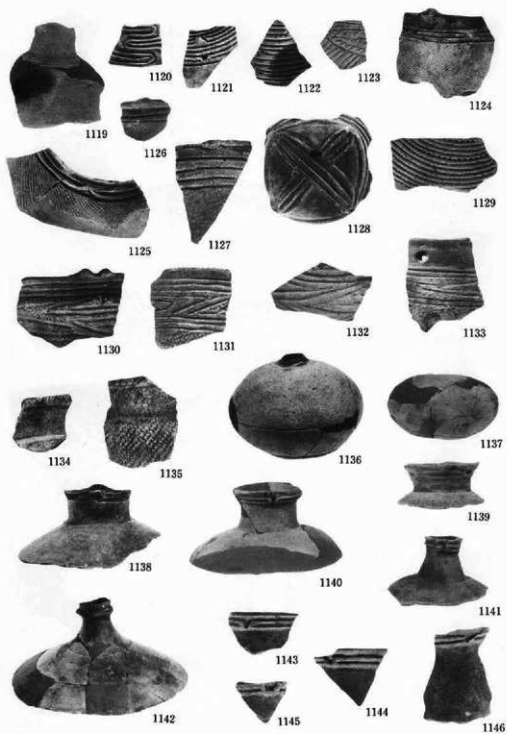
写 真 图 版



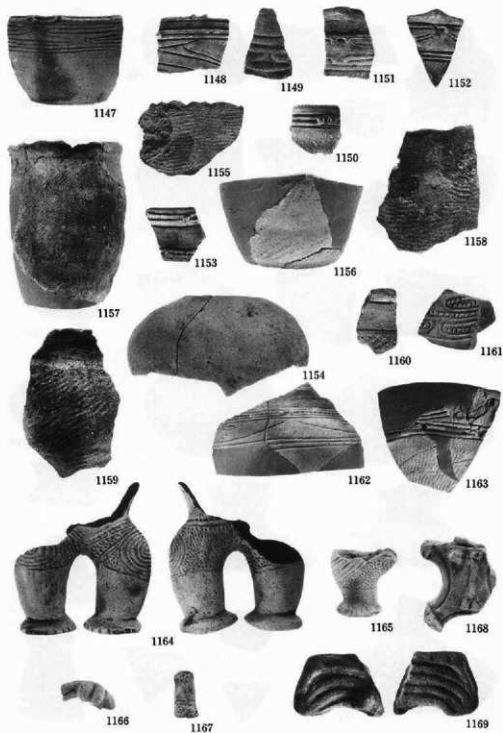
写真图版1 第I~IV群土器



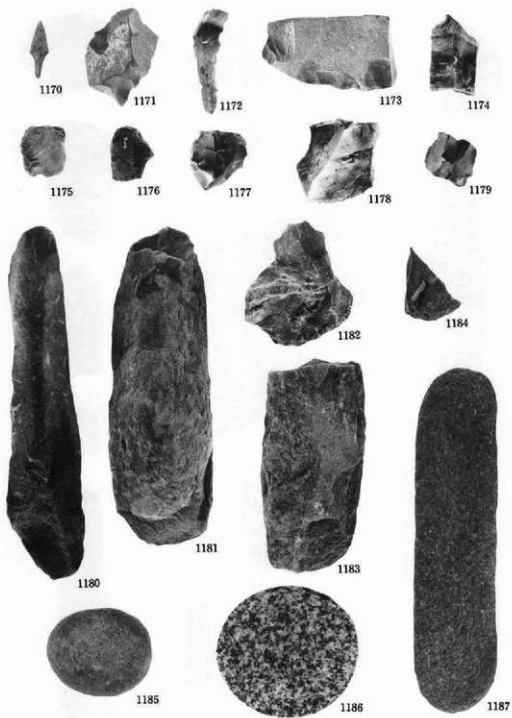
写真図版 2 第Ⅳ～Ⅴ群土器



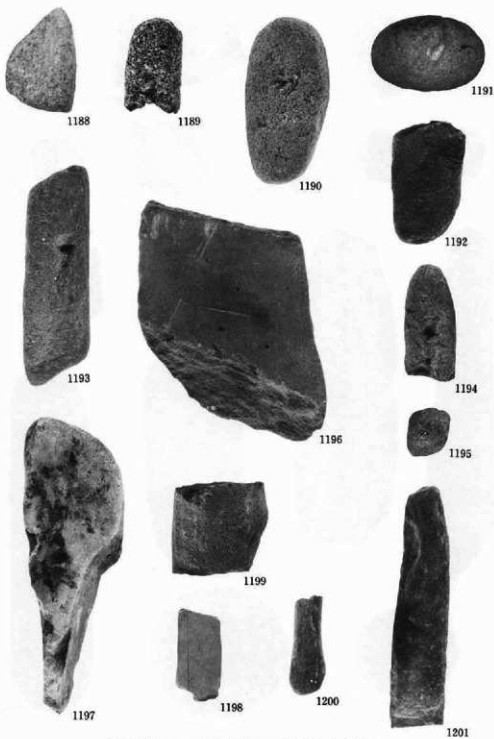
写真図版 3 第V群土器



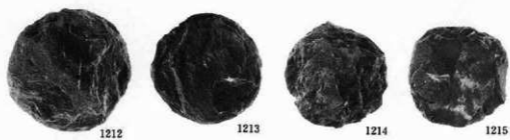
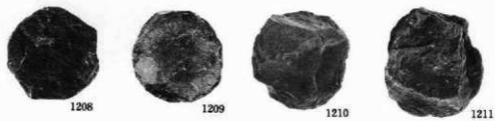
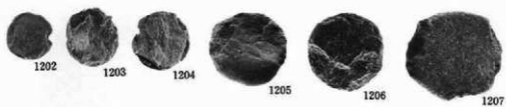
写真图版4 第V~VII群土器



写真図版 5 石鏃・石錐・不定形石器・石斧
磨石・凹石・タタキ石



写真図版 6 磨石・凹石・タタキ石・砥石
 石剣・石刃・石棒類



写真図版7 石製品



1219



1220



1221



1222

写真図版 8 石製品・その他の礫石器



住居跡



カマド跡



井戸跡



調査風景

写真図版 9 民家跡・井戸跡

VI 片^{かた}地^ぢ家^や館^{たて}跡

所在地 陸前高田市矢作町字諏訪48ほか
委託者 岩手県土木部 大船渡土木事務所
発掘調査期間 昭和63年4月11日～5月31日
整理期間 昭和63年12月1日～平成元年1月31日
調査対象面積 1,595㎡
発掘調査面積 1,595㎡
遺跡番号・略号 NF66—0103・KJ—88
調査担当者 中川重紀・遠藤 修
協力機関 陸前高田市教育委員会

1. 検出された遺構と遺物

本遺跡は遺跡名の通り中世の館跡ということで調査を行う事になった。調査の結果、平場状に見られた部分は採掘をした際に形成されたものであり、調査区外においても堀割りなど館に付随する遺構が見つからない等、館であるための証左は得られなかった。代わりに調査区のA～G区にかけて採掘による掘り返しが幾度となく行われていることが確かめられた。

検出した遺構は、調査区全体が採掘跡の一つの遺構として扱っても良いものであるが敢えて上げるならば、ある程度規模の分かる採掘跡10箇所以上と調査区外に延びる神社跡1箇所である。なお、略報では採掘跡6箇所、土坑5基として報告したが、土坑は検討した結果、小規模な採掘跡である事が判明したことから本報告では採掘跡として扱うこととする。出土遺物は縄文時代から弥生時代にかけての土器、石器と近世以降の古銭が出土している。

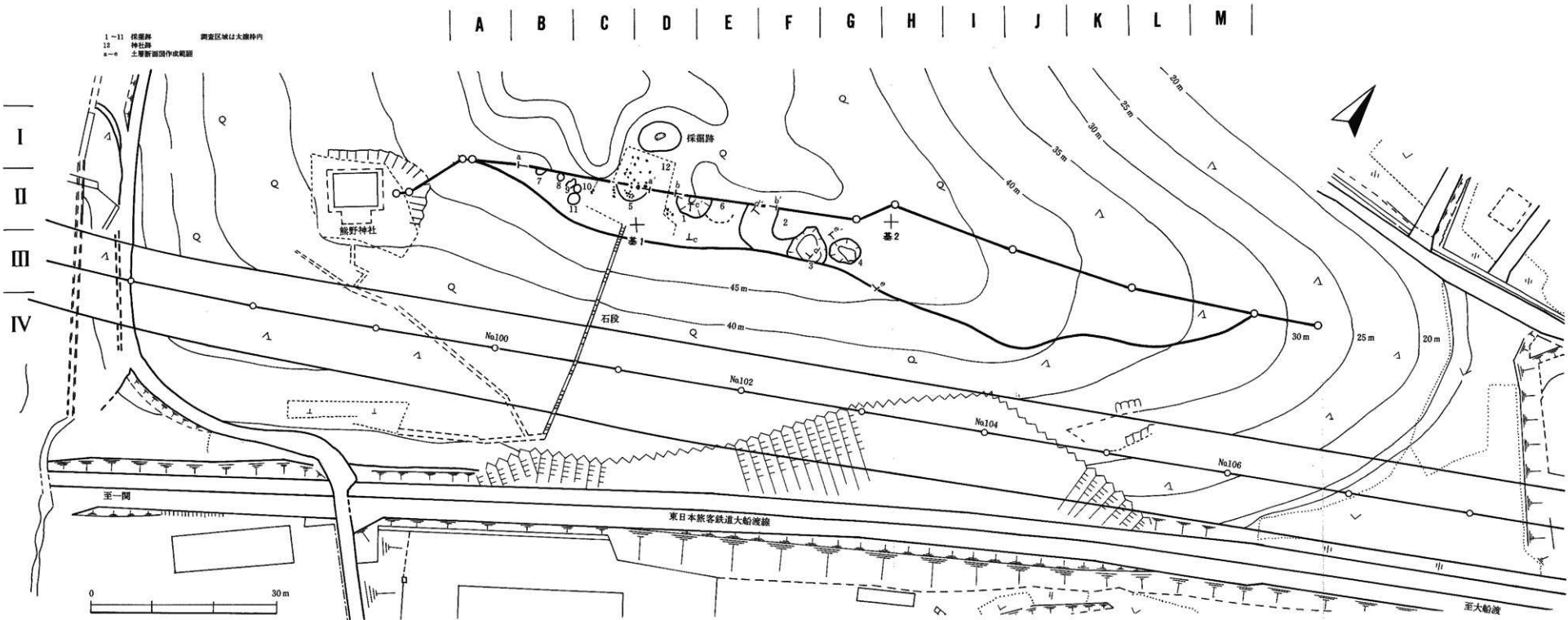
1) 遺構

採掘跡 (第1～4図、写真図版1・2)

調査区のほぼ全域が粘板岩の岩盤まで掘り込まれており、採掘跡として捉えられるものであるが、中でも調査区A～G区に、規模が大概分かるものが10箇所ほど見られ(第1図)、その内1～4号とした採掘跡は調査前から摺鉢状に地表面が窪んで見られた。これらの規模は現表土面1、3、4号が直径5～6m、深さ2m前後で、2号が直径約10m、深さ2m程であった。5～11号とした採掘跡は表土層を剥いだ面で検出した。規模は5号が直径約4.50m、深さ2m、6号が直径約2m、7～11号が直径約1～2m程である。平面形は1～4号が円形ないし楕円形状に見られたが、最終的に形態は掘り進めていく過程の中で、捉える事が出来ず、しかも調査区外に延びているため分からなかった。5号は岩盤の状況から溝状、6～11号は円形ないし楕円形状のようであるが、何れもその輪郭を明確に捉えられなかった。埋土は基本土層のII～IV層に粘板岩の破砕片や炭化物粒が混入しているもので構成され、堆積状況から、他の部分を掘り進めていく過程で投げ捨てられ、再堆積したものである。これら採掘坑は規模の大小があるが何れも岩盤まで掘り込んでいるもので恐らく調査区全域を幾度も掘り返している。特に1～4号採掘跡では一度埋め戻された部分を更に掘った結果、窪地が出来たと考えられる。出土遺物は採掘跡に関連するものはないが、縄文時代から弥生時代の土器、石器が埋土中から出土している。

神社跡 (第5図、写真図版2)

調査区のC、D区で粘板岩の礎石の一部が調査区に検出された。主屋の殆どは北側の調査区外に礎石や朽ちた建材の一部が露呈して見られた。この神社跡は残された礎石から、採掘跡を



第1図 グリッド・遺構配置図



1号採掘跡(南北断面)

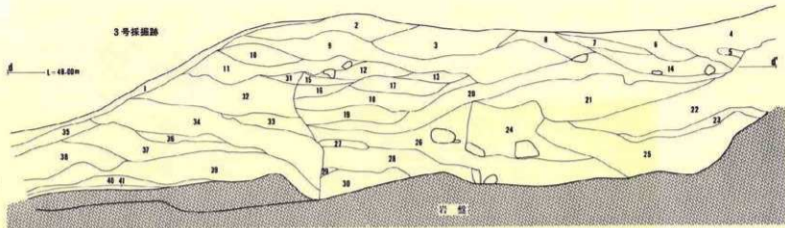
1. 表土、腐植土
2. 7.5VR%、明褐色、粘土質、粘土粒混入
3. 7.5VR%、明褐色、細かい土、大の石入る
4. 7.5VR%~%、褐色、細かい土、黒褐色土が入る
5. 7.5VR%、明褐色、小石多入る、粘土質
6. 7.5VR%、明褐色、5層と同じ
7. 7.5VR%~%、明褐色、大、小の石を多く含む
8. 7.5VR%~%、褐色、粘土質で褐色土が入る
9. 5VR%、暗赤褐色、粘性の強い土、大きい石混じる
10. 7.5YR%~%、明褐色、粒になっている層、丸石混入
11. 7.5VR%褐色~与暗褐色、粘土質の層
12. 7.5VR%、褐色、粘土質の層、丸石を多く混入
13. 7.5VR%、明褐色、細かい土の層、小石や粘土粒混じる
14. 7.5VR%、暗褐色、粘土質との混合、大の丸石混入
15. 7.5VR%、褐色、気泡に小石が混じる、やわらかい層
16. 7.5VR%、褐色、粘りがあつ、かたい、小石多入る

南北断面



1号採掘跡~2号採掘跡(東西断面)

1. 表土、腐植土
2. 7.5VR%、明褐色、まかく粒のよりに混れる
3. 7.5VR%~%、褐色、小石混じり、5cm位の石が2層より多い
4. 7.5VR%、明褐色、細かい土の層、石片や丸石が僅かに混入
5. 7.5VR%、褐色、砂質や粘土質との混合
6. 7.5VR%、暗褐色、明褐色の土
7. 7.5VR%、褐色、暗褐色の土(粘土質混入)
8. 7.5VR%、褐色、小石や砂石が10%位入っている
9. 石片、薄い石片や小石混じりのかたい層
10. 7.5VR%、明褐色、粘土質の層、5cm位の角石混じり
11. 7.5VR%、褐色、砂質と粘土質の混合層、石片が多い
12. 7.5VR%、褐色、粘土質でかたい
13. 7.5VR%、褐色、粘土質でかたい
14. 7.5VR%、暗褐色、粘土が多くなっている
15. 7.5VR%、明褐色、黒褐色の土との混合、小石混じり
16. 7.5VR%、明褐色、砂質や粘土粒が入りかたい
17. 7.5VR%~%、明褐色、粘土質の上混じり
18. 7.5VR%、暗褐色、粘土質の上混じり、かたい
19. 7.5VR%~%、褐色、かたい、丸石混入
20. 7.5VR%、褐色、明褐色の土、石片や小石混入
21. 7.5VR%、褐色、かたい層で砂粒や粘土粒多く入る
22. 7.5VR%、灰褐色、細かい粒の土の層
23. 7.5VR%、浅黄褐色、サラサラした細かい層
24. 7.5VR%、褐色、暗褐色との混合土
25. 7.5VR%、明褐色、粘土質の土
26. 7.5VR%、褐色、暗褐色の土や粘土質の上でかたい
27. 7.5VR%、明褐色、細砂質で石片、粘土質の塊混入
28. 7.5VR%、明褐色、粘土質の土、かたい
29. 7.5VR%、暗褐色、細かい土、まろかい
30. 7.5VR%、明褐色、粘土質の上、風化した砂岩混じる
31. 7.5VR%、褐色、ややかたい土の層、石片や丸石混入
32. 7.5VR%、明褐色、粘土質、混りを含む、かたくしまっている
33. 7.5VR%、褐色、粘土質、粘土粒や粘土粒を多く入る
34. 7.5VR%、明褐色、粘土粒、石石混じる
35. 7.5VR%、明褐色、3層より大きい石片入る
36. 7.5VR%、褐色、明褐色、暗褐色土との混合
37. 7.5VR%、褐色
38. 7.5VR%、暗褐色、細かい土、粒くまかい
39. 7.5VR%、明褐色、かたい粘土質、砂質が入る
40. 7.5VR%、褐色、砂、粘土質
41. 7.5VR%、明褐色、粘土質の層
42. 7.5VR%、明褐色、粘土質、小石混じる
43. 石層、10~20cm大
44. 7.5VR%、明褐色、粘土粒の層
45. 7.5VR%、暗褐色、まかく、しまりなし
46. 7.5VR%、褐色、粘土粒混入
47. 7.5VR%、明褐色、粘土質の層
48. 7.5VR%、暗褐色、まかい、サラサラの土
49. 7.5VR%、褐色、まかい石片が入っている
50. 7.5VR%、明褐色、塊中心の混合層
51. 7.5VR%、明褐色、塊中心の暗褐色土が混入
52. 7.5VR%、明褐色、粒の土の層
53. 7.5VR%、明褐色、粘土質の土、粘土塊入る
54. 7.5VR%~%、明褐色、粘土の塊多入る混合土
55. 7.5VR%、明褐色、小石、石片が多くなる
56. 7.5VR%、褐色、粘土塊、石片、小石が混じる
57. 7.5VR%、褐色、砂質の塊の多い層
58. 7.5VR%、褐色、土の塊、石片を多く含む
59. 7.5VR%、明褐色、粘土質の土、かたい
60. 7.5VR%、褐色、明褐色の粘土粒が多くなる
61. 7.5VR%、褐色、小石を多く混入
62. 7.5VR%、明褐色、粘土粒、小石が多くなる

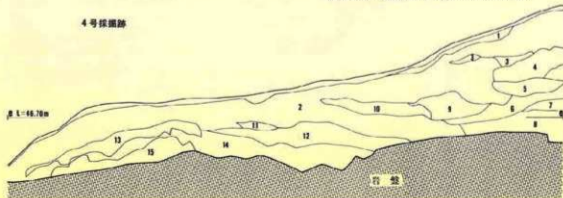


4号探掘跡

1. 7.5VR% 明褐色、小石混入
2. 7.5VR% 明褐色、粘土の塊、小石が混入
3. 7.5VR% 暗褐色、粘土層、土層が少し混じる
4. 7.5VR% 褐色、僅かに小石混入
5. 7.5VR% 暗褐色、極めて細かい土の層、小石混入
6. 7.5VR% 褐色、暗褐色土が混じる層
7. 7.5VR% 明褐色、薄いい石が多く有
8. 7.5VR%-%。

9. 岩層
10. 7.5VR% 褐色、粘土の多く混入、粘性有
11. 7.5VR% 褐色、暗褐色土層、小石混入
12. 7.5VR% 褐色、粘土粒多く、単一層
13. 岩層
14. 7.5VR% 褐色、上土岩の層
15. 7.5VR%-%、明褐色、柔らかい岩の層

4号探掘跡



3号探掘跡

1. 表土層(腐植土)-腐植土
2. 7.5VR% 黄褐色、田舎土がブロック状に残る
3. 10VR% 明褐色、混合、明褐色土の混合土層、岩が混じる
4. 7.5VR% 明褐色、木根や小石混入
5. 10VR% 明黄褐色、石、塵多
6. 10VR% 褐色、明褐色、黄褐色の混合土、炭化物を微量に混入
7. 10VR% 褐色、塵層と薄い
8. 10VR% 褐色、大きい塵多
9. 7.5VR% 褐色、小礫層
10. 7.5VR% 暗褐色、粘土の粒子が僅かに入る
11. 7.5VR% 黄褐色、粘土質、小石混入
12. 10VR% 褐色、かたい、石含む
13. 10VR% 明褐色、柔らかい
14. 7.5VR% 褐色、黄褐色土がブロック状に入る、小礫有
15. 7.5VR% 褐色、柔らかい
16. 7.5VR% 褐色、柔らかい、黄褐色土がブロック状にある

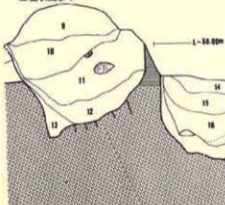
17. 7.5VR% 褐色、粒子が細かい
18. 10VR% 暗褐色、粘土が細かい、11層が混入
19. 7.5VR%-%、明褐色、褐色、黒褐色土が部分的に混じる
20. 10VR% 黄褐色、6層土の混合土、黄褐色土のブロックが見られる
21. 10VR% 褐色、黄褐色土がブロック状に混入、硬さあり
22. 10VR% 褐色、硬さ層下に有り
23. 7.5VR% 黄褐色、2層と同じ
24. 10VR% 暗褐色、石が割れに入っている
25. 10VR% 明黄褐色、石層が多い
26. 7.5VR% 褐色、14層と同じ
27. 7.5VR%-%、極暗黄-黒褐色
28. 7.5VR% 褐色、砂と塵の混入土
29. 7.5VR%、黄褐色、褐色土混入
30. 7.5VR% 褐色、黒褐色土混入、砂粒状に空いている
31. 7.5VR% 明褐色、暗褐色土混入、小石混入
32. 7.5VR% 明褐色、粘土層、暗褐色土の粘土全体に混入
33. 7.5VR% 褐色、明褐色の粘土質の土が多く混入、小石が入る
34. 7.5VR% 暗褐色、角のある石が入る、粘土の粒も多く有
35. 7.5VR% 暗褐色、石、粘土粒の混じりかたない土の層
36. 7.5VR%-%、褐色、粘土粒混入、小石も有
37. 7.5VR% 明褐色、粘土の割合が多い層
38. 7.5VR%、にじみ褐色、赤土に小石、粘土粒が入る
39. 7.5VR% 褐色、小石混入
40. 7.5VR% 黄褐色、黄褐色土
41. 硬結された岩

1 L-58.10m B区断面



1. 棕色、7.5YR5-7%、基本土層中、Vと2層が半層を合んで置ける
- II. 黒褐色、7.5YR7%、砂状土で腐植土が混じる
- III. 褐色、7.5YR7%、黒褐色土が部分的に混入
- IV. 褐色、7.5YR7%、粘性土

土量状高まり



24. 赤褐色、5YR6%、明褐色の粘土、砂利が全体に混じる
25. 暗褐色、7.5YR7%、やわらかい層、底部に小石が入る
26. 褐色、7.5YR7%、明褐色の粘土層や小石が混入
27. 褐色、7.5YR7%、黒褐色土混入
28. 腐植(黒)色、7.5YR7-7%、やわらかい層
29. 明褐色、7.5YR7%、砂のやわらかい層
30. 明褐色、7.5YR7%、河原石、若干が混入している
31. 赤褐色、5YR7-7%、石、9層の色がもろ入っている
32. 褐色、7.5YR7%、砂や粘土混入
33. 褐色、7.5YR7%、明褐色の粘土層

- V. 腐-明褐色、7.5YR5-7%、粘板石の砂片等が混入
- VI. 暗褐色、粘板石
1. 暗褐色、7.5YR7%、粘土質の褐色土混入
2. 褐色、7.5YR7%、粘土の砂子の層、小石混入
3. 褐色、5YR5-7%、粘土混層、小石混入
4. 褐色-明赤褐色、5YR5-7%、粘性、小石混入
5. 明褐色、7.5YR7%、粘性、小石混入
6. 明褐色、7.5YR7%、粘土質、小石混入
7. 腐-明赤褐色、5YR5-7%、粘土質
8. 暗腐-明褐色、7.5YR5-7%、粘土質
9. 褐色、7.5YR7%、腐土
10. 砂片(石)層
11. 褐色、7.5YR7%、明褐色の粘土混入

12. 明褐色、7.5YR7%、岩片と土の半々の層
13. 明赤褐色、5YR6%、粘性、小石混入
14. 暗褐色、7.5YR7%、土の細かい層(表土)
15. 明褐色、7.5YR7%、全体に細かい岩片が混入、やわらかい層
16. 褐色、7.5YR7%、しまりのない層、微、小石入る
17. 暗褐色、7.5YR7%、細かい層
18. 土に赤褐色、5YR7%、3.10層の混合層、小石、砂と細かい砂子の粘土混入
19. 明赤褐色、5YR6%、粘土質、岩片、小石混入
20. 赤褐色、5YR6%、7%、明褐色の粘土層が全体に入る
21. 明褐色、7.5YR7%、河原の砂の層、石混入
22. 明褐色、7.5YR7%、砂利、丸石混入、粘土質層
23. 暗赤褐色、5YR6%、赤褐色の粘土混入、粘性

5号採掘跡(神社跡の下位)

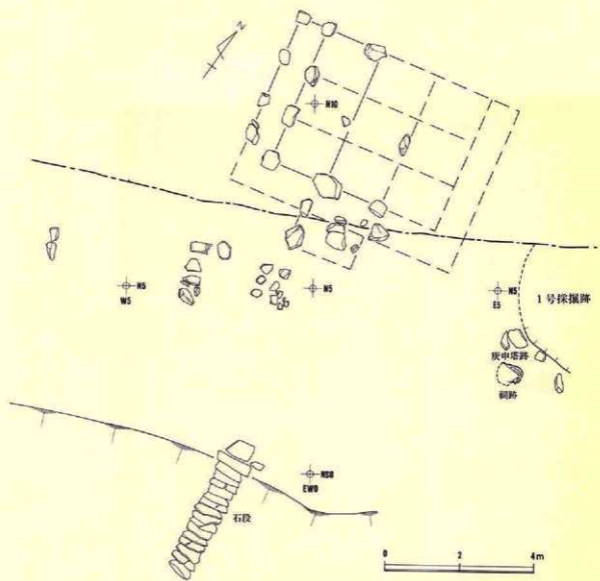


34. 明褐色、7.5YR7%、細かい土の層
35. 明赤褐色、5YR6%、粘土上、小石混入
36. 暗腐-褐色、7.5YR5-7%、粘土質土、かたい
37. 褐色、7.5YR7%、細かい土層
38. 明褐色、7.5YR7%、2層と同じ、小石混入
39. 暗褐色、7.5YR7%、褐色の粘土上や暗褐色土混入
40. 明褐色、7.5YR7%、細かい土の層
41. 明褐色、7.5YR7%、粘土の塊の層
42. 褐色、7.5YR7%、砂の土層、下部に砂片、上部に小石入る
43. 褐色、7.5YR7%、粘土と砂子の塊

44. 暗褐色、7.5YR7-7%、上記2層と同じ
45. 暗褐色、7.5YR7%、細かい土の層
46. 褐色、7.5YR7%、7%、粘土質、小石混入
47. 褐色、7.5YR7%、5-7%、3層との混合層



第4図 B・C区土層断面図



第5図 神社跡

避けて建てられた四角い建物と見られ、3間×3間の主屋に西側と南側、東側に回廊が付くようであり、正面中央部分に階段があるようである。神社の参道は山裾から粘板岩製の石段が斜面を上りきった部分まで見られ、石段から社殿正面までは約5m程ありその前庭部分の東側に供養碑を祭った祠跡があり、一部は現在道路用地にあるため村社に移転したそうである。西側にも石列が見られる事から何らかの人工物があつたと考えられる。建物の規模は東西の柱間が1間1.60m、南北が1間1.30m、回廊が0.80m幅である。この神社は江戸時代に、矢作村の住民が諏訪神社に参詣してきた際に建てたようであり、終戦後のアイオン台風の時に倒壊したそうである。また、元文五年(1740年)の銘がある皮申塔から、その頃に創建されたと考えられる。出土遺物は、周辺から現代の貨幣に混じって、寛永通寶が出土している。

2) 遺物

出土した遺物は、縄文時代から弥生時代にかけての土器、石器と近世以降の古銭である。

土器(第6図、写真図版3)

土器は殆どが摩滅や剝落が著しく、掲載できたものは19点である。縄文時代の土器は中期(第III群土器)と晩期(第V群土器)であり、他には弥生時代の土器(第VI群土器)である。

第III群土器(第6図-1~12)

縄文時代中期初頭から末葉までのものである。

1~12のうち4と8の土器を除いた他の土器は何れも深鉢形土器の破片である。1は口縁部破片で、幅3~4mmの篋状工具で横位に荒い整形を施して、その施文が沈線状に見られる。口唇部は角張り、平坦である。2、3は口縁部破片で、縄文LRが2では2条、3では1条が押圧されている。また、3では先の細い棒状工具で沈線が施文されている。2、3とも口唇部は丸い。4は小型の土器の口縁部破片で、口縁直下に1条の幅広の沈線、さらにその下位に幅の狭い沈線を平行に2条施文し、沈線間は隆帯となっている。沈線より下位に斜縄文RLらしきものを施文した後に弧状の沈線を2条施文している。5は口縁部の破片で、隆帯で渦巻き状の文様が施文されている。6は細い波状を呈する口縁部破片で無文地に口縁直下に隆帯を巡らしている。7はキャリパー形深鉢のキャリパー部分で無文地に細い平行沈線が2条とボタン状の粘土粒が貼付されている。8は鉢形土器の破片で最大径部分に隆帯を巡らしそれより上方では無文地に細い沈線を横位に数条施文している。胴部には縄文RLを施文後に隆帯で文様を施文している。9は胴部破片で表面が擦れており良く見えないが縄文LRを施文後に粘土紐による隆帯で文様を構成し、隆帯に沿って沈線が施文されている。10~12は胴部破片で曲線的な縄文帯や無文帯が施文されているものであり、無文帯と縄文帯は浅い隆帯によって区画されている。縄文は11がLR、10、12がRLである。これらの土器は1~4が縄文時代中期初頭の大木7式

に、5～9が中葉の大木8～9式に、10～12が末葉の大木10式に相当するものであろう。

第V群土器（第6図—13、14）

縄文時代晩期の土器で、2点が出土した。

13は壺か注口土器の破片である。文様は雲形状の文様が浮彫り風に施文され沈線が1条見られる。文様部には縄文LRが施文されている。14は鉢形土器の口縁部破片で、文様は沈線で表現されている。口唇部には棒状工具による側面押圧が施されている。縄文は文様帯より下位に縄文LRが施文されている。小破片のため良く分からないが文様の特徴から晩期中葉から末葉と考えられる。

第IV群土器（第6図—15～19）

弥生時代の土器で、出土量は少ない。

何れの土器も小破片のため器形は良く分からないが鉢か壺の破片と考えられる。15は無文地に不規則な沈線が施文されている。16は縄巻き縄Lによる側面圧痕と撚り糸文が施文されている。17は軸巻きの撚り糸文Lが施文されている。18は縄文RLが糸が横になるように施文され、その後表面を撫でている。19は底部破片で撚り糸文Lが底部近くまで施文されている。これらの土器は天王山式土器に類似する。

石器（第7～12図、写真図版4～6）

石器は主に縄文時代のものであり、掲載した57点の他には剥片やチップ類が出土している。器種としては、石鏃、石匙、削器、石錐、楔形石器、打製石斧、凹石、敲石、磨石、石剣状石製品、石皿、円盤状石製品、石錘である。

石鏃（第7図—1～13、写真図版4—1～13）

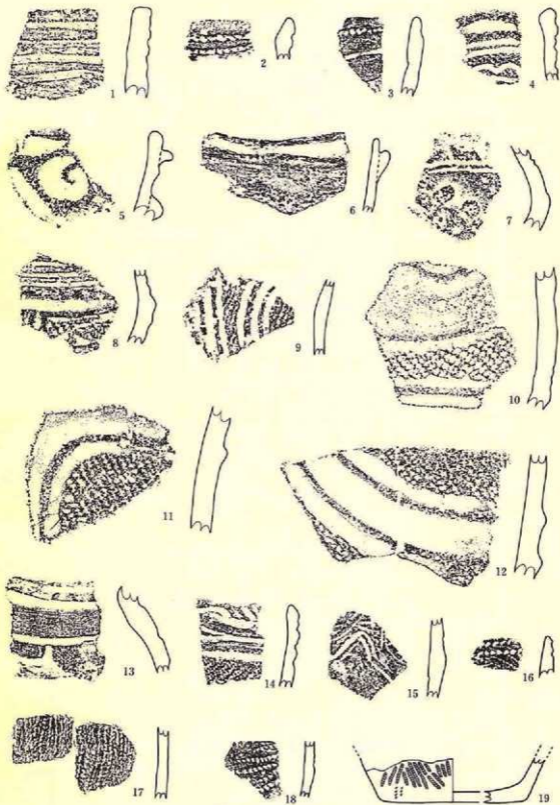
13点出土した内、完形ないし完形に近いものは1～6、9と13の8点である。他は先端部や基部が欠損している。これらは基部の形状から有茎のもの12と無茎のもの1～11、13のものに分けられる。無茎のものは更に基部の抉りの度合いが浅いもの（1～3）と深いもの（4～7、10、11）それに若干尖っているもの（9、13）に分けられる。8は欠損のため基部形態は不明である。12は基部の形が変わったもので両側縁に抉りを入れて基部を作りだし、基部には更に強い抉りを入れ凹基式状になっている。1～11、13が縄文時代、12が弥生時代と思われる。

石匙（第7図—14、写真図版4—14）

横長の石匙で縦長剥片の左側縁の上方に寄った位置につまみが付いている。周縁が幾らか調整されているが刃部の作りは粗雑である。

削器（第7図—15～18、写真図版4—15～18）

縦長や横長の剥片の周縁に細かい剝離が見られるものである。形状から15は石匙に18は楔形石器に見られるものである。



第6图 土器 S=1/2

石錘 (第8図—19・20、写真図版4—19・20)

19は剥片の一部の突きでた部分に調整剝離を加えて錘としたもの、20は形態から石錘のつまみ部分と思われるもので、表裏面に調整剝離が見られる。

楔形石器 (第8図—21~25、写真図版4—21~23)

21~23のものが断面が楔状のもので、剥片の上下両端に微細な剝離痕が見られるものである。24、25が楔形状のもので、上端は平坦で下端には特に使用痕らしきものは認められない。21~24には使用時か製作時の竪断面が側面に認められる。

剥片の縁辺面に剝離痕が認められるもの (第8図—26~28、写真図版4—26~28)

26は古い段階に割られた剥片のバルブ部分の表裏面に剝離して薄身の剥片としたもので、末端部分に一部微細な剝離が見られる。27は両側縁に微細な剝離が見られる。28は板状に割られた粘板岩で、形態が石斧状のもので先端部の一部に微細な剝離痕が見られる。

打製石斧 (第9図—29・30、写真図版4—29・30)

粘板岩の板状に割られた石の側縁部を加工して、分割形状にしたものである。29は先端が欠損していると見られる。30は薄く割られたものと考えられる。

凹石 (第9図—31、写真図版5—31)

河原石の片面に浅い凹みが2箇所見られるものである。この石は裏面に擦り痕が見られることから磨石としても使用されているようである。

敲石 (第9図—32、写真図版5—32)

卵形状の石の上下に敲打痕と思われる痕が極僅かに見られるものである。

磨石 (第9図—33、写真図版5—33)

長楕円形の石の平坦部分と稜の部分に擦り痕が見られ、擦り面は滑らかになっている。

石剣状石製品 (第9図—34・35、写真図版5—34・35)

何れも破損品のため形状は分からないが、34は片面が割れ、残された片面では表面が擦られている。35は表裏面や縁辺に敲打痕や剝離された部分が見られる。

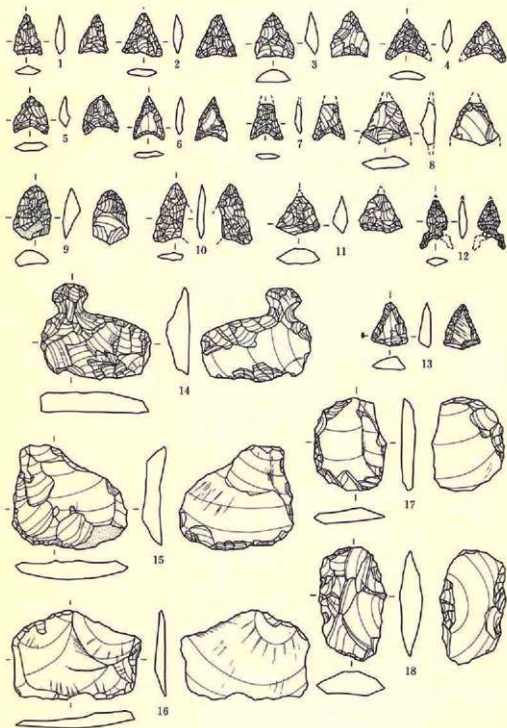
石皿 (第10図—36・37、写真図版5—36・37)

2点出土したが何れも破損品のため全体の形状は分からない。2点とも表裏面に磨痕が極僅かに見られる。

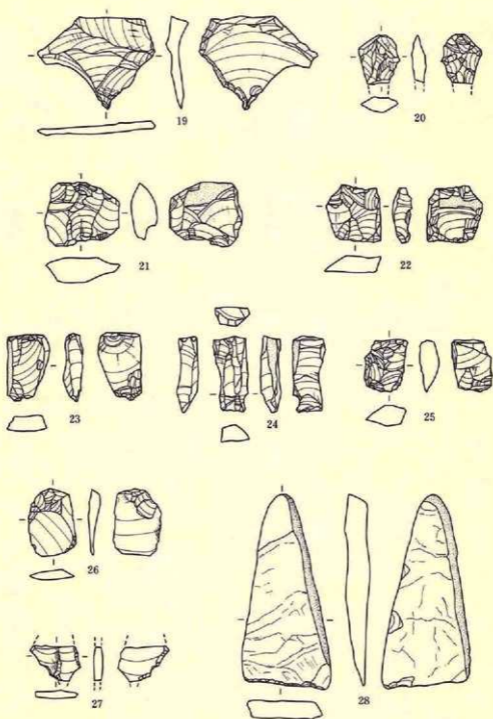
円盤状石製品 (第11・12図—38~56、写真図版6—38~56)

粘板岩製の薄身の石の側縁を打ち欠いて円盤状にしたものである。38~44が円形に、45~47が菱形に、48~56が長方形にしたものである。51~56は上下の長辺の中央部が幾らか凹んでいることから見方によっては石錘とも見えるものである。

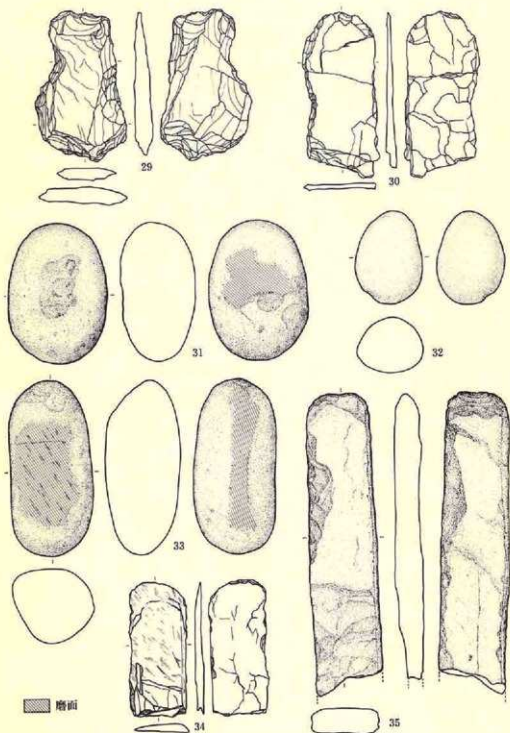
石錘 (第12図—57、写真図版6—57)



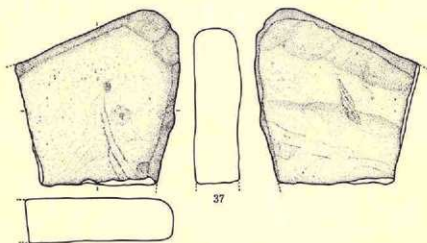
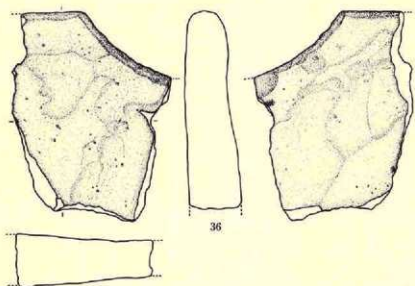
第7圖 石器 1 S=3/5



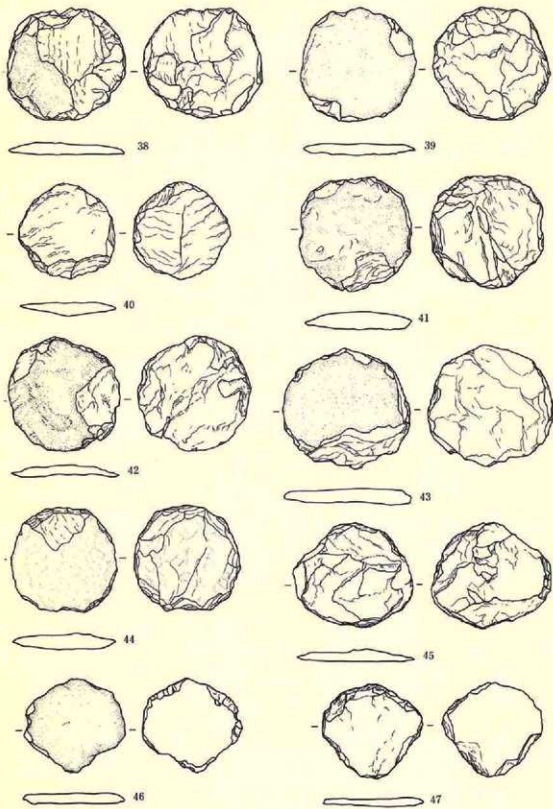
第8图 石器2 S=3/4



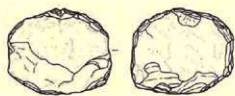
第9图 石器3 S=1/2



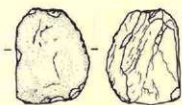
第10图 石器4 S=1/2



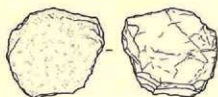
第11图 石器 5 S=1/2



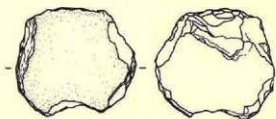
48



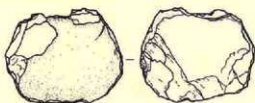
49



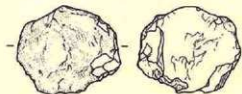
50



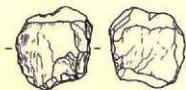
51



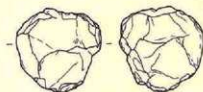
52



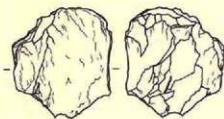
53



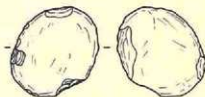
54



55



56



57

第12图 石器 6 S=1/2

石器一覧表

番号	出土地点	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	産地	備考
1	B区	石鏡	1.6	1.1	0.3	0.4	MMA組石鏡チャート	古生界	黒褐色土
2	B-C区 神社跡	〃	1.6	1.6	0.4	0.6	MMA組石鏡チャート	古生界	トレンチ
3	C区 採掘跡	〃	1.7	1.5	0.5	0.9	MMA組石鏡チャート	古生界	西側木の根
4	C-D区 採掘跡	〃	1.2	1.6	0.3	0.6	チャート	北上山地、古生界	東西トレンチ
5	B区a	〃	1.5	1.4	0.3	0.4	チャート	北上山地、古生界	黒褐色土層中
6	C区2号 採掘跡	〃	1.6	1.2	0.2	0.4	チャート	北上山地、古生界	
7	B区	〃	1.4	1.2	0.2	0.3	MMA組石鏡チャート	古生界	黒色土
8	3号凹地	〃	1.7	1.9	0.5	1.5	御粉岩	奥羽山地、古生界	西側 暗褐色土質土中
9	B区c	〃	2.2	1.5	0.6	1.4	Obaidian	奥羽山地	黒褐色土層中、黒曜石
10	B区c	〃	2.3	1.1	0.3	0.6	Obaidian	奥羽山地	黒褐色土層中、黒曜石
11	B区 ベルト	〃	1.5	1.8	0.6	1.1	Obaidian	奥羽山地	暗褐色土
12	表紙	〃	1.9	0.8	0.3	0.3	MMA組石鏡チャート	古生界	
13	表紙	〃	1.8	1.4	0.5	1.1	MMA組石鏡チャート	古生界	
14	B区a	石匙	3.6	4.4	0.9	12.9	結實細粒凝灰岩	奥羽山地、新第三系	黒褐色土層中
15	3号凹地	削、棒器	4.6	4.0	0.8	14.9	結實細粒凝灰岩	奥羽山地、新第三系	表土中出土
16	C区2号 採掘跡	〃	3.6	3.2	0.5	9.2	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	
17	B区-a	削器	3.7	2.9	0.5	6.7	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	
18	C区 採掘跡	〃	4.5	2.7	1.0	11.2	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	西側木の根 黒褐色土
19	B区 神社跡部分	ドリル	3.6	4.7	0.7	6.6	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	表土層中
20	B区a (ドリル?)	〃	1.9	1.5	0.6	1.7	MMA組石鏡チャート	古生界	黒褐色土
21	1号凹地	塊	2.5	2.9	1.0	6.7	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	南側トレンチ 黒褐色土層中
22	C区 (p10-1)	塊	2.2	2.1	0.8	3.7	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	東西トレンチ(木の根元)
23	B区 採掘跡	塊状	1.7	2.6	0.8	3.6	柱状花岩	奥羽山地、新第三系	褐色土
24	1号採掘跡 埋土中	〃	3.0	1.3	0.8	3.3	MMA組石鏡チャート	古生界	
25	B区a	〃	2.1	1.6	0.8	2.9	柱状花岩	奥羽山地、新第三系	黒褐色土
26	B区a	使用済のある削片	2.7	1.8	0.4	2.1	柱状細粒凝灰岩	奥羽山地、新第三系	黒褐色土
27	B-1土層 埋土中	〃	1.4	1.9	0.3	0.8	凝灰質柱状花岩	奥羽山地、新第三系	
28	1号凹地	〃	7.6	3.6	0.9	25.7	粘板岩	北上山地、古生界	南北トレンチ
29	3号凹地	打製石斧	11.6	7.0	1.4	125	粘板岩	北上山地、古生界	
30	C区6号 採掘跡	〃	12.4	5.8	0.8	55	千枚岩	北上山地	
31	C区 神社跡	削、磨石	10.2	8.0	6.0	750	内門黒雲母花崗岩	北上山地、古生界	トレンチ
32	1号凹地 埋土中	磨石	7.4	3.4	3.0	200	凝灰質硬砂岩	北上山地、古生界	
33	C区 南北トレンチ	〃	14.0	6.6	6.0	775	凝灰質硬砂岩	北上山地、古生界	3号採掘 No2延長
34	C-D区間	石刀の破片	10.8	4.6	0.8	50	粘板岩	北上山地、古生界	東西トレンチ
35	C-D区	石刀	24.3	8.5	2.2	490	粘板岩	北上山地、古生界	褐色土
36	C-D区 採掘跡	石皿	15.7	12.5	4.2	1245	凝灰質硬砂岩	北上山地、古生界	西側 木樫付近
37	C区 採掘跡	〃	14.0	13.1	3.7	1145	凝灰質硬砂岩	北上山地、古生界	南側 木樫付近
38	3号凹地	使用不明の石製円盤	5.4	5.7	0.6	24.5	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
39	3号採掘跡	〃	5.3	5.3	0.6	24.1	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	南北トレンチ
40	3号凹地	〃	4.6	4.6	0.7	16.3	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	表土中
41	3号凹地	〃	5.4	5.3	0.9	35.3	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
42	3号凹地	〃	5.5	5.4	0.5	21.2	ホルンフェルス	北上山地、古生界	表土中
43	3号採掘跡	〃	5.7	6.2	0.7	25.3	粘板岩	北上山地、古生界	
44	3号凹地	〃	4.1	5.0	0.5	17.9	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	表土中
45	3号凹地	〃	3.0	5.7	0.6	20.3	粘板岩	北上山地、古生界	
46	3号採掘跡	〃	4.5	4.9	0.5	16.1	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	南北トレンチ
47	3号凹地	〃	4.6	4.9	0.4	10.9	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	表土中
48	3号凹地	〃	4.1	5.0	0.5	17.9	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
49	3号凹地	〃	4.5	3.5	0.6	16.6	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
50	3号凹地	〃	4.2	4.6	0.6	14.2	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
51	3号採掘跡	〃	5.1	5.8	0.7	28.9	粘板岩	北上山地、古生界	南北トレンチ
52	3号採掘跡	〃	4.6	5.6	0.6	20.5	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	南北トレンチ
53	3号凹地	〃	5.5	5.4	0.5	21.2	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
54	3号凹地	〃	3.6	3.6	0.6	8.4	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
55	3号採掘跡	〃	3.9	4.1	0.9	14.9	凝灰質粘板岩	北上山地、古生界	
56	3号凹地	〃	4.5	4.9	0.4	10.9	粘板岩	北上山地、古生界	表土中
57	D区 pit-1	〃	4.2	4.1	0.6	18.7	柱状粘板岩	北上山地	上部より

円形状の扁平な石の上下の一部を打ち欠いて浅い凹み状としているものである。

古銭（第13図、写真図版7）

古銭は神社跡の周辺から現代の貨幣と共に47枚出土した。内訳は銅銭24枚、鉄銭23枚である。銭名は銅銭が寛永通寶、鉄銭は1枚が寛永通寶、他は不明である。第13図は何れも銅銭で1～9が古寛永通寶、10～23が新寛永通寶で、10～12には背面に「文」の字が付けられている。鉄銭には写真図版7～24のように直径が3cm大のものが5枚ある。また、背面に波文が付くものもある。

2. ま と め

今回の調査は館跡としての可能性があることから調査に入ったが、調査の結果、館として認定するには至らず、代わりに調査区のほぼ全域で大規模に採掘が行われていた事が判明した。

採掘跡は、打越遺跡、東角地遺跡、古館跡でも昨年検出されたが、今年度は当遺跡の他に、寺前I遺跡で検出され、その形態は露天掘りと坑道掘りがある。本遺跡で検出したものは露天掘りによるもので地山を掘下げては隅を掘り進めて行くという方法がとられ、岩盤を目掛けて掘り進めている。この採掘跡は何を目的に掘っているかという点、打越遺跡内から採集した石英隕等の分析結果から金の採掘が試みられた可能性が指摘されていること（財団法人埋文報告第131集）や今回も岩盤中に入っている石英塊（写真図版2）を日本金山株式会社の金多門氏が調べたところ、金の粒が数粒発見された。そして気仙地方は古くから産金地帯として知られており、遺跡周辺の雪沢や玉山等に金山が点在してあることから、金の採掘を試みた可能性がある。また、日本で金銀の採掘が行われたのは、7、8世紀の頃からとされ、宮城県北から当地方の産金に関しては、古代には文武天皇5年（701）3月に、陸奥国に砂金が産出することが中央にきこえていたようであり、聖武天皇の天平21年（749）には帰化人と思われる陸奥国守百済王敬福が黄金を貢納した。その量の多いことや大倭国にないと言われた金があった事から聖武天皇は天平21年4月に年号を天平感宝と改元している。此のときの金の産出地は現在の宮城県遼田郡涌谷町黄金追の黄金山神社付近であったようで、「天平産金遺跡」伊東信雄著（昭和35年）には今でも砂金を採集することができる事が書かれている。中世には天正19年9月以降、伊達政宗の支配地となった旧葛西領は、北上山系の有力な産金地帯として、露頭金鉱が豊富なこともあり、政宗も産金事業に着手したが、文禄元年より慶長元年の5年間その産出量に目をつけた豊臣秀吉の直轄領地となり、金の採掘が行われた。このように旧葛西領は古くから産金地帯として知られており、奥州藤原氏の平泉文化の繁栄を築き、中世から近世にかけては葛西氏や伊達氏、豊臣秀吉によって金の採掘が試みられ、当矢作地区でも雪沢や玉山の金山等が16世紀末から17世紀の頃まで賑わいを見せていたようである。しかしその賑わいも玉山金山では延宝年

間中頃以降は産金量も少なくなり宝暦9年頃には遂に休山したようである。

以上の事から本遺跡の採掘跡の時期を考えてみると、出土遺物がないことから詳しくは分からないが、諏訪神社跡やその周辺から出土した寛永通寶から判断して、神社は、採掘跡埋土中に古銭が入らない事から、採掘を止めた後に採掘跡を避けて建てられたと考えられる。周辺出土の寛永通寶(古寛永通寶、新寛永通寶)や供養碑の年代(元文五年・1740年)から、採掘の開始時期は不明であるが、終了時期は遅くとも17世紀中頃には止めたと考えられる。しかし、現在でも窪んで見られる所の一部は終戦後に掘られたものもあると考えられる。

縄文時代から弥生時代の遺物は少ないが出土し、縄文時代中期・晩期・弥生時代の土器片や石器がある。恐らく縄文から弥生にかけて、生活の場であったと考えられる。また、矢作川沿いの小高い地区には縄文時代以降の人々の生活した場所が数多くあると考えられる。

〈引用参考文献〉

小岩末治 1936年 「岩手県史」第4巻近世編

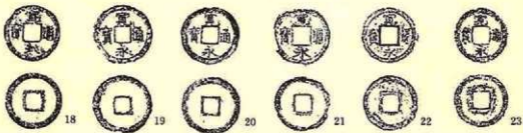
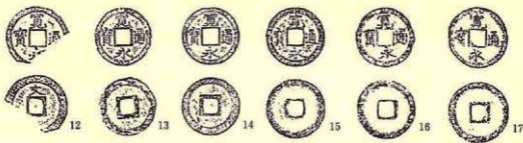
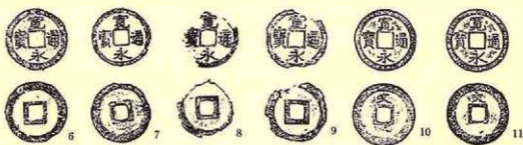
小林行雄 1976年 「古代の技術」

玉川英喜・中川重紀 1988年 「打越・東角地遺跡、古館跡発掘調査報告書」(財)岩手県

文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第131集

古 銭 一 覧 表

No	遺 跡 名 (グリット名)	銭 文		初 鋳 年 (西 暦 年)	法 量						備 考
		面	背		外径mm	穿径mm	距離mm	輪幅mm	厚さmm	重さg	
1	C区南斜面	寛永通寶	—	寛永13年(1636年)	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.0	古寛永
2	C区埋蔵跡	—	—	寛永13年(1636年)	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.3	
3	神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.2	
4	B区C神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	2.5	0.7	0.1	0.3	0.1	2.6	
5	神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.4	
6	B区神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.2	
7	神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.5	
8	B区C神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	(2.2)	0.6	0.1	0.2	0.1	(1.4)	
9	神社跡	—	—	寛永13年(1636年)	(2.4)	0.6	0.1	(0.2)	0.1	(1.7)	
10	B区C神社跡	—	文	寛文8年(1668年)	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	2.2	
11	B区べルト	—	—	寛文8年(1668年)	2.5	0.6	0.1	0.2	0.1	2.5	新寛永
12	B区神社跡西側	—	—	寛文8年(1668年)	2.5	0.6	0.1	0.3	0.1	(1.5)	
13	神社跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	1.9	
14	神社跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.3	0.6	0.1	0.2	0.1	2.0	
15	C-1区(遺土より)	—	—	寛文8年(1668年)	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.0	
16	お堂跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.0	
17	お堂跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.0	
18	お堂跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	2.0	
19	お堂跡(神社礎)	—	—	寛文8年(1668年)	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.5	
20	神社跡(お堂跡)	—	—	寛文8年(1668年)	2.4	0.6	0.1	0.3	0.1	2.5	
21	神社跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	(2.0)	
22	B区神社跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.3	0.7	0.1	0.2	0.1	1.6	
23	お堂跡	—	—	寛文8年(1668年)	2.2	0.6	0.1	0.2	0.1	1.8	
24	C区南斜面	—	—	—	2.9	0.7	0.1	0.3	0.1	4.0	背に放射有り、鉄銭
25	C区南斜面	—	—	—	2.4	0.6	0.1	0.2	0.1	2.5	鉄銭
26	神社跡	寛永通寶	—	—	2.1	0.6	0.05	0.15	0.1	1.6	鉄銭、字は丸になっている
27	神社跡	—	—	—	2.5	0.7	0.1	0.2	0.1	2.5	鉄銭



第13圖 古錢 S=3

写 真 图 版



遺跡遠景 東南から



遺跡遠景 東南から



現状 東から



B区東西断面 南から



1号採掘跡現況 東から



B区東西断面 南から



1号採掘跡東西断面 南から



1号採掘跡岩盤検出状況

写真図版1 遠景・現況・土層・採掘跡 S=1/2



2・3号採掘跡検出状況 東から



2号採掘跡東西断面 南から



3号採掘跡断面 南東から



5号採掘跡東西断面 南から



岩盤中に石英結晶が入っている状況



5号採掘跡岩盤検出状況 南西から

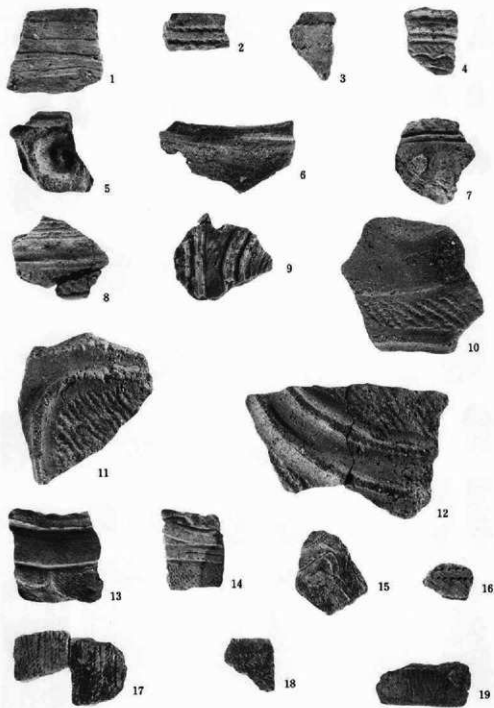


神社跡礎石検出状況 南から

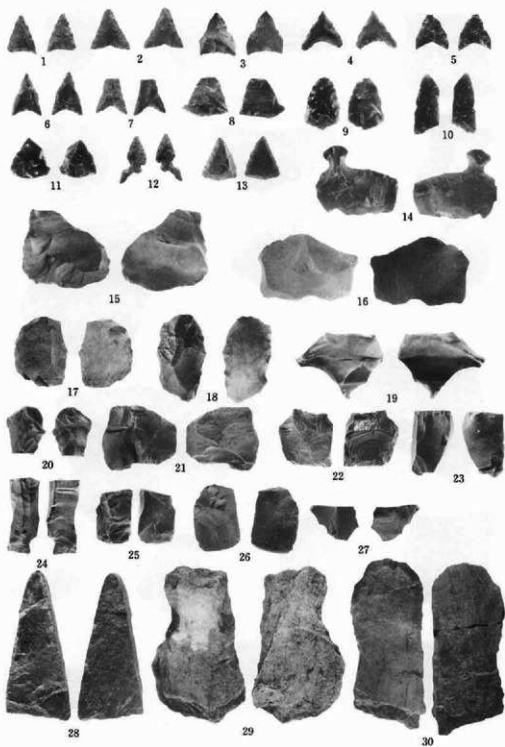


元文五年の銘がある庚申塔

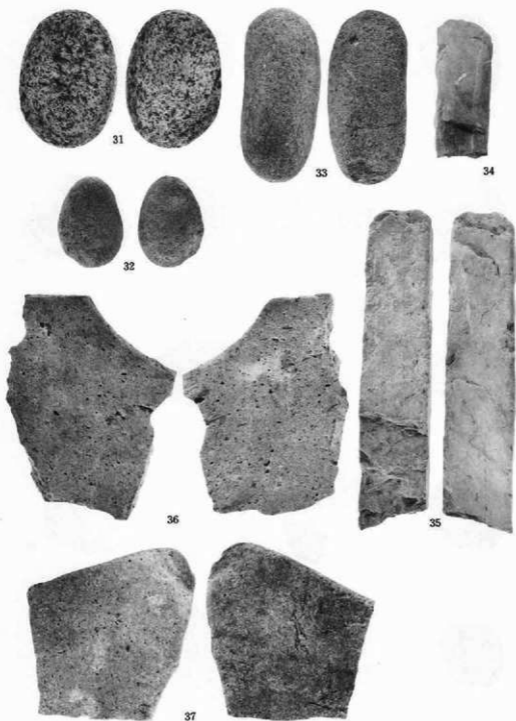
写真図版2 採掘跡、土坑 S=1/2



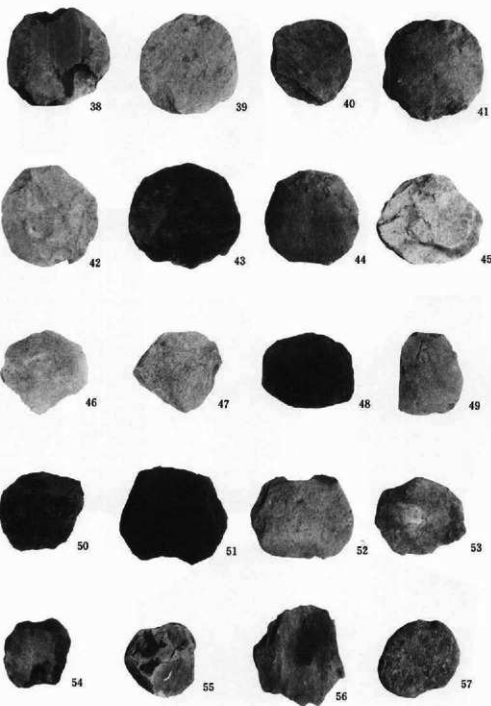
写真図版3 土器



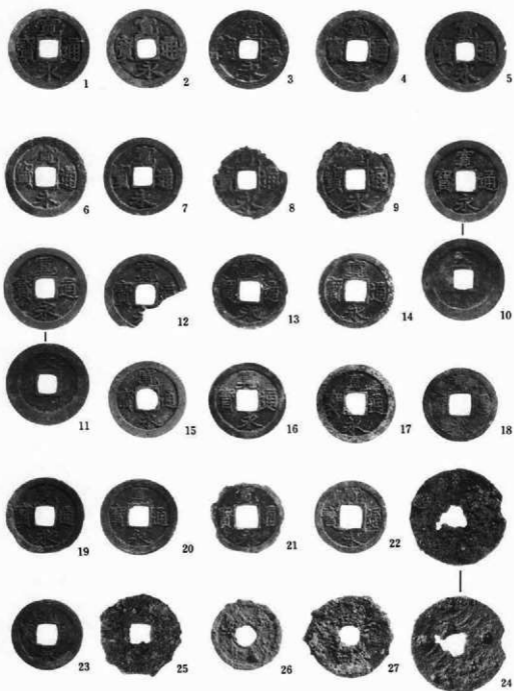
写真図版 4 石器 1



写真图版 5 石器 2



写真図版 6 石器 3



写真図版7 古 銭

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	及 川 昌 二		
副 所 長	鎌 田 良 悦		
(管 理 課)			
管理課長(兼)	鎌 田 良 悦	嘱 託	吉 田 一 男
課長補佐	伊 藤 吉 郎	運転技士	佐 藤 春 男
主 事	阿 部 隆 広	兼技能員	
(調 査 課)			
調 査 課 長	昆 野 靖		
課長補佐	佐々木 嘉直		
主任文化財	小田野 哲憲	文 化 財	遠 藤 修
専門調査員		専門調査員	
〃	三 浦 謙 一	〃	斎 藤 邦 雄
〃	工 藤 利 幸	〃	高 橋 義 介
〃	高橋 与石 ^エ 門	〃	佐々木 信 一
〃	平 井 進	〃	小 原 眞 一
〃	中 村 良 一	〃	村 上 修
〃	中 川 重 紀	〃	酒 井 宗 孝
文 化 財	藤 村 敏 男	期 限 付	酒 菊 地 宗 哉
専門調査員		専門調査員	相 原 伸 裕
〃	斎 藤 實 行	〃	及 川 靖 世
〃	光 井 文 隆	〃	女 鹿 文 雄
〃	佐 瀬 隆 司	〃	濱 田 宏
〃	斎 藤 博 幹	〃	及 川 涉
〃	東海林 隆 弘	〃	星 雅 之
〃	佐々木 均 行	〃	森 下 宏
〃	川 村 均 行	〃	高 橋 堅
〃	鈴 木 貞 行	〃	
(資 料 課)			
資 料 課 長	高 橋 薫 夫		
主任文化財	田 鎖 寿 夫		
専門調査員			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第140集

寺前 I・II 遺跡・片地家館跡発掘調査報告書

国道343号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷 平成元年 9月25日

発行 平成元年 9月30日

発行 財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001・9002

印刷 川口印刷工業株式会社

〒020 盛岡市本町通2丁目13番8号

電話 (0196) 23-3351